

---

# ~ 少年が望んだ世界と力 ~

A R X - 7 アーバレスト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

少年が望んだ世界と力

### 【Nコード】

N5400R

### 【作者名】

ARX17アーバレスト

### 【あらすじ】

毎日を退屈に過ごす高校生の少年、野田健悟。

ある日、友人達との帰りに謎の宝石を拾い、真っ白いオーロラに飲み込まれ、何も無い空間に飛ばされた。

何も無い空間に突然声が響きわたり、「お前の望みを叶えてやろう。」そのこと言葉のあとに健悟の前に青い扉が現れた。

その扉をくぐれば望む世界と力を手に入れることが出来る、しかしその代わりに大いなる災いと試練が待ち構えている。

健悟は迷わず青の扉をくぐることを決め、扉を開け光に飲み込まれ

た。

健悟が望んだ世界と力とは、そして大いなる災いと試練とは一体！？  
初めて小説を書いたので文が下手だったらごめんなさい。あと苦手  
な方は回れ右をして下さい。

## プロローグ（前書き）

始めまして、ARX-7アーバレストです。

初めて小説を書いたので凄くドキドキしてます。

読んでいただいく皆さんに楽しく読んでいただければと思っています。

設定等が無茶苦茶ですがどうか暖かい目で読んで下さい。  
では、どうぞ！

## プロローグ

プロローグ

退屈な日々。

毎日毎日同じことの繰り返し、朝起きて朝食を取り学校に行き授業を受け、家に帰りゲームをしたりアニメを観たり漫画を読んだり晩御飯を食べ風呂に入りそして寝る。そんな毎日が退屈だった。

ある日、俺は四人の友人と遊びに出かけた。夜の8時頃友人達との帰りに俺は脚で何かを蹴飛ばした。

蹴飛ばしたものは小さな紐袋だった。

中を見ると青色、赤色、緑色、銀色、黒色の丸い小さな宝石のような物が五つ入っていた。俺達は一人一個ずつ手に取って眺めていた。その時、俺達の目の前に真っ白なオーロラが現れた。

それは仮面ライダーディケイドに出てくる銀色のオーロラのようにも見えた。

そして、俺達はその真っ白なオーロラに飲み込まれ、気を失った。目を覚まし、辺りを見渡すとそこは何もない真っ白な空間だった。そして、一緒にいたはずの友人達が一人もいなかった。

俺は、友人達の名前を読んだが全く返事が帰ってこなかった。どうしたものかと考えていると、

『よく来た。』

と何処からか声が聞こえてきた。

「誰だ!？」

突然のことで驚き、俺は思わず叫んでしまった。

『お前の望みを叶えてやろう。』

謎の声がそう言つと目の前に青い扉が現れた。

『その扉の向こうは、お前が望む世界に繋がり、お前が望む力を与えよう。しかし、その代償として大いなる試練、災いも待ち構えている。』

「俺が望む世界？望む力？大いなる試練に災い？」

『もしお前が己の望んだ世界で大いなる試練や災いに立ち向かう覚悟、勇気があるならその扉をくぐるがよい。だが』

今度は、後ろに白い扉が現れた。まるでキングダムハーツだな。

『お前に立ち向かう覚悟と勇気がなく、今までの暮らしを望むのであれば、白の扉をくぐり元居た世界、場所に戻るが良い。さあ、どうする？』

俺が望んだ世界、力、その代償としての大いなる試練と災い……  
実に面白そうだ。元の世界では退屈な毎日だったしちょうどいいな。

「面白い、やってやる。」

『よく言った。では、その青の扉をくぐるがよい。しかし、一つだけ忠告しておくぞ。これからお前が行く世界で何が起きよとも、己を信じて行動し、後悔をするでないぞ。よいな？』

「え、えっと……はい、解りました。」

ちよつと返事が曖昧になつてしまつたが気にせず青の扉の前に立ち、扉を開けると、光りに包まれ、また気を失つた。

## プロローグ（後書き）

えー、いかがでしたでしょうか？

私としてはまあまあな出来だと思っております。

謎の声は若本さんをイメージして下さい（笑）

ちよつと文が短かったかな？

皆様のご意見、ご感想をお待ちしております。

それでは、次回もお楽しみに！！！！

**第一話 これが俺の望んだ物！？**      **(前書き)**

第一話です。自分が思っていたより短くなりました。  
では、どうぞ。

## 第一話 これが俺の望んだ物!?

「う、うーん。あれ?何処だここ?」

扉をくぐってからまた気を失い、目が覚めたら見知らぬ公園の芝生の上で寝ていた。

「ここが俺が望んだ世界かあ。」

そう呟きながら俺は立ち上がったがあることに気がついた。いつもより視線が低く感じ、体を見ると

「ちっさ!!!」

体が縮んでました。

「えー!なんで?俺、体縮んでるし!何これ!?名探偵コナンか俺は!!!!!」

そして、体が縮んだことよってパニックってる俺は、回りからの視線を気にしている余裕がないほど驚いていた。

パニックってから約5分後ようやく落ち着きを取り戻した俺。

「ハァー、どうしよう。体縮んじやったよ。」

しかしまだ若干落ち込んでいた。

「けど、落ち込んでもしようがないし、とりあえずここがどこか確

認しないと。」

そう言つて俺は携帯を取ろうとズボンのポケットを探っていると何か紙のような物と鍵が入っているのに気がついた。

「ん？なんだ、鍵と地図？」

その地図には現在の場所から目的地までの道が書かれたがもう一つの鍵がなんの鍵かはまだ解らない。

「うーん、とりあえずこの地図の書いてある所まで行ってみるか。」  
行く宛てもなかったのととりあえず行くことにした。

しかし、この世界とかこの町のこととはよく解らなかつたので人に道を尋ねながら目的地を目指すこと約1時間半辿り着いた場所は

「……デカ」

2階建ての建物、ガレージは何故か三つ、広い庭しかも池付き、更に小さい畑もある。

「何、この家。つか誰の家だよ。」

そう思い門の前の表札を見るとそこには、「野田」っと書かれていた。

「俺ん家かい！！！！」

思わず突っ込んでしまった。いやいやありえない、俺がこんなにい

い物件に住める訳がない。と思っていると、ふとさっきの鍵の存在を思い出した。

「まさかなあ。でも、いちよう試すか。」

半信半疑で門をくぐり玄関に立ち、鍵穴に鍵を入れ回すと、ガチャ、まさかの開きました。家に入ろうと思ったら

『指紋認証を行ってください。』

と壁のセキュリティパネルから音声が聞こえた。

言われたとおり、センサーらしき所に手を翳すと「CLEAR」と文字が出て、ガチャ、扉が開きました。

「どうしよう、開いちゃったよ。・・とりあえず、お邪魔します。」

とオドオドしながら家の中に入っていく。

中に入り、リビングに入ろうとした時に中から何か物音がした。いやしている。

しかも複数の物音が聞こえる。

ガサゴソという音、ガシャ、ガシャ、とまるで機械が歩くような音、虫が羽ばたいている音、何か跳ねている音等バラエティー豊か過ぎる音が聞こえてくる。

「何？何この統一性のない音！つかなんかいるし！！」

正直、ビビってる。一体この扉の向こうに何がいるのか予想が全くつかないからだ。

でも音の正体も気になる。

俺は覚悟を決め、ドアを開けた。リビングから聞こえた音の正体に俺は目を丸くしア然としていた。

「……………は？なにこれ？」

その理由は目の前に「仮面ライダーカブト」のゼクター達「仮面ライダーW」のファングメモリとエクストリームメモリとメモリガジェット達「仮面ライダーオーズ」のカンドロイド達が部屋の中を動き回っていたからだ。

第一話 これが俺の望んだ物!?

(後書き)

ARX-7アーバレスト「やあやあ、ついに始まりました。栄光の第1話が!!!」

健悟「テンション高いな、おい。」

ARX-7アーバレスト「主人公のクセにやけにテンション低いね。」

健悟「体縮んだからだよ!!!」

ARX-7アーバレスト「いいじゃん別に」

健悟「よくねえよ!」

ARX-7アーバレスト「さて、それよりも時間もないし早く次回予告しよぜ!」

健悟「話を逸らしたか。はあ、えー、今回は『第二話 新居を探検、望んだ力はライダーと (前編)』です。」

ARX-7アーバレスト「次回もお楽しみに!!!」

第二話 新居を探検、望んだ力はライダーと (前編) (前書き)

えー、第2話です。

1話よりは長くなりましたが、まだ短いです。すいません。

では、どうぞ！

## 第二話 新居を探検、望んだ力はライダーと（前編）

どうもこんにちは 俺は野田 健悟といます。  
歳は、十八歳です。

え？なぜ自己紹介をしているのかって？

うーん、そうだなあ。軽い現実逃避かなあ？

なんか俺の体縮んでるし、目の前にゼクターやガジェットやカンドロイドが動き回ってるんだよ。びっくりして何がなんだかもう解らなくなってきたよ。

ハッハー。つかなんだよこれは！ゼクター達はまだいいよ。確かにライダーになりたいって思ってたし、でもなんで体が縮んでるの！  
？明らかに不便過ぎるだろ！！

「ハアー、俺これからどうなるんだ？」

若干落ち込んだ。扉をくぐるまでの威勢は何処にいったのやら。そんな時だった。

「グアー」

「ん？」

鳴き声が聞こえたほうを見るとそこには仮面ライダーWの自立歩行型ガイアメモリ、ファンゲメモリが俺のほうを見ていた。よく見ると、ゼクター、ガジェット、カンドロイド達も俺を見ていた。

「お前ら、心配してくれてるのか？」

と尋ねてみると

「グアー」

っとファングが鳴き、コクコクつと頭を頷かせていた。ゼクター達も同じように頷いていた。

「そっか、ありがとな。元気がでたよ。」

「グアー」

そう言うとファングは嬉しそうに鳴き、ゼクター達も嬉しそうにしている。

「そうだな。落ち込んでてもしょうがない、これが試練だっていうなら受けてたつてやる。」

つと俺は新たに決意するが

「グウ」

腹がなつてしまい、自分で格好悪いと思つてしまった。

「とりあえず腹減つたしなんか食つかつて・・・ん？」

今までパニックつたり、落ち込んでたりしていたので全く気がつかなかったがリビングに置かれているテーブルとソファアの上に無数のアタッシュケースが置かれていた。

テーブルの上に置かれている ケースの一つを取ると

「スマートブレイン!？」

なんと仮面ライダーファイズのスマートブレインのロゴマークが入っていた。

他のアタッシュケースも確認するとスマートブレイン以外にもカブトのZEKTのマーク、ブレイドのBOARDのマーク、他にも龍騎、響鬼、電王、キバ、ディケイド、W、オーズの紋章が描かれたアタッシュケースも置いてある。

「これ全部ベルトやライダーに変身するやつなのか？」

そう思った俺はアタッシュケースを片っ端から開けていった。

そして予感は的中した。

スマートブレインのロゴマークの付いたアタッシュケースにはお馴染みのファイズ、デルタ、カイザのギア一式、更には帝王のベルトであるサイガとオーガのベルト、量産型のライオトルーパーのベルトにファイズブラスターまである。

「BOARD」と書かれたケースには、ブレイドからグレイブのバツクルに加えアブゾーバーもあった。

「ZEKT」のケースにはカブト、ガタツク、キックホッパー、パンチホッパー、ダークカブトのベルトが入っている。

龍騎の紋章が入ったケースには龍騎からリュウガに加え、擬似ライダーであるオルタナティブも含めて十四枚のカードデッキが、

ディケイドとディエンドのマークが付いたケースにはディケイドライバーとディエンドライバー、更にケータッチが、

電王のケースには電王のベルトからG電王のベルトまでが、

響鬼のケースには響鬼から歌舞伎にアームドセイバーまでが、

オーズのケースにはオーズドライバーと基本のタトバにガタキリバ、ラトラータ、サゴソゾまでメダルが揃っており、更に最新のバースドライバーまでである。

「W」と書かれたケースには、ダブルドライバーとサイクロンメモリ、ジョーカーメモリ、ヒートメモリ、メタルメモリ、ルナメモリ、トリガーメモリの六本のガイアメモリが入っている。

「A」と書かれたケースには、アクセルドライバー、アクセルメモリ、トライアルメモリ、エンジンメモリ、更に別のケースにエンジンブレードが入っている。

「S」と書かれたケースには、スカルメモリとロストドライバー

「E」と書かれたケースには、エターナルメモリとロストドライバーが入っていた。

キバのケースにはイクサドライバーとサガーク以外はケースの中に「必要な時だけ呼べ」と置き手紙だけがあった。

「凄いなあ。これ全部になれるか。……アギトとかクウガにはなれないのか？」

そう思い俺はアギトと変身ポーズをとってみるとベルトが出現した。

「おー！出来た出来た。じゃあ次はクウガだな。」

そう言うとアギトのベルトを付けたままクウガの変身ポーズをとるとアギトのベルトが引っ込み、クウガのベルトが出現した。

「もうすげえの一言だな。」

あまりの凄さに言葉を失っている俺はある物がないか部屋を見渡した。

「…………G3ユニットとかないのか？」

G3ユニット……仮面ライダーアギトに登場する装着型仮面ライダー。

俺のお気に入りライダーの一人である。  
しかしそれらしき物は見当たらない。

「うーん、流石にG3ユニットはないかあ。まあまずあれはGトレーラーで運用されているやつだし…………っは!!」

俺はあることに気がつき外に飛び出しガレージの前に立った。

「まさかこのガレージの中にGトレーラーが。」

そんな期待を胸にガレージのシャッターを開けると

「うわあ、本当にあった。しかも二台。」

ガレージの中にGトレーラーが格納されていた。

しかもちゃんと「警視庁」とまで書かれ、なぜか二台もガレージに入っていた。

「本当の警察に会ったらどう説明すればいいんだ？つか誰が運転するんだこれ？」

ガレージにGトレーラーがあつたのはいいがよくよく考えると誰がこれを運転するのだろうか？

俺は体縮んでるからペダルに足届かないし、まず大型車両どころか一般車すら運転を知らない俺がGトレーラーを運転出来る訳がない。

「・・・試しに乗ってみるか。」

奇跡を信じGトレーラーのドアを開け、運転席に座るが

「・・・ペダルに足届かねえ〜！」

予想通りアクセル、ブレーキ、クラッチに届かず足をぶらぶらさせていた。

「やっぱり届かないかあ。これじゃあ意味ないなあ。」

そんなことを呟いた時

「ブオン」

といきなりGトレーラーのエンジンが掛かった。

「え！な、何！？俺何もしてないぞ！！??？」

突然のことにパニクる俺だったがすぐにあることに気がつく。

目の前のカーナビ画面に目的地を入力するようにと文字がでていた。

とりあえず進む距離を十メートル程に入力したらGトレーラーのク  
ラッチとアクセルが勝手に動き、十メートル程で進み止まった。

「このGトレーラーって、自動運転なのか？」

そう思い今度は十メートルバックするように入力するとギアがバッ  
クに代わり自動でバックした。

「自動運転かあ。これなら使えるな。さて、そろそろコンテナの中  
を見てみるか。」

運転席から下り 一台目のGトレーラーのコンテナの中を調べると  
中は劇中と全く同じでガードチェイサーが中央に置かれていたが今  
の俺はG3もしくはG3-Xを早くみたくてしかたがなかった。

「えーっと、ここの壁の開閉の仕方は・・・これか。」

そして、壁の開閉スイッチを入れると壁が開き、中から現れたのは

「やっぱりあったか。G3-Xユニット・・・ってG4ユニット！  
!???」

G3-Xユニットの隣に何故かG4ユニットがあった。

「G4システム、まさかこれまであるとは」

仮面ライダーG4・・・仮面ライダーアギトの劇場版に登場するラ  
イダーシステム。

G3、G3-Xと比べれば確かにとても強力なシステムだが、その  
力故に装着者を死にいたしめる危険なライダーシステム。

しかしここであることを思い出す。

「今の俺じゃ使えねえな。」

体が小さいので使えなかった。

「……使いたかったな、G3-X。」

無念に思いながら次に目に入ったのはG3-XとG4の武装だった。得に1番気になったのが

「これが本物のGX-05 ケルベロスと多目的巡航4連ミサイルランチャー ギガント」

二つともG3-X G4の強力な火器であるため俺は目を輝かせていた。

「他のライダーになった時に少し借りるか。」

そんなことを考えながら二台目のGトレーラーの中に入り一台目同様、壁の開閉スイッチを入れた。

中にはG3にG3MILD<sup>マイルド</sup>、そして

「今度はV1か。」

今度は何故かV1も並べられていた。

「うーん、今更だけどなんでもありだな。」

そう思いながらGトレーラーを下り、一つ目のガレージのシャッター

ーを降ろし、二つ目のガレージのシャッターを開け中を見ると今度はファイズのスマートブレインモーターズ製可変型バリアブルビークル、オートバジンとサイドバツシャー、オーズのライドベンダーが置かれていた。

「今度はバジンとバツシャーとベンダーか、心強いな。」

そして最後に三つ目のガレージのシャッターをかけたが何もなかった。

「こっちのガレージはオマケか」

シャッターを降ろし、家の中に戻った。

しかし、この家はなかなかいい。

リビングも広いしキッチンも使いやすく和室もあり、一番気に入ったのは風呂が大きかったことだ。

やっぱり風呂は重要だ、なんと言っても風呂は命の洗濯とも言うしな。

「さて、一階はこんな感じか。次は二階だな。」

二階が上がってすぐのところ部屋があり入ってみた。

中にはベットと机とテレビに本棚と中々シンプルな部屋だった。

そして机の上に何か置いてあることに気付いた。

「身分証明書に通帳にハンコにこれは……制服？」

机の上には生活で必要不可欠な物と、どこかの学校の制服と鞆と教材が置いてあった。

「しかしこの制服、どこかでみたような気がするけど。」  
そんなことを考えているとベットの脇にまた別のアタッシユケースを見つけた。  
しかし何処にもライダーの組織のロゴやマークが書かれていなかった。

「まあ、開ければわかるか。」

ケースを机に置き、中を開けると銃の形のドライバーのような物とかなりの数のライダーカードが入っていた。

「デイエンドドライバー？いや似てるけど違うな。それにこのライダーカードはなんだ？」

裏向きにされていたカードの表を見てると

「ガンダム!？」

ライダーのカードと違っていが絵柄にはガンダムが描かれていた。更に他のカードも全て調べてみた。

ファーストからユニコーンまでの全てのガンダム作品のMS、MAモビルスーツモビルアーマーが描かれており、ガンダムシリーズの他にマクロスシリーズ、フルメタシリーズ、エヴァ、ガオガイガー、ナデシコ、スーパー戦隊シリーズまでもカードに描かれている。

更に何も描かれていない真っ白なカードにOldと書かれたカードが数枚入っていた。

「一体なんなんだこれは、ガンダムとかがライダーカードみたいになってるのも気になるけど、このOldってなんだ？それにこのド

ライバーも。」

そう言っただけ俺はドライバーを手を取った。

「初めてみたはずのドライバーなのにどこかで見ただことあるような。」

すると

「おはようございます。マイマスター」

「！喋った!?!」

なんとドライバーが喋りだした。

「もしかして、自立型A.I.が搭載されているのかお前は?」

「イエス、そのとおりです、マスター。またこちらの世界ではインテリジェントデバイスとも呼ばれますが。」

「そうかこっちの世界ではインテリジェントデバイスって呼ばれるのか・・・ん?待てよ、インテリジェントデバイス?ってまさかこの世界って」

俺は今ようやく自分が望んだこの世界がなんの世界なのか理解した。インテリジェントデバイスと呼ばれる世界は俺が知っている中では一つしかない。

「はい、この世界は「リリカルなのは」の世界です。」

そう、俺が望んだ世界は「魔法少女リリカルなのは」の世界だった。

第二話 新居を探検、望んだ力はライダーと (前編) (後書き)

ARX-7アーバレスト「第2話終了」

健悟「おい」

ARX-7アーバレスト「なにか？」

健悟「いくらなんでも無茶苦茶じゃないか？」

ARX-7アーバレスト「うーん、いいんじゃない？」

健悟「いい加減だな。おい。」

ARX-7アーバレスト「さーて、そんなことより次回予告しよ。次回予告。」

健悟「わかった、わかった。次回『第三話 新居を探検、望んだ力はライダーと (後編)』です。」

ARX-7アーバレスト「さーて、次回もサービス、サービスウー」

健悟「ミサトさんの真似をするなよ!!!」

ARX-7アーバレスト「お楽しみにー!!」

### 第三話 新居を探検、望んだ力はライダーと（後編）

あのと色々説明をしてもらったために一階に下り

「リリカルなのはの世界ねえ。」

そっぴいなながら俺は少し遅い昼飯を食べていた。

「やけに落ち着いてますね。マスター」

「いや、これでも多少は驚いてるけど体が縮んだり、ゼクター達がいったり色々あったから少しは慣れた。」

「そうですか。」

5分後、俺は食事を食べ終えて後片付けを済まし、席につき本題に入った。

「えーっと、まずこの世界が何処なのかはわかった。っんで、本題に入るけどいいか？」

「どうぞ。」

「まず、お前って何者？あと名前は？」

「最初の質問に対してはお答え出来ませんが、二つ目の質問にはお答え出来ません。」

「……は？」

理解ができなかった。何故答えられないのかと聞こうとしたが

「何故なら私にはまだ名前がないからです。」

先に答えられてしまった。

「名前がない？」

「イエス、マスター。私はまだマスターである貴方から名前を頂いていません。ですから今はどうしても呼びたければ名無しと呼んで下さい。」

トロワ・バートンかとツツコミたくなるな。

「名前ねえ。どんな名前でもいいのか？」

「イエス。しかし出来ればライダー名兼ドライバー名とAIのコールサインの二つを考えると嬉しいですが、面倒であれば一括にして貰っても構いません。」

「ライダー名兼ドライバー名とAIのコールサインってやっぱりお前ってライダーシステムだったのか？」

「イエス。私のライダーシステムは仮面ライダーディケイドとディエンドのハイブリッド型、つまり私一つでディケイドの他のライダーへの変身、及びディエンドのライダー召喚が可能です。またフォームチェンジ状態のライダーも召喚可能です。」

「じゃあ例えばだが、ディケイドみたいにファイズの姿になった状態でディエンドみたいにライオトルーパーを召喚するのも可能か？」

「出来ますよ？」

なんか答え方が凄く軽いな。

「言い忘れましたが私はライダー以外も変身、召喚が可能です。」

「ライダー以外？」

「私が入っていたアタッシュケースの中にライダー以外のカード、ガンダムやマクロス等のカードが入っていましたが今持ってますか？」

「ああ、あるぞ。」

そう言っただカードの束をテーブルに置いた。

「そのカードの全てに変身又は召喚ができます。しかしサイズは人間程ですが。」

「はい!？」

正直これは驚かすにはいられなかった。

ライダーだけではなくMSやバルキリーやASアーム・スレイブにスーパー戦隊シリーズにも変身、召喚出来る。まるで夢のような話しだからだ。

「……マジか？」

「マジですか？」

「ちなみにエクシアのトランザムとかウィングゼロのゼロシステムとかも使えるのか？」

「はい。もちろん使えます。」

「オールレンジ兵器は？」

「ファーストのビットからダブルオーのファングまで使用可能です。その際はコントロールは私がサポートします。」

「優秀だな。お前って。」

「お誉めただけて光栄です。マスター。」

全ての平成ライダーに変身、更にはガンダム等にも変身と召喚か。

「なんと言うか。もの凄いチートだな。」

「当たり前です。これもマスターが望んだことなのでから」

「俺が望んだ？」

「はい。マスターは昔、ディケイドとディエンドの能力が一つになり、ガンダム等が召喚出来るライダーシステムがあったらいいと思ったことがあるはずです。マスターが望んだから私が生まれたのです。」

そう言われて、俺はディケイドが放送されていた時に確かにそう思

っていたことがあることを思い出した。

「確かに思ったことがある。」

「話しを反らして申し訳ありませんがそろそろ決まりましたか？」

「何が？」

「私の名前です。」

結構マイペースな奴だなこのAI。まあいいか。

「ああ、決まったよ。今ので思い出した。」

「そうですか。では登録するので、どうぞ。」

そう言われて、俺は一回深呼吸をして

「ライダー名兼ドライバー名、フェニックス。AIのコールサインはアポロンだ。」

俺のライダーシステムとこれから共に戦う相棒に名前をつけた。

「ライダー名兼ドライバー名、フェニックス。AIコールサインアポロン、登録完了しました。」

「これからよろしくな、アポロン。」

「イエス、マイマスター。」

こうして俺が忘れてた仮面ライダー、フェニックスの戦いが今幕をあけ……ん？まてよ。なんで俺が忘れてたライダーシステムをこいつが知ってるんだ？それにさっき俺から生まれたってことは

「一つ聞いていいか？」

「なんですか？」

「まさかお前の中に俺の今までの記憶とか入ってたりしてる？」

「……気づきましたか。」

「なにー！ー！」

なんだと！俺の記憶がある！？いくらなんでもプライバシーの侵害だ！

「何処まで知ってるん！？正直にいいや！」

「マスター、喋り方が関西弁になってますよ？」

「そんなん今はどうでもええ。はよゆえや！」

もう気になりすぎて、若干キレてます。

「わかりました。私が知っているマスターの記憶は主にご家族、学歴、関西出身、ライダーやガンダム等に関する知識のみです。」

「あ、そうなの？」

なあんだ、それだけか俺はてっきりあれも知ってるのかと

「ちなみにサブではマスターの幼少時代から18歳までの悪戯行為、失敗談、失恋談、マスターの他の能力等もありますが？」

「って結局全部知ってるんか!?!??」

「はい。私はある意味、マスターの分身ですから」

マジで〜!最悪や、18歳ぐらいやったらまだええけど幼少時代の時まであるとは!なんであるんや!失敗談に悪戯行為に失恋談に俺の他の能力まで……………って他の能力?

「……………」

俺はアポロンをジッと見た。

「どうしましたかマスター？」

「他の能力って何？」

「言ってますでしたか？」

「聞いてない。」

今までずっとライダーシステムの話ししかしてねえよ。

「そうですね。では、説明させて頂きます。まずマスターの頭の中には、Wのフィリップの<sup>ダブル</sup>ようにあらゆる次元世界の知識、「次元の本棚」が入っています。」

うわー、ついに本棚まで手に入れてるよ俺。

「次にマスターの身体能力ですが、こちらは「ダブルオー」のアレルヤとハレルヤが一つになった状態と同じものです。しかし、まだ体に馴染んでないと思うのである程度トレーニングをおこなって下さい。」

今度は超兵でしかも超反射能力、反射と思考の融合ですか。

「プログラム構成等は「SEED」のキラ・ヤマトと同じ、もしくはそれ以上あります。」

スーパーコーディネイターと同じかそれ以上って

「そして最後にマスターは昭和ライダーにも変身かのですが今はまだできませんのでご了承下さい。」

とどめは平成だけかと思ったら昭和ライダーも可能か。

「……凄いな。」

「そうですね。」

「つかこんなチートっていいのか?」

「いいんじゃないですか?」

「超反射能力ってことは脳量子波もあるのか?」

「ありますよ？」

「はあ、自分で望んどいてこういうのはなんだが色々ありすぎて頭痛くなってきた。」

「では、気分転換に散歩などがでしようか、マスター？」

確かに気分転換もいいがこの町を「海鳴」をある程度知っておく必要があるしな。

「よし、じゃあ行くか。」

そう言っつて俺とアポロンは散歩に出掛けた。

散歩をしていて海鳴は本当にいい町だなと俺は思った。

「潮風が気持ち良いな。」

「気分転換にはなりましたか？」

「ああ、十分いい気分転換になってるよ。」

「それはなによりです。」

「さて、実はまだ聞きたいことがあるんだがいいか？」

「もちろんです。」

「今の時間ってなのはどのあたりなんだ？」

「現時点ではシリーズの第一期、つまり無印で、高町なのはが魔導師になったばかりです。フェイト・テストアロツサと出会うのは少々先です。」

ほー、結構最初の辺りに来たなあ。

「そうか。」

「そろそろ家に帰りませんか？マスターはまだあの家の全てを見てないでしょうし、私が案内します。」

「別にいいけど、家の案内するなら散歩に出かける前にしろよ。」

俺は文句をいいながら家に帰ろうとしたその時だった。

「ちょっと、なんなのよあんた達！」

「大人しくしろ、小娘！」

前方からどこかで聞き覚えがある声が聞こえた。

「ん、なんだ？」

見てみると黒いスーツをきた男達が二人の少女を黒い車に無理矢理乗せようとしていた。

二人の少女をよく見みると

「アリサとすずか！？」

なのはの友人である「アリサ・バニングス」と「月村すずか」だった。

男達は二人を乗せ、走り去って行った。

「・・・あれってどう見ても誘拐だよな？」

「そうですね。というよりもあれが誘拐に見えなければ何に見えま  
すか？」

「それもそうだな。」

やっぱり二人とも御令嬢だからなあ。犯人は恐らく、大量の身代金を要求するだろうな。しかし

「原作でアリサとすずか誘拐されるところなんてあったか？」

「恐らく、とら八も混じってるんでしょうね。」

「とら八？」

なんか聞いたことがあるような、ないような。

「それは後で次元の本棚で調べてはいかがですか？それで、どうしますかマスター？このまま家に帰りますか？」

「アホか、お前は。二人を助けるに決まってるだろうが。」

そっぴいながら俺はWのメモリガジェット「バットショット」を取り出し、ギジメモリを挿入した。

『BAD』

音声が聞こえ、バットショットはライブモードになる。

「バットショット、悪いがさっきの車を追跡してくれ。」

バットショットは頷き、車が走り去って行った方向に飛んで行った。

「さてと、俺達も追つか。」

「しかしマスター。その身体では、以下に超兵といえど限界があります。」

「……あ。」

確かにいくら身体能力が高くても流石に無理か

「というところで、すでに足は呼んでいます。」

「え?」

呼んでいるって何を聞こうとした時

「ブッブー」

「来たようですね。」

後ろを振り返るとGトレーラーがやってきた。

「……いつから呼んでた?」

「アリサ・バニングスの声が聞こえた時に出撃命令を出しましたが問題ありますか？」

「いいや、全くない。」

俺はGトレーラーの運転席に乗り込み、それを確認したのかGトレーラーは走り出した。

第三話 新居を探検、望んだ力はライダーと (後編) (後書き)

ARX-7アーバレスト「はい、第3話も無事終了!」

健悟「待て!」

ARX-7アーバレスト「何?」

健悟「一つ聞きたいことがある。」

ARX-7アーバレスト「どうぞ?」

健悟「お前、とらハの内容知ってるのか?」

ARX-7アーバレスト「……………少しだけ」

健悟「本当は!!!?」

ARX-7アーバレスト「全く知りません。にじファンとかでとらハのネタを読んだりネットで調べた程度です。」

健悟「そんなんで大丈夫か!?」

ARX-7アーバレスト「大丈夫だよ!!!……………多分」

健悟「最後の多分は何!?」

ARX-7アーバレスト「そんなことより、もう時間ないよ!ほら次回予告!」

健悟「また話逸らしやがって　　ったく次回『第四話　「初の変身、  
とあるおばあちゃんの教え」』です。……って……え?!」

ARX-7アーバレスト「次回いよいよ初変身だ!!!」

#### 第四話 「初の変身、とあるおばあちゃんの教え」

アリスとすずかが男達に誘拐され現在それを追跡中、俺はGトレイラーのコンテナ内でアポロンと敵のアジトを探していた。

「うーん」

「どう思いますか。マスター？」

「そうだな。誘拐するならまず余り遠くない場所にアジトがあるはず、それに昼も夜も人の出入りが少ない場所。これが基本だと思うがお前はどうか？」

「私もそう思います。敵の逃走方角から今の条件が一致する建物は三箇所あります。」

「三箇所か。」

「本当なら三箇所全てを調べたいが時間がない。」

「どうするか」

「ペリリッペリリ」

突然フェニックスドライバーが鳴りだした。

「マスター、バットショットが敵のアジトを突き止めたようです。」

「本当か！場所は！？」

「ここから約一キロ程離れた港の倉庫です。先程の三箇所の中で一番近い場所です。」

「よし、行くぞー!」

そういつてGトレーラーの速度を上げた。

健悟 Side

あれから5分後、現在港に侵入しアリサ達が捕らえられている倉庫を探している真っ最中。

ちなみにGトレーラーは目立つので港の入口から二百メートル程離れた場所に待機させている。

「あそこか。」

「そのようですね。」

倉庫の入口に例の黒い車が停まっていた。倉庫の壁に耳をあてると

「っへへ、まさかこんなに上手くいくとは思わなかったな。」

「バニングス家の御令嬢と夜の一族の娘か。こりゃあたんまり金が入ってくるぜ。」

うーん。ある意味お約束の展開だが夜の一族って何？アリサのことは普通に令嬢って言うてるからすずかのことを言ってるのか？まあ、色々考えるのは二人を助けた後でもいいや。

「ところで、アポロン」

「はい、マスター。」

「駄目元で聞くけどライダー達を非殺傷設定で召喚することって出来るか？」

「可能です。」

出来るのかよ。

「お前が優秀で助かるよ。」

「光荣です。」

「じゃ、行きますか」

「オーライ、マスター」

すずか Side

学校の帰りにアリサちゃんと一緒に掠われてどこかの倉庫で縛られている。

さっきの会話でこの人達の目的はお金、それに私のことを知っている。

だったらせめてアリサちゃんだけでも逃がさないと。

「お、お願いです！私はどうなってもいいからアリサちゃんは、アリサちゃんは逃がしてあげて下さい！」

「すずか！？あんなにいつてるのよ！」

隣で驚くアリサちゃん、そして男の人達の一人が私の前に来てしゃ

がんだ。

「いやー、友達想いだねえお嬢ちゃん。おじさんそういう友達想いな子は好きだけど残念ながらそれは出来ないね。」

男の人が私に触ろうとした

「すずかに触るんじゃないわよ！」

「っ痛て！」

アリスちゃんは縛られている両足で男の人の足を蹴った。

「このガキ、兄貴に何してんだ！」

別の人のアリスちゃんを叩こうとしている。助けてお姉ちゃん、なのはちゃん、誰か助けて！そう願った時

「はいはい、そのへんで止めようねおじさん達。」

私の願いが通じたのか、誰かが助けにきてくれた。

俺は倉庫の入口に立ち、中を見るとちょうど男がアリスに手をだそうとしていたところだった。

「はいはい、そのへんで止めようねおじさん達。」

お！全員振り向いたな。

「なんだ小僧、どつから入った!？」

「ここはガキが来るところじゃないぞ！」

誰が好き好んで来るかよ。

「確かにそうですね。ここには外道共の集会場みたいですからね。」

「なんだとゴラア!!！」

「ガキが舐めた口言ってるじゃねえぞ！」

一応中身は十八だけど知る訳無いか。そんなことより二人の救出が優先だな。

「おじさん達、申し訳ありませんが、その二人を解放して貰えませんか？貴方達に怪我をさせたくないのです。」

「はあ？」

「あ、訂正。解放しなくてもいいですが、そのかわり怪我をしますよ。」

「このガキ、調子乗りやがってえー」

男の一人がこちらに向かって来て

「喰らえやー！」

殴り掛かってきたが

ス力

「・・・え？」

超反射能力を持つ俺にしてみれば遅すぎる。

「遅えよ。バーカ！」

男の腹に膝蹴りを喰らわせ、男はダウンした。

「な、なんだこのガキ!？」

おー、やっぱり動揺してるな。さて、ここであの名言の一つをい  
ましか。

「最後の警告です。その二人を解放して貰えませんか？貴方達では  
俺には勝てませんよ？」

「な！なんだと!？」

「とあるおばあちゃんが言っていた。「この世にまずいメシ屋と悪  
の栄えた試しはない」ってな。」

いやー、一度言ってみたかったんだよねー、天道総司の台詞

「おい、坊主。お前、一体何者だ？」

リーダーっぽい人が俺に質問をしてきた。あんな質問されたら言う  
ことはこれしかないだろう。

「通りすがりの仮面ライダーだ、覚えておけ。you see?」

ちよつと「戦国BASARA」の伊達政宗を入れてみました。

「ふざけてんじゃねえぞ!!」

うわ! ヤバイ敵さんマジギレだな。全くしょうがないな。

「はあー、最終警告終了。戦闘体制に入る。アポロンいくぞ!」

「やっと出番ですね。待ちくたびれました。」

「すまん、すまん。じゃあ、行こうぜ! 仮面ライダーフェニックスと野田 健悟の初陣だ!」

ロックオン・ストラトス風に決め、一枚のカードを取り出し、フェニックスドライバーに挿入した。

『KAMEN RIDER!』

フェニックスドライバーをディエンドのように上に向けて、

「変身!」

トリガーを引いた。

『PHOENIX!』

フェニックスドライバーから音声が流れ、小学生程しかなかった身

長が大学生ぐらいにまで伸びた。  
簡単に言えばディケイドの世界の響鬼とキバみたいな感じだ。  
カラーはディエンドよりも濃いインディブルー、目は赤色だ。  
今、「リリカルなのは」の世界に仮面ライダーが大地に立った。

「な、なんだ!?!」

「で、デカくなりやがった。」

まあ、普通は驚くよな。敵の数は……四十人か、まあまあな数だな。

「アポロン」

「わかっていきます。既に非殺傷設定でライダーを召喚する準備は出ています。」

「上等だ。行くぜ相棒!」

「イエス、マスター」

俺はカードケースからカードを二枚取り出した。

「使うか、俺の兵隊達をよろしく。」

ディエンドの台詞を言ってカードをドライバーに一枚目を挿入した。

『KAMEN RIDER! RIOTROOPERS!』

一枚目のカードはディエンドでもお馴染み、「仮面ライダーファイ

ズ」の世界のスマートブレイン量産型仮面ライダー「ライオトルーパー」を五体召喚し、続けて二枚目を挿入、

『SOLDIER RIDER! ZECTROOPERS!』

二枚目は「仮面ライダーカブト」の世界の戦闘部隊「ゼクトルーパー」を五体召喚した。

ちなみにこのカードはもちろんオリジナル。

「な、なんだこいつら!?!」

「じゃあ、いつてらっしゃい。言っておくけど殺さない程度にしるよ。」

ライオトルーパーとゼクトルーパーはこちらを振り向き頷くと敵に向かって行った。

「さて、雑魚は彼らに任せてっと」

ゆっくりと敵の幹部達とすずかとアリサの所に近ずいた。

「どうします?このまま大人しく捕まったほうが身のためだと思いますが?」

「ふん。悪いがその気はないな。」

男がそういつとぞろぞろと部下共が出て来た。数は二十人程か。無駄なのに。

「そうですか。じゃ、今度は警察と自衛隊の力を借りますか。」

再びカードケースから今度は六枚のカードを取り出し、六枚全てを入れた。

『KAMEN RIDER! G3! G3-X! G3MILD!  
G4! V1! GDEN-O!』

「頼むぜ！ハッ！」

トリガーを引き、ドライバーから新たに六人の仮面ライダーが現れた。

「仮面ライダーアギト」の世界で警視庁が開発し、Gトレーラーにも積まれているライダーシステム、  
仮面ライダーG3、

G3の強化型、仮面ライダーG3-X、

G3の量産試作型、仮面ライダーG3MILD、  
マイルド

「劇場版 仮面ライダーアギト PROJECT G4」に登場し、  
G3-Xと共に設計され劇中では陸上自衛隊が使用したもつとも危険なライダーシステム、仮面ライダーG4、

G3システムに対抗して作られた仮面ライダーV1、

「劇場版 仮面ライダー電王 超・電王トリロジー」「EPISODE YELLOW お宝DEエンド・パイレーツ」に登場した  
時間警察の電王、仮面ライダーG電王の六人を召喚した。

「雑魚共の逮捕は任せたぞ。」

そういつとG3達は駆け出し、敵の部下達に攻撃をしかけた。  
G3-Xは普通にGX-05 ケルベロスを持ってたけど大丈夫だ  
ろう。

「さて、相手をしてあげますけど、どうします?」

残っているのは恐らく幹部とリーダーだけだろう、一応聞くだけ聞  
いてみたが

「舐めんじゃねえぞ!!」

五人中、四人が襲い掛かってきた。やっぱり聞くだけ無駄だったか。

「はあー、結局こうなるか。」

相手の物分かりの悪さにため息をつく。

「ハッ!」

「ぐうっ!」

まずは一人目

「このっ!」

「フッ!」

「グハッ!」

二人目

「セイツ！」

「グワツ！」

はい、三人目

仕掛けて来た四人の内三人にそれぞれ腹に右ストレート、エルボー、回し蹴りを喰らわせた。

もちろんある程度加減はしてある。

「さーつてと、ラストだけどうします？」

「て、てめえー。」

もう、声震えまくってるなこいつ。

「お、お前！一体なんなんだ！なんであるのガキ共を助けようとするんだ！」

「は？そんなもん簡単だろ？なんの罪もない可愛い女の子を助けるのは当たり前だろ。馬鹿か、オツサン？」

「へ、馬鹿はお前の方だろうが！バニングス家のガキは助ける価値はあるだろうが、月村家のガキは助ける価値なんてないのによ！」

「……どう言う意味だ？」

俺は沸き上がる怒りを押さえた。

「知らねえなら教えてやるよ小僧、月村家のガキはなあ。」

「!つ駄目!!言わないで!!!!!!」

「夜の一族と呼ばれ、吸血鬼の血を持つ、化け物なんだよ!ははははは!」

「!!いや・・・いや・・・いやー!!!!!!」

正体をばらされて泣きながら悲鳴を上げるすずか。  
そして、それを嘲笑う男。その男の行動に対し

「・・・そうか、吸血鬼かあ。そうかそうかよくわかったよ。それで・・・言いたいことはそれだけか?」

俺はキレた。

「ははははは!っは?」

「言いたいことはそれだけかと聞いてるんだよ!!!」

そっぴいながらフェニックスドライバーの銃口を向け、男の足元に  
二、三発、発砲した。

「ひいひい!」

男は完全に微々つて腰を抜かしているがそんなことは関係なかった。

「お前、今の台詞をもう一度言ってみろよ。」

「な、なにを?!」

「助ける価値がない? 化け物? ふざけんなよ。」

男に近ずき、右腕で男の胸倉を掴んだ。

「あの子がお前達に何か危害を加えたのか? 誰か一人でも傷つけたのか?!? ええ!!?!?」

「ぐっ、ぐるじ!」

「答えろ!! とうなんだ!?!」

「じ、じで、ま、ぜん!!?!」

「フンッ!」

俺は男を投げ捨てた。

「ッゲホ、ッゲホ」

「俺はこの子のことはよくは知らねえよ。だからテメエの言うとうり、確かに吸血鬼の血を持っているかも知れない。でもなあ、血を持ってはいるってだけで」

男の首根っこを掴み

「化け物って言ってんじゃねえー!」

真上に投げ、落ちてくる男に

「身のほどを、知れー！！！！！」

カブトのライダーキックを応用、つまり回し蹴りを喰らわせた。

「っかは！」

男は吹っ飛び、ドラム缶や木材等にぶつかった。

「最後に一つだけ言っておく、とあるおばあちゃんが言っていた。

「男がやってはならないことが二つある、女の子を泣かせることと、食べ物粗末にすることだ」ってな。わかったか？」

「は、は・・・い」

返事を返し、男は気を失った。

「・・・アポロン」

「気を失っただけです。死んではいません。」

「そうか。さて、あんたはどうします？まだ抵抗しますか？」

俺はリーダーにフェニックスドライバーを向けた。

「一応言っておきますがもう完全に抵抗は無駄だと思いますよ？」

俺の言葉を合図にしたかのように相手の部下を倒したG3、G3-X、G3MILD、G4、V1、G電王、ライオトルーパー、ゼクトルーパーがリーダーを囲み、

GG-02 サラマンダー、GXランチャー、GM-01 スコーピオン、多目的巡航ミサイルランチャー「ギガント」、V1シヨット、デンガツシャー・ガンモード、アクセレイガン、マシンガンブレードの各武器を向けている。  
いくら非殺傷設定でもGXランチャーとギガントはまずいような気もするが今はスルーしている。

「……………負けたよ。降参だ。」

リーダーはあっさり降参した。

男達を一人ずつボディーチェックし、武器を取り上げ全員縄で縛っておいた。

「はい……………はい……………そうです。港の倉庫で誘拐犯達が縛られているので逮捕しておいて下さい。それでは。」

警察に連絡を入れ終え、携帯をしまった。

「ふう、あとは警察に任せるか。」

「そうですね……………ところでマスター。」

「わかってる。今はとりあえずあの二人を家に送り届けよう。」

G3-X、G4、ライオトルーパーの二体がアリサとすすかを介護してくれているところに近ずき二人に優しく話しかけた。

「大丈夫か？」

「は、はい。大丈夫です。」

「……………大丈夫です。」

「さすがは随分落ち込んでいるようだ。」

「……………とにかく家まで送ろう。今、車を呼ぶから。」

「もう呼んでいます。」

「アポロンがそう言っているとGトレーラーが調度停まった。」

「……………まあ、ありがとう。」

「どう致しまして。」

「あー」

「アリスが何か言いたそうだった。」

「どうかした？」

「貴方達って警察……………なんですか？」

「ああ、Gトレーラーを見てそう思うのは無理ないかあ。」

「いや、違つぞ。」

「えっ、でも。」

「それについては帰りながら話そう。流石にいつまでもここに居るのは色々まずいからな。さあ、乗ってくれ。」

「は、はい。」

「・・・はい。」

アリサとすすかの二人をGトレーラーに乗せ、ライダー達も乗ったのを確認し、二人を家まで送り届けた。

第四話 「初の変身」とあるおばあちゃんの教え」 (後書き)

ARX-7アーバレスト「いやー、やっとライダーに変身させられたよ。」

健悟「……………」

ARX-7アーバレスト「どうかした？」

健悟「いや、なんかかなり危ないことしてるなって。」

ARX-7アーバレスト「大丈夫だよ。ライダーシステムあるし。」

健悟「そうじゃなくて！誘拐犯達に対してだよ！」

ARX-7アーバレスト「ああ、そっち？」

健悟「本当に大丈夫なのか？」

ARX-7アーバレスト「大丈夫、大丈夫。ねえ？」

フェニックス「問題ありません。」

健悟「お前も参加してるの!？」

フェニックス「イエス、マスター。本日から参加することになりました。」

健悟「で、何で問題ないんだ?ちゃんと説明してもらおうぞ?」

ARX-7アーバレスト「そうしたいけど、残念ながらお時間です。」

健悟「何!!!!!!」

フェニックス「ご安心下さい、マスター。次回で理由を説明します。」

健悟「……じゃあ頼む」

ARX-7アーバレスト「それじゃ、次回予告よろしく!」

健悟「次回、『第五話「早期に正体、明かしました」』です。」

フェニックス「みなさまのご意見とご感想をお待ちしています。」

ARX-7アーバレスト「お楽しみに!!」

第五話 「早期に正体、明かしました。」（前書き）

前回の後書きで訂正があります。

フェニックスではなくアポロンでした。

すいません。

第五話 「早期に正体、明かしました。」

アリサとすずかの救出し、家に送り届ける途中なのだが

「……………」

「……………」

「……………」

凄く空気が重い。

「……………おい、止めてくれ。」

俺はGトレーラーを止めさせた。

「?あ、あのどうしたんですか?」

「ん?ああ、いや。喉乾いたから飲み物買いに行くんだ。君達も何か飲むか?」

「え?えつと…お任せします。」

「君はどうする?」

「……………お任せします。」

健悟Side

シブ

ガコン！

自販機を見つけ、現在ライダーの姿で購入中。

「ふう、すずかは相変わらず元気がないな。」

「そうですね。よほどショックだったんでしょう。」

「正体をばらされたからか、それとも化け物と言われたからか。まあ、両方だろうけどな。」

ピッ

ガコン！

「それで、どうしますかマスター？このままあの二人に正体を教えるのですか？」

「そうだなあ。さつき教えるって言ったしなあ。」

「私としてはあまり賛成出来ませんが。」

「わかってるよ。でも、まあなんとかなるだろ？」

ピッ

ガコン！

「だといいのですが。」

「よし、戻るぞ。」

三人分の飲み物をライオトルーパーに持たせ、Gトレーラーに戻った。

アリサSide

一体この人達は何者なんだろう？

私とずかを助けに来てくれたあの人も最初は凄く小さかったような気がするし、警察の車を持ってるとけど警察じゃないって言ってるし、この人達の格好なんか特撮ヒーローみたいな感じだし、それに

「あ、あの。貴方達って何者なんですか？」

「……」

「……」

さっきから一言も話さないし、質問しても反応は一応してくれるけど答えてはくれない。ずかはまだ落ち込んでるし、凄く空気が重い！

「ただいま〜と」

調度さっきの人が帰ってきた。

Gトレーラーに戻るとやっぱり空気は先程と同じか、更に重さが増したような気がした。

一言も話さないライダー達を置いて行ったのは失敗したな。

「はい、とりあえずオレンジジュースを買ってきたけどよかったかな？」

「あ、はい。ありがとうございます。」

「……ありがとうございます。」

はあ、やっぱり重傷だな。どうしたもののか。

「あ、あの……」

「ん？どうした？」

「そのまま飲めるんですか？」

「……あ」

俺はライダー状態で買ってきた飲み物を飲もうとしていた。

「そういえばそうだな。アポロン変身を解除、ライダー達も戻してくれ。」

「イエス、マスター。」

変身が解除されたことで身長はアリサ達と同じ位に再び縮み、G3達も消えた。

「なっ！」

「えっ！？」

お！やっとすずかも反応してくれたか。

「ふうー。」

「いかがでしたかマスター。初めての变身と使い心地は？」

「ああ、全く問題ない。使い心地も申し分ない。」

「ありがとうございます、マスター。」

「でも、なんか体が少しダルいな。」

「それはマスターがまだライダーシステムに馴染んでいないからです。例え超兵であろうとやはり体を鍛える必要があります。」

「そうだな。少しトレーニングメニューを考えないといけないな。」

「私もお手伝いします。マスター」

「頼む。」

やはりトレーニングが必要か。超兵だから大丈夫だと思ったんだけどなあ。

「ちょっとー!!」

「うん？」

「はい？」

「あんだ、私達のこと忘れてない!?!」

「「……………あ」「

忘れてた。

「忘れてたでしょ！！！！」

「すまん。色々やることが増えたからそれを整理してたら忘れてた。」

「申し訳ありません。」

俺とアポロンは素直にアリサに謝った。

「全く。で、ちゃんと説明してくれるんでしょうね?」

「「は?」「

「は?っじゃないわよ!!!さっきの姿は何!?さっきまで沢山いた特撮ヒーローみたいな人達はなんでいきなり消えたの!?さっきから会話してるその銃は何!?なんで会話できてるの?それに明らかに銃刀法違反じゃない!!!そして、あんたは誰!!!!?一体何者!」?

すごいマシンガントークだな。

「ア、アリサちゃん、少し落ち着いて。それじゃあ話そうにも話ずらいよ。」

「そ、そうね。ごめん。」

すずかに言われて少し落ち着いたか。

「ごめんね。・・・えっと」

「あー、自己紹介がまだだったな。俺は野田健悟、よろしく。」

「私は月村すずか、よろしくね。」

「私はアリサ・バニングス、よろしく。」

「さて自己紹介も済んだし、さつき港で説明するって言ったからな。ちゃんと説明するよ。でも、説明する代わりに条件がある。」

「条件？」

「そう。まずこのことは決して誰にも言わないこと。仮に言ってもいいとしたら家族の人かもっとも信頼できる人だけだ。まあ、信じてもらえるかは分からんがな。次にさっきの姿に関しては今は極一部しか話さない。機密事項だからな。この条件を呑まないなら説明しない。どうする？」

時空管理局の人達なら次元世界のことを知っているから、ある程度ならライダーのことを話せるがアリサやすずかは、この時はまだ魔法の存在すら知らない。

話すならせめてなのはとフェイトが魔導師であることを知るA、Sの時期までは黙っておこう。

それに世間にはされると色々めんどくさいことになりそうだな。

「今はってことは、いつかは全部話してくれるの？」

「ああ、そうだ。今はまだ話せないが時がくれば必ず話す。」

「……わかった、その条件でいいわよ。すずかは？」

「私もそれでいいよ。」

二人が俺の出した条件を呑んだ。

「よし、それじゃあ説明しよう。さつき俺がなっていた姿と消えた奴らは、仮面ライダーと呼ばれる戦士だ。」

「仮面……ライダー？」

すずかが名前を繰り返して、アリサは黙ったままだ。

「そう。仮面ライダーフェニックス、それが俺が変身していた姿だ。」

そういいながらフェニックスドライバーを見せた。

「これってさつきあんたと会話して奴よね？なんで会話できるの？」

「こいつには自立型AIが搭載されている。アポロン、挨拶をしる。」

「イエス、マスター。初めまして、アリサ・バニングス様、月村すずか様、マスターのパートナーのアポロンと申します。以後お見知りおきを。」

「う、うん。よろしく。」

「よろしくね。」

機械に自己紹介されることなんてないから多少戸惑ってるな二人とも。

「俺がライダーになれるのはこいつのお蔭なんだ。」

「どっやって変身するの?」

「こいつを使うんだ。」

俺は懐からカードを取り出した。

「?ただのカードじゃない?」

「このカードをフェニックスドライバー、つまりアポロンに入れることで変身できるんだ。」

「へえー。」

「ちなみにさっきのライダー達もこのカードを使って呼んだんだ。」

「すごいね」

「確かにすごいけど、なんであんながそんなの持ってるのよ?それにこの車って警察の車でしょ?」

流石に痛い質問をしてくるな。

「悪いけどその質問には答えられない。機密事項だからな。それに説明は極一部だけって条件だからな。」

「そうだね。」

「わかったわよ。」

二人とも承諾してくれたが、アリサはやはりまだ納得がいかないようだ。

まあ気持ちはわからなくはないがな。

「すまん。さつきも言ったが、今はまだ話せないんだ。時がくれば必ず話すからそれまで待つてくれ。」

「うん、わかったよ。」

「しょうがないわね。いいわよ。」

「ありがとう。」

なんとかアリサも納得してくれたな。さて、すずかには申し訳ないけどこっちも色々と聞かないとな。

「俺からも質問していいか？」

「何よ？」

「夜の一族」

「!?!」

予想どおり、明るさを取り戻したすずかが再び暗くなった。

「ちよっ!あんだ!?!」

「あの男が言ってた、吸血鬼の血を持ってっっていうのは本当か?」

「.....」

すずかは黙ったまま頷いた。

「そっか。」

そう言って俺は買ってきたコーラの蓋を開け、飲んだ。

「.....」

「.....」

「.....」

沈黙した空気が流れる。

「あの、野田君」

沈黙した空気を初めに破ったのはすずかだった。

「ん?何?」

「えっと、それだけ？」

「さすががきょとんとした状態で聞いてきた。」

「それだけって、何が？」

「私のこと怖くないの？化け物だって言わないの？」

「別に？」

「どうして？」

「どうしてって、月村さんは月村さんだろ？まだ出合って間もないけど、月村さんが優しい子だってことはすぐに分かった。そんな子が化け物な訳ないだろ？」

「！..！」

俺はすずかに近ずき、右手をすずかの頭に寄せ、頭を撫でた。

「大丈夫。月村さんは化け物なんかじゃない。君はただの可愛い女の子だよ。」

「う..う..う..うあああああ..ッ」

泣き出したすずかを俺は優しく抱きしめた。

「辛かったよな。でも、もう大丈夫、大丈夫だからな。」

「ああああ..うああああ..！」

「俺が守ってやる。月村さんを傷つける奴らから、俺が守ってやる。絶対に。」

「グスツ・・・本当？」

「本当だ。約束する。だから、安心してくれ。な？」

「うん・・・うん」

俺は今まで生きてきた中でこんなに人を守りたいと思ったことは初めてだ。

やはり、自分に守ることができる力を持っていると誰かを守りたいと思うのだろうか？

この気持ちに嘘、偽りは無い。

俺が望んだこの世界ですずかのように心から助けを望む者がいるなら、俺は手を差し伸べ、必ず助けてみせる。

多分、俺はそのために力を望んだと思うから。

だから、俺はすずかを守る。

俺が望んだ力、仮面ライダーの力で。

「マスター。」

俺が新たな決意をした直後にいきなりアポロンが話しかけてきた。

「どうした？」

「後ろ」

「後ろ？」

後ろに何かあったか？と振り返ると

「……………」

「……………あ」

アリサが俯いた状態で小刻みに震え、そして

「だ〜か〜ら〜、私のこと忘れてんじやないわよ〜……………!!……………!!」

怒鳴られました。

第五話 「早期に正体、明かしました。」（後書き）

ARX-7アーバレスト「お疲れさまでーす。」

フェニックス「お疲れさまです。」

ARX-7アーバレスト「あれ？君のマスターは？」

アポロン「今回は出たくないそうです。」

ARX-7アーバレスト「何で？」

アポロン「今回の自分の行動が恥ずかしかったようです。」

ARX-7アーバレスト「うわー、純情〜。」

健悟「やかましいわ！」

ARX-7アーバレスト「あ、出てきた。」

健悟「俺がいない所で何言われるかわからんからな。」

ARX-7アーバレスト「あれ、今日は関西弁？」

健悟「まあ、標準語でもいけるけどやっぱ元は関西やからな。」

ARX-7アーバレスト「落ち着く？」

健悟「まあな。ところでアポロン、前回言ってたことだけど」

アポロン「はい。ご存知のように私は第四話でG3達を非殺傷設定で召還しましたが、ライダーに限らずMS、MA、AS、バルキリー等召還する者全てに非殺傷設定にできます。その際の攻撃は射撃系ならば、麻酔弾や麻痺弾と同じ効果を持ち、近接格闘系ならば、スタンロッドと同じ効果、簡単に言えば麻痺ですね。」

健悟「へえー、それなら確かに問題ないな。」

ARX-7アーバレスト「でしょ？さて、いきなりですがそろそろアンケートを取りたいと思いまーす！！」

健悟、アポロン「アンケート？」

ARX-7アーバレスト「そのとおり。と言うことで読者のみなさんに募集するのはこの作品で出してほしい仮面ライダー、MS、MA、AS、スーパー戦隊、バルキリー等を募集します。もちろんこちら以外のガオガイガーやナデシコやエヴァンゲリオン、マジンガーZ等幅広く募集してます。」

健悟「ちよつと待て！！」

ARX-7アーバレスト「何？」

健悟「ガンダム作品とマクロス作品とフルメタ作品以外のロボット作品はせめてスーパーロボット大戦シリーズに登場した作品だけにしろ。でないと色々大変だから！！」

アポロン「私もそのほうがよろしいかと。」

ARX-7アーバレスト「じゃあ、そうしよう。っと言っことで皆さんのご応募をお待ちしております。では、そろそろ次回予告を」

健悟「はいはい、次回『第六話 小学生から再スタート?!』です。」

アポロン「お楽しみに」

ARX-7アーバレスト「最後取られた!!!!!!」

## 第六話 小学生から再スタート？！

「それじゃあ、先生が呼ぶまで待っててね。」

「分かりました。」

そう言っつて先生は教室に入っつていった。

「……………はあー、なんでこんなことに。」

あれは昨日のことだった。

### 回想

「本当にここでいいのか？」

すずか達を家まで届けようと思っつたが二人が「ここでいい」と言っつたため二人を下ろした。

「うん。ここからなら大丈夫だよ。」

「それにあんたもそれを見られGトレジャーとまずいんでしょ？」

しかし、アリサはまだ機嫌が直っつていないようだ。

「……………バニングスさん、まだ怒っつてる？」

「そりゃ、何回も人のこと忘れられたら怒るわよ。」

「あー、ごめん、ごめん。」

「ふん。」

「こりゃあ、色々大変だな。」

「それじゃあ、近いとはいえ、二人とも気をつけて帰れよ。月村さん、バニングスさん。」

「そういつてGトレーラーを走らそうとした。」

「あ、待って!!--」

「しかし、いきなりすずかに呼び止められた。」

「どうした?」

「う、うん／＼／＼あのね／＼／＼」

「ん?」

「そ、その／＼／＼私のこと、月村さんじゃなくて、すずかって呼んでくれない?／＼／＼」

「名前で呼んで欲しいと?」

「う、うん／＼／＼いいかな?」

「うーん。まあ別に問題ないか。そのほうが楽だし。」

「いいよ？」

「ほ、本当？」

「うん。」

「あ、ありがとう／＼」

なんか顔が若干赤いような気がするけど、気のせいかな。

「じゃあな。すずか、バニングスさん」

今度こそGトレーラーを走らそうとした。

「待ちなさいよ！」

今度はアリサに呼び止められた。

「何？」

「何ですずかは名前で呼んで、私は名前で呼ばないのよ。」

「だって許可もらってないもん。」

「うっ！」

正論を言ったため反撃できないアリサ。

「……ああもう！すずかだけじゃ不公平な感じだから、私も名前前で呼びなさいよ！」

なんか逆ギレされたような気がする。色々めんどくさいな。

「わかったよ。あ、そうだ。」

俺はあることを思い出し、メモ帳にあるものを書き、

「はい。何か困ったことがあったらいつでも連絡してくれ。」

そういつて家の電話番号と携帯の番号、メールアドレスを二人に渡した。

「うん、ありがとう!」

「まあ、一応もつといてあげるわ。」

すずかは素直だけど、アリサはやっぱり素直じゃないな。うーん、これが本当のツンデレか。

「それじゃあ。」

「マスター。」

今度はアポロンか。

「何だ?」

「やはり私はお二人が心配です。護衛をつけたほうがよろしいかと。」

「どっせって?」

「見つかったては不味いのなら見つからなければいいのです。」

「……?」

「何が言いたいのよ?」

アリサとすずかはアポロンの言っている意味が分からないでいる。

「成る程な。制御は?」

「マスターが離れたり、変身を解除した状態でも最低でも一時間は自立行動可能ですのでご安心を。それに任務が完了すれば自動で戻るように設定しています。」

「じゃあ、問題ないな。あと設定は」

「分かっています。非殺傷設定ですね?」

「流石だな。」

「恐縮です。」

「?」

「だからあんた達さっきからなんのこと言ってるのよ?」

相変わらず意味が分からなくて困っているアリサとすずか。

「まあ説明するよりも、見たほうが早い。」

そっついながらカードを取り出しフェニックスドライバーに挿入した。

『KAMEN RIDER!』

「変身!」

『PHOENIX!』

本日二度目、仮面ライダーフェニックスに変身した。変身が完了し、新たにカードを二枚取り出した。

「なんで変身したの?」

「いいから見てろ。」

すずかにそっつい、二枚のカードを挿入。

『AS RIDER! M9 GERNSBACK VERMAO!』

『AS RIDER! M9 GERNSBACK VERKURZ!』

「よっ!」

トリガーを引き、二体の人型ロボットが姿を現した。

「二体とも「フルメタル・パニック！」及び「フルメタル・パニック！TSR」に登場した陸戦兵器。」

「傭兵部隊「ミスリル」の西太平洋戦隊「トウアハー・デ・ダナン」陸戦コマンドSRT（特別対応班）所属の

メリッサ・マオ曹長やクルツ・ウェーバー軍曹、一時期は相良宗助軍曹も搭乗した第三世代型アーム・スレイブ「M9 ガーンズバック」

その「M9ガーンズバック」のマオ機とクルツ機を召喚した。マオ機とクルツ機の唯一の違いは頭部部分。

マオ機のM9は電子戦能力を強化したため頭部にブレードアンテナを備えている。

ちなみにM9ガーンズバックは量産型の機体である。

「よう。」

「今度はロボット？」

「何なのよ、このロボットは？」

「この機体は、M9ガーンズバックと呼ばれる陸戦型のロボットだ。」

「M9・・・ガーンズバック？」

「ガーンズバックまで言うのが面倒ならM9って呼べばいい。この機体はそっちなで呼ばれるほうが多いから。」

「それで、そのM9を出してどうするの？」

「君達が無事に家に帰るまで護衛をさせる。」

「えっ!?!」

「はぁ!?!」

アリサとすずかの二人が驚いている。

「何か問題でもあるか?」

「当たり前よ!!こんなのがいたら目立つでしょうが!!!」

「大丈夫だ。M9各機、ECS不可視モード作動!」

俺の指示通り二機のM9はECS不可視モードを起動させ、姿を消した。

「消えた!」

「凄い!」

「これならバレないだろ?」

「えっと、これは?」

「ECS不可視モード、簡単に言えば光学迷彩だな。」

「光学迷彩?」

「対象物を透明化する技術、つまり目でも見えないようにすることだ。」

「は、はあ」

「.....」

やっぱり二人にはまだ難しいか。

「また今度ゆつくり教えてやるよ。それじゃあ、マオ機はさすがの護衛、クルツ機はアリサの護衛を頼む。」

ECS使用中の二機のM9に指示を出し、変身を解除した。

「二人共気をつけて帰れよ。」

「うん、ありがとう。野田君。」

「ありがとう。」

今度こそGトレーラーを走らせようと思った時にあることを思い出した。

「あ、そつだ。言い忘れてたことがある。」

「？」

「何よ？」

「今度からは、二人とも俺のことは名前で呼んでくれ。俺だけが二人を名前で呼ぶのはなんか違和感あるだろう？」

「な、名前で？／＼／＼」

「ああ、嫌か？」

「う、ううん！そんなことないよ！ね、アリサちゃん？」

「まあ、私は別にいいけど。」

何故かすずか凄く嬉しそうな顔をしている。男の子を名前で呼ぶのってそんなに嬉しいのか？

「じゃあ、またね。健悟君。」

「またね。健悟。」

「おう、またな。」

そして、今度こそ俺はGトレーラーを走らせた。

Gトレーラーを車庫に戻し、現在ソファでくつろいでいる。

「ふう、疲れた。」

「大丈夫ですか、マスター？」

「まあ、大丈夫といえば大丈夫だけど、やっぱり体がダルイ。」

「慣れるのとトレーニングをするしかないですね。」

「そうだな。」

そういつて俺はソファから立ち上がった。

「どちらに？」

「疲れたから風呂に入る。」

「では、マスター。その前にお時間をもらってもよろしいですか？」

「何でだ？」

「マスターに見せたい場所と物があります。」

「何それ？」

「見てからの楽しみです。」

「ふーん、わかった。案内してくれ。」

俺はアポロンにガレージまで案内された。

「ここに何かあるのか？」

「マスター、そこに棚がありますよね？」

アポロンに言われ視線を向けると工具等が載った大きな棚があった。

「その前に立って下さい。」

「はいはい。」

俺は棚の前に立った。

「そこでシステムチェックと言って下さい。」

「システムチェック。」

その言葉の後に何やらセンサーらしき物が俺をスキャンし始めた。

『音声チェック、並びにスキャン完了。マスター、健悟と確認しました。』

音声の後に棚が下に収納され、壁が横にスライドした。

「隠し扉か。」

「イエス、マスター。さあ、どうぞ入って下さい。」

「おう。」

俺は地下に続く階段を降り始めた。

「これは…」

地下を降りるとそこは車庫だった。

しかし、そこに置かれていた車両に俺は驚いた。

トライチェイサー2000、ビートチェイサー2000、ブルースペイダー、凱火、カブトエクステンダー、マシキバー、マシンデイケイダー、ハードボイルダーが置かれていた。

これは平成仮面ライダークウガ、ブレイド、響鬼、カブト、キバ、デイクイド、Wが乗ってたバイクだ。

他にも ジャイロアタッカー、シャドーチェイサー、レッドランバス、グリーンクローバー、竜巻、ガタックエクステンダー、ダークエクステンダー、イクサリオン、パワードイクサー、スカルボイルダー、平成ライダー達が乗っていたバイクが置かれている。

「凄いな。ん？」

俺はライダー達のバイクの中に普通のバイク、ホンダ・VTR1000Fとドウカティ・999が置かれていることに気がつく。

「アポロン、このバイクは？」

「はい、この二台はアギトの津上翔一とWの照井竜が乗っていたバイクです。」

「へえー。じゃあこれに乗ってアギトに変身したらマシントルネイダーになるのか？」

「そのとおりです、マスター。」

しかし、俺はあることを思い出す。

「俺、体縮んでるから乗れないし、まず免許ないぞ？」

「バイクや車両の運転は私が教えます。」

「出来るの?」

「問題ありません。」

「でも無免許なんじゃ。」

「捕まらなければ問題ありません。」

「そんなのでいいのか?」

「でも、体はどうするんだ?」

「ガンダム達以外のカードでOldと書かれたカードがあったのを覚えてますか?」

「ああ、覚えてるし、今も持ってる。」

ポケットからOldと書かれたカードを取り出した。

「その中の20と書かれているカードをドライバーに入れて、トリガーを引いて下さい。」

「わかった。」

アポロンに言われたとおり、カードをドライバーに挿入し、

『OLD RIDE!』

トリガーを引いた。

『TWENTY!』

音声の後に体に異変が起きた。  
今まで低かった目線が段々高くなっていった。

「いかがですか、マスター？」

「……………」

「マスター？」

「え？ああ、すまん!？」

さっきまで高かった声が低くなっている。

「随分驚かれていますね。」

「ああ、正直かなり驚いてる。アポロン、これは一体？」

「このカードはOldカード、使用者の容姿等を使用したカードと同じ数、つまり年齢の平均的な体にするカードです。」

「つまり、今の俺の体は20歳の男性の大きさになっているってことか？」

「イエス、マスター。まあ、世界のこちらの世界の変身魔法と同じだと思えばよろしいかと思えます。」

「確かに、元に戻る時はどうするんだ？」

「フェニックスになった時に変身を解除する時と同じようにするだけですよ。」

「結局はお前がやると？」

「イエス、マスター。それでどうします？」

「カードの効果も解ったし、解除してくれ。」

「イエス、マスター。」

俺の身長は再び小学生程の身長に戻った。  
本当にもう何でもありだな。でも、これでバイクの運転とかも何とかなるな。

「ではマスター、次に行きましょう。」

「は？次？」

アポロンに言われ、次に案内されたのは地下二階で再び車庫だったが今度はかなりの大型の車庫だった。

「……マジ？」

そこには、ジェットスライガー、リボルギャリー、スカルギャリーがあった。

しかも何故かジェットスライガーは3台置いてある。

「うーん、凄いとしか言いようがない。」

「では次に行きましょう。」

「まだあるん!？」

「次でラストです。」

最後に案内された地下三階。こっちの方がもっと凄かった。

「何これ？」

「地下施設です。」

「そんなもん見れば分かる。」

俺が言いたいのはその規模の大きさだった。

コンピューターが並ぶ部屋。モニターには世界地図が映りだされる。

他にも研究室や医務室、トレーニングルーム、会議室、更にはプールや娯楽施設まである。

しかし一番気になったのが

「………何？」

「演習場です。」

演習場まであることだった。

例えるなら「ガンダムSEED」のオープのM1アストレイやキラ・ヤマトのフリーダムとムウ・ラ・フラガのストライクが模擬戦を行

った場所みたいな感じだ。  
しかもかなり広い。

「……かなり豪華な施設だな。」

「当然です。この施設ならどんな物でも開発、修理、改造が可能です。」

「例えば？」

「新たなライダーシステムやオプションパーツ等の開発、私のカスタマイズ等です。」

「成る程ねえ。」

俺は改めて思った。……俺って欲張りすぎなんじゃないかと。

「では、マスター。そろそろ入浴して早く就寝しましょう。きっと明日は早いからです。」

「そうだな。早く風呂に入って今日はもう寝よう。色々あって疲れだし、明日も早いし……ん？」

今のどつという意味だ？

「明日は早いつて？」

「明日から学校です。」

「誰が？」



俺は教室に入り、黒板の前に立った。

クラスを見渡すとなのは、アリサ、すずかがいた。どうやら同じクラスのようにだな。

「それじゃあ、自己紹介してくれるかな？」

「はい、皆さん初めまして。野田健悟っていいいます。関西から越してきたんでまだこっちのことよう分からんからよろしくお願いします。」

ちなみに関西出身であることは本当だが、越してきたのは嘘だ。しかし、書類上では引越してきたことになっている。

「野田君の席は・・・月村さんの隣ね。月村さん、野田君が何か困ったことがあったら教えてあげてね。」

「は、はい！」

おお、すずかが隣か。知らない奴が隣じゃなくてよかった。

「よろしくな、月村さん。」

「う、うん。よろしく／＼／＼」

何で顔赤いんだ？

「それでは、授業を始めます。」

俺の実年齢は18、つまり高校三年生だ。  
だから授業内容はやはり簡単すぎる。

そのため退屈だったので何回あくびをしかけたことか。  
そして、今は休み時間。

さあ、ここからが色々大変だ。  
多分、転校生が一番大変なこと。それはクラスメイトからの質問攻めだ。

好きな食べ物や好きな芸能人、趣味、関西の何処に住んでいたとか色々聞かれ、やっと質問攻めが終わった。

「……疲れた。」

「大丈夫？健悟君。」

さすが心配そうに声をかけてくれた。  
隣にはアリサとなのもいる。

「うん、なんとか大丈夫や。」

「よかった。」

「それにしてもあんた関西の人だったんだ。昨日は関西弁喋ってたのだからつきり関東の人だと思ってたのに。」

「うん、私も最初はびっくりしたよ。」

「まあ、あんまり気にせんといて。」

「あのお。アリサちゃん、すずかちゃんって野田君と知り合いなの

「？」

「え？え」と、昨日色々あってお友達になったんだよ。ね？アリサちゃん、健悟君？」

「そ、そうそう。色々あってね。」

「あ、健悟君紹介するね。この子は私達のお友達の高町なのはちゃん。」

「高町なのはです。よろしくね、野田君。」

「ああ、よろしくな。」

「……未来の魔王か。」

「あ、そうだ。」

「どうしたのすずか？」

「健悟君、実は今度私の家でお茶会をするんだけど、健悟君も一緒にどうかな？」

「俺は別にかまへんけど、迷惑ちゃうか？」

「そんなことないよ！！」

「私も別にいいわよ。」

「私も野田君とは仲良くなりたいし。」

「それじゃあ、お言葉に甘えようか。」

「うん!」

こうしてお茶会に参加することになった。

そして、まもなく現れる金髪の魔導師と出会う時が刻々と迫ってきている。

第六話 小学生から再スタート?! (後書き)

ARX-7アーバレスト「やっと出来たー!!」

健悟「随分時間かかったな。」

アポロン「ご苦労様です。」

ARX-7アーバレスト「微調整とかに時間かかった。」

健悟「次はもう少し早くしろよ。」

アポロン「頑張ってください。」

ARX-7アーバレスト「はい、頑張ります。それでは、次回予告よろしく。」

健悟「はいよ。次回『第七話 介入開始』です。」

アポロン「今回はあの子達があの子達と戦います。」

ARX-7アーバレスト「お楽しみに」

## 第七話 介入開始（前書き）

今回は、文がかーなーり長いです！

## 第七話 介入開始

すずかにお茶会に招待され、現在お茶を飲んでいるんだが。

「ニヤー」

「ニヤー、ニヤー」

「……………」

本当にいっぱい猫がいるな。どんだけ好きなんだ？

「ん？どうかした健悟君？」

「いや、凄い猫が好きなんだなって思って。」

「うん！大好きだよ！」

「まあ、初めてみたら誰でもそう思うわよね。」

確かにそうだな。

「そういえば、あんた今日は関西弁じゃないのね。」

「……………気にするな。」

そういえば、確かなのはとフェイトが戦う日って今日じゃないのか？とどうやら当たりらしいな。なのはがユーノを追いかけ行って、俺も行くでしょう。

「どっしたの？」

「悪い、俺も高町とユーノを追いかけてくる。」

「なんでよ？」

流石に戦うからとは言えないな。俺だけならともかくなのはの正体はまだ知らされていないし。

「……あいつ運動音痴だろ？」

「確かに。行ってよし！」

「了解！」

友人にすら運動神経を信頼されてないのか。ドンマイなのは。

健悟 Side

結界が張られたか。さて、原作どつりに進んでいるが

「……本当にデカイな。」

「そうですね。」

現在、巨大化した猫を木の上から見ている。

確かジュエルシードが「あの猫の大きくなりたいてっけ？意味が違っただろ。」

お！黄色の魔力弾が、と言うことは

「マスター。」

「わかってる。フェイトが来たな。」

「はい。それともう一つご報告があります。」

「どうした？」

「フェイト・テストロツサの後方五百五十メートルに反応あり、恐らく使い魔のアルフと思われます。」

「アルフが？」

あれ？原作でアルフが接触するのって確か温泉の時だったはず。

「恐らく後方支援のために待機していると思われます。」

「成る程な。さて始めるか。」

「早速介入するのですかマスター？」

「いや、今回は見学だ。俺はな。」

「と言うことはライダー達は介入させる訳ですね。」

「いや、ライダーじゃなくこいつらだ。ぴったりだろ？」

カードケースから四枚のカードを取り出した。

「成る程。確かにピッタリですが、何故アルフとユーノはこいつら

なのですか？」

「ん？なんとなくだ。」

ドライバーにカードを挿入した。

『KAMEN RIDE!』

「変身！」

『PHOENIX!』

「アポロン、非殺傷設定で頼むぞ！」

「イエス、マスター」

一枚目を挿入した。

『MOBILE RIDE WING GUNDAM!』

続けて二枚目

『MOBILE RIDE GUNDAM DEATHSCYTH  
E!』

更に三枚目

『AS RIDE FALKE!』

ラストの四枚目

「ハッ！」

今回召喚したのはライダーでなく、人と獣の形をしたロボットだ。

一体目は「新機動戦記ガンダムW」の五機のガンダムの内の一機で、火力と機動性が高く、ヒロ・ユイの搭乗モビルスーツ「XXXG-101W ウイングガンダム」。

二体目も「ガンダムW」の五機の内の一機で、ステルス性が高く、デュオ・マックスウエルの搭乗モビルスーツ「XXXG-101D ガンダムデスサイズ」。

三体目は「フルメタルパニックTSR (The Second Ride)」に登場した陸戦兵器。

第三世代型アームスレイブ「M9ガンズバック」のD系列の試作機だがスペックはE系列の機体（メリッサ・マオ曹長やクルツ・ウェーバー軍曹が使っているM9）と大差はない。

傭兵部隊「ミスリル」のSRTのチームリーダーのベルファンガン・クルゾー中尉の搭乗アーム・スレイブ「ファルケ」。

ラストは「機動戦士ガンダムSEED」に登場し、砂漠戦が初めてだった地球連合軍モビルスーツ「GAT-X105 ストライク」を苦しめたザフト軍の四足歩行型陸戦モビルスーツ「TMF/AI-802 バクウ」。

「よし、ウイングはあの白い子を、デスサイズは金髪の子、ファルケはここから五百五十メートル先に潜んでいる奴、バクウは白い子の近くにフェレットをそれぞれ担当してくれ。」

ウイング、デスサイズ、ファルケ、バクウに担当相手を説明をした。

「任務了解。」

「OKだぜ！」

「ウルズ1、了解。」

「了解です。」

「よし！……うん？」

予想外のことが起きている。頷くだけかと思っていたモバイルスーツとアームスレイブが返事をしたからだ。

「アポロン？」

「申し訳ありません。伝え忘れてたことがありました。モバイルスーツやアームスレイブ、バルキリー等の機体にはその機体に搭乗したパイロットの人格が擬似人格として使われます。」

「それじゃあ。つまりあいつらは。」

「イエス。ウイングガンダムはヒロ・ユイ、ガンダムデスサイズはデュオ・マックスウェル、ファルケはクルーゾー中尉の人格があります。」

「でも、この前M9達は何も話さなかったぞ？」

「それは単に話す機会がなかっただけです。」

確かにあの時はすぐに帰ったから話す機会がなかったな。

「ちなみにバクウは？」

「ただのAIです。」

「あ、そう。」

バクウだけ適当だなあ。　　とそろそろだな。

「ウイング、そろそろしたら金髪の子が白い子にアークセイバーって言うブーメランのような攻撃をするはずだ。それをライフルで撃ち落とせ。ファルケ、お前はECSで後方の敵に接近しろ！ウイングの攻撃が戦闘開始の合図だ！行動開始！」

「……了解！」「」「」

ウイングとデスサイズがスラスターを使い空に飛び、バクウはキャタピラで移動し、ファルケはECS不可視モードを使用し移動を開始した。

「御手並み拝見といきますか。」

「こちらウイング、金髪の少女がブーメランのような攻撃を使用、撃ち落とす。」

「よーし、撃てー！」

「任務・・・了解!!」

空にウイングガンダムのバスターライフルが放たれた。

なのはSide

私以外にジュエルシードを集めてる子と出会っていきなり戦うことになって攻撃された時、突然別の方向から魔力砲が飛んできた。

私は魔力砲が飛んできた方を見たら、そこには見たこともないロボットさんがいた。

「あ、あの。助けてくれたんですか？」

私は助けてくれたロボットさんに声をかけた。

「・・・お前、名前は？」

「ふえ？あ！な、なのはです。高町なのは。」

「そうか」

「貴方の名前は？」

「俺は、ウイング。」

「ウイング？」

「高町なのは、お前を・・・殺す！」

「え？」

その言葉の後ウィングさんは右手に持ってた銃を私に向けて

ズヴァアア

魔力砲を撃ってきた。

「きゃっ！」

M a s t e r !

私は咄嗟によけて、レイジンググハートの声で前を見るとウィングさんが今度は緑色に光る剣を私に振り下ろしてきて、それをレイジンググハートで受け止めた。

「な、なんで！？どうして?!」

「任務を遂行する。」

フエイトSide

私は突然現れたロボットのようなバリアジャケットを着た人に目を向けていた。

アークセイバーを白い魔導師の子から守ったと思ったら、今度は攻撃を始めた。

でも、このチャンスを逃す訳にはいかない。

S i r

「わかってよ。バルディッシュ」

母さんのためにも、ジュエルシールドを手に入れないと。

「今のうちに封印を！」

!Sirr!!

「どうしたの？バルディツ?!！」

ダダダダダ

「くっ！」

突然草むらから魔力弾を撃たれ、私は咄嗟にシールドを張った。

「へえー、よく防いだな。やるじゃねえか、お嬢ちゃん。」

草むらから魔力弾を撃った奴が現れた。

その姿は今、白い魔導師の子が戦っている人とよく似ていて、バルディツシュのような武器を持っている。

「・・・貴方は何者ですか？時空管理局の人ですか？それに向こうにいる人は貴方の仲間なんですか？」

「俺か？俺はデスサイズ、ガンダムデスサイズ。ちなみに時空管理局って言う組織とはなんも関わりねえから安心しな。」

「ガン・・・ダム？」

「それと向こうで白い子と戦っているのはお嬢ちゃんの言う通り俺の仲間のウィングガンダムだ。」

「ウイング・・・ガンダム？」

とりあえずこの人が管理局の回し者でないことは分かった。けど、だとしたら一体何者なの？見たこともないバリアジャケット、それに攻撃されるまでバルディッシュに反応しなかった。ガンダムってなに？

「何故いきなり攻撃したんですか？」

「うん？そんなの決まってるだろ？相手を攻撃するとしたら、相手を倒すか邪魔をするかのどちらかだろ？」

この人の本当の目的が何なのかは解らないけど

「邪魔をしないで！」

サイズフォーム

「はあああ！！！！」

「おっと！！」

デスサイズの大鎌とバルディッシュがぶつかり合う。

「へえー、中々やるな。でもなあ！」

「くっ！！」

デスサイズの力に負け、体制を崩した。

「くらえ！」

すかさず魔力弾を撃つてきたが全て回避した。

「オマケだ！」

今度は左腕に装備されていたシールドを飛ばしてきた。

「はあ！」

Sir!

シールドを弾き返し、バルディッシュの声で前を見ると既にデスサイズが接近していた。

「！速い！！！」

「おらおら、いくぜ！」

デスサイズが大きく振りかぶり、私はバルディッシュで大鎌を受け止めるが、勢いがありすぎ耐えることが出来ず後ろに飛ばされた。

「くっ！強い！」

「さあて、お互い似た者同士、一緒に地獄に行こうぜ！」

このままじゃ、キリがない。こうなったらアルフと二人で。

(アルフ、聞こえる?)

( どうしたんだい、フェイト？ )

( 悪いけど、今すぐこっちに来られる？ちょっとでござって。 )

( まさか管理局が！ )

( ううん。管理局じゃないけど、なんかロボットみたいなバリアジャケットを着た人と戦っているの。それも強い。 )

( ロボットみたいなバリアジャケット？わかったすぐに行くから・・・っく！ )

( アルフ？どうしたの！？ )

( わからない。いきなり何処から攻撃されたんだ！ )

( 大丈夫なの！？怪我は？！ )

( 避けたから大丈夫だけど、すぐにはそっちに行けそうにないね。ごめんよフェイト。私も敵を片付けたらすぐに行くから。 )

( わかった。気をつけてね、アルフ。 )

どうしてアルフがいることがわかったの？とにかく今は早くこの人を倒さないと。

「行くよ、バルディッシュユ？」

YES, Sir!

「さあて、それじゃあ。斬って、斬って、斬りまくるぜー!!」

アルフSide

一体何処から撃ってきたんだ？索敵をしても何処にも反応がないし。まさか遠距離から攻撃・

ダダダダダ

「うわっ!!」

なんとか避けれたけど、遠距離攻撃じゃない！もっと近くにいる。でも一体何処に!？

「ほおー、今のを避けたか。中々やるな。」

「!誰だ!!」

辺りを見渡すが誰もいない。

「貴様の反射神経はたいしたものだ。普通だったら二、三発ぐらいは当たっただろうに。」

「隠れてないで出てきたらどうだい!!」

「……いいだろ。これではフェアではないからな。ウルズ1よりHQへ、これより戦闘を開始する。ECSの解除を申請する。」

なんだ？通信？じゃあこいつらの指揮官が何処にいるのか？それにしても一体何処に隠れてるんだ!？

「ウルズ1、了解。モード4に調整、バイラテラル角を3・7に再調整、ECS不可視モード解除。」

「なっ！」

森の中に潜んでいると思っていた敵が目の前に現れた。それにさつきフェイトが言っていたロボットのようなバリアジャケットを着ている。

「一体何者なんだいあんた。まさか管理局の人間か!？」

「そう言えば自己紹介がまだだったな。俺の名はファルケ、君と同じ使い魔に近い存在だ。正式な所属は言えないが、管理局と言う組織とは関わりはない。」

「使い魔!？」

こいつが使い魔だって?あの姿で?

「さて、お喋りはここまでだ。俺も自分の任務をしなくてはならないからな……いくぞ!」

「ぐっ！」

その言葉と同時に相手は急接近し、短刀を持った右腕を振り下ろし、それを私は左手で相手の右腕を掴み、相手は私の右腕を掴んだ。

「こいつ！」

「パワーは互角、そして」

「ぐつつ！」

私の右腕を掴んだまま相手は右腕を振り払い、腹に膝蹴りをくらい、更にかさず右足と左足を交互に蹴りをだしてきたが両腕で防ぎ、右腕で殴り掛かったが避けられ、かさず左腕で殴り掛かったがそれも避けられた。

相手は避けた反動を利用した裏拳を左腕で防いだが、更に反動を利用し右足を軸にし左足で私の足を狙って回し蹴りをしてきたが回避し一旦距離をとった。

「テクニックも悪くない、だが！」

再び接近し、こちらにしかけると思い構えたが、

「なに！？」

相手は手前で高く跳び上がり、落下の勢いを利用した踵落としを私は両腕でガードし振り払ったが相手は着地する前に空中で右足と左足で交互に蹴りをだしてきたのを腕で防いだが膝蹴りを右頬に喰らった。

「ぐつつ！強い！」

「思ったとおり二流の使い魔だ。君の戦い方は技ではあっても術<sup>アート</sup>ではない。この違いが解るか？」

「何を訳の解らないことを！」

「……こんなじゃれあいでは見えもしないか、この際だ本気で相

手をしてやるうじじゃないか。」

今まで本気じゃなかった！？あの動きで？こりゃマジでやらないと  
いかないとヤバイ。

「面白い、やってやるうじじゃないか。」

「いくぞ。」

ユノSide

「一体なんなんだ、あんなの見たこともない。」

僕と同じ世界の出身の魔導師の子の攻撃をなのはから守ってくれた  
と思ったら、いきなりなのはを攻撃し始めた。

「とにかく、なのはをサポートしないと。」

僕はなのはの近くに行こうとした。

ギョオオオオ

ドゴオオン！

「うわっ！」

いきなり爆発が起きた。

「な、なんだ？」

後ろを振り返るとそこには目が一つしかない獣のようなロボットがいた。

「あなたは何者ですか？」

「H Qへ、こちらバクウ。対象生物を確認。」

（バクウ？それがあの人の名前なのか？）

「これより攻撃を開始します。」

「え？」

バシユツ、バシユツ、バシユツ、バシユツ

ギユオオオオ

その言葉のあとに背中に背負っていたコンテナから何かが無数飛んでくる。

「あれは、ミサイル!？」

僕はすぐにシールドを展開した。

ドゴッ、ドゴッ、ドゴッ、ドゴッ、ドゴオオオオオオン

「くっ!」

全て防げたけど、あれは一体なんなんだ？

それに質量兵器であるミサイルまで装備してるなんて。

「これでも、喰らえ！」

そついいながらバクウという名のロボットは口？からピンク色の剣を左右に展開し、高速で僕に向って来た。

「うわっ！」

僕はすぐに避けた。

しかし、バクウは僕をとっり過ぎた後反転し、再びミサイルを撃ってきた。

「くっ！！」

僕は再びシールドで防ぎ、ひとまず草むらに入り、身を隠そうとした。

「逃がすか！！」

しかし、バクウは僕を見逃さないように高速で追いかけてくる。

バシユッ、バシユッ、バシユッ、バシユッ、バシユッ、バシユッ

ギユオオオオ

更には追いかけながらミサイルも撃ってきた。

ドゴッ、ドゴッ、ドゴッ、ドゴオオオオオオオン

「うわっ、わわわわ！」

ミサイルが飛んでくるのを除けば、その光景はさっきなのは友達のすずかが飼っている猫に追いかけているのと同じ感じだった。

「なんで僕は今日は追いかけてばかりなんだーーーーー!!」

「待てーーーーー!!」

しばらくの間、僕とバクウの追いかっこは続いた。

健悟 Side

現在の状況はなのはとフェイトはウィングとデスサイズが交戦、アルフとユーノのサポート組みの方もファルケとバクウの両方から交戦開始の通信もあつたし問題ないな。

「これで邪魔者はいないな。」

「そうですね、マスター。」

さて、さっさと片付けるか。まだ慣れてないせいでもた体がだるくなってきたし。

「アポロン、封印とかできるか?」

「申し訳ありませんが、いくら私でも封印までする機能はもっていません。」

「は?マジか?」

「イエス、マスター。申し訳ありません。」

まあ、確かに封印するなんてそうそう無いからな。

「じゃあ、どうしよう。」

「では、あれで封印しましょう。」

「あれって？」

「ライダーの中で唯一の封印手段。ラウズカードです。」

「ああ、なるほど。ってラウズカードはあるのか？」

「もちろんです。」

ラウズカード。

仮面ライダー剣<sup>ブレイド</sup>の世界のライダーがアンデットを封印するために使うカード。

俺はまだ封印される前の状態、コモンブランク状態のラウズカードを取り出す。

「……っで？どうやってジュエルシードを取り出すんだ？」

「考えてなかったのですか？」

「うん。」

正直、何も考えてなかった。

「ライダーでなんとかならないか？」

「ラウズカードは、あくまで封印するカードなのでジュエルシードを取り出すことは不可能、更にライダーの力でジュエルシードを取り出すことは不可能です。」

「じゃあ、どうすればいいんだ？」

ジュエルシードを封印する手段はある。  
でも、取り出す手段がない。

ライダーでは、不可能。MSやASなんてもっと無理だ。

「どうすれば。」

「マスター。」

「何だ？」

「こちらの世界に来る時にマスターは扉をくぐりましたね？」

「え？あ、ああ。」

「そして、扉をくぐる前に言われたことを覚えていますか？」

「ああ、覚えてる。」

「では、それを声に出して言うてみて下さい。それがマスターを導くはずですよ。」

「俺を……導く？」

「イエス、マスター。」

「……………分かった。」

俺はあの時、この世界に来る前に言われたことをアポロンに言われたとつり声に出して言った。

「『その扉の向こうは、お前が望む世界に繋がり、お前が望む力を与えよう。しかし、その代償として大いなる試練、災いも待ち構えている。もしお前が己の望んだ世界で大いなる試練や災いに立ち向かう覚悟、勇気があるならその扉をくぐるがよい』……………」

言い終えた俺は何か引つかかるような感覚がし、手がかりなりそうな言葉を探る。

「俺が望む世界と力、その代償、大いなる試練と災い、それに立ち向かう覚悟と勇気……………勇気!!！」

俺はカードケースからあるカードを探した。

「解ったようですね、マスター。」

「ああ、お前のおかげでな!!！」

思い出した!ライダーやMS、ASには出来ない、取り出す手段を持つ奴を。

勇気……………その言葉<sup>キーワード</sup>が合うのは、あれしかない!

「あつた!!!いくぞ、アポロン!!！」

「イエス、マスター。」

俺は二枚のカードを取り出し、ドライバーに挿入した。

『BRAVE RIDE！ FURYU！、RAIRYU！』

勇者ロボット、風龍と雷龍。

勇者王ガオガイガーに登場する超AIを搭載した中国製ビークルロボ。

「……………あれ？」

しかし、いつになっても俺の前に人型サイズの風龍と雷龍は姿を現さない。

「……………失敗？」

「大丈夫です、マスター。恐らく今ので目覚めたと思います。」

目覚める？何が？

「来ました。」

アポロンがそういうと後ろから何か近づいてくる音がし、振り返ると。

「なっ！！！！！」

緑色のミキサー車と黄色のダンプカーがこちらに向ってきた。しかしその二台の車には見覚えがあった。

「まさか。」

「イエス、マスター。そのまさかです。」

「「ズジイージャオファン!!!」」

二台の車体が浮き、車両から人型へと姿を変えていく。

「風龍!」

「雷龍!」

そして目の前に現れた二体の人型ロボット。

緑色のボディ、背中にドラムを背負い、その名のとおり風を使う勇者ロボ「風龍」

黄色のボディ、背中にバケットを背負い、こちらもその名のとおり電撃を使う勇者ロボ「雷龍」

ちなみに風龍と雷龍は兄弟であり、風龍が兄、雷龍が弟である。

「おお!」

「初めまして、野田健悟隊長。僕は風龍、よろしくお願いします。」

「俺は雷龍。よろしくな健悟隊長!」

風龍と雷龍はキチンと俺に挨拶してくれた。

「アポロン。」

「言いたいことは理解しています。しかし、今はジュエルシードを先に封印することが先決かと思えます。」

「……あとで説明しろよ。」

「イエス、マスター。」

「風龍、雷龍。会ってそうそう悪いが頼みがある。」

「問題ありません。」

「それで頼みってなんだ？」

「シンメトリカルドッキングで撃龍神になってくれ。そして、シャントウロンである猫からジュエルシードと呼ばれる物を取り出してくれ。出来るな？」

「分かりました。」

「任せてくれ！」

「頼むぞ。」

「了解！シンメトリカルドッキング！！」

シンメトリカルドッキング。

風龍と雷龍が互いの意思を一つにした時に初めて合体できるシステム。

二体が合体した時、一体の勇者が誕生する。

「撃龍う神！」

右半分が風龍、左半分が雷龍。

二体の勇者が一つになった姿、その名は撃龍神！！！！

「よし、これでいけるな。」

「マスター。」

「ん？」

「今この状況でシャントウロンを撃てば、あの猫がかなり悲惨なことになる。」

「あ」

「それじゃあ、どうすればいいんだよ！」

「落ち着け撃龍神。それに、策はあるんだろ、アポロン？」

「もちろんです。」

ブオン！

「おっと！」

いきなりカードケースから一枚のカードが飛び出した。

「それを使って撃龍神に撃って下さい。」

「は？」

「何！？」

「コイツ、凄いことをサラっと言うよな。」

「それで、撃龍神は非殺傷能力を身につけることができます。」

「本当か？」

「イエス、マスター。」

「………わかった。撃龍神。」

「わかったよ。いつでも来い！」

カードをドライバーに挿入。

『ATTACK RIDE!』

ドライバーを撃龍神に向けて

「痛みは一瞬だ。」

デイエンドの台詞を言ってから、トリガーが引いた。

『NON・BLOODSHED!』

「うおっ！」

撃龍神が劇中でキバやブレイドがディエンドにファイナルフォームライドと撃たれた時と同じような声を出した。

「よし、これでいけるな。少しだけ我慢してくれよ。撃龍神！」

「了解！！」

撃龍神の右腕のドラムに風が巻き起こり、左腕から雷がバチバチと音をだしている。

「唸れ疾風、轟け雷光！」

そして、両腕を一つに合わせた。

「シャントウロオオン！！！！」

撃龍神から緑と黄色の龍、風と雷のエネルギー状の龍が放たれ

「にゃーーーー！！！！」

猫にシャントウロンが当たった。

「うおおおおおお！！！！」

撃龍神の雄叫びと共にシャントウロンが戻ってきた。

「ジュエルシード、回収完了しました。」

撃龍神にしてみればとても小さいジュエルシードが左手の掌に載っ

ていた。

「よし。」

俺はラウドカードを取り出し、ジュエルシードに投げた。

ジュエルシードはラウズカードに吸い込まれ、カードは俺の手元に帰ってきた。

絵柄を見るとカードにはジュエルシードが描かれ、？XIVと書かれていた。

「封印完了だな。それにあっちも」

猫の方を見ると元の大きさに戻り、気を失っていた。見たところ外傷はない。

「非殺傷設定ではありませんが、やはり少々刺激が強かったようですね。しかし生命に支障はありませんのでご安心を」

「そうかよかった。」

「それでは、隊長殿、我々は先に撤退します。」

「また後でな。」

風龍と雷龍はビークル形体になり、走り去っていった。

「……また後で？」

「マスター、そろそろウィング達も撤退させたほうがよろしいと思います。」

確かに目的も達成したし、もういいだろ。

「わかった。HQより各機に通達。目的は達成した速やかに戦闘を停止し撤退せよ。」

なのはSide

「はあ、はあ、はあ。」

>Are you all right? My master?<

「う、うん。大丈夫だよ。レイジングハート。」

「……………」

ウイングさんは黙ったまま私を見ている。

(こんなところで戦ってる場合じゃない。早く、ジュエルシードを封印しなくちゃ。)

私はレイジングハートをウイングさんに向けた。

「やめておけ。何度やっても同じだ。今のお前では俺には勝てない。」

「私だって本当は戦いたくありません！私はただジュエルシードを封印したいだけなんです！！だからどいて下さい。」

「……断る。」

ウィングさんは再び銃を私に向けてきた。

「……任務了解。戦闘を停止し、撤退を開始する。」

でも、撃たずに銃を下ろした。

「俺の仲間がジュエルシードを回収した。もうお前と戦う理由はない。」

「えっ!」

ジュエルシードが回収された?

「さらばだ。」

「あっ、待って!」

でも、ウィングさん待ってくれず、そのまま飛んで行ってしまった。

フェイトSide

「はあ、はあ、はあ」

>Sir<

「大丈夫だよ、バルディッシュ。」

「どうした、もうバテたのか?俺はまだまだいけるぜ。」

私の前に強敵、デスサイズが全く疲れた様子もなく私を見ている。

(この人、すごく強い。)

「そろそろ、諦めて帰ったらどうだ？多分今のお嬢ちゃんじゃ、俺には勝てねえだろうからな。」

「・・・申し訳ないですけど、諦める訳にはいきません。」

「そうかい。それじゃあ・・・」

ドゴオオオオオン

「!!」

「おいおい、なんだなんだ？」

突然何かが地面に強くぶつかり、そのせいで砂埃が舞っている。そこにいたのは

「う・・・くっ!!」

「アルフ!!」

私の使い魔のアルフだった。しかも、凄い傷だらけだった。私は急いでアルフに駆け寄った。

「アルフ、大丈夫？」

「フェ・・・フェイ・・・ト。」

ガシャンッ

「!!!」

私の後ろに何かに着地した音がした。

振り返るとデスサイズとは違う姿のロボットのようなバリアジャケツトを着た人がいた。

「随分派手にやってるようだな、ファルケ。」

「ここは戦場だ。敵が例え女でも全力で相手をする。」

「少しは加減してやれよ。」

「お前はもう少し緊張感をもったらどうだ？デスサイズ。それにしても、その使い魔。」

ファルケと呼ばれる人がアルフを見ている。

「醜いな、全く醜い。不器用で強引で柔軟差の欠片も無い。それに。」

今度は私を見た。

「君がその使い魔の主人か？」

「・・・そうです。」

「成程。どつりで弱いわけだ。」

「どつりという意味ですか？」

「分からんか？ならば簡単に言つてやろう。あくまで推測だが、君自身の能力は高いんだろつが実戦での経験は少ないはずだ。だからその使い魔は君のことが気がかりで戦いに集中できていない。君が弱い内はその使い魔も弱いままだ。」

「くつ」

私は返す言葉がない。

「こつ言つては申し訳ないが言わせてもらつ。君は自分が強いと思つているんだろつが君は弱い。君では、嫌、君達では我々には勝てない。所詮君は子供だ、大人しく降りたまえ。」

「……フェイトを」

「ん？」

「アルフ？」

「フェイトを……馬鹿にするなああ————————  
——————！！！！！！」

アルフはいきなり立ち上がり、ファルケに襲いかかった。

「おい、ファルケ！！」

「問題ない、デスサイズ。手を出すな。」

「うおおおおおー!!!」

「ふん。」

ファルケがアルフの攻撃を避け、右手でアルフのアゴを突き、左腕でアルフのお腹の部分を突き、アルフは飛ばされ木にぶつかった。

「アルフ！」

「攻撃が単純だな。かなり避けやすかったぞ。」

「まだまだ・・・」

アルフが再び立ち向かおうとする。

「あれ？」

でも、立ち上がろうとしてまた倒れた。

「アルフ、どうしたの？」

「わ、わからない。」

「放っておけ、軽い脳震盪だ。あの一撃を喰らって立ち上がるつもりなのは驚きだがな。」

「く、くそー。」

「……………所詮は飼い犬ということか。」

「ん？……………ああ、了解。おい、ファルケ。」

「分かっている。ウルズ1、了解。直ちに撤退を開始する。」

デスサイズとファルケが撤退しようとしている。

「もはや、君達と戦う理由は無くなった。」

「どうしてですか？」

「俺達のリーダーが目的のジュエルシードを回収したからだよ、お嬢ちゃん。」

「！そんな…！」

ジュエルシードが回収された？それじゃあ、この人達は罠だったの？

「デスサイズ、撤退してHQと合流する。行くぞ。」

「へいへい。」

そう言って、ファルケは姿を消し、デスサイズは空高く飛び上がった。

「……………」

「……………ごめん……………よ……………フェイト。あたしが……………頼り……………」

ないから。」

「うっん、そんなことないよ。それより早く帰ろつ。手当てをしな  
いと。」

私はデスサイズとファルケが立っていた場所を見た。

（デスサイズにファルケ……次は負けない。）

ユノSide

「はあ、はあ、はあ」

「くそ、ちょこまかと！」

「一体僕はどれぐらい走ってるんだろ？  
流石にそろそろ体力が持たない。」

バシユッ

ギユオオオオ

ドゴオオン

「うあっ！」

逃げることに集中しすぎてシールドを張れなかった。

「はあ、はあ、はあ」

駄目だ。走りすぎて動けない。  
バクウも近づいてくる。  
もう駄目だと思った。

「！……………了解です。ただちに撤退します。」

バクウは僕にとどめを刺さずにそのままどこに走り去っていった。

「どうして……………あ！なのは！！！」

僕はなのはが心配になり力を振り絞りなのはの元に急いだ。

「ふう、疲れた〜」

「お疲れ様です。マスター」

「お前もな。」

あれからウイング、デスサイズ、ファルケ、バクウに礼を言ってカードに戻した。

ちなみに原作ではなのはがダメージを受けて運ばれるはずだったがウイングがある程度の加減をしたため運ばれなかったが変わりにユイノがグツタリしていた。

皆に理由を聞かれると「また猫に追いかけていた」っとあながち嘘ではないが嘘を言っていた。

そして、空が茜色に染まってきたので俺は帰ろうとした。

「あ、健悟君」

しかし、すずかに呼び止められた。

「どうした？」

「あの、来週って何か予定とか入ってる？」

来週？なんかあったか？・・・無いな。

「いや、特にはないけど。」

「本当？それなら、来週みんなで温泉に行くんだけど。健悟君もどうかな？」

ああ、温泉のイベントか。あそこにもジュエルシードがあるしな。

「そうだな。でも、いいのか？」

「大丈夫！ちゃんと皆も連れて行ってもいいって言ってくれてるから。」

「そうか。それじゃあ、ご一緒させてもらおうかな？」

「うん！もちろんだよ！」

なんか凄く嬉しそうだなすずか。

「それじゃあ、またな。」

「うん。またね。」

(さて、いよいよ温泉イベントか。また色々と忙しくなるな。・・・  
・・・にしても体がダルイ。)

そんなことを考えながら俺は家に帰った。

## 第七話 介入開始（後書き）

ARX-7アーバレスト「……疲れた。」

健悟「大丈夫か？」

ARX-7アーバレスト「なんとか。」

健悟「よし、それなら言っただけか？」

ARX-7アーバレスト「まあ、言いたいことは予想できるけどどうぞ。」

健悟「いくらなんでも設定無茶苦茶だろ！特に風龍と雷龍が！なんでカードで召喚じゃないんだよ！」

ARX-7アーバレスト「だって白騎士君さんから「もし勇者口ポを出すならカードで召喚では無くそのまま出してください」ってリクエストがあつたんだもん！！折角こんな無茶苦茶な小説を読んでくれてるんだから読者のリクエストには成るべく答えてあげたいじゃない！！」

健悟「まあ、気持ちは分かるけど。今後どうするんだよ。」

アポロン「ご安心を、マスター。」

健悟「アポロン。」

ARX-7アーバレスト「やけに出てくるの遅かったね。」

アポロン「風龍と雷龍の問題はちゃんと解決済みです。」

健悟「本当か？どうやったんだ？」

アポロン「それについては次回の本編で明かします。」

健悟「そういえば本編で思い出したけど、今回凄く長いな。」

ARX-7アーバレスト「そりゃ、バトルシーンだからな。気合い入れたぜ！！」

健悟「それぞれの相手ってなんか共通点あるな。」

ARX-7アーバレスト「合わせて選んだもん。」

アポロン「特にアルフSideが一番手が込んでいますね」

ARX-7アーバレスト「だってファルケだよ！クルーゾー中尉だよ！気合い入れないでどうする！？」

健悟「クルーゾー中尉好きなのか？」

ARX-7アーバレスト「一番好きなのは、宗助とアーバレストだよ？」

健悟「じゃあなんで？」

ARX-7アーバレスト「だって「フルメタル・パニック！TSR (The Second Ride)」の第八話のアーバレストと

ファルケの模擬戦シーンカッコいいじゃん!」

健悟「・・・否定はしない。」

アポロン「ファルケとアルフに戦闘はその八話のシーンをアーバレストの位置をアフルに置き換えたそうですよ?」

ARX-7アーバレスト「ちなみにアルフを倒す時は脳震盪にするか模擬戦でアーバレストを倒した技にするか迷ったけど脳震盪にしました。」

健悟「しかも最後はきつちり」所詮は飼い犬ということか」って言うてるな。この台詞好きだけど。」

ARX-7アーバレスト「まあ、ぶっちゃけ。長くなった最大の理由は最初は風龍と雷龍をカード召喚する設定だったけど上で書いたとおり、リクエストに答えたかったから案を練り直したから。」

健悟「頑張るな。読む読者は大変だろうけど。」

ARX-7アーバレスト「読者のみなさんごめんなさい。」

アポロン「それではそろそろ次回予告をしましょう。」

ARX-7アーバレスト「はいはい。それじゃあ、健悟君よろしく!」

健悟「次回『第八話 温泉行ってもゆっくりできない』です。」

ARX-7アーバレスト「俺も温泉行きたいな。次回もお楽しみ

150

第八話 温泉行ってもゆっくりできない (前書き)

遅れてすみません！

## 第八話 温泉行ってもゆっくりできない

すずかの家にあったジュエルシードを封印して一週間が過ぎ、すずか達に誘われて現在海鳴温泉に向う高町家の車に乗せてもらっているのだが

「……………」

「健悟君？」

「ん？どうした？」

「それはこっちの台詞よ」

「え？」

「健悟君、ここまで何回も後ろを見るよね？」

「何かあんの？」

「い、いや。そんなことないぞ？」

「そんなことあるから言ってるんでしょっが！」

そっついながらアリサとすずかは後ろを見た。

「」「あ」

「え？何々？何かあるの？」

アリサとすずかが気になったのかなのはも後ろを見た。

「?何も無いよ?」

「そ、そうだね」

「ごめん、なのは。気のせいだったみたい」

「そっか」

「そうそう。あ、健悟ちょっといい?」

はいはいわかってますよ、言いたいことは。

(何であれまで付いてきてるのよ!)

なのはに聞こえないように小声で話す俺とアリサとすずか。

(.....まあ、その、護衛だ)

(それになんだか数が増えてない?)

(.....増えた)

(あんなのどうするのよ!)

(多分大丈夫だ。なんとかなるって。)

(あんだねえ!)

「三人ともどうしたの？」

なのはが俺達が話しているのに気付いた。

「な、なんでもないわよなのは」

「う、うん」

「おう、なんでもないぞ？」

「????？」

(兎に角なんとかしときなさいよ?)

(分かってるって)

俺がずっと気になっていて、アリサとすずかにも色々言われた理由それは高町家の車と月村家の車の後ろを走っている大型車両、Gトレーラーとビークル形態の風龍と雷龍の三台が付いてきているからだ。

付いてくることに関しては問題ないがずっと後ろを走ってきたら妖しがる。

そのため三台には予め一旦離れ、別ルートを使って合流するように指示してある。

俺が後ろを気にするのは三台がちゃんと合流できたか確認するためだった。

(よし、予定どおり合流できたな。しっかし、先週に引き続きジュエルシードの回収か。それだけでも面倒なのに更に今度は風龍と雷

龍。先週中に説明はしてもらったけど。はあ、色々問題が山積みだな。）

回想

すずかの家から帰宅し、夕食と食べようとしたがアポロンに訓練場に行くように言われ、訳もわからず訓練場に行ってみると

「……………」

「お疲れ様です、健悟隊長」

「お疲れさん！」

風龍と雷龍が待っていた。

「……………どういうことだ？」

「本日より我々風龍、雷龍は健悟隊長の許に配属されました」

「よろしくな」

「……………アポロン、説明しろ」

明らかに答えを知っているアポロンに説明を求めた。

「イエス、マスター」

「その前にさっき目覚めたって言ったが、あれはどういう意味だったんだ？」

「その言葉のままです、マスター。あの時、風龍と雷龍のカードを使用した時にこの海鳴市に身を隠していた風龍と雷龍の超A IとG Sライドが目覚め、現在の状況になっています」

「待て！つてことは氷竜や炎竜とかもこの海鳴の何処かに身を隠しているのか？」

「イエス、マスター。しかしまだマスターがカードを使用していないので超A IとG Sライドは覚醒しておらず、ただの車両として使われています」

「……マジ？」

「マジです。しかしそれはあくまで環境に溶け込める者だけですが」

まあ、氷竜や炎竜、風龍、雷龍、ボルフォッグは開発のベースがクレーン車、はしご車、ミキサー車、ダンプカー、パトカーだから街中においても不自然じゃないな。それにライナーガオー？も新幹線だからな。光竜と闇竜、ステルスガオー？、？は……軍かな？

「じゃあ、マイクやギャレオン、ジェイアークとかは？」

「ジェイアークはアニメの様にどこかの山の中にいるはずですよ。マイクやギャレオン、ファントムガオー、一部のガオーマシンはこの下の整備施設に保管させて「待て！」なんですか？」

「整備施設？」

「イエス、マスター」

「この階がラストじゃないのか？」

「確かに前回、ラストといいましたが地下がラストとは言ってませんか？」

「それって言い訳のような気がするんだが」

「申し訳ありません。それで、ご覧になりますか？」

「いや、今はいい。あと聞きたいことがあるんだが？」

「なんですか？」

「風龍と雷龍はもちろんだがガオガイガーとかをファルケ達みたい  
に人間サイズで出すことって出来るか？」

「可能です」

出来るのかよ。

「しかしその際は本体が使用できませんが」

「どういう意味だ？」

「まずカードを使い、人間サイズの風龍と雷龍を召喚します。しかしそれだけでは完全には動きません。次に風龍と雷龍の本体の意識を私を經由して人間サイズの風龍と雷龍に意識を飛ばします。これで初めて人間サイズの風龍と雷龍が完成します。もちろん風龍と雷龍の意識は人間サイズの体に飛ばされているので本体は意識がなくなるため意識が戻るまで本体の活動が停止します」

「つまり簡単に言えばWの翔太郎やフィリップがメモリを使って意識を飛ばすみたいな感じか？」

「大雑把に言えばそんな感じですよ」

「なんだかよく分からねえけどとりあえず試してみようぜ、健悟隊長」

雷龍が自ら申し出てくれた。

「そつだな。風龍、雷龍の体を支える準備を」

「了解です」

「では、初めましょう」

「おう」

ドライバーを取り出しカードを挿入した。

『KAMEN RIDER! PHOENIX!』

続けて雷龍のカードを取り出し挿入した。

『BRAVE RIDER! RAIRYU!』

俺の前に人間サイズの雷龍が現れた。

「ん？」

「どうした、雷龍？」

「いや、なんだか今誰かに呼ばれるような感覚が」

「それは今、マスターがこのサイズのあなたを召喚し、あなたに力を求めているからです」

「成程な」

「では、データを送る要領で意識を飛ばしてみてください。既に設定済みです」

「了解！」

そう言うと雷龍の目から光が消え、倒れそうになったが風龍が支えている。

「どうなった？」

「成功だぜ、健悟隊長。」

目の前の人間サイズの雷龍が返事をした。

「すげえな。本当に小さくなってるぜ。こうして見ると俺も風龍もデカイな」

「雷龍、システム等はどうか？」

「問題ないぜ。戻る時はどうするんだ？」

「戻る時も同じようにすればOKです」

「よし！」

再び雷龍の本体が起動した。

「へえー、こいつは便利だな」

「これで我々も隊長と共に戦える機会が増えますね」

「そうだな。でも、これなら最初っからこうすれば良かったんじゃないか？」

「残念ながらそれは不可能です」

「なんで？」

「先程も申したとおり、人間サイズの勇者ロボを完成させるには私を経由して意識を飛ばす必要があります。現在は風龍と雷龍は目覚めているので可能ですが、まだ氷竜達は目覚めていないため意識を飛ばすことが出来ませんので人間サイズの氷竜達を召喚しても未完成の状態になります」

「つまり、一度はカードを使って目覚めさせないといけないってことか？」

「イエス、マスター。しかしそれは氷竜達に限らず、ギャレオン、ファントムガオー、ジェイアークも同様です。彼らに関しては擬似人格も目覚めさせる必要もあります。ガオーマシンはいつでも使用

可能ですが」

「成程。しかし困ったな。ギャレオンとファントムガオーがいないとガオガイガーとガオファイガーが使えねえぞ」

「ですので、出来るだけ早くカードを使い、彼らを目覚めさせないといけません」

回想終了。

(目覚めさせる・・・ね。はあ、本当にやること多いな)

「・・・君・・・健悟君!!」

「へ?」

急に呼ばれたので間抜けた返事をしてしまった。

「もう、着いたよ?大丈夫?」

「ああ、大丈夫、大丈夫。ちょっと考え事してて」

「そう?よかった」

俺が先週のことを思い出している間に目的地の海鳴温泉に到着したようだ。

「ふうー」

荷物等を部屋に置いて、現在温泉に浸かっている。  
温泉はいいねえ。

温泉は疲れた心と体を癒してくれる。

リリンが生み出した文化の極みだよ。

ちなみにユーノが助けを求めるかのように鳴いていたがそこは原作  
どおり+面白そうだったからスルーしておいた。

シャカ、シャカ、シャカ

「さーてつと確かこの後はアルフがなのはと接触。そして夜はなの  
はとフェイトが戦闘か」

俺は頭を洗いながらこの後の出来事を整理している。

「うーん、アルフのはスルーしよ。俺がいなくても解決するだろう  
し。そういえばアルフの奴もう回復したのか？」

シャーーーーー

「まあ、いいか」

シャワーでシャンプーの泡を流し、脱衣所に出る。

そして、

ゴクッ、ゴクッ、ゴクッ

「プハアー、さて色々忙しくなるな」

予め買っておいた牛乳を飲んだ。

「マスター。白ひげが出来てますよ？」

「……カッコ悪。」

夜になり、なのはがジュエルシードを感じたのかユーノをつれて外に出る。

「さて、俺も行くとするか」

俺はバックの中から変身ツール「ブレイバツクル」を取り出した。

「今日は私はお休みですか？」

「そつだな。たまには休め」

ブレイバツクルにスピードA「CHANGE」のカードを入れ、腰に装着し、バックルからトランプ状のベルト「シャッフルラップ」が伸長し、バックルに装着され構えた。

「変身！」

『Turn Up』

ターンアップハンドルを引き、光のゲート「オリハルコンエレメント」が前面に放出された。ゆっくりとオリハルコンエレメントを通過し、俺は仮面ライダーブレイドに変身した。

仮面ライダーブレイド。

不死の生命体「アンデット」と戦い、封印する仮面ライダー。

平成仮面ライダーシリーズの第五作「仮面ライダー<sup>ブレイド</sup>剣」の主演ライダー。

キヤッチコピーは「今、その力が全開する。」「運命の切り札をつかみ取れ！」

「よし」

ブレイドに変身した俺は窓から外に出て、左腰のホルスターに収納されているブレイド専用の剣型カードリーダー兼メインウエポン「醒剣ブレイラウザー」をラウザーホルスターから引き抜き、内臓されているトレイを円状に展開し、スピードの2〜13までのラウズカードの中からスピードの9「MACH JAGUAR」カードを取り出し、スラッシュリーダーにカードをラウズした。

『MACH』

ラウズしたことでスピードの9に封印されていたジャガーアンデットの力が開放され、高速移動「ジャガーマッハ」が発動し、俺はジュエルシードの回収に向った。

「ふう、間に合ったな」

俺が現場に到着すると既にフェイトとアルフがジュエルシードを発見していた。

そして、フェイトがバルディッシュを起動させ、封印しようとしていた。

「悪いな、フェイト」

コモンブランク状態のラウズカードを取り出し、ジュエルシードに向けて投げ、ジュエルシードを封印した。

無論フェイトとアルフは驚いている。

封印し終えたラウズカードが俺の手元に戻り、カードにはジュエルシードと????が描かれている。

「よし、封印完了っつと」

「誰だい！隠れてないで出てきな！」

アルフがこちらに向って叫んでいる。

(まあ、いずれは姿を見せないといけなし、丁度いいかな?)

そう思った俺は林の中から出て、二人に姿を現した。

「また変なのが、あんた一体何者だい？」

「人に名を聞く前にまず自分から名乗るのが礼儀じゃないのか？」

正直知っているから別にいいけど、なんとなく挑発してみた。

「なんだと！ふざけるんじゃないや、アルフ」って、フェイト

フェイトがアルフを静めた。

「こちらが名乗ったらちゃんと名乗ってくださいますか？」

「ああ、約束する」

「……フェイトです。フェイト・テストロッサ」

「あたしはフェイトの使い魔、アルフだよ」

「フェイトにアルフか。俺の名はブレイド。仮面ライダーブレイド」

「仮面ライダー……ブレイド？」

「あんたふざけてるのかい!？」

名前を繰り返すフェイトに対し、その名が本名ではないと分かっているアルフは少々怒っている。  
嘘じゃないんだけな。

「ふざけてなんかいない。これが俺の名前だ。覚えにくいならブレイドでいいぞ?それにしてもフェイト……か」

「?なんですか？」

「あたしのご主人様の名前がおかしいかい？」

フェイトは警戒し、アルフは相変わらず怒り状態だ。

「いや。おかしい何て思ってない。むしろ逆だ」

「逆？」

「そう。いい名前だと思ってな」

「え？」

「は？」

突然のことにフェイトとアルフは気の抜けた声を出した。

「だから、いい名前だなんて言ってるんだよ。知ってるか？こっちではフェイトってのは運命って意味があるんだ。いい名前を付けてもらってよかったな」

「え？えーと、ありがとう・・・ございます」

フェイトが頭を下げてお礼を言っている。

「フェイト、お礼を言ってどうすんのさあ」

アルフがフェイトにツッコミを入れている。

「ところであんた。さっきあたしらが封印しようとしていたジュエルシートを吸収したカード。あれは投げたのはあんたかい？」

「説明してもいいが。お客さんが増えたようだな」

後ろを振り返るとバリアジャケットを展開したなのは、なのは肩に乗っているユーノがいた。

「あ」

「遅かったな」

「あなた一体何者なんですか？」

なのはの肩に乗っているユーノが俺に質問してきた。

「俺に質問するな」

照井風に言ってみました。

あ、困った顔してるな。

しょうがないな。

「さっき彼女らにも言ったことを君達にも言わせてもらう。人に名前を聞く時は、まず自分から名乗るのが礼儀じゃないのか？」

「あ、えっと、ごめんなさい。私、なのはです。高町なのは」

「僕はユーノです。ユーノ・スクライア」

「俺の名前はブレイド。仮面ライダーブレイドだ。よろしく」

「えっと、よろしくお願ひします」

「よろしくお願ひします」

「ちょっとあんたら！」

なのはとユーノと挨拶をしている最中にアルフが痺れを切らした。

「いつまで挨拶してるんだい！特にその……え……」

「ブレイドだよ、アルフ」

「そうそうブレイド！さっさとさっきの答えを言ってもらおうか！」「アルフって物覚え悪いのか？」

「さっきの答え？」

「ああ、そうだったな」

そっぴいながらジュエルシールドが封印されているラウズカードを取り出し、全員に見せた。

「やっぱりあんたが！」

「そのとおり、君のご主人が封印する直前で俺がこのラウズカードを使ってジュエルシールドを封印させてもらった」

「ブレイドさんもジュエルシールドを？」

「どうして、あなたはジュエルシールドを集めてるんですか！？」

「今は言えないな」

「とにかく痛い目に遭いたくなかったら、そいつを渡しな。でないとかガブツていくよ？」

「痛い目に遭うつか。それは先週、君がファルケにされたことを言ってるのか？」

「なっ！」

「ファルケ！？」

ファルケの名を聞いてアルフとフェイトが反応した。

「あんだ、ファルケを知ってるのかい！」

「当たり前だ。俺の仲間だからな」

「それじゃ、デスサイズも？」

「もちろん。ファルケとデスサイズだけじゃなく、ウイング、バク  
ウも俺の仲間だ」

「ウイングさん！？」

「バクウ！？」

今度はなのはとユーノが反応した。

「あの時ファルケが言ってたジュエルシードを回収した仲間が」

「そ、俺のことだ。これが証拠だ」

先週封印したジュエルシードのラウズカードも見せた。

「…………それを渡して貰えませんか？」

「…………断つたら？」

「それなら」

フェイトの足元に魔方陣が展開され左手を前に出し、魔力が集まっ  
ていく。

(あ、まずい。あれは！)

フェイトの攻撃魔法の一つ、遠距離・直射系砲撃魔法「サンダース  
マッシャー」だ。

「力づくで奪います！」

>Thunder Smasher<

フェイトからサンダースマッシャーが放たれ、砲撃がこちらに向っ  
てくる。

「危ない！」

ユーノが叫ぶが俺は避けない。

「チツ！」

俺は舌打ちをしながらブレイラウザーのトレイを円状に開きラウズ  
カードを一枚取り、ラウズした。

ドゴオオオオオオ

サンダースマツシャーが着弾し辺りに土ぼこりが舞い上がる。

「あーあ、馬鹿だねえ。素直にジュエルシードを渡していればやらずに済んだのにねえ。それにしてもさっすがあたしのご主人様やっぱり凄いね〜」

「……アルフ、ブレイドからジュエルシードを回収するよ」

「へいへい」

「誰がやられたって?」

「!」

「何!??」

「ギリギリセーフ。……かな?」

土ぼこりが晴れると俺は普通に立っていた。

「そんな馬鹿な!フェイトの砲撃はちゃんと命中したはずだ!」

「確かに命中したぞ?」

「ならどうして、立っていられるんですか?」

「答えが知りたいんならもう一度攻撃を試してみろよ?」

「……バルディッシュ」

> Photon Lancer      Fire <

バルディツシュからフォトンランサーが放たれ、俺もカードをラウズした。

『METAL』

次の瞬間、体が銀色に包まれ、フォトンランサーを軽く弾いた。

「なんだい今のは？」

「ユーノ君、今ブレイドさんが」

「うん、まるで身体が金属になったかのようにだった」

「これがラウズカード『メタル』の力だ」

俺が最初にサンダースマツシャーを防ぎ、今フォトンランサーを防ぐために使用したラウズカード。

スピードの7「METAL TRILOBITE」のカードをラウズしたことでスピードの7に封印されたトリロバイトアンデットの力が解放され、身体を鋼の様に硬化させ、防御力を強化する能力「トリロバイトメタル」が発動した。

「どうだ、これで分かったか？」

「嘘だろ？フォトンランサーをあんなにあっさり」

「さーて、そろそろこっちも反撃するか。あ、そっだ」

俺はなのはの方を向いた。

「安心しろ、高町なのは。ちゃんと君の相手もするから」

一枚のラウズカードを取り出し、ラウズした。

『GEMINI』

ジエミニをラウズしたことで俺の隣にブレイドがもう一人現れた。

「え？」

「ブレイドがもう一人？」

「どうなってんだい？」

「分からない」

本来はブレイドの世界の仮面ライダー、「仮面ライダーギャレン」が使うラウズカード、ダイヤの9「GEMINI ZEBRA」。ラウズしたことでダイヤの9に封印されたゼブラアンデットの力が解放され、己の分身を一体生成する能力「ゼブラジエミニ」が発動し、俺の分身が現れた。

「それじゃあ、始めるか」

とは言え、ブレイドはフェニックスと違い非殺傷設定がない。だから最低限の攻撃しかできない。できれば早めに勝負をつけたいところだ。

「君達、ここで軽いゲームでもしようか」

「え？」

「ゲーム？」

最初に反応したのはなのはとフェイトだった。

「今から俺と勝負してどちらかが早く俺を倒せば、ジュエルシード二つを渡す。しかし、片方でも負ければその場でゲームは終了、負けた方がジュエルシードを一つだけ俺に渡す。ハンデとしてそれぞれのサポート組みの参加も認める。どうだ？」

「つまりあなたは二対一でもかまわないというのですか？」

「そのとうりだ、ユーノ・スクライア。どうする？悪いゲームじゃないと思うが」

「どうする、フェイト？」

フェイトはしばらく考え、そして

「やるよ。勝てばジュエルシードを二つ手に入れることができる」

「よし。フェイトがそういうならあたしもやってやるよ」

フェイトはゲームに乗り、アルフはやる気満々だ。

「そっちはどうする？」

「え、えつと。本当は戦いたくありませんけど、やります！」

「OK。それじゃあ」

なのはサイドの俺（以降Nブレイド）が構え。

「ゲームスタートだ！」

フェイトサイドの俺（以降Fブレイド）がゲーム開始を合図し、フェイトとなのはに向っていった。

「いくぞー！」

FブレイドSide

「いくぞー！」

両サイドの俺が同じ台詞をいい、フェイトに向っていった。

「バルディッシュ」

>サイズフォーム<

バルディッシュから魔力刃が出現し、フェイトはサイドスイングでバルディッシュを大きく振り、それをブレイラウザーで受け止める。

「ふっ」

「くっ」

余裕のある俺は鼻で笑い、フェイトは悔しそうな顔をしている。

「うおおおおおー！」

俺がフェイトに動きを止められている際にアルフが後ろから接近してくる。

回避するためにブレイラウザーに込めていた力を抜いた。

その結果フェイトはバランスを崩し、俺はその場でジャンプし、フェイトの後ろに回る。

「なっ！」

「フェ、フェイト！？」

フェイトとアルフはお互いに回避を試みるがどちらも勢いがついていないため回避は不可能だった。そして、

ゴチンッ！

「いたたたた」

「・・・痛い」

お互いに頭をぶつけた。

「うわゝ、痛そう」

正直、今のはいい音をしたた。

「う、ごめんよフェイト！大丈夫！？」

「う、うん。なんとか」

「……若干涙目になってないか？」

「フェイトによくも！！！」

「いやいや、確かに避けた俺も悪いけど、明らか事故だろ？」

「あたしも本気でいくよ！！！」

アルフが狼形態に変身した。

「うおおおおお！！！！！」

「ぶっ、面白い！！！」

そっぴいながら狼形態のアルフに立ち向かっていった。

NブレイドSide

「いくぞ！！！」

両サイドの俺が同じ台詞をいい、なのはに向っていった。

「はあああ！！！」

手始めに俺は右ストレートを出す。

「！」

> Flier fin<

レイジングハートが飛行魔法を発動させ、なのはは空中に回避する。

「レイジングハート、お願い！」

> All right<

レイジングハートがデバイスモードからシューティングモードに変形し、魔力が圧縮されていく。  
来るぞ。なのはの十八番が！

> Divine Buster<

レイジングハートからダイバインバスターが発射された。

しかし、既に対策のラウズカードは用意してある。

「それなら、これだな」

『 REFLECT 』

本来はブレイドの世界のライダー、「仮面ライダーカリス」が使用するラウズカード、ハートの8「REFLECT MOTH」。ラウズしたことでハートの8に封印されたモスアンデットの力が解放され、身体の周囲にバリアを発生させ、相手の攻撃を反射させる能力「モスリフレクト」が発動し、なのはのダイバインバスターを反射した。

「え！」

流石のなのにも驚きいたがすぐに回避した。

「さて、こつちも空中戦といきますか」

左腕に装備させているブレイドのパワーアップアイテム、「ラウズ  
アブゾーバー」からラウズカードを二枚取り出し、中央部の「イン  
サート・リーダー」にスピードのQのラウズカード「ABSORB  
CAPRICORN」をセットする。

『ABSORB QUEEN』

アブゾーバーが起動し、続けて二枚目のラウズカード、スピードの  
J「FUSION EAGLE」をラウズした。

『FUSION JACK』

身体の各部が金色のアーマー「ダイヤモンドゴールド」に覆われ、  
胸の部分はスピードのカテゴリ<sup>ジャック</sup>「J」の鷲の紋章「ハイグレイドシン  
ボル」が刻印されたブレイドの強化進化した姿。

カテゴリーJの力をまとった高機動形態、「仮面ライダーブレイド  
ジャックフォーム」

「姿が変わった！」

ユーノが驚く。

ジャックフォームの背中に装備された「オリハルコンウィング」を  
展開し、空に飛び上がった。

「飛行もできるのか！」

「さーて、折角ジャックフォームになっただけどそろそろ終わらせよう」

流石にこのまま戦い続けると色々騒ぎになりかねないし。

ブレイラウザーから再び二枚のラウズカードを取り出し、二枚を連続でラウズする。

『SLASH』

『THUNDER』

ラウズカード、スピードの2「SLASH LIZARD」スピードの6「THUNDER DEER」。

スピードの2に封印されたりザードアンドットの力が解放され、ブレイラウザーの切れ味を増幅させ、斬撃攻撃「リザードスラッシュ」が発動し、スピードの6に封印されたディアーアンドットの能力が解放され、電気エネルギーが生成され、ブレイラウザーから電撃を発生させる能力「ディアーサンダー」が発動する。

『LIGHTNING SLASH』

そして、二つを組み合わせたことでブレイドの必殺技の一つ、「ライトニングスラッシュ」が発動する。

「はあああああ！」

なのはに急接近し、切りかかる。

> Protection <

レイジングハートがプロテクションを展開するが、ジャックフォームになったことで攻撃力が上昇しているライトニングスラッシュは簡単にプロテクションを破壊し、

「あっ」

「・・・悪いがチエックメイトだ」

なのはの喉元でライトニングスラッシュを寸止めた。

> Put out <

レイジングハートがジュエルシールドを排出した。

「レ、レイジングハート!?!」

「主人思いのようだな」

コモンブランクカードを取り出し、ジュエルシールドを封印する。

FブレイドSide

「うおおおおお」

狼形態のアルフが俺に噛み付こうとしたがそれを横に避ける。

「脇がから空きだな」

『TACKLE』

今度はスピードの4「TACKLE BOARD」をラウズ。スピードの4に封印されたボアアンデットの力が解放され、突進力が強化される能力、突進攻撃「ボアタックル」を発動させ、アルフの脇にタックルを食らわせた。

「ぐっ!!」

「おまけだ!」

『UPPER』

その次はダイヤの4「UPPER FROG」を続けてラウズ。ギヤレンが使うラウズカードでダイヤの4に封印されたフロッグアンデットの力が解放され、腕力が強化され、アッパーパンチ「フロッグアッパー」を発動させ、アルフの腹に食らわせた。

「がはっ!!」

フロッグアッパーをまともに食らい、アルフは蹲っている。

「アルフ!!」

フェイトがアルフに心配し近づく。

「アルフ、大丈夫?」

「ゲホッ、ゲホッ。だ、大丈夫」

「さて、トドメを刺すか」

プレイヤーからラウズカード抜き、ラウズしようとした。

「……と言いたいところだが、もう既にゲームは終了している」

「え？」

勝負が決着が付いたためジェミニを解除し、元の一人に戻った。

「約束どおりジュエルシード貰っていくぞ」

「くっ！こうなったら力づくで」アルフ「っフェイト」

「これ以上無理をしちゃ駄目だよ。今は引こう」

人間形態に戻っているアルフに肩を貸し、撤退しようとするフェイト。

「あ、待って！」

なのはがフェイトを呼び止める。

「名前、あなたの名前は？」

フェイトはなのはの方を向き、無言で見つめ再び背を向ける

「フェイト。フェイト・テストロッサ」

「あの、私は」

フエイトは自分の名前を名乗り、なのはの名前を聞かずに去っていった。

俺もそろそろ宿に戻ろうとした。

「待ってください!」

ユーノが俺を呼び止めた。

「なんだ?」

「どうして貴方はジュエルシードを集めているんですか?」

「さっきも言っただろ?今は言えないって」

「でも!それはとても危険な物なんです!」

「だったら尚更君達に持たせておくのは不安だ。俺が責任を持って預かる」

「でも!」

このままではキリがないと思い、俺は右手を上げた。

周りに突風が吹き、なのは達が目を瞑っている隙に撤退した。

「ご苦労様です、隊長」

「俺達の出番はなかったな」

「そうだったな」

林の中で風龍と雷龍がビークル形態で待機していた。

「風龍、さつきはありがとな」

「いえ、問題ありません」

ちなみにさつきの突風は風龍が起こしたものだ。

「それで、収穫はどうだったんだ隊長？」

「発動前のを一つと賭け勝負で勝って一つ。二つのジュエルシードの回収に成功した」

「これで隊長が所持している数は三つですね」

「そうだな。さて、俺はそろそろ戻って寝るわ」

「はい。お休みなさい、隊長」

「ゆっくり寝るよ」

「おう。お休み、風龍、雷龍」

俺は宿に戻り、変身を解除し、布団に入った。  
まだ慣れていない変身のせいか直ぐに眠りについた。

第八話 温泉行ってもゆっくりできない (後書き)

ARX-7アーバレスト 「俺、5日ぶりに更新！」

健悟「ライトニングブラストー!!!」

ARX-7アーバレスト 「グハーーーー!!!」

健悟「遅いんだよ!!!今まで何してた!!!」

ARX-7アーバレスト 「えーっとバイトとか課題とやってたら何時の間にか時間過ぎてたし、ストーリー作るのにも時間かった。」

健悟「課題ぐらいやつとけよ。」

アポロン「ちなみにその課題もまだ出来ていないようです。」

健悟「クリムゾンスマッシューーーー!!!」

ARX-7アーバレスト 「ぶべらーーーー!!!」

健悟「お前、どうする気だ!!!」

ARX-7アーバレスト 「終わるよ………多分。」

健悟、アポロン「さあ、お前の罪を数えろ!」

ARX-7アーバレスト 「ごめんなさい!!!」

健悟「はあ、まあ馬鹿は放っておいて。なんで今回はブレイドに変身したんだ？」

ARX-7アーバレスト 「そりゃあ、やっぱりラウズカード繋がりです。」

健悟「あつそ。それじゃあ、そろそろ。」

アポロン「次回予告ですね。」

健悟「おう。次回『第九話 偶然の出会い』です。」

ARX-7アーバレスト 「お楽しみに。」

第九話 偶然の出会い（前書き）

遅くなってすみません。

では、どうぞー！

## 第九話 偶然の出会い

海鳴温泉の件から数日後。

現在俺は野田家、地下三階の演習場の真ん中に立っている。

「いくぞ？」

「イエス、マイマスター」

フェニックスドライバーを取り出し、カードを挿入。

『KAMEN RIDE!』

「変身！」

『PHOENIX!』

仮面ライダーフェニックスに変身した。

「初めますよ？マスター」

「ああ、いつでも！」

「トレーニングシステムスタート。召喚はランダムに設定」

『トレーニングシステムスタート。召喚システムはランダム設定に設定されました』

演習室全体に音声か響きわたる。

『MISSION 1 スタートします』

『MOBILE RIDE! ZAKU? J TYPES!』

最初に現れたのは「機動戦士ガンダム」に登場するジオン公国軍の量産型MSでかなり知名度が高い「MS-106 ザク? J型」が三機出現した。

「身体慣らしには丁度いいな。」

「マスター、来ますよ?」

アポロンの言葉どおり、ザク?達のモノアイが光り、一体はヒートホークを持って接近し、二体目は120mmザク・マシンガンを発砲し、更に右足の脚部3連装ミサイルポッドのミサイルを全弾発射、三機目はZIM/M-T-K175C無反動砲(マゼラ・トップ砲)を発砲。

ダダダダダッ

バシユッ、バシユッ、バシユッ

ドンッ、ドンッ、

「チッ!」

ザク・マシンガン、無反動砲の弾をかわし、ミサイルはフェニックスドライバーで撃ち落とし、ヒートホークをかわした。

「へえー、結構いい連携攻撃をしてくるな、あのザク？達」

「そうですね。一体が近距離で相手の動きを止め、残りが中距離及び遠距離でダメージを与える。中々いい作戦です」

「ああ。それじゃ、こつちも攻撃開始するか」

カードケースからカードを取り出す。

「蜂の巣にしてやるよ！」

『ATTACK RIDE! BLAST!』

仮面ライダーディケイド、ディエンドが使用するアタックライド。フェニックスドライバーから発射された無数の弾がザク？達に命中する。

無反動砲を装備していたザク？は大破したが中距離のザク？はマシンガンと左腕を破壊しただけでまだ戦闘の継続は可能、ヒートホーク装備のザク？はシールドを破壊し、ヒートホークを弾いたがスラスターの出力を上げ、アタックルをしてきた。

「ぐっ！」

ザク？のアタックルはかなり効いた。

流石ジオンのMSだ。

「いつつ、ヤロー」

ザク？はアタックルをした後バックステップで離れ、弾かれたヒートホークを回収した。

「残りは二機。一機は中破、一機は健全、どうしますか？」

「これが訓練じゃなきゃ、とつくにライダーとか召喚してるのにな」

「いけません、マスター。今回はマスター一人の力で乗り切ってください。いつまでも召喚にばかりに頼っていると単独の時に色々困りますよ？」

「わかってるよ。」

話をしてる間に二機のザクは攻撃を再開、中破したザク？は破壊したはずのマシンガンを発砲している。

どうやらヒートホーク装備のザク？が渡したようだ。

更にショルダーシールドを無くしたザク？がヒートホークで切りかかってくる。

切りかかってきたザク？を避け、更に足を引っ掛けてやった。

その結果ザク？は転びそうになり、隙が生まれた。

「アポロン、ダガーモード起動！」

「イエス、マスター！」

フェニックスドライバーの銃口のしたから折りたたみ式のダガーが展開し、ザク？の脇に突き刺し、その状態で零距离射撃を食らわした。

中破したザク？がマシンガンを撃ってきてるがヒートホークを装備していたザク？を盾にし防いだ。

盾にしたザク？からダガーを引っこ抜き、適当に放り投げて地面に着地と同時に爆発。

「あと一機！」

最後のザク？に向かって走りだした。

ザク？は接近されまいとマシンガンと左足に残されたミサイルを全弾発射。

「くっ！」

ミサイルを撃ち落とし、マシンガンの弾はアーバレストの動きを参考し回避。

ザク？はマシンガン捨て、ヒートホークに変更し切りかかるがジャンプし後ろに回る。

「アポロン、ショットモード！」

「イエス、マスター」

フェニックスドライバーの銃身が伸び、そのまま振り向いたザク？のコックピット部に銃口を突きつけ

「終わりだ！」

零距离でコックピット部を撃ち、更に前のめりになったので頭部にも撃ち込んだ。

「全ての脅威目標を制圧、ミッションクリアです。マスター」

「そつだな」

「次のミッションを開始します」

「頼む」

『MISSION 2 スタートします。』

『AS RIDE! SAVEGES!』

『MOBILE RIDE! ACGUYS!』

次に現れたのは「フルメタル・パニック！」に登場するソ連製第二世代型AS「RK-92 サベージ」が三機、その次は「機動戦士ガンダム」に登場し、さっきのザク?と同じ、ジオン公国軍で開発された水陸両用MS「MSM-04 アツガイ」も三機現れた。

「また三機編成で数は六機かよ」

「まだこれで終わりではありません」

『ステージを変更します』

今まで何もなかった演習場の中に当然、市街地と海岸が現れた。

「……バーチャルか？」

「イエス、マスター。しかも触れることができます」

ああ、なのはの第3期の訓練と同じ感じか。  
しかし、ここであることに気付く。

「このステージ、あいつらにとっては有利で俺にとっては不利じゃないのか？」

「もちろんです。そのためにこのステージを選択しましたので」

「は？」

「例え相手が有利な戦場でも臨機応変に対応できるようにするためです」

「一理あるな。」

「それとマスター。もう始まっていますよ？」

「へ？」

前を見るとすでにアツガイ達から発射されたミサイル、メガ粒子砲、サベージ達のロギノフBK-540 37mmライフルが火を噴いた。

「くそ！」

俺はとにかく横に回避し、37mmライフルとメガ粒子砲を回避するがミサイルはまだ追ってくるが撃ち落した。

サベージ達はライフルを撃ち続け、アツガイ達はその間に海岸に走り、海に潜った。

「アツガイ達が海に入りましたね」

「そうだな」

「どっしますか?」

「今は先に目の前の奴らを叩く。ところでアポロン」

「何ですか?」

「召喚は駄目でも変身はありだよな?」

「・・・ありますね」

「じゃあ、これだな」

カードケースからライダーカードを一枚取り出し、ドライバーに入れる。

『KAMEN RIDER!』

「変身!」

『FAIZ!』

次の瞬間、俺の体は仮面ライダーフェニックスから仮面ライダーファイズに変身した。

「悪いが一瞬で終わらせる」

再びカード取り出し、ドライバーに挿入。

『FORM RIDER! FAIZ AXELFORM!』

ファイズの超音速形態「ファイズ アクセルフォーム」にフォームチェンジした。

「いくぜ？」

左腕に装備されているファイズアクセルのスタートスイッチを入れた。

『START UP』

超音速モードに入ったと同時にカードを取り出し、ドライバーに挿入する。

『FINAL ATTACK RIDE! FAIZ!』

デイケイドライバーやディエンドドライバーと違いスクラッチ調ではない音声を出し、右足に装備された「ファイズポインター」から円錐状の赤い光を発射し、三機のサベージを同時にロックオンし、ファイズの必殺技「クリムゾンスマッシュ」のアクセルフォーム版「アクセルクリムゾンスマッシュ」をサベージ達に食らわせた。

三機のサベージは赤いギリシャ文字「<sup>ファイ</sup>」の文字を浮かばせ爆発した。

「あとはアツガイか・・・!!」

そういつていると海中からミサイルが飛んできた。

「チツ！水中戦には水中戦だ」

『KAMEN RIDER!』

「変身!」

『DEN-O!』

ミュージックホーンが流れ、今度はファイズから仮面ライダー電王ソードフォームに変身。

「まだまだ!」

『FORM RIDER! DEN-O RODFORM!』

さつきとはまた別のミュージックホーンが流れ、ソードフォームからロッドフォームにフォームチェンジした。

「そして、これも」

『ATTACK RIDER! BOKU NI TSURARET  
EMIRU?』

「僕に釣られてみる?なんてな」

電王ロッドフォームのお決まりの台詞をいった後、俺は海に飛び込んだ。

水中に入ると直ぐにミサイルが迫ってきたが撃ち落した。

「手荒い歓迎だな」

アツガイ達が三機そろってアイアン・ネイルをしかけてくる。

「おー、狙いやすいな。」

『FINAL ATTACK RIDE! DEN-O!』

俺はフェニクスドライバーをダガーモードにしてデンガンシャー・ロッドモードの代わりに投げ、亀甲状の網「オーラキャスト」でアツガイ達を捕まえ、そのままデンライダーキックを食らわせアツガイは消滅した。

「……なんであいつら三機そろって同じ攻撃をしたんだろうな？」

「さあ？さて、次でラストです、マスター」

「わかった。」

『FINAL MISSION スタートします』

『HERO RIDE! DEKARANGER!』

『KAMEN RIDE! LEANGLE!』

『VALKYRIE RIDE! NIGHTMARE PLUS S!』

ラストに現れたのは六人の人と三機の人型ロボットだ。

最初の五人は赤、青、緑、黄色、ピンクのデカスーツを着用し、上半身左半分にはそれぞれ1〜5までの数字が書かれていた。

スーパー戦隊シリーズ、第28作目「特捜戦隊デカレンジャー」の

デカレッド、デカブルー、デカグリーン、デカイエロー、デカピンクの五人。

次は緑色と金色のボディに杖状のカードリーダーを持ち、胸の部分にトランプのクラブのマークが刻印されている。

クモをモチーフにしており、クラブのラウズカードを持つ「仮面ライダー剣」の世界の仮面ライダー。

「仮面ライダーレンゲル」

最後の三機の機体は「マクロス7」に登場した「VF-17 ナイトメア」を一般パイロット用に生産性を向上した再設計型の機体。コスト低減に伴い性能は従来17系からやや低下しているがピンポイントバリアシテムを搭載しており、防御力、格闘性能は従来型を上回っている。

「マクロスF」<sup>フロンティア</sup>の機体。「VF-171 ナイトメアプラス」

「……おい」

「なんですか？マスター」

「いくらなんでも、これは辛いぞ」

「訓練です」

「いや、例え訓練でも限度が「来ますよ？」っ！」

アポロンの言葉どおりデカレンジャー、レンゲルがこちらに向って走りだし、ナイトメアプラス三機はファイター形態で向ってくる。更に向ってくる際にデカレッドは腰からデカレッド専用拳銃「ディーマグナム01」、ディーマグナム02」を抜き、発砲。

デカブルーは警棒をかたどったディーアームズ「デカブルー専用ディーロッド」と格闘用ディーアームズ「ディーナツクル」を狙撃銃「デリースナイパー」に合体させ遠距離から攻撃。

デカグリーンはデカグリーン専用ディーロッドとディーナツクルを熱線サブマシンガン「ディーブラスター」に合体させ、走りながら発砲。

デカイエローはディースティックとディーナツクルをパルスビーム拳銃「ディーショット」に合体させ、デカグリーン同様に走りながら発砲。

デカピンクはイエローとピンク専用の十手をかたどったディーアームズ「デリースティック」で接近戦を仕掛けてくる。

レンゲルはラウズカードを取り出し、レンゲル専用杖型カードリーダー「醒杖レンゲルラウザー」にラウズする。

『RUSH』

ラウズカード、クラブの4「RUSH RHINOCEROS」。クラブの4に封印されたライノセラスアンデットの力が解放され、突進力とレンゲルラウザーの貫通力が強化され、ラウザーを構えての突進攻撃「ライノセラスラッシュ」を発動させ、向ってくる。

ナイトメアプラスは散開し、三機ともビフォーズBML-02Sマイクロミサイルランチャーからミサイルを一斉発射。

「ヤバッ！」

俺は急いでカードを取り出し、ドライバーに入れた。

『ATTACK RIDE! BARRIER!』

「仮面ライダーディケイド」の世界のライダー、「仮面ライダーディエンド」が使用するアタックライド。

「フェニックスバリア」を発動させ、デカレッド、ブルー、グリーン、イエローの射撃とナイトメアプラスのミサイルを防ぎ、更にカードを取り出し、ドライバーに入れる。

『ATTACK RIDE! BLAST!』

M I S S I O N 1のザク? J型との戦闘でも使用したアタックライド「フェニックスブラスト」を使い、主に接近してくるデカピンクとレンゲルを攻撃した。

「あぶねえ〜。つたく。九対一は反則だろ。しかもレンゲル、ラウズ出来るのかよ!でも、そっちがそうくるならこっちも数を増やす!」

『ATTACK RIDE! ILLUSION!』

アタックライド「フェニックスイリュージョン」を発動し、俺は三人に増えた。

三人に増えた俺は、デカレンジャー、レンゲル、ナイトメアプラスをそれぞれ相手する。

「数を増やしたけど、まだ不利だな。だから、スピードで勝負だ!」

『KAMEN RIDER!』

「変身!」

『KABUTO!』

「お前は同じ世界同士がいいだろ?」

『KAMEN RIDER!』

「変身!」

『BLADE!』

「こっちはライダーじゃなくてごめんね。」

『MOBILE RIDER!』

「変身!」

『EXIA!』

三人の俺は、それぞれ姿を変える。

まず、まだ数に差があるデカレンジャーに対してスピードで対抗するために「クロックアップシステム」を持つ「仮面ライダーカブト」に変身。(以降、Pカブト)

レンゲルには言葉どおり同じ世界のライダー同士ということ、海鳴温泉でも変身した「仮面ライダーブレイド」に変身。(以降、Pブレイド)

最後は前の二人はライダーに対してこちらはMS。

機動力が高く、空中戦闘が可能なバルキリーには恐らくライダーでは敵しい。

そこで機動性が高く、空中戦闘が可能なものが多いMSを選び、その中から選んだのは「機動戦士ガンダム00 1st SEASON」の私設武装組織「ソレスタルビーイング」の第三世代型ガンダム、「ガンダムエクシア」に変身した。（以降、Pエクシア）

「「「さあて、そんじゃあ、いくぜー!!」「」」

デカレンジャー、レンゲル、ナイトメアプラスに向かっていった。

PカブトSide

デカレッド達は向っていく俺に銃を構え発砲してきた。

「うわあ!」

ほとんどの弾が命中し飛ばされ、地面を転がる。

カブトの基本形態であるライダーフォームは機動性重視のため防御力とパワーが低い、なので。

「いてて、まずは防御とパワー重視で勝負するか」

カードを取り出し、ドライバーに入れる。

『FORM RIDE! KABUTO MASKEDFORM!』

本来はカブトの世界のライダーの変身直後の姿（キックホッパー、パンチホッパー、ヘラクレス、ケタロス、コーカサスを除く）。

機動性は下がるが防御力とパワーを重視したカブトの重装甲形態「カブト マスクドフォーム」にフォームチェンジした。

「おっしやー！」

無駄にテンションを上げ、デカレッド達に向っていく。

デカレッド達も射撃を行うが装甲が追加されたことで防御力が高まり、先ほどの様に飛ばされることなくカブトの武器「カブトクナイガン」を取り出し、ガンモードにし、セミオート射撃に設定し発砲しかし、これはあくまで牽制のための射撃、デカレッド達が怯み射撃が止まる。

その際にカブトクナイガンをガンモードからアックスモードに変更し、懐に入り込み、切りかかった。

火花を散らしながら飛ばされるデカレッド達、しかし直ぐに立ち上がり、デカレッドは再びディーマグナムを構え、デカブルー、デカグリーンはディーロッドを、デカイエロー、デカピンクはディースティックを持ち、接近戦をしようとしている。

「甘いな。キャストオフ！」

マスクドアーマーをパージし、元のライダーフォームに戻る。

その際、パージされたマスクドアーマーはデカレッド達に当たる。

「これで決まりだ！」

『ATTACK RIDE! CLOCK UP!』

クロックアップはカブトの世界のライダー達とワームの成虫体を使う超高速の特殊移動方法。

クロックアップを使ったことで周りがまるで止まったかのようにな

った。

『FINAL ATTACK RIDE! KABUTO!』

「はああああ!」

カブトの必殺技「ライダーキック」(回し蹴り)を一人一人に食らわせた。

「くくくくわああああ!!!」

ライダーキックを食らったデカレッド達は消滅した。

「ふう、まずは五人だな」

PブレイドSide

フェニックスドライバーをダガーモードにし、レンゲルと格闘戦をしている。

「そらあ!」

「ぐああ!」

ダガーでレンゲルを斬った。

レンゲルは俺から一旦距離をとり、ラウズカードを取り出し、ラウズする。

『SCREW』

ラウズカード、クラブの3「SCREW MOLE」。

クラブの3に封印されたモルアンデットの力が解放され、腕力が強化され、コークスクリューパンチ「モルスクリュー」が発動し、レンゲルが向ってくる。

俺も直ぐにカードを取り出し、ドライバーに入れる。

『ATTACK RIDE! METAL!』

トリロバイトメタルを発動させ、レンゲルのパンチを防ぎ、そのまま至近距離でフェニックスドライバーでレンゲルを撃った。

「ぐわっ！」

レンゲルは撃たれた衝撃で飛ばされ、地面を転がる。

「こっちも終わらせるか」

『FINAL ATTACK RIDE! BLADE!』

「ウエエエエエイ!!」

「があああああ!!」

ファイナルアタックライドを発動させ、ブレイドの必殺技「ライトニングブラスト」を食らわせ、レンゲルは消滅した。  
もちろん、仮面ライダー剣の「剣崎一真」風に仕留めました。

「よし、ラスト三機だな。」

PエクシアSide

『ATTACK RIDE! GN SWORD!』

エクシアの武装の一つである「GNソード」が出現し、右腕に装備する。

「エクシア、目標を駆逐する!」

エクシアのガンダムマイスター「刹那・F・セイエイ」の台詞をい、GNソードをソードモードにし、ナイトメアプラスに切りかかる。

「はああああ!」

しかし、ナイトメアプラスは散開し、GNソードをかわした。

更に三機のナイトメアプラスは一機がファイター形態、一機がガウオーク形態、ラスト一機がバトロイド形態で迫ってくる。

ファイター形態のナイトメアプラスがスピードを駆使しながらミサイルを発射、ガウオーク形態のナイトメアプラスは距離をとりながらハワードGU-14B ガンポッドを撃ってくる。

ミサイルを腕に内蔵されている「GNバルカン」で撃墜し、ガンポッドは上に回避する。

しかし、上には既にバトロイド形態のナイトメアプラスが待ち構えており、推進力と落下速度を活かし、両腕にピンポイントバリアを展開し向ってくる。

「くっ!」

現在の速度では超反射能力でも回避は間に合わない。

「おらああああ!」

回避を諦めスピードを上げ、ナイトメアプラスに正面からタックルする。

「！」

ナイトメアプラスは回避しようとするが間に合わず、タックルを食らいバランスを崩す。

バランスを崩したナイトメアプラスに右腕を出し、右腕のGNソードをソードモードからライフルモードに変更し、両腕、頭部を撃ち抜き、コックピット部を撃ち撃破する。

「まずは一機目！つち！」

一機撃墜後、直ぐにビームとミサイルが飛んでくる。今までどつりにミサイルを撃ち落とし、ビームを回避する。

「このまま、トランザムで仕留める！」

カードケースからカードを取り出した、しかし、カードには何も描かれていない。

「な！つうわああ」

カードに何も描かれていないことに気を取られ、ビーム砲を受けてしまった。

「アポロン、どついうことだ！？」

「どつやら、そのカードはまだ封印されている状態のようですね」

「封印!!!??」

「デイケイドでもカードの力がない物があつたでしょ?あれと同じです」

「マジか!つておわ!」

説明を聞いている間にもナイトメアプラスは攻撃を続けてくる。

「自分の力でなんとかしろってことか!!!」

GNドライブの出力を上げ、速度を上げ、ナイトメアプラスに向っていく。

ガウォーク形態のナイトメアプラスにGNバルカンとGNソードライフルモードの両方を撃ち、牽制する。

一定の距離まで近づいたところでGNソードをしまい、GNバルカンを連射しながら腰背部のGNダガーを抜き、ナイトメアプラスに投げる。

GNダガーを避けたところを狙いGNソードを展開し、そのまま両断し、消滅した。

「あと一機!」

最後のナイトメアプラスがファイター形態でビーム砲とミサイルを撃ちながらこちらに向ってくる。

「くそ!」

『ATTACK RIDE! GN SHIELD!』

エクシアのGNシールドを装備し、ビームを防ぐ。  
最後のナイトメアプラスがファイター形態からバトロイド形態に変  
形する。

どうやら向こうも勝負をつけるつもりようだ。

「これでラストーーーーー!!!!!!」

『ATTACK RIDE! GN BLADE!』

両腰に長さが違う二本の実体剣「GNロングブレイド」と「GNシ  
ョートブレイド」が装備された。

GNロング、ショートブレイドを抜き、ナイトメアプラスに向って  
いく。

俺のGNブレイドとナイトメアプラスのピンポイントバリアパンチ  
が接触し、火花を散らす。

そして、ここで俺はわざとGNブレイドを握る強さを弱めた。

力を弱めたことでGNブレイドは弾かれ、ナイトメアプラスは前に  
倒れる形になる。

前に倒れてくるナイトメアプラスの懐に入り、GNソードの銃口を  
ナイトメアプラスの胸に当てる。

「チエックメイトだ」

そういつてGNビームを5、6発撃ち込んで離れ、ナイトメアプラ  
スは爆発した。

『MISSION ALL CLEAR 本日のトレーニングシ  
テムを終了します』

トレーニングが終了したので、変身を解除する。

「ふう」

「お疲れ様です、マスター」

「ああ、最後のは本当に疲れた」

デカレンジャー五人にレンゲル、ナイトメアプラス三機だからな。しかし、変身には慣れたのかそっちの疲れは多少なくなった。

「それにしても、トランザムが使えないとは厄介だな」

「しかし、マスターの腕なら問題ないと思いますか？」

「いや、やっぱりいざって時にはいるだろ？」

「そうかもしれないね」

「まあ、使えないもんはしょうがない。とりあえず今はトランザム無しで頑張るか」

(・・・やはりまだ一部のカードは使えませんか。しかし、これはこれでマスターのいい修行になるでしょう。それにいざとなれば私がトランザムシステムを発動させれば問題ないでしょうし。しかし、そうなるシステムの調整を急がねばなりませんね。)

「どうかしたのか、アポロン？」

「いえ、なんでもありません。それよりマスター」

「なんだ？」

「本日は買い物に行きませんとそろそろ食材が無くなりますよ？」

そういえば、そうだったな。

「よし。じゃあ、今から行くか」

「イエス、マスター」

「随分買われましたね、マスター」

「うん。今日はよく動いたから腹減ってさあ。寂しいけど、今夜は一人焼肉といこうと思ってな」

スーパーから出てきた俺の両手にはかなりの食材が入った袋を二つずつ持っていた。

「・・・少し買い過ぎたかな？」

正直重かった。

「大丈夫ですか？マスター」

「うーん。多分大丈夫だ。それより早くかえ」「いいじゃんか、お兄ちゃん達と一緒に遊ぼうぜ」

「・・・ん？」

ふと見ると顔まで見えないが金髪の女の子が高校生くらいの男三人に絡まれている。

「い、いえ。だから結構です！」

「そんなこと言わないでさあ、すごく楽しいことしてあげるから」

「お、お菓子もいっぱいあげるよ？うえっへへへへ」

あの眼鏡かけた奴、笑い方気持ち悪いな。

「あ、あの、私待っている人がいますから！」

「そんなの別にいいじゃん。ほら行くっぜ？」

高校生が女の子の腕を掴む。

「！いい、嫌です！！」

「いいからいいから」

高校生が女の子を無理やり連れて行くところとする。

「・・・あの子の声、どっかで聞いたことあるような？」

「助けますか？マスター」

「そつだなあ」

周りを見た限り、皆高校生が怖いのか見てみぬ振りをしている。

「はあ、助けるか」

スーパ―の袋を安全そうな場所に置き、近くに自動販売機があったので炭酸ジュースを三本買い、自販機の横に置いてある缶、ビン用ゴミ箱から空き缶を一つ取り出し、準備完了。

「風向き問題なし。距離修正。ターゲットロックオン」

ターゲット〃女の子に絡んでいる高校生。

高校生三人の内一人の後頭部に照準を合わせる。

「最終安全装置解除、発射準備完了。艦長、発射指示を」

「私がマスターに命令するのは変な感じですが、こつこつするのはノリが大切です。第一攻撃開始、空き缶発射！」

「イエッサー！ファイヤー！！！！」

発射した空き缶は綺麗に真っ直ぐ飛んで行き、そして。

「ほら、早くい」

カンッ！

「イデッ！」

高校生の後頭部に命中した。

「艦長、目標に着弾しました」

「では、そのまま白兵戦用意」

「イエッサー」

「イテテテ、おい誰だ！今空き缶ぶつけた奴は！！」

「はいはい、俺です」

高校生三人が俺を見る。

「ああん？なんだこのクソガキ！」

「てめえ、なに人の頭に空き缶ぶつけてるんだゴラァ！！」

「いやー、すみません。ゴミ箱と勘違いしました」

「なんだと！！」

「小さい女の子を無理やり連れて行くことするなんて最低な人はゴミ箱と同じかそれ以下ですよ。あんた達ロリコン？」

「このガキイ！舐めた口言いやがって！！！！」

「やっちまえ！！」

ガキ相手になに熱くなってんだか。

まあ、俺も同じこと言われたらムカつくけど。

男が殴りかかってきたのでかわし、そのまま腕を掴み、放り投げた。

「うわっ！」

「コイツー！」

今度は別の男が右足で蹴ろうとしてきたがそれを受け止め、そのまま懐に入り込み腹に拳を4、5発入れた。

「ぐはあっー！」

「こ、この〜」

「……」

さっき気持ち悪い笑い方してたコイツは明らかに弱そうだったので、とりあえずかわし、足を引っ掛けた。

「ぎゃふんー！」

「……普通にこけた。」

このこけた奴の顔、なんかさわやかジャパンのおっさんに似てる。そっいえば前の世界でさわやかジャパンのおっさんに似た友達がい  
たなあ。

しかもこいつ結構似ているな。

それは置いて、俺は最初に投げ飛ばした男に近づきながらさっき買った炭酸ジュースを取り出す。

「っこのガク、まだ起きるな！」っはうー！」

起きようとしたので股間を思いつき蹴飛ばした。

「おおおおおおおおお！！！！！！！」

男はもの凄い痛がっている。

シャカ、シャカ、シャカ

それを見ながら手に持っている炭酸ジュースを上下に思いつき振り

「ターゲットロックオン」

ジュースの開け口を男の顔に照準を合わせた。

「私からの手向けだ。さあ、お前の罪を……数えろ」

「こ、ここに、このガキ、何しやが」「目、閉じた方が身のためだぞ？」「っへ？」

その言葉をトリガーにし、蓋を開け、倒れている男の目と鼻の中に炭酸ジュースをぶっ掛けた。

「ぎゃあああああ！は、鼻が痛い！！！！いや、やっぱり眼が、ああああ眼が、眼がああああ！！！！！！！！！！」

おー、見事にムスカ大佐になったな。

「お、おい。大丈夫か！？」

腹を押さえながら近づくと仲間と転んだせいで顔面が赤くなっているさわやかジャパンのおっさん似の仲間が炭酸のせいで眼と鼻に激痛が走っている男に近づくと

「さーて、その残りのお二人さん」

残りの二人がゆっくりとこっちを向く。

「次はどっちが先にかけられたいですか？」

シャカ、シャカ、シャカ、シャカ、シャカ、シャカ、シャカ、シャカ、シャカ、シャカ、

もう一本炭酸ジュースを取り出し、さっきよりも思いつき振り、俺は笑顔で二人に尋ねた。

「く、くそ！覚えてるよ、クソガキ！！おい、ロッキー！そいつを早く連れてくぞ！」

「お、おう！」

「あああああああああ！」

二人はまだムスカ状態になっている男を連れて逃げていった。

「ったく。あいつらのせいで360円中、240円分損した」

そういいながら思いつき振り振った缶の中身を近くの溝に捨て、空き缶を処分し、食材を回収した。

「よし、帰るとするk」「あの!」「ん?」

「さっきはありがとう。助けてくれて」

どづやらさっきの女の子がお礼を言いに来たようだ。

「いや、別にかまわ・・・な・・・い」

振り返るとそこにいたのは数日前戦った少女、フェイトだった。あまりのことに俺は若干戸惑った。

「?あの、どうかした?」

「い、いや、なんでもない。大丈夫だったか?」

「う、うん。大丈夫だよ。ありがとう」

「でも、さっき手を無理やり握られてただろ?ちょっと見せてみ」

「あっ」

俺がフェイトの手を握り、見ようとしたその時

「フェイトー!」

「うん?」

「あ」

アルフが戻ってきたようだ。

「じゅめんよ、フェイト。思ったより時間がかかったやつてさあ」

「ううん。気にしないで、アルフ」

「ありがとう、フェイト。それはそうと」

アルフが俺を睨んでくる。

「あんた、フェイトになにしようとしたんだい！！嘘を言ったらタダじゃ済まないよ！！」

どうやら、俺がフェイトにちょっかいを出したと勘違いしているようだ。

「えーっと」

「やめて、アルフ！この子は私になにもしてないよ。むしろ、さっき私を助けてくれたんだよ！！」

「へっ」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

沈黙する空気。

「それって・・・本当かい？」

沈黙の中、最初に口を開いたのはアルフだった。

「うん」

更に気まずい空気が流れる。

「ああ、そのー、えーっと」

真実を聞かされ戸惑うアルフ。

「あ、あはははは、ご、ごめんよ。あたいなんか勘違いしちゃってさあ。そっかそっかフェイトを助けてくれたのか。はははは」

「本当にごめんね」

笑ってはいるが顔が引きつっているアルフと本当に申し訳なさそうに誤るフェイト。

「間違えることは誰にでもある。別に気にしなくてもいい」

「ありがとう。えっと・・・」

「ああ、自己紹介をしてなかったな。俺は健悟、野田健悟。よろしく」

「私はフェイト、フェイト・テストロッサ。よろしくね。」

「あたいはアルフだよ。よろしく。それにしても、あんたいいい子だ」

ねえ。ありがとう」

「じゃあ、俺はそろそろ失礼させてもらっよ。腹がへぐううう  
つて・・・ん？」

誰かのお腹が鳴った。

しかも結構大きい音だった。

「あ」

「もう、アルフ！」

「あ、あはははは」

「随分でかい音だったな」

「た、頼むから言わないでおくれ」

「アルフ、私達も帰ってご飯にしよっ」

「そうだね」

「それじゃあ」あのさあ」「？」

「もしよかったら一緒に夕飯どう？」

「えっ？」

当然のことで二人がぼかんとしている。

「実は今夜、焼肉にしようと思ったんだけど材料を買いすぎてな。処理を手伝ってくれると助かるんだが」

「肉?!」

アルフが食いついてきた。

流石狼だな。

目がキラキラしてる。

「ア、アルフ」

「あ、でもそっちの家の人もう飯の準備してるか？」

「う、ううん。それは大丈夫だけど……いいの？」

「大勢で食べた方がうまいし、楽しいからな。俺は大歓迎だ」

「でも……」

「ねえねえフェイト。折角なんだから行くこつよ」

肉と聞いて行きたがるアルフ。

「もう、アルフ!! えーっと本当にいいの?」

「おっ」

「……じゃあ、いこうかな」

「わーい」

「よし、決まりだ。じゃあついて行きてくれ」

こうして、二人を家に招待することになった。

・・・肉足りるかな？

## 第九話 偶然の出会い（後書き）

ARX-7アーバレスト「あー、やっと更新できた。」

健悟「遅い。」

ARX-7アーバレスト「しょうがないじゃん色々あるんだよ。」

アポロン「ところで今回の話のタイトルと内容があまり合っていないような気がしますか?」

ARX-7アーバレスト「そこは気にしないで。」

健悟「今回もバトルシーンが一番手が込んでるな」

ARX-7アーバレスト「だって好きだもん!!」

健悟「つか最後のデカレンジャー、レンゲル、ナイトメアプラス三機って鬼かお前!!」

ARX-7アーバレスト「頑張れ!」

健悟「やかましわ!!」

アポロン「では、そろそろ次回予告をしましょう。」

健悟「はいはい。次回『第十話 次元震』です。」

ARX-7アーバレスト「次回もお楽しみに!!」

第十話 次元震（前書き）

お待たせしました！！  
では、どうぞ！！

## 第十話 次元震

「さあ、どうぞ。」

「お、お邪魔します。」

「お邪魔します。」

帰る時にフェイトとアルフが食材の入った袋を一つずつ持ってきてくれたので楽に帰ることができた。

「あなた、けっこういい家に住んでるんだねえ。」

「まあ、ね。あ、荷物置いたら適当にくつろいでくれていいから。」

「手伝うよ。」

「いや、大丈夫だ。それに食事に誘ったのは俺だし。」

「でも。」

「君達はゲストなんだからゆっくりしてくれ。」

「ありがとう。」

「あなた、本当にいい子だねえ。じゃあ、ゆっくりお世話してもらひつよ。」

「どうぞ。」

俺は袋から買ってきた野菜を取り出し、切るうとした。

ドタツ、ドタツ

「「「ん?」「「「

二階からドタ、バタと音が聞こえてきた。

「なんの音だい?」

「上に誰か居るの?」

「あー、居るのは居るが、なんというか。」

どう言えばいいのか説明に困ってしまった。

その時、階段を下りてくる音がして、何かがリビングに入ってきた。

「クワァー!」

「うわ!」

「きゃっ!」

「あ。」

二階から階段を下り、リビングに入ってきたのはファングだった。更にファングに続いて、ゼクター、メモリガジェット、カンドロイド達が次々とリビングに入ってくる。

「え？え？」

「な、なんだいこいつら!？」

フェイトは混乱し、アルフは戸惑っている。

「ああ、驚かせてすまん。大丈夫、こいつらは危なくないから。」

「あ、あの。それは一体？」

「うん？ああ、こいつらはゼクター、ガジェット、カンドロイドだ。」

「

「ゼクター、ガジェット、カンドロイド？」

「そう。」

「なんなんだいそれ？」

「うーん。説明するのはかなり難しいな。」

説明したらライダーだってばれるし。

「まあ、簡単に言えばこいつらは自立行動、つまり自分で考えて行動をすることができる特殊な小型のロボットなんだ。」

「へー。」

「凄いね。」

フェイトとアルフがファンング達を見ている。

「名前とかあるの？」

「ああ、もちろん。最初にこの部屋に入ってきた恐竜の形をしたのがファンングって名前だ。」

「ファンング？」

「グワアー」

自分の名前を呼ばれたのでファンングが返事を返した。

「あんたがファンングか。強そうの名前だねえ。」

「よろしくね、ファンング。」

「グワアー」

フェイトとアルフにあいさつをされてファンングも嬉しそうだ。

「次にこの赤いカブトムシがカブトゼクター、黄色いスズメバチがザビーゼクター、水色のトンボがドレイクゼクター、紫のサソリがサソードゼクター、青いクワガタムシがガタツクゼクター、左右が緑と茶色なのがホッパーゼクター、黒いカブトムシがダークカブトゼクター、そして金色、銀色、銅色のカブトムシがカブティックゼクターだ。」

「えーっと。」

「カブト、ザビー、ドレイク、サソード、ガタツク、ホッパー、ダイクカブト、カブティツクだね。よろしくね。」

「……………」

ゼクター達もファンングと同じように嬉しそうに空中を一回転したり、跳ねたりしている。

「次はこのクワガタムシがスタッグフォン、コウモリがバットショット、クモがスパイダーショット、カエルがフロッグポッド、カブトムシがビートルフォン、カタツムリがデンデンセンサーだ。」

スタッグフォンとビートルフォンがフェイトとアルフの上をぐるぐると飛び回り、バットショットはフェイトの頭の上へ乗り、スパイダーショットはアルフの掌へ乗り、フロッグポッドはフェイトの掌へ乗り、デンデンセンサーはアルフの肩に乗っている。

「ふーん。」

「可愛いね。」

「で、最後にこいつらがタカカン、タコカン、バツタカン、トラカン、ゴリラカン、電気ウナギカン、クジャクカンだ。」

「ほおー。」

「よろしくね。」

「……………」

タカカン達がファンングやゼクターやガジェット達と同じように嬉しそうにしている。

「さて、紹介も終わったし飯の準備を再開するか。ちょっと時間かかるかもしれないけどこいつらと遊んで待っててくれ。」

「うん、分かった。」

「はい。」

俺は準備を再開した。

フェイトがファンング達と遊んでいる間に野菜を切り、肉と鉄板を用意した。

「そういえば、あんたの親はいつ帰ってくるだい？」

「ああ、俺、親いないんだよ。」

「「え？」」

「色々あって今はいないんだ。」

正確的には前に居た世界に居る。

「あー、ごめん。」

アルフが落ち込んでしまった。

「別に気にしてないから大丈夫だ。」

「……寂しくない？」

「別に寂しくないさ。友達もいるし、ファング達もいるし、な？」

「クワアー」

ファングが返事をし、ゼクター、ガジェット、カンドロイド達も頷いている。

「準備完了つと。さあ、暗い話しは終わりにして、飯にしよう。」

「あ、うん。」

「そうだね。」

ジュウー、ジュウー、ジュウー

「うまーい！ー！」

「そいつあよかった。」

「この肉、凄く美味しいよ！ー！」

「結構いい肉を選んだからな。でも、肉ばかりじゃなく野菜もちやんと食べてくれよ？」

「分かってるよ。」

「テストロッサさんも遠慮せず食べてくれ。」

「ありがとう。はむっ……うん、美味しい。」

「よかった。はむっ……うん、美味しい！」

「こづいうの、久しぶりだな。」

「うん？なんか言ったか？」

「え？う、ううん。なんでもないよ？」

「そっか。」

フェイトが何か言ったような気がしたが本人がなんでもないというので再び食べ始めた。

そして、楽しい時間はあっという間に過ぎ、現在家の前で二人を見送ろうとしている。

「いやー、食べた食べた。」

「うん、美味しかった。」

「お粗末様でした。よかったら、また来てくれ。その時は美味しい物作るから。」

「うん、ありがとう。」

「そうさせてもらひつよ。」

「じゃあ、気をつけてな。テストロッサさん、アルフさん。」

そろそろ、家に戻ろうとした。

「あ、あのー！」

「ん？」

フェイトに呼び止められた。

「どうかしたか？」

「あ、あの、えっと、その。」

フェイトが何か言いたそうだが、中々言わない。

「あの！もしよかったら、名前で呼んでくれない？」

「……フェイトって？」

「う、うん。駄目かな？」

場の空気がシーンとする。

「……健悟。」

「え？」

「俺のことも健悟って呼んでくれたら、いいぜ？」

フェイトはキョトンっとしている。

「嫌か？」

「う、ううん！そんなことない！」

・・・あれ？なんか前にも似たようなことがあった気がする。

「そっか。じゃあな、フェイト、アルフさん。」

そっついながら俺はフェイトの頭に手を乗せ、頭を撫でた。

「あ。」

「あ、すまん。つい。」

俺は何故かフェイトの頭を撫でてしまった。

「う、ううん。別に、大丈夫だよ／＼／＼」

フェイトの顔が急に赤くなったように見えたが・・・気のせいかな。

「じゃあ、おやすみなさい。」

「うん、おやすみ。」

「お、おやすみ。け、健悟／＼／＼」

二人が帰るのを見送った後、俺は家に戻った。

フェイトside

「……私、どうしたんだろ？」

「フェイト、どうしたんだい？」

「え？な、何が？」

「いやあ、さつきからボーっとしてるから」

「そ、そんなことないよ？」

「そう？ならいいけど。」

アルフには、ああ言ったけど、本当は悩んでいることがある。さつき、最後に頭を撫でてもらってからずっとドキドキしてる。健悟の名前を呼んだ時、呼ばれた時もすごくドキドキした。それに、別れる時に凄く切なくなっただけの気がする。この気持ちは……なんなのかな？

フェイト達が帰った後、洗い物を済まし、風呂に入り、寝間着に着替え、自室のベットに座っていた。

「ふう。」

「今日は忙しい日でしたね、マスター。」

「そうだな。特に戦闘訓練が疲れたな。」

今日は昼から数時間の戦闘訓練、夕方には買い物に行き、高校生からフェイトを助け、更にその後フェイトとアルフを夕飯に誘い、夕飯を食べた。

「色々あったけど、今日は楽しい一日だったな。」

食事も久しぶりに他の人と食べたし。

「良かったですね、マスター。本日はそろそろお休みになったからいかがですか？明日も学校がありますし。」

時計を見ると時間は午後11時半になっていた。

「そうだな。そろそろ寝るとするか。ふあ〜あ」

あくびをした後、電気を消し、ベットに入った。

「おやすみ、アポロン」

「おやすみなさい、マスター。良い夢を。」

「おう。」

疲れていたのか、まぶたを閉じると直ぐに眠りについた。

「いい加減にしなさいよ！〜」

翌日のある休み時間、例のなのはとアリサの喧嘩イベントが発生した。

まあ、本当はイベントとか言っちゃいけないけど。

「この間っから何話しても上の空でボーっとして!」

「うん、ごめんねアリサちゃん。」

「ごめんじゃない! 私達と話すのがそんなに退屈なら一人でいくらでもボーっとしてなさいよ! 行くよすずか、健悟!」

そっついながらアリサは教室を出て行く。

「アリサちゃん……あ、なのはちゃん。」

「……いいよ、すずかちゃん。今のはなのはが悪かったから。」

「そんなことないと思うけど、とりあえずアリサちゃんも言いすぎだよ。少し話してくるね。」

「うん、ごめんね。」

すずかはアリサを追いかけていった。

「高町、あまり気にしすぎるなよ?」

「うん、ありがとう。」

俺もアリサとすずかを追いかけた。

「怒らせちゃった。ごめんね、アリサちゃん。」

「アリサちゃん、アリサちゃん！」

「おい、アリサ！」

俺とすずかがアリサに追いついた。

「アリサちゃん。」

「何よ？」

「なんで怒ってるのかなんとなく分かるけど、駄目だよあんまり怒っちゃ。」

「だってムカつくわ！悩んでるのみえみえじゃない！迷ってるの、困ってるのみえみえじゃない！なのに、何度聞いても私達にも教えてくれない。」

「あ。」

「.....」

ま、俺は理由知ってるけどな。

「悩んでも迷ってもないなんて嘘じゃん！」

「どんなに仲良しの友達でも、言えない事はあるよ。なのはちゃん  
が秘密にしたいことだったら私達は待つてあげることしかできな  
いんじゃないかな？」

「確かにな。」

「だからそれがムカつくの！少しは役に立ってあげたいのよ！どん  
なことでもいいんだから、何にも出来ないかもしれないけど、少な  
くとも一緒に考えてあげられるじゃない！」

「うん。」

「確かにそうだが、さっきさすがが言ったとおり例え友人でも言え  
ることと言えないことがある。」

「だから！俺だってそうだ。「っえ？」

「俺だつてお前達にアポロンやGトレーラー、ライダーの全てを話  
していない。本当は話してあげたいがまだ話せない。だから俺も迷  
ったり、悩む時だつてある。だが、今回の高町に関しては迷いや悩  
みの全てを自分一人で解決しようとしている。恐らく、アリサ達に心  
配させたくないと思っっているんだろうけどな。まあ、逆効果になっ  
てるけど。」

「……………」

「……………」

アリサとすずかが黙ったまま俺の方を見る。

「さすがと同じことを言うが、アリサの気持ちも分かるけど、今俺達に出来ることは高町が自分から言ってくれるのを待つだけだ。だから待つといてやるぞ。」

「……………分かったわよ。」

なんとか納得してくれたようだ。

「やっぱりアリサちゃんもなのはちゃんのこと好きなんだよね？」

「そんなの当たり前じゃないの！」

……………本当にツンデレだな、コイツ。

夜になり、俺は市街地に来ていた。  
理由はもちろん、この後のフェイトとなのはの戦闘に介入するためだ。

「……………そろそろだな。」

「イエス、マスター。」

現在の時間は午後7時09分。

そろそろフェイト達が行動を起こす時間だ。

ゴロゴロッ、ゴロゴロッ

「ッ！来たか！」

晴れていた夜空は突然曇りだし、雷が鳴り響き、落雷が落ちる。  
アルフが魔法を使った証拠だ。  
その結果ジュエルシードが発動し、それに続き今度は街に結界が張られた。

「よし、いくぞ?」

「イエス、マスター。」

『KAMEN RIDE!』

「変身!」

『PHOENIX!』

「さて、じゃあ最初は見学でもするか」

フェニックスに変身し、直ぐに別のカードを取り出す。

『KAMEN RIDE!』

「変身!」

『BLADE!』

仮面ライダーブレイドに変身し、更にカードを取り出す。

「更にこいつも。」

『FROM RIDE! BLADE JACKFROM!』

「ブレイド ジャックフォーム」にフォームチェンジし、飛行能力を使いなのはとフェイトの両方を確認できるビルまで飛んだ。

ビルの屋上に下り、二人を見ると二人共ジュエルシードに封印砲を発射していた。

「おいおい、もう封印砲を撃つたのかよ。折角見学しようと思ったのに。」

「それで、これからどうするんですか、マスター？」

「原作どおりならアルフがなのはに攻撃をするはずだ。そこに割ってはいる。」

「なるほど。」

「さて、そろそろだな。ダガーモード用意。」

「イエス、マスター。」

アポロンがフェニックスドライバーのダガーモードを起動させた。

「そつは、させるかい!!」

ダガーモード起動と同時にアルフがなのはに攻撃を仕掛けた。

「行くぞ!」

「イエス、マスター。」

オリハルコンウィングを展開して接近し、なのはとアルフの間に割って入った。

「なに！」

「あ！」

「ふんっ！」

フェニックスドライバー、ダガーモードに力を込め、アルフを振り払った。

「あんだこの前のー！」

「仮面ライダー、ブレイド。」

「ブレイドさん！？」

「またジュエルシードを回収に来たのか。」

「ブレイド？違うな。」

「え？」

「ブレイドじゃない？」

「そのとうりだ。フェイト・テストロッサ。ユーノ・スクライア。」

「！なぜ僕達の名前を！？」

「この前戦ったブレイドは俺の仲間だからな。ちなみに俺はブレイドとは違う別の仮面ライダーだ」

「ブレイド、解除します。」

アポロンの後に俺の姿はブレイドからフェニックスに戻った。

「姿が変わった！？」

ユーノが驚いている。

「どうも、こんにちは。俺の名前は仮面ライダーフェニックス。そして、この銃が相棒のアポロンだ。」

「初めまして皆様。」

「インテリジェントデバイス！？」

「まあ、それに近い存在だな。」

「あんだ、魔導師かい？」

「いや。さっきも言っただろ？俺は仮面ライダーだと。」

「じゃあ、聞くけど。その仮面ライダーが何の用だい？」

「この場に来る理由なんて一つしかないと思うが？」

俺はわざとらしく質問する。

「……………ジュエルシード」

フェイトがボソツと呟いた。

「正解だ。」

「どうしてあなたやブレイドさんやバクウ達はジュエルシードを狙うんですか!？」

「理由はこの前ブレイドが言ったはずだが？」

「あんな理由で納得するとも思ってたんのか？」

アルフは今にでも飛び掛りそうだった。

「思っていないと言ったら？」

「力づくであんたのジュエルシードを頂くよ!!」

アルフが飛び掛ってきた。

「ちっ!」

軽く舌打ちをし、バックステップで回避する。

「いいだろ。相手をしてやる。おい!」

俺はなのはの方を向いた。

「は、はい！」

「そうゆうことだからその子の相手を頼んでいいか？」

「あ」

なのはは、フェイトに視線を向ける。  
そして、再び俺に視線を戻した。

「はい！」

「いい返事だ。」

「このおー！」

「おっと！」

アルフが再度飛びかかって来る。

「ほらほら、こっちだ！」

「こいつ！」

俺はなのはとフェイトの邪魔をさせないためにアルフを二人から遠ざけた。

なのはSide

目的がある同士だからぶつかり合うのは仕方ないのかもしれない。  
だけど、知りたいんだ！

「この間は自己紹介出来なかったけど。私、なのは！高町なのは！私立聖祥大附属小学校三年生。」

> Scythe Form <

「あ！」

フェイトちゃんがデバイスを構えてくる。

でも、そんな時でも私はどうしても知りたかった。

どうしてそんなに悲しい目をしているのか。

そう考えているとフェイトちゃんが攻撃をしてきた。

「あ！」

> Flier Finn <

健悟 Side

「うおおおお！」

「よっど。」

アルフは何度も攻撃してくるが狼形態での攻撃は昨日のザク？やサベージ、アツガイ、デカレンジャー、レンゲルに比べれば単純であるため簡単に回避できる。

それに動きもナイトメアプラスよりも遅い。

「くっ！」

「どうした、どうした。この程度か？」

「うるさい！」

向ってくるアルフに対し、俺はカードを二枚取り出し、一枚目のカードを入れる。

「君には少し調教が必要だな。」

『KAMEN RIDER! SAGA!』

最初に現れたのはディエンドが「電王の世界」で電王との戦いでも召喚したライダー。

鞭状の武器を持ち、キバの鎧の前に開発された最初期の鎧。

ファンガイアの王を守護する為に作られた、ヘビ型人工モンスター

「サガーク」の力を借り、「運命の鎧」の別名を持つ「サガの鎧」を纏った姿。

ヘビをモチーフにし、銀色のボディに青色の複眼を持つ「仮面ライダーキバ」の世界の仮面ライダー

「仮面ライダーサガ」

「獣には獣か。」

そう言いながら二枚目のカードを入れる。

『ZOID RIDER! LIGER ZERO TYPEZER  
O!』

次に現れたのは金属生命体「ゾイド」と呼ばれる獣の形をしたロボ

ツト。

チェンジング・アーマー・システム

白いボディのライオンの形をし、自由に装備を換装できるCASを搭載し、「ゾイド新世紀スラッシュゼロ」の主人公「ビット・クラウド」、「ゾイドフュージーズ」の主人公「RD」の搭乗機として登場したゾイド

「ライガーゼロ タイプゼロ」

「な！こ、こいつら一体何処から!?!」

「一体どうなってるんだ?」

突然現れたサガとライガーゼロにアルフとユーノは驚いている。

「まだ終わりじゃないぞ?」

俺は休まずカードをドライバーに入れる。

『KAMEN RIDER!』

「変身!」

『KIBA!』

仮面ライダーサガと同じ世界の仮面ライダー「仮面ライダーキバ」に変身し、次にフォームライドのカードを取り出し、挿入する。

『FORM RIDER! KIBA GARULFORM!』

アオオオオオオ!

狼の鳴き声が聞こえ、それと同時に「キバ ガルルフォーム」にフォームチェンジした。

「また姿が変わった！それにさっきは赤色だったのも青色に変わっている！」

「コロコロと姿を変えて！」

「狼には狼ってね。」

「仮面ライダーディケイド」で龍騎の世界でディケイドが仮面ライダーナイトに対して言った「コウモリにはコウモリ」の台詞をアレンジして言った。

「じゃあ、サガ、ライガーゼロ、行くぞ！」

「……」

「ガオオオオオオ！！！」

サガは黙ったまま頷き、ライガーゼロは雄叫びを上げ、アルフとコーナーノに向かっていく。

「はあ！」

「くっ！」

最初にサガがサガ専用リコーダー型汎用武器「ジャコーダー」を鞭状のジャコーダービュートでアルフを攻撃するが、アルフは横に回避する。

「ガオオオオオ！」

「うわっ！」

しかし、回避した場所に今度はライガーゼロが跳びかかる。  
アルフは上に回避する。

「甘いな！」

「なっ！」

既に行動を読んでいた俺は空中で左手に持ったキバ ガルルフォー  
ムの武器「ガルルセイバー」を振る。

「がああああ！」

「次はこっちだ！」

『ATTACK RIDE! BLAST!』

今度は右手に持ったフェニックスドライバーにアタックライド「ブ  
ラスト」のカードを入れ、「フェニックスブラスト」でアルフとユ  
ーノを攻撃する。

「くっ！」

「うわああああ！」

ユーノはシールドを展開したため、ブラストを防いだが、アルフは

直撃した。

「つつ！くっそおおおお！」

「いい根性だ！そうじゃないと困る！」

俺とサガ、ライガーゼロは向ってくるアルフに向っていった。

誰もいない夜の市街地の空中では、なのはとフェイトが激しい高速戦闘を繰り広げている。

フェイトがなのはの後ろを捉えた。

>Flash Move<

しかし、フラッシュムーブで今度は、なのはがフェイトの後ろを捉えた。

>Divine Shooter<

背後から近距離でデivainシューターを発射する。

>Defencer<

フェイトは即座に反応し、ディフェンサーで防ぎ、お互いに一旦距離をとり、デバイスを構える。

「フェイトちゃん！」

なのはの声が結界内に響き渡る。

「あー！」

「話し合うだけじゃ、言葉だけじゃ何も変わらないって言ってたけど、だけど話さないと、言葉にしないと伝わらないことだってきつとあるよー！」

フェイトは、なのはの言葉を黙って聞いている。

「ぶつかり合ったり、競い合うことになるのは、それは仕方がないのかも知れないけど、だけど、何も分からないままぶつかり合うのは、私、嫌だ！」

フェイトはそのまま聞き続ける。

「私がジュエルシードを集めるのは、それがユーノ君の探し物だから、ジュエルシードを見つけたのはユーノ君で、ユーノ君がそれを元どつりに集めなさいといけないから、私はそのお手伝いで！だけど、お手伝いをするのは偶然だったけど、今は自分の意思で、ジュエルシードを集めてる！自分の暮らしている町や自分の周りの人達に危険が降りかかったら嫌だから！これが、私の理由！」

「あ、・・・私は」

フェイトが自分の理由を教えようとするが。

「フェイト、答えなくていいー！」

アルフが妨害する。

「優しくしてくれる人達のところであぐらあぐらと甘ったれて暮らして  
るようなガキんちよになんか、何も教えなくていい！」

アルフが大声を上げる。

こいつもこの時はKYだとな。

「あたし達の最優先事項はジュエルシードの捕獲だよ！」

アルフの言葉でフェイトはバルディッシュを構える。

「あ！」

「なのは！」

「大丈夫！」

ユーノがなのはに声をかけるがなのはは、大丈夫と答えた。  
フェイトは反転し、ジュエルシードに向かって行き、フェイトに多少  
遅れてなのはもジュエルシードに向かって行った。  
そして、レイジングハートとバルディッシュがぶつかった。

「くうっ！」

「あ！」

次の瞬間、二つのデバイスにヒビが入った。

「フェイト！」

「なのは！」

「くっ！」

ジュエルシードから光りが放たれた後、それに続き青白い光の柱が空に伸びた。

なのはとフェイトは飛ばされ、やがて青白い光の柱は消えた。フェイトはバルディッシュを見る。

「大丈夫？戻って、バルディッシュ。」

>YES, Sir<

ポロポロになったバルディッシュをデバイスモードから待機モードに戻し、フェイトがジュエルシードに向っていく。

「はあ、全く。アポロン！」

「キバ、解除！」

俺は溜め息をつきながらキバを解除し、新たに二枚のカードをドライバーに入れる。

『MOBILE RIDE! GOUF IGNITED!』

『MOBILE RIDE! DYNAMES!』

「いけ！！！」

トリガーを引き、カードから呼び出したのは二機のMS。

「機動戦士ガンダムSEED DESTINY」に登場するザフト軍のニューミレニアムシリーズに属する機体。

青いボディに背中にフライトユニットを装備し、宇宙空間、大気圏内の両方での戦闘が可能であり、大気圏内ではザフト軍の航空用MS「デイン」にも匹敵する飛行能力を持っているザフト軍の量産型MS

「ZGMF12000 グフイグナイテッド」

「機動戦士ガンダム00 1st SEASON」に登場する機体。

緑と白のボディ、前面を覆う外套状のシールド。

肩のアタッチメントにはスナイパーライフルが装備されている。

「私設武装組織ソレスタルビーイング」の第三代ガンダムの内の一機で、ベースとなった第二代ガンダム「GNY-002 ガンダムサダルスード」のセンサー性能を高精度射撃に転用した遠距離戦闘用MS。

ガンダムマイスター、「ロックオン・ストラトス（ニール・ディラインデイ）」の搭乗MS

「GN-002 ガンダムデユナメス」

「デユナメス。あの金髪の子の進行を妨害してくれ!!」

「了解だ!」

デユナメスが答えると上空に上がり、頭部のアンテナがツインアイを覆うように下がり、額に隠されていた高精度ガンカメラが現れ、精密射撃モードに入り、肩のアタッチメントからGNスナイパーライフルを手に持ち、構える。

「デユナメス、目標の進路を妨害する!」

デユナメスのGNスナイパーライフルからGNビームが放たれた。

放たれたGNビームはフェイトの目の前を通りすぎる。

「くっ！」

目の前をGNビームが通りすぎたため、スピードを落とし、止まった。

「グフイグナイトッド！」

「了解です。」

グフイグナイトッドが右腕からスレイヤーウィップを発射し、フェイトの左腕に巻き付ける。

「えっ？」

「よし、引っ張れ！」

「了解！」

グフイグナイトッドが命令どおり、フェイトを引っ張り、空中でスレイヤーウィップを離す。

「え？きやあああー！」

「フェイトー！」

突然のことでフェイトは驚き、悲鳴を上げ、アルフが叫ぶ。

「よっど。」

俺は落下してくるフェイトをできるだけ優しくキャッチする。

「二人共、ご苦労さん。」

「あれぐらい楽勝だ。」

「問題ありません。」

デユナメスとグフイグナイテッドが返事を返す。

「さてっと。」

現在、お姫様だっこ状態のフェイトを見る。

「君、今素手でジュエルシードを封印しようとしただろ？」

声のトーンを一つ下げて、フェイトに尋ねた。

「は、はい。そうです。「馬鹿野郎!!」っ!!!!」

突然怒鳴られたのでフェイトが驚いている。

そしてそれは、なのは、ユーノ、アルフも同感だった。

「デバイスをボロボロにするだけの力を出したんだぞ!例えさつきより威力が落ちているとしてもそれを素手で触れたらどうなるか分からないのか!？」

「.....」

フェイトは黙り込んでしまった。  
俺はそのままジュエルシードを見る。

「だから、俺がなんとかする。」

「あんた何言ってるんだい！あんたは魔導師じゃないんだろ？そんなあんたがあれの力を抑えられるはずがない！！」

「アルフの言うとおりです。いくらあなたでも。」

フェイトとアルフが俺を止めようとする。

「確かにそうかもな。でも。」

お姫様だっこをしていたフェイトを降ろす。

「？」

フェイトの前でしゃがみ、そのまま手をフェイトの頭に寄せた。

「あっ」

「君が頑張っているのに、俺がなにもしないのは駄目だろ？それに、かわいい女の子が怪我をするところなんて見たくないからな。」

「か、かわいい／＼／＼」

「だから、俺に任せる。」

俺は立ち上がり、前が出る。



「氷竜、炎竜。システムチェンジ承認！」

「システムチェンジ！！」

二台の車体が浮き、車両から人型へと姿を変えていく。

「氷竜！」

「炎竜！」

車両から人型に変わった二体のロボット。

「勇者王ガオガイガー」に登場する超AIを搭載したGGGスリージーの勇者ロボット。

青いボディに、背中にクレーンを背負い、その名の通り氷を使う勇者ロボ「氷竜」

赤いボディに、背中にはしごを背負い、こちらもその名の通り炎を使う勇者ロボ「炎竜」

この二体も兄弟で、氷竜が兄、炎竜が弟である。

更に風龍と雷龍の兄弟でもあり、一番上が氷竜、次が炎竜、その次が風龍、そして一番下が雷龍である。

「ええ？ええええええ？」

「じゃ、車両がロボットに……」

「変形した！？」

「……すごい。」

上から、なのは、ユーノ、アルフ、フェイトが驚いている。

「お待たせしました、隊長。」

「僕達の出番が来たんだな！」

「ああ、氷竜、炎竜、お前達の力を貸してくれ。シンメトリカルドッキングいけるな？」

「はい。」

「まかせてくれ！」

氷竜と炎竜から頼もしい答えが返ってくる。

二人の答えを聞いて、お決まりの台詞を言う。

「よし！シンメトリカルドッキング、承認！！！」

「シンメトリカルドッキング！！！」

風龍と雷龍と同じ、お互いの意思を一つにした時に初めて合体できるシステム。

風龍と雷龍が撃龍神になったように氷竜と炎竜が合体した時、もう一体の勇者が誕生する。

「超お竜う神！！！」

氷竜と炎竜が背負っていたクレーンとはしごが腰に装備され、右半分が氷竜、左半分が炎竜。

撃龍神と同じ二体の勇者が一つになった姿、その名は超竜神！！

「今度は合体した!」

「超竜神、これを使い!」

『ATTACK RIDE! ERASER HEAD XL!』

アタックライドが発動し、上空から巨大な物体が飛んでくる。

「うおおおおおお!」

超竜神は腰のクレーンとはしごをジャッキの代わりにし飛び上がり、スラスターを使い、更に高く上がり、飛来した物体「イレイザーヘッドXL」をキャッチし、着地する。

イレイザーヘッド。

消しゴムをモチーフにし、超振動によって爆発や電磁波などのエネルギーを中和し、被害が出ない方向に偏向する超竜神専用のメガトンツール。

今回のジュエルシールドがどれ程のエネルギー量か不明であるため弾頭を「勇者王ガオガイガーFINAL」でレプリガオガイガーのヘルアンドヘブンを止めようとしたXLに設定した。

「あれって・・・消しゴムかな?」

「さあ?僕にも分からない。」

「超竜神、狙えるか?」

「やってみせます!」

超竜神がイレイザーヘッドXLをジュエルシードに向けて構える。

「ちょ！あんた何しよう」と黙ってみてる！」「っく！」

「アルフ、ここはフェニックスとあのロボットに任せよう。」

「う、うん。わかったよ、フェイト。」

フェイトに言われ、アルフが大人しくなる。

「ありがとう、フェイト・テストロツサ。・・・超竜神！」

「了解！！照準合わせよし！イレイザーヘッドXL、発射！！！」

バジュウウウツ

超竜神がイレイザーヘッドXLを発射し、

ゴオオオオオオオツツ

ジュエルシードに当たり、さっき程のように光の柱が空に伸びた。

「す、凄い・・・」

ユーノが啞然としたように言った。

俺はゆっくりジュエルシードに近づき、ジュエルシードを掴む。

「よし、問題ない。」

「上手くいったようですね、隊長。」

「ああ、お前のおかげだ。ありがとう、超竜神。」

「いえ、問題ありません。」

「今の内に、うわっ！」

「人の手柄を横取りするのは良くないぜ？」

「くっ！」

アルフが俺の隙をつき、ジュエルシードを回収しようとしたのでデユナメスがGNスナイパーライフルで威嚇射撃をする。

「すまん、デユナメス。」

「構わねえさ。それよりも早く封印しろ。」

デユナメスがいつでも威嚇できるようGNスナイパーライフルを構え直し、グフイグナイトッド、ライガーゼロ、サガ、超竜神も構えを取る。

「ああ。」

ラウズカードを取り出し、ジュエルシードを封印しようとした時だった。

「!!--」

俺は突然殺気を感じた。

後ろを振り返り、なのは達も後ろを見る。

そこには結界内にいるはずがない一般人がいた。

「な、なんで一般人がここに!？」

「どうなってんだい!?まさか魔導師？」

「分からない。」

「……よこせ。」

ユーノ、アルフ、フェイトが驚いている中、一般人の男が何かをつぶやいた。

「その石を……よこせ……!……!……!」

男が声を上げたその瞬間、男の身体にいくつもの線が浮かび上がり、姿を変えていく。

「!……!」

「え!?えええええ!」

「なんだいありゃ!？」

「い、一般人の姿が変わった!？」

フェイト、なのは、アルフ、ユーノが混乱する中、俺だけが違う意味で混乱していた。

「何故だ？何故此処にいる？」

目の前の男が変えた姿は、全身が灰色で、人間の進化形態と呼ばれた異世界の怪人。

「オルフェノク！！」

「仮面ライダーファイズ」の世界の怪人「オルフェノク」がこの世界に現れたからだ。

第十話 次元震（後書き）

ARX-7アーバレスト「ふう〜、かーけたつと。」

健悟「今回もえらい時間掛かったな。」

アポロン「全くですね。」

ARX-7アーバレスト「いやー、中盤辺りの展開をどうしようか  
ずっと悩んでてさ〜」

健悟「つか。これ明らかにミスったやろ？」

アポロン「私もそう思います。」

ARX-7アーバレスト「うん。俺も書いててそう思った。」

健悟「まあ、次からは気いつや？」

ARX-7アーバレスト「はい。じゃあ、次回予告行ってみよう！  
」！

健悟「はいはい。次回『第十一話 異世界の怪人』です。」

ARX-7アーバレスト「次回もお楽しみに！！」

第十一話 異世界の怪人（前書き）

お待たせしました！

今回もかなり気合いを入れて書きました！！（主に戦闘シーン）  
では、どうぞー！！

## 第十一話 異世界の怪人

俺は今、とても信じられない状況だった。

なぜなら結界内にいるはずがない一般人がいて、その人が突然この世界とは全く無関係の怪物に変身したからだ。

「なんだいありや!？」

「一般人の姿が変わった!？」

「何故だ?何故此処にいる?」

「フェニックスさん?」

「あなたはあれを知ってるんですか?」

なのはとユーノが俺を見る。

それに続きフェイトとアルフも俺を見る。

そして、俺はゆっくりと口を開いた。

「・・・オルフェノク」

「オル・・・フェノク?」

フェイトがオルフェノクの名前を繰り返した。

オルフェノク

「仮面ライダーファイズ」の世界の怪人。

人類の進化形態であり、人が一旦死を迎えた後に再度覚醒したものの。

オルフェノクには「オリジナル」と「使徒再生」の二つある。

自然死、事故死などの使徒再生無しでの覚醒をした場合「オリジナル」と呼ばれ、能力は高い。

そして、「使徒再生」はオルフェノクが人を襲った際に自らのオルフェノクエネルギーを注入し、相手をオルフェノクに覚醒させること。

その際、体の一部から触手を伸ばし、対象の心臓まで伸ばして心臓に突き刺すか、持っている武器で直接心臓を突き刺し、心臓を消失させることによって行う。

しかし、エネルギーを注入された人間がオルフェノクの進化に耐えられる場合のみ成功し、その確率は低い。

成功しなかった場合は一時的に活動を再開した後、すぐに灰化して死亡する。

「うっうっうっう、うおおおおお！！！！！」

サソリの姿をしたオルフェノク、スコピオンオルフェノクが俺達に向ってくる。

しかし、この状況は最悪だ。

なのはとフェイトのデバイスである、レイジングハートとバルディッシュはさっきのジュエルシードの影響で

ボロボロの状態、つまりなのはとフェイトにはもうほとんどの戦力はないことになる。

アルフとユーノも俺とサガとライガーゼロによる攻撃で体力を大幅に消耗している。

「みんなを守りながらはキツイな。」

「ご安心を、増援は呼んでいます」

「は？」

ダダダダダダダッ

「ぐわあっ！」

何処からか連射音が聞こえ、スコピオンオルフェノクが攻撃を受けた。

「な、何？」

「一体何処から？」

「この攻撃と連射音は……」

「来たようですね。」

フェイトとアルフが突然の攻撃に驚き、俺には攻撃した奴の検討がついていた。

キイイイイン、ガシャンッ

上空から何かが飛来し、俺の隣に着地した。

「やっぱりお前か。オートバジン。」

そこには先程スコピオンオルフェノクを攻撃した、ファイズ専用ビークル「オートバジン」が立っていた。

オートバジン

「仮面ライダーファイズ」の世界の大企業、スマートブレインの子会社であるスマートブレインモーターズ製可変型バリアブルビークル。普段は>ビークルモード<で活動しているが、搭載されたAIにより>バトルモード<と呼ばれる人型ロボットに自立変形し独自にファイズのサポートをする。本体の胸部にあるスイッチを押すことで任意で変形させることも可能である。

「な、何あれ？」

「多分ロボットだと思っけど。」

「また変なのが出てきたね。」

「あれも、フェニックスの仲間。」

オートバジンは右手に持っていたアタッシュケースを差し出す。そのアタッシュケースには「スマートブレイン」のロゴが入っていた。俺はオートバジンからアタッシュケースを受け取り、中身を確認する。

「……ファイズギアか。」

アタッシュケースの中には、ファイズフォンを初め、ファイズドライバー、ファイズポインター、ファイズショットの一式が入っていた。

「ファイズに変身しろってことか？」

オートバジンは電子音を鳴らしながら頷いた。

「でも、あいつらにバレるしな。」

そういいながら、フェイト達の方をチラッと見る。

「大丈夫です。そのために色々用意をしています。」

「……ならいいか。」

「うおおおお！」

話し込んでる内に再びスコープオンオルフェノクが向ってくる。

「オートバジン、ちょっと相手をしといてくれ。」

オートバジンは頷き、スコープオンオルフェノクに向かって行き、右腕でパンチを食らわした。

「ぐあああああー!!！」

殴られたスコープオンオルフェノクは後ろに飛ばされた。

「さて、変身の前にもう一体呼ぶか。」

カード取り出し、ドライバーに入れた。

『BRAVE RIDER! VOLFOGG!』

カードを発動させたと同時に結界内にサイレンの音が鳴り響く。

「な、なんだい？」

「なんの音？」

「これって・・・サイレンの音？」

やがてサイレンの音が段々近づいてきている。

「なのは！あれ！」

「ふえ？」

ユ一ノが指す方向を見ると一台のパトカーが走ってくる。

「今度はパトカー！？」

「お！来たか。」

「システムチェンジ！」

車体を浮かせ、人型へと姿を変える。

「ボルフォーッグ！」

パトカーから姿を変え、現れたのは一体のロボット。

「勇者王ガオガイガー」に登場し、紫色のボディに、忍者のような姿をしており、諜報、偵察、攪乱を得意とし、事件の基礎捜査や要人護衛を主に担当する機関、GGG諜報部所属の超AIを搭載した

勇者ロボ

「ボルフォッグ」

「初めまして、フェニックス隊長。これからよろしくお願いします。」

「おう、よろしくな。さっそくだがあそこにいる白い服を着た女の子とフェレットを守ってくれ。」

「え？」

「ぼ、僕達？」

「超竜神、お前は金髪の子と狼を頼む。」

「え？」

「あたい達も？」

「分かりました。お任せ下さい。」

「了解です、隊長。」

「デユナメス、グフイグナイトッド、サガ、ライガーゼロ、お前達はジュエルシードを死守してくれ。」

「了解だ。」

「了解です。」

「……………」

「ガオオオオオ」

なのは、ユーノの護衛をボルフォッグ、フェイト、アルフの護衛を超竜神、そしてジュエルシードの死守をデユナメス、サガ、グフイグナイテッド、ライガーゼロに任せた。

「で、どうやってあいつらにバレずにファイズになるんだ？」

「じつするのです。」

シューウウウウウツツ

「うわっ！何だこれ!？」

次の瞬間アポロンからスモークが噴射され、スモークが俺を包み込んだ。

「これなら見られずに変身出来ます。」

「成程。」

「では、変身を解除します。」

アポロンによって変身が解除されたが。

「ゴホッ！ゴホッ！」

変身を解除したため煙を吸ってむせた。

「大丈夫ですか？」

「ゴホッ！だ、大丈夫、大丈夫！」

そっぴいなからアタツシユケースからベルト型変身ツール「ファイズドライバー」を取り出し、左右のハードポイントにファイズポインター、ファイズショットを取り付け、腰に巻きつけ、携帯型トランスジェネレーター

「ファイズフォン」に変身コードを入力する。

- 555 ENTER

『STANDING BY』

コードを入力し、待機音が流れ、ファイズフォンを閉じ、ファイズフォンを持った右腕を高く上げる。

「変身！」

上げた右腕を下ろし、そのままドライバーのバックル部 フォンコネクター にファイズフォンを突き立て左に倒した。

『COMPLETE』

音声の後にファイズドライバーから俺の身体を沿って フォトンフレーム が形成され、赤い光を放った。

そして光が収まり、ソルメタルと呼ばれる金属で作られた戦闘用特殊強化スーツを身にまとい、流動エネルギー>フォトンブラッド<が循環しているエネルギー流動経路>フォトンストリーム<がライ

ン状に全身にいきわたっている。

赤いフォトンストリームに黄色い複眼をした、スマートブレイン製  
仮面ライダー

「仮面ライダーファイズ」に変身した。

仮面ライダーファイズ

ギリシャ文字の<sup>ファイ</sup>を模したデザインの仮面ライダー。

「ファイズの世界」の大企業、スマートブレイン社製のライダーズ  
ギアで最も後期に開発されたシステム。

ツール数が最多及び唯一アクセルフォームやブラスタフォームと  
いった強化変身フォームチェンジが可能と拡張性が高い。

平成仮面ライダー作品の第四作「仮面ライダー555」<sup>ファイズ</sup>の主演ライ  
ダー。

キャッチコピーは「疾走する本能」

スモークが晴れ、変身完了後、夜の街の中、赤いフォトンストリー  
ムと黄色の複眼を発光させ、オリジナルのファイズ「乾 巧」と同  
じように右手首を振る。

「だ、誰あれ？」

「また別の人が」

「あいつ、なんか光ってるねえ。」

「フェニックスは何処に行ったんだらう？」

「なっ！ファ、ファイズだと！」

スコープオンオルフェノクはを驚き、なのは達は不思議そうに俺を<sup>ファイズ</sup>

見る

「いくぜ?」

戦闘を開始しようとした時

「BGMスタート」

「は?」

アポロンがそういうと、突然静まり返っていた町に仮面ライダー  
アイズの挿入歌「Dead or Alive」が流れる。

「な、何?何?」

「歌?」

突然のことに驚くのはとユーノ

「おおお!テンション上がってきたー!!!」

そして、Dead or Aliveが流れてテンションを上げ、  
俺はスコルピオンオルフェノクに向っていった。

「オートバジン、交代だ!」

命令するとオートバジンは攻撃を中止し、俺の方を向き、ハイタツ  
チをして俺と交代した。

「おりやああああ!!」

声を上げながらスコーピオンオルフェノクに右ストレートを左頬に食らわす。

「ぐあっ!!」

殴られたスコーピオンオルフェノクは少しよろけた。

「はあっ!!」

よろけたことで更に隙が生まれ、左足を1歩前に出し、右足でスコーピオンオルフェノクの腹に蹴りを入れた。

「がはっ!!」

蹴りを入れられ、スコーピオンオルフェノクは2、3歩後ろに下がった。

「まだまだいくぜ!!」

右手首をスナップさせ、更に向っていく。

なのはSide

さっきまでフェイトちゃんとジュエルシードをめぐるって戦って、私のレイジングハートとフェイトちゃんのバルディッシュが傷付いて封印が出来なくなつて、フェニックスさんの仲間の赤と青のロボットが合体して消しゴムみたいなやつでジュエルシードの暴走を止めてくれて、フェニックスさんが封印しようとした時に誰もいないはずの結界の中に男の人がいて、その人がいきなり怪物に変身して、

今度はフェニックスさんがいきなり煙に包まれて、煙の中から赤い光が出て、煙が晴れたらフェニックスさんやブレイドさんとは違ったまた別の人が立っていた。  
しかも身体の赤いラインと黄色い眼が発光している。

「ユーノ君、あれって一体？」

「さあ？僕にもさっぱり」

「あれはオルフェノクと呼ばれる死者が蘇った怪人で、今戦っているのがそのオルフェノクと戦う戦士、仮面ライダーファイズです。」  
私の質問に答えてくれたのはパトカーから変形した紫色のロボットさんだった。

「あ、あとう」

「申し遅れました。私の名はボルフォッグと申します。仮面ライダーフェニックス及びファイズの仲間です。宜しければお二人のお名前をお聞かせていただけますか？」

ボルフォッグさんは凄く丁寧に教えてくれ、私達に名前を聞いてきた。

「は、はい！なのはです！高町なのは！私立聖祥大附属小学校三年生です！」

「えっと、僕はユーノです。ユーノ・スクライア。」

「よろしくお願ひします。高町さん、スクライア君。」

「は、はい！よろしくお願いします！」

私は緊張しながらボルフォッグさんとお話……お話!?

「ふえ？ふえええええええ！？」

私は声を上げてしまった。

「な、なのは!？」

「どうしました!？」

突然声を上げたので、ユーノ君とボルフォッグさんが心配している。

「ボ、ボボ、ボルフォッグさん!! ななな何でロボットなのに! し  
やしゃしゃ喋れるの!!??」

「なのは、今気付いたの？」

「説明しますので落ち着いてください。私には、超AIと呼ばれる  
人間の頭脳を工学的に表現した、最新鋭の情報処理システムが搭載  
されており、人と同じ様に自分で考えたりすることが出来ます。」

「へー。」

「凄い、これ程まで高性能なAIがこの世界にあるなんて。」

ボルフォッグさんに説明してもらっているといきなり街中に歌が流  
れてきた。

「な、何？何？」

「歌？」

「おおお！テンション上がったー！ー！ー！ー！ー！」

この曲を聞いて、ファイズさんが駆け出していった。

「ど、どうしたのかな？」

「さ、さあ？」

「この曲はファイズのテーマ曲ですので、それで気分が高ぶっているでしょう。」

「そうなんだ。」

「でも、この曲は何処から？」

「恐らく、アポロンが街の電子機器にハッキングし、そこからこの曲を流しているでしょう。」

「そ、そうなんだ。」

ハッキングって、そんなことしていいのかな？

「ところで、ファイズ一人で大丈夫なんですか？」

「問題ありません。それにいざとなれば私も助けに入ります。」

そういいながら、ボルフォッグさんはファイズさんの方を向き、私もファイズさんの方を向き、見守った。

フェイトSide

「あれはオルフェノクと呼ばれる怪人で、今戦っているのがオルフェノクと戦う戦士、仮面ライダーファイズです。」

さつきジュエルシードの力を押さえた右側が青、左側が赤のロボットが説明してくれた。

「ところで、あんたロボットなのになんで喋れるんだい？」

アルフが私の疑問でもあったことを聞いた。

「私には超AIと呼ばれる人間の頭脳を工学的に表現した、最新鋭の情報処理システムが搭載されており、人と同じ様に自分で考えたりすることが出来ます。」

「へえー。」

「この世界って機械技術がすごいんだね。」

「申し遅れました。私の名は超竜神。そして、私がこの姿に合体する前の二体のロボットが青が氷竜、赤が炎竜といます。よろしければあなた方のお名前を聞かせてもらえますか？」

超竜神つというロボットが丁寧に挨拶をして、私とアルフに名前を尋ねてきた。

「えっと、フェイトです。フェイト・テストロッサ。」

「あたいはアルフだよ。」

「よろしくお願いします。」

超竜神に説明してもらい、互いに自己紹介をした後、いきなり町に歌が流れ始めた。

「な、なんだい!?!」

「う、歌?」

「おおお!テンション上がってきたー!ー!ー!ー!」

この曲を聞いて、ファイズと呼ばれる人が駆け出していった。

「ど、どうしたんだろ?」

「さ、さあ?」

「今流れている曲はファイズのテーマ曲なので気分が高ぶっているのでしょう。」

「そうなんだ。」

「……どうやって歌を流してるんだろ?」

「ところで、あんたはあっちの手伝いをしなくてもいいのかい?」

アルフはファイズを見る。

「はい。隊長なら大丈夫です。それに今の私の任務はあなた方を守ることです。」

そついいながら、超竜神はファイズの方を向き、私もファイズの方を向き、見守った。

「ふんっ！はっ！つたあああ！」

「ぐわあああっ！！」

俺はスコープオンオルフェノクの腹に右と左と交互にパンチを入れ、更に右アッパーを食らわせ、スコープオンオルフェノクは地面に転がった。

曲がそろそろサビに入るところだな。

「そろそろ終わりでしょうか。」

ファイズフォンのプラットフォームに装填されたメモリーカード型キー>ミッションメモリー<を引き抜き、ファイズドライバーの右側のハードポインターに装備されたデジタルトーチライト型ポイントイングマーカージェバイス「ファイズポインター」を手に持ち、ミッションメモリーをファイズポインターに挿入した。

『READY』

音声が流れ、ファイズポインターを右足の脛に装着し、ファイズフォンを開きENTERを押した。

ENTER

『EXCEED CHARGE』

音声の後にファイズドライバーからフォトンストリームを經由し、ファイズポインターにフォトンブラッドが注入される。

「ふんっ！」

ファイズポインターの注入が完了し、右足を前に出し、腰を少し落とすように構え、スコールフェノクに向って駆け出す。

「はあっ！」

そのまま飛び上がり「乾 巧」の様に前方一回転をし、ファイズポインターから円錐状の赤い光放ち、スコールフェノクをポ  
拘束イントする。

「ぐっ！があっ！」

「てやああああっ！！！」

そして、掛け声と共に右足を前に出し、そのまま円錐の中に入る。円錐がスコールフェノクに突き刺さり、ファイズの必殺技「クリムゾンスマッシュ」をスコールフェノクに喰らわした。

「がああああああつっ！！！！！」

次の瞬間、円錐がスコープオンオルフェノクの中に入っていく様に消え、まるで相手の中を通り抜けたかの様に俺はスコープオンオルフェノクの後ろに着地する。

「ふん。」

「うつ、あああああ」

歌が終わったとほぼ同時にクリムゾンスマッシュを受けたスコープオンオルフェノクは赤いギリシャ文字、<sup>ファイ</sup>を浮かばせ、青い炎に包まれ、灰となって消えた。

「終わった……の？」

「そう……みたいだね。」

「はい。終わりました。」

「ふう、さーつてと。」

オルフェノクを倒し、ゆっくりとジュエルシードに近づき、掴んだ。

「よしつと。超竜神、ボルフォッグ、サガ、デユナメス、グファイグ  
ナイトッド、ライガーゼロ、ご苦労さん。」

「いえ、問題ありません。」

「同じくです。」

「……………」

「ま、簡単なミッションだったしな。」

「はい。」

「ガオオオオオッ」

超竜神、ボルフォッグ、デユナメス、グフイグナイテッド、ライガ  
ーゼロはそれぞれ返事を返し、サガだけが頷いていた。

「くっそ！またあいつらにジュエルシードを！！」

「……………アルフ、帰ろう。」

フェイトとアルフが悔しそうに撤退しようとした。

「おい！ちよつと待て！」

俺は二人を呼び止めた。

「……………何ですか？」

「まだやるうってのかい？」

二人が警戒しながら俺を見る。  
そんな二人に俺はゆっくり近づいた。

「・・・持って行け。」

そついいながら、さっき回収したジュエルシードを差し出した。

「」「」「えッ！」「」「」

なのは、ユーノ、フェイト、アルフが驚いている。

「ど、どうしてですか？」

フェイトが混乱しながら質問をしてくる。

「今日は君が身体を張ってまで封印しようと頑張ったご褒美ってとこだ。」

「え、えっと。」

「あんだ、なんか企んでるんじゃないだろうね！」

「何も企んでいないさ。だから安心してくれ。」

「・・・あ、ありがとうございます。」

戸惑いつつ、フェイトはジュエルシードを受け取った。

「帰ろう、アルフ。」

「う、うん。」

フェイトとアルフは撤退していった。

「よかったですか、隊長？」

「折角あんたが苦労したのによー。」

「別に大丈夫だ、超竜神、デユナメス。それにあの子が頑張ったのは事実だ。それでも何か問題があるか？」

俺は超竜神達を見る。

「いえ、隊長がそう判断したのなら私達に異存はありません。」

全員を代表してボルフォッグが答えた。

「ならいい。じゃ、俺達も帰ろう。」

「了解です。」

「分かりました。」

「はいよ。」

「了解。」

「・・・」

「ガオオオ」

全員返事を返し、超竜神、ボルフォッグ以外は消え、カードに戻り、超竜神はシンメトリカルアウトをし氷竜と炎竜に戻り、氷竜、炎竜、

ボルフォッグはビークル形態にシステムチェンジをした。

「オートバジン。」

俺に呼ばれ、オートバジンが近づき、胸部にあるスイッチを押した。

>VEHICLE MODE<

音声の後にオートバジンがバトルモードからビークルモードに変形した。

「いくぞ。」

「はい。」

「あ、あの待って！」

なのはに呼び止められたが無視をし、オートバジンに跨がり、氷竜、炎竜、ボルフォッグと共に走り去った。

「行っちゃった。」

「どうしてあの人は、あの子にジュエルシードを……」

戦いが終わった場所に取り残された二人だった。

???Side

誰もいないはずの結界内のビルの屋上からフェニックス達の戦闘を見ていた複数の影がいた。

「あれがこの世界に現れたライダーってやつか。」

「世界の破壊者と呼ばれるディケイドとディエンドの両方の能力を持っているのか。」

「更にライダー以外の他次元の者も呼び出せる上に他のライダーのベルトを持ち、変身まで出来るとわな。」

「それに、あんなロボットまでいるなんて、鬱陶しいわね。」

「カインの遺産のロボット。」

「いけませんねえ。この世界でも彼らが存在するとは」

「気にいらんな。あのような感覚を持つ男は」

「はっ！中々面白そうな奴じゃねえーか。」

「俺は戦争とあいつが出したガンダムをぶっ殺すことさえ出来ればそれでいいがな。」

「彼は世界に変革も齎すのに邪魔な存在だ。」

「へっ！俺が刻み込んでやるぜ！兄貴！」

「あははっ、面白そう。」

「僕の邪魔をさせないよ。僕は人類を導かなくてならないのだから。」

「

「彼は我々の計画の妨げになる。早めに始末するのだ！本来この世界には存在しない新たなライダー、仮面ライダーフェニックス・・・  
・・・おのれ、フェニックスー！！！！！」

眼鏡とコート、フェルト帽を被った壮年の男が叫ぶと屋上にいた者達は銀色のオーロラに飲み込まれ、姿を消した。

「ふうっ」

家に帰宅し、オートバジンを車庫に戻し、氷竜、炎竜、ボルフォックスは地下の整備施設に入り、俺はすぐに風呂に入り、今は風呂から上がりソファーに腰を下ろしている。

「本日もお疲れ様です、マスター。どうでしたか？ファイズの使い心地は。」

「ああ、問題ない。それに身体も慣れてきたのか、ダルさもあまりない。」

「それはなによりです。」

確かにファイズに変身しても問題はなかった。しかし、疑問に思うところがいくつかある。

「アポロン、聞きたいことがある。」

「なんででしょうか？」

「なんで俺はファイズに変身出来たんだ？」

最初の疑問はファイズに変身出来たことだった。

ファイズ、カイザ、サイガ、オーガのデルタを除く四つのライダーシステムは身体にかかる負担が大きいためライダーに変身出来るのはオルフェノクまたはオルフェノクに近い身体を持つ者に限られているからだ。

更にサイガとオーガはオルフェノクの中でも選ばれた者しか装着出来ない。

「理由は簡単です。あのファイズギア、カイザギア、サイガギア、オーガギアは誰でも装着が出来るからです。」

「……は？」

あまりの衝撃に言葉が出なかった。

「誰でも？」

「イエス、マスター。」

改めて聞いてみたが聞き間違いではなかった。

「でも、どうしてだ？」

「まずライダーズギア各種にオルフェノクの記号を更に強化した物のデータをインプットしてあります。このオルフェノクの記号は上級のオルフェノク並み、もしくはそれ以上の物です。これによりオ

ルフェノクでない普通の人間でもファイズやカイザ、ライオトルーパーはもちろん、サイガとオーガにも変身させることが出来ます。あとデルタの闘争本能活性化装置「デモンズスレート」もカバーしてくれます。ちなみに劇中の様にオルフェノクの記号に限界はありませんのでご安心下さい。」

「でも、それじゃあ奪われた時とかどうするんだ？」

「ご安心下さい。その対策は既に出来ています。ライダーズギア各種にデルタフォンと同様の音声認識システムと指紋認証システムを追加しました。もし仮に奪われたとしても登録されていない音声と指紋の場合、確実にエラーが出るようにプログラミングをしております。」

「じゃあ、もし俺以外の人でも変身させたい場合は？」

「その時はその人の音声と指紋を登録します。しかし、その場合はマスターの承認がなければ登録できません。あとプログラムの変更も出来ません。仮にプログラムをマスターの承認無しでしようとした場合は機密保持のために全てのシステムが消去され、自爆するよう設定されています。」

自爆までするのか。

「あと、マスターの承認をライダーズギアに送るのは私なので、私もいなければ登録、変更は不可能です。」

かなり嚴重なセキュリティだな。

まあ、確かにこれなら奪われても悪用される心配はないな。

「納得していただけましたか？」

「ああ、ファイズに変身出来たことの疑問については納得出来た。でも、まだ疑問は残ってる。」

「……今日現れたオルフェノクのことですね？」

「ああ。」

俺にとって一番の疑問点は、なぜなのは世界と無関係のオルフェノクが現れたからだ。

「……やっぱり、これがあの時に言ってた大いなる災いや試練の一つなのか？」

「その可能性が一番高いと思われませう。」

俺がこの世界に来る前、扉をくぐる時に言われた言葉。

「『お前が望む世界に繋がり、お前が望む力を与えよう。しかし、その代償として大いなる試練、災いも待ち構えている。』つか。恐らく、今回だけで済むはずはないよな？」

「イエス、マスター。それにオルフェノク以外、グロンギやアンノウン、ミラーモンスター、アンデット、魔化魍、ワーム、イマジン、ファンガイアなど他にも様々な世界の怪人が現れる可能性もあります。」

「そっか。」

しばらく沈黙が続く。

「じゃあ、しょうがないか。」

「よろしいのですか？マスター。」

「当たり前だ。元々災いと試練があるのを分かってこの世界に來たんだ。だったら乗り越えてみせる。だから、お前も力を貸してくれ、アポロン。」

「もちろんです、マスター。」

「ありがとう。よし！じゃあ寝よ！」

「おやすみなさい、マスター。」

こうして俺は二階の自室に行き、ベットに入って就寝した。

翌日 4月27日午後6：19 海鳴市 海鳴臨海公園

現在、O1dカードを使い、20代の人になりすまし、ジュエルシードが発動するのを待っている。

「アポロン、状況は？」

「現在予定の5分前。氷竜、炎竜、風龍、雷龍、ボルフォッグから通達、指定の位置に配置完了とのことです。」

「よし、そのまま待機するように通達してくれ。」

「イエス、マスター。」

作戦の準備を進める中、俺はあることを考えた。

「……………」

「どうしましたか、マスター？」

「え？い、いや。なんでもない。」

「……………なのは様とアリサ様のことですか？」

「……………分かってるなら聞くなよ。」

今日の学校でもなのはとアリサはまだ仲直り出来ていなかった。まあ、ちゃんと仲直りすることは分かっているが。

「はあ。あの二人には困ったものだ。」

「そうですね。…………マスター、そろそろです。」

「分かった。」

時間を見ると午後6：23 ジュエルシールドが発動するまで一分を切った。

「発動まであと30秒です。」

「了解だ。」

俺は辺りを見渡す。

「あと10秒です。」

10・・・9・・・8・・・7・・・6

「あと5秒。」

4・・・3・・・2・・・1・・・

「0」

午後6：24になりジュエルシードが発動した。

「発動しましたね。」

「ああ、いくぞ！」

「イエス、マスター。」

『KAMEN RIDER!』

「変身！」

『PHOENIX!』

フェニックスに変身したと同時に周囲に結界が張られた。そして、ジュエルシードによって姿変えた樹が出現した。

「結構デカイな。」

「イエス。それに原作よりも更に大きくなっています。」

「そうか。ボルフォッグ！」

「了解です。」

俺はすぐにボルフォッグに指示を出した。

樹は土から根っこをだし、なのはに攻撃しようとした。

「ユーノ君、逃げ・・・シルバームーン！」っえ!？」

ボルフォッグは武装のシルバーブーメランにミラーコーティングを  
施し、投擲する技「シルバームーン」を使い、なのはに襲い掛かる  
根っこを切り裂いた。

「あなたは！」

「ボ、ボルフォッグさん！」

なのはとユーノは、助けしてくれた相手の名を呼んだ。

「こんにちは、高町さん。スクライア君。」

「ウオオオオオオオ!!！」

樹は更に根っこを出し、攻撃を仕掛けてくる。

「ボルフォッグさん！」

「大丈夫です。」

「氷竜、炎竜！発砲許可！」

「了解！！」

「フリージングガン！」

「メルティングガン！」

氷竜と炎竜が武装の一つであるフリージングガンとメルティングガンで根っこを撃っていく。

「あっ！」

「貴方達は昨日の！」

「昨日はごうも。自己紹介がまだでしたね。私は氷竜、よろしくお願ひします。」

「僕は炎竜、よろしくな！」

「あ、えっと、私はなのはです。高町なのは！」

「僕はユーノです。ユーノ・スクライア。」

「あなた方の名前は昨日ボルフォッグから聞きました。」

氷竜達が自己紹介をしている時に別の方向から黄色の魔力弾が数弾

飛んできた。

「ウオオオオオオ!!」

樹は魔力弾をバリアで防いだ。

「うおう。生意気にバリアまで張るのかい。」

「うん。今までより強いね。それにあの子とあの人もいる。」

魔力弾が飛んできた方向を見るとフェイトとアルフがいた。

「ウオオオオオオ!!」

樹はうめき声を上げながら、再び攻撃を仕掛けてくる。

「鬱陶しいな。」

俺はフェニックスドライバーを発砲する。

「ウオオオオオオ!!」

しかし、やっぱりバリアで防がれてしまう。

「駄目か。」

「まずはあのバリアの強度を調べる必要がありますね。」

「そつだな。風龍、雷龍!」

「了解!!」

別の場所で待機していた風龍と雷龍が出てきた。

「あっ！」

「また新しいロボット！」

「一体何体いるんだろうねえ？」

「今度のは緑と黄色のロボット。」

なのは達が現れた風龍と雷龍に目を向ける。

「ティガオツー！フォン・ダオ・ダン！」

「ティガオフォー！ヴァアアアンツレイ！」

風龍と雷龍は胸のダイヤルを回した。

風龍は胸のダイヤルをレベル2に合わせ、背中に背負ったドラム「ジャオ・ダン・ジイ」から超圧縮空気弾「フォン・ダオ・ダン」を発射。

雷龍は胸のダイヤルをレベル4に合わせ、雷の攻撃「ヴァン・レイ」を発動させた。

「ウオオオオオオオ！」

しかし、風龍と雷龍のフォン・ダオ・ダンとヴァン・レイもバリアによって防がれてしまった。

「おいおい、マジかよ!?!」

「私達の攻撃ですら防ぐとは。」

正直俺も予想外だった。

「私がバリアを分解しますか?」

「うーん、そうだな。あ!」

俺はあることを思いついた。

「どうしました?隊長。」

「ボルフォッグ、メルティングサイレンは必要ない。こいつらを使う。」

そっぴいなながらカードケースからカードを取り出し、ドライバーに入れた。

『BRAVE RIDE! GALEON!』

「ギャレオオオオオオン!」

「ガオオオオオオオオツ!」

俺が名前を呼び、雄叫びを上げながら現れたのは一体のメカライオンだった。

「勇者王ガオガイガー」に登場し、三重連太陽系「緑の星」にて建造された宇宙メカライオン「ギャレオン」

「よし！じゃあ、さっさとファイナルフュージョンを・「マスター」  
「っ何？」

俺がギャレオンをファイナルフュージョンさせようとしたところで  
アポロンに止められた。

「折角なのでマスターがなってみてはいかがですか？」

「何に？」

「ガオガイガーに。」

「・・・」

「・・・」

少し沈黙し、

「何ー！ー！」

思わず叫んでしまった。

「えっ！俺がギャレオンとフュージョンして、尚且つファイナルフ  
ュージョンしてガオガイガーになれと！？」

「そうですね？」

毎度思うけど、本当にコイツって返事軽いよな。でも、俺もガオガイ  
ガー好きだしなあ。

「うーん、よし！なるうー！」

軽い気持ちでなることを決めた。

「フュージョン！」

そう叫ぶと俺はギャレオンの口内に入った。

パクッ

「えー！！」

「く、食われた！！」

なのはとユーノが騒いでる。

ギャレオンは俺を取り込んだ後、最初に頭部を出現させ、腕、足とメカライオンから人型のロボットに姿を変えていく。

「ガイガー！」

ギャレオンはメカライオンから人型のロボット「ガイガー」に変形した。

仮面ライダーフェニックスはギャレオンとフュージョンすることでメカノイド、ガイガーに変形するのだ！

「ガオーマシン！！」

ガオーマシン

ガイガーと合体することでガオガイガーになる簡易AIを搭載した

サポートマシン。

周りに響き渡るように叫んだ。

すると上空から航空機、「ステルスガオー」が飛んできた。

ステルスガオー

B-2ステルス爆撃機に似た形状の航空機のガオーマシン。

ガオガイガーの背部及び下腕部になる。

更にステルスガオーの下部アームには、鉄道車両「ライナーガオー」が吊る下げられて輸送されていた。

ライナーガオー

500系新幹線に似た形状の鉄道車両のガオーマシン。

ガオガイガーの肩及び上腕部を形成する。

ほとんどの鉄道路線を走破できる軌間可変台車、及びほとんどの鉄道車両と連結できる万能連結器を装備している。

そして地面からドリル戦車「ドリルガオー」が現れた。

ドリルガオー

二基のドリルを備えた戦車のガオーマシン。

左右に分離し、ガオガイガーの両足部となる。

陸海空どこでも運用可能な万能車両である。

「よしー！」

俺は直ぐにカードをドライバーに入れた。

『ATTACK RIDE! FINAL FUSION!』

アタックライド「ファイナル・フュージョン」を発動させた。

「プログラムドライブを承認します。」

アポロンがファイナルフュージョンのプログラムを発動させる。

「よっしやああああ！！ファイナル、フュージョオオオオン！」

ファイナル・フュージョンが発動し、ガイガーは回転しながら合体時から敵の攻撃を守るために腰部から緑の奔流を放った。

電磁嵐の中にドリルガオー、ステルスガオー、ライナーガオーの順番で入ってくる。

ガイガーの下半身が180 回転する。

ドリルガオーのドリル部分が90 度開き、そこにガイガーの足が入り、ロックされる。

次にガイガーの両腕が背中に移動し、空間が開き、ライナーガオーがその空間に入り、停車する。

次にステルスガオーが背中にドッキングされ、ライナーガオーから上腕部が形成され、ステルスガオーのエンジン部分が上腕部と接続され、マニピュレーターが回転をしながら出てくる。

そして、頭部に追加装甲が装着され、額にGストーンが浮かんできた。

「ガオ！ガイ！ガオー！！」

メカノイド、ガイガーとサポートマシン、ガオーマシンが合体し、誕生したスーパーメカノイド。

その名は、勇者王ガオガイガー！！

「ふんっ！」

「が、合体した!!」

「この世界ってこんな物まであるのかい!?!」

ユ一ノとアルフが驚く中、地面に着地し、構えをとる。

「折角ガオガイガーになったけど、速攻で終わらせる!!」

ガオガイガーの中で更にカードを取り出し、ドライバーに入れた。

『BRAVE RIDE! GOLDY MARG!』

カードを発動させるとオレンジ色の戦車がこちらに向っていく。

「システムチエエエンジン!」

車体が浮き上がり、人型へと姿を変えていく。

「ゴルディイイマアアグ!」

「勇者王ガオガイガー」に登場したマルチロボ、「ゴルディーマーグ」

ゴルディオンハンマーがあまりに強力である為、ガオガイガーの機体そのものにもダメージを与えることが判明し、ダメージの軽減、及びゴルディオンハンマーの運搬のためにコネクターとなるゴルディーマーグが開発された。

「いくぞ!ゴルディーマーグ!!」

『ATTACK RIDE! GOLDION HAMMER!』  
アタックライド「ゴルディオオンハンマー」のカードをドライバーに  
入れた。

「セーフティデバイスリリーヴ!」

アポロンがゴルディオオンハンマーの最終安全装置を解除した。

「うりゃあああつ!」

ゴルディマーズがウルテクエンジンを起動させ、空に飛び上がる。

「システムチエエエンジン!」

ゴルディマーズの頭部と胴体が分離、胴体が右腕「マーズハンド」  
に変形し、頭部はゴルディオオンハンマーに変形する。

ガオガイガーの右腕がステルスガオーに戻され、マーズハンドがコ  
ネクトされる。

「ハンマー、コネクトツ!ゴルディオオンツ!ハンツマアアアアアツ  
!!!!!!!」

ゴルディオオンハンマー  
正式名称「グラビティ・ショックウェーブ・ジェネレイティング・  
ツール」。

重力波を目標に叩きつけ、光子に昇華して消滅させる。  
ガオガイガーの必殺技「ヘル・アンド・ヘブン」の負荷負担を軽減  
させるために開発されたハイパーツール。

ゴルディオオンハンマーを持った瞬間、ガオガイガーとゴルディオオンハンマーは全身が金色に輝きだした。これは内蔵されているGSライド・及びウルテクエンジンのエネルギーがガオガイガーを保護するための特殊なエネルギーコーティングが展開されているためである。

「な、何!?!」

「黒いロボットが」

「金色に!?!」

「・・・綺麗。」

「ふんっ!」

マーグハンドから釘を取り出す。

「ハンマアアア、ヘルツ!?!」

取り出した釘を樹に打ち付けた。

「ハンマアアア、ヘブンツ!?!」

マーグハンドからバールの先端が出現し、釘抜きの手順でジュエルシードを排出した。

「光になれえええっ!?!」

そう叫びながら、最後にゴルディオオンハンマーを叩きつけた。

「ウオオオオオオオオオ．．．．．」

ゴルディオンハンマーを受けた樹は光子となって消滅した。

「す、凄い。」

「よつと。」

樹が消滅したのを確認し、ガオガイガーから下りた。

「．．．．つつつつかれた〜〜。」

「大丈夫ですか？マスター。」

「いや、全然。」

まさかガオガイガーなるってこんなに疲れるとは思わなかった。こりや、トレーニングメニュー増やす必要があるな。

「トレーニングメニューを増やす必要がありますね。」

「俺も思った。あ、その二人。」

俺はなのはとフェイトを見た。

「は、はい!？」

「えっ?」

「どつちでもいいからジュエルシードを封印してくれ。俺、今疲れてるんだ。」

正直、今はかなり疲れているから封印するのがめんどくさい。

「……………」

「……………」

> Sealing mode・Set up・<

> Sealing form・Set up・<

なのはとフェイトは空中に浮いているジュエルシードに目を向け、レイジングハートとバルディッシュをシーリングモード、フォームに変形させ、構える。

「ジュエルシード シリアル?!」

「封印!」

二人はほぼ同時にジュエルシードを封印した。

「ジュエルシードには、衝撃を与えてはいけないみたいだ。」

「うん。タベみたいなことになったら、私のレイジングハートも、フェイトちゃんのバルディッシュも可哀想だもんね。」

「だけど、譲れないから。」

> Device form <

フェイトはバルディッシュをデバイスフォームに戻す。

「私は、フェイトちゃんと話をしたいだけなんだけど」

> Device mode <

なのはもレイジングハートをデバイスモードに戻した。

「私が勝つたら・・・ただの甘ったれた子じゃないと分かっても  
らえたら・・・お話、聞いてくれる？」

なのはがそういい終わると二人は同時に互いに向って行く。  
俺はここであることを思い出した。

「そういえばこの場面ってたしか。」

そう思った時、二人の間に別の魔方陣が展開された。

「ストップだ！」

なのはとフェイトがレイジングハートをバルディッシュをぶつけよ  
うとした時、突如声が聞こえた。

その言葉の後、レイジングハートとバルディッシュを受け止めた。

二人の間には黒いバリアジャケットを着た一人の少年がいた。

「ここでの戦闘行為は危険すぎる！時空管理局執務官、クロノ・ハ  
ラウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか。」

現れたのは時空管理局執務官「クロノ・ハラウン」だった。

## 第十一話 異世界の怪人（後書き）

ARX-7アーバレスト「まずは最初にごめんなさい。」

健悟「今回は2週間の遅れやな。」

アポロン「だんだん遅くなってきてますね。」

ARX-7アーバレスト「今回は色々頑張りました。」

健悟「それに今回は俺がガオガイガーになつとるし、いいんか？  
こんなんで。」

ARX-7アーバレスト「まあ、今回のガオガイガーは読者サービ  
スってことで。」

アポロン「一部の方にしか喜ばれないと思いますが。」

ARX-7アーバレスト「そこは気にしない。」

健悟「にしても、なんで樹を倒す時の技がヘルアンドヘブンじゃな  
くハンマーヘルアンドヘブンなんや？」

ARX-7アーバレスト「それは、どっちかと言うとハンマーヘル  
アンドヘブンの方が好きだし、ゴルディーマーグは早い段階で出し  
ておきたかったから。」

健悟「そして、今思えば、この話かなりカオスになってきてないか  
？」

ARX-7アーバレスト「いいじゃん別に。」

アポロン「諦めましょう。マスター」

健悟「おい!!」

アポロン「それにしても今回はかなり長いですね。」

ARX-7アーバレスト「まあ、今まで待つてもらったお詫びも兼ねて長くしました。……本当は単に上手くまとめられなかっただけけど。」

健悟「駄目じゃん。」

ARX-7アーバレスト「つとと言うことでいきなりですが、ここでアンケートを取りたいと思います。」

健悟「本当にいきなりだな。」

アポロン「全くですね。」

ARX-7アーバレスト「アンケートお題と内容は次のとおりです。」

お題：この小説の状況について

- 1： 文が長い、もっと短く。
- 2： 文が短い、もっと長く。
- 3： 今のままで十分。

ARX-7アーバレスト「こんな感じですよ。」

健悟「答えが、あんまり変わらんような気が。」

ARX-7アーバレスト「アンケートの答え方は番号でお願いします。あとできれば理由も一緒をお願いします。」

アポロン「ちなみにこれ以外でも何かご意見やご感想があればご遠慮なくお書き下さい。お待ちしております。」

ARX-7アーバレスト「では、そろそろ次回予告。」

健悟「次回『第十二話 登場、時空管理局!!』です。」

ARX-7アーバレスト「次回もお楽しみに!!」

## 第十二話 登場、時空管理局！！

「ストップだ！」

なのはとフェイトがレイジングハートをバルディッシュをぶつけようとした時、突如声が聞こえた。

その言葉の後、レイジングハートとバルディッシュを受け止めた。二人の間には黒いバリアジャケットを着た一人の少年がいた。

「ここでの戦闘行為は危険すぎる！」

ついに現れたか。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか。」

時空管理局執務官、クロノ・ハラオウン。  
またの名は、K・Y。

「時空管理局。」

「まずは、二人共武器を引くんだ。」

クロノがなのはとフェイトを地上に降ろす。

「このまま戦闘行為を続けるなら。はっ！」

クロノが警告をしてる中、クロノに向かってオレンジ色の魔力弾が放たれた。

「くっ！」

クロノはシールドを展開し、魔力弾を弾いた。

「フェイト、撤退するよ！離れて！！」

アルフがフェイトを逃がすためになのはとクロノに威嚇射撃を放った。

フェイトは撤退する前にジュエルシールドを回収しようとジュエルシールドに向っていった。

しかし、そこにクロノが放った魔力弾が飛んでいき、フェイトに当たろうとした。

「はっ！くっ！」「クワァー！！」「！！！」

空中で何かが複数、クロノの魔力弾を全て弾き、フェイトの肩に乗ったりフェイトの前で止まったりしている。

フェイトが自分の目の前と肩に乗っている物に目を向けた。

「ファ、ファング！」

「グワァー」

フェイトを守り、肩に乗っているのはファングだった。

「それにカブト達も！」

ファングと同じようにフェイトを守り、目の前にいたのはカブト、ガタツク、ザビー、ドレイク、ダークカブト、カブティックゼクタ

「達だった。」

「な、なんなんだ！あれは！」

「あいつらは恐竜の形をしたのがファング、虫の形をしたのがゼクターだ。」

『MOBILE RIDE！ GOUF GUSTOM！』

『KAMEN RIDE！ LEANGLE！』

俺は仮面ライダーレンゲルと「機動戦士ガンダム 第08MS小隊」に登場したジオン公国軍MS

「MS-07B3 グフカスタム」を召喚した。

グフ・カスタム

白兵戦を重視したコンセプトであったジオン公国軍MS「MS-07 グフ」は攻撃範囲が狭く、武装が固定武装のためデッドウェイトとなり、汎用性に欠け、運用に不便な点が浮上していた。

そこでグフを全面的に見直し、固定武装を廃し、射撃武装を着脱式にし中近距離射撃能力を向上させ、グフの特徴装備「ヒートロッド」は材料を強化し、ワイヤー型にすることで小型化し射程距離を延長、更に溶断機能を廃し放電のみにし、先端をアンカー状にした。

08小隊を苦しめたジオン軍のエースパイロット「ノリス・パツカード」大佐の搭乗機である。

「こ、こいつら！一体何処から！？」

突然現れたレンゲルとグフカスタムにクロノは驚いている。

「アポロン、こいつらの制御は任せるぞ？」

「イエス、マスター。ところで身体の疲れは？」

「今はそんなのどうでもいい。フェニックス、解除。」

「フェニックス、解除。」

レンゲルとグフカスタムの制御をアポロンに任せ、フェニックスを解除させた。

「氷竜、炎竜、風龍、雷龍、ボルフォッグ、お前達は手をだすな。」

「はい。」

「了解！」

「分かりました。」

「了解だ。」

「了解です。」

氷竜達に手をださないように命令した。

「あれがフェニックスさんの本当の姿？」

「そうみたいだね。」

（なんか。野田君に似てるような。）

「あれがあの人の正体。」

(どうしてあの人がファングとカプト達を知ってるの？それに・・・あの人。どこかで見たような。)

「なんのまねだ？」

なのはとフェイトが変身を解いた状態の俺を見て色々考えている中、クロノは俺の行動が理解出来ないため、質問をしてくる。

「単に別の奴に変身するために解除しただけだ。」

そっついながら俺は、どことなく白いソフト帽を取り出す。

「それから、お前に言っておくことがある。」

「・・・なんだ？」

クロノはS2Uを構える。

「撃つていいのは撃たれる覚悟がある奴だけだぜ・・・ボーイ？」

「なんだと！」

「ガイアメモリを仕事に使わないのが俺のポリシーだったんだが・・・やむおえん。」

更にこんなこともあるのかと、俺は懐に入れておいた仮面ライダーW「ダブルドライバー」のプロトタイプ、変身ベルト「ロストドラ

イバー」をバツクル状態で取り出し、腰に装着し、バツクルからベルトが伸長し、バツクルに装着された。

そして、更に懐からある物を取り出した。

あらゆる「地球の記憶」を収めた、10cm程のUSBメモリ型生体感応端末「ガイアメモリ」。

その中の人間の身体能力を極限まで引き出すことが出来る「骸骨の記憶」を宿したガイアメモリ

「スカルメモリ」を取り出し、スカルメモリのスイッチを入れた。

『SKULL!』

スカルメモリのスイッチを入れたことでメモリに封印されていた「地球の記憶」を表す電子音声

「ガイアウィスパード」が流れ、メモリが起動した。

スカルメモリをロストドライバのメモリスロットに入れ、展開した。

『SKULL!』

「変身。」

変身すると同時に風が巻き起こった。

変身した姿は黒と銀を基本カラーとし、頭蓋骨を模した顔に白いマフラを身につけている。

そして、白いソフト帽を頭部にある「S」字の傷模様を隠すように被った。

俺は「仮面ライダーW」の世界の仮面ライダー、「仮面ライダースカル」に変身した。

仮面ライダースカル

仮面ライダーWの装着者「左 翔太郎」の探偵の師匠であり、その相棒の「フィリップ」に生き方を教えた人物、おやっさんこと「鳴海 壮吉」がスカルメモリを使い変身した仮面ライダーである。

「な、なんだその姿は!？」

スカルに変身した俺を見て、クロノは動揺している。

「俺の名は、仮面ライダースカル」

「仮面ライダー・・・スカル？」

クロノは名前を繰り返した。

「さあ、お前の罪を」

右手を前に出し、

「数える。」

スカルの決め台詞とポーズをとった。

「僕に数える罪はない!!」

クロノはS2Uを構え、魔力弾を撃ってきた。

そこに先程召喚したグフカスタムが盾を使い守ってくれた。

「大丈夫ですか？」

「すまない、グフカスタム。あと、ついでに少しの間あいつの相手をしておいてくれ。」

「はっ！お任せを！」

グフカスタムにクロノの相手を任せた。

「ま、待て！！」

「貴様の相手は私だ、小僧！！」

グフカスタムはシールドに装備された6銃身75mmガトリング砲をクロノに向けた。

「！！誰が小僧だああっ！！！！」

健悟Side

グフカスタムにクロノの相手を任せた後、俺はフェイトに近づいた。

「怪我はないか？」

「は、はい。ファング達が守ってくれましたから。」

「そうか。」

フェイトに怪我がなかったのでホッとした。

「あの、どうしてあなたは、ファング達を知ってるんですか？」

「・・・残念だが今は説明している余裕はあまりない。・・・カブ

トゼクター。」

カプトゼクターは俺に呼ばれるとジュエルシードを持って近づいてきた。

「ありがとう。」

「

ジュエルシードを受け取り、カプトゼクターにお礼をいい、撫でるとカプトゼクターは嬉しいそうにしている。

「さて、君に一つだけ聞きたいことがある。」

「・・・なんですか?」

「君はなぜこれジュエルシードを集めている?」

理由は知ってるけど、一応聞いてみた。

「・・・母さんがそれを求めているから。」

「それが君がジュエルシードを集める理由か?」

「・・・はい。母さんが・・・待ってるから。」

「・・・そうか。」

俺は、今まで回収したジュエルシードが封印されているラウズカードを取り出した。

「レンゲル！」

「……」

レンゲルは無言のままこちらに近づき、ラウスカードを一枚取り出し、レンゲルラウザーにラウスした。

『REMOTE』

ラウスカード、クラブの10「REMOTE TAPIR」

クラブの10に封印された「ティアアンデット」の力が解放され、「ティアリモート」が発動し、ラウスカードに封印されていたジユエルシードを解放した。

本来はラウスカードに封印されたアンデットを解放して操る能力である。

「ならば……持っていけ。」

「えっ？」

俺は、昨夜ジユエルシードを渡したのと同じように、今まで回収したジユエルシードを全て差し出した。

「き、貴様！何を！」

「余所見をするとは余裕だな！！」

「くっ！」

クロノがなんか言ってたけど・・・無視しよう。

「あ、あの！どうして？」

「さあ？ただの気まぐれだ。」

そういつて、俺はフェイトにジュエルシードを渡した。  
よくよく考えたら、昨夜とほとんど同じことをしてるな。

「えっと、ありがとうございます。」

「礼なら必要ない。さっきも言ったがただの気まぐれだ。それよりも早く撤退したほうがいい。彼に捕まりたくないんだろ？」

そっついながらグフカスタムと戦っているクロノの方を見る。

「・・・はい。」

「なら、早く撤退しろ。彼の足止めは俺達がしておいてやる。だから安心しろ、フェイト。」

「あっ。」

「フェイト、撤退しよう！」

「うん、うん。」

フェイトとアルフは撤退していった。

クロノSide

「貴様の相手は私だ、小僧!!!」

「!!! 誰が小僧だあああつ!!!」

今回の任務はロストロギアの回収とその関係者から事情を聴きだすことだった。

しかし、黒い魔導師の使い魔が攻撃し、その主人がロストロギアを回収しようしたため僕は攻撃をおこなった。

それを恐竜と昆虫の形をした小型の機械に防がれた。

その小型の機械の正体を知り、頭部までバリアジャケットに覆われた人物は銃の形をしたデバイスにカードのような物を入れ、デバイスから音声の流れると何処からか全身が水色で目が一つしかないロボットのような姿をした人物とデバイスを持っている人物と同じような人物が現れた。

そしてデバイスを持っていた人物はバリアジャケットを解除し、男だと分かった。

投降するつもりかと思ったがその考えはすぐに無くなった。

男は懐からなにかを取り出し、腰に装着し、更にUSBメモリを取り出したと思うとスカルと言う音声を流し、腰のベルトに入れた。するとさっきとは全く違うバリアジャケットを展開した。

男はバリアジャケットを展開した後「仮面ライダースカル」と名乗った。

そして、僕に罪を数えろと言ってきた。

しかし、「僕に数える罪はない」と言っつてスカルに攻撃をしたが水色のロボットが盾で防いだ。

スカルはロボットに僕の相手をするように言い、黒い魔導師のところに近づいていく。

僕は止めようとしたが水色のロボットに邪魔をされ、尚且つ小僧呼

ばわりされたので腹が立ち、現在交戦中である。

「ステインガーレイ！」

「ふんっ！」

ステインガーレイを放ったが軽く避けられてしまった。

「相手の隙を作らずに攻撃が当たると思っているのか!？」

ダダダダダッ

そういうと相手は質量兵器であるガトリングを発砲したが弾は一つも僕には当たらず、地面だけに着弾した。しかし、それが奴の狙いだった。

弾が地面に着弾したことで土煙が舞い上がり、視界を遮った。

「煙幕のつもりか!!」

煙の向こうからは相手が向ってくる音が聞こえてくる。

「何処から来る気だ？」

煙で回りが見えず、警戒をしていたその時だった。

バシユッ

ガキイイン

「くっ!何!？」

左側からワイヤーのようなものが発射され、S2Uが弾かれた。

「左か!!」

左側を向くと煙の中から水色のロボットが現れ、そのままタックルを食らった。

「がはっ!!」

タックルをまともに食らい、肺から空気が押し出された。

「ふっ、この程度か小僧!」

ダダダダダダダッ

ロボットはガトリングをこちらに向け、再び発砲してきた。

「小僧じゃないっ!!」

また小僧呼ばわりされ腹が立ち、痛みを堪えシールドを張り、ガトリング砲の弾を防いだ。

「ほお、よく防いだな。だがっ!」

今度は右手に持っていた剣で振り掛かってくる。

「くっ!」

相手の剣を避けると同時に弾かれたS2Uを回収し、反撃に移った。

「ステインガースナイプ！」

「むっ！」

ステインガースナイプを放ち、相手のガトリング砲を破壊した。

「はっ！楽しませてくれる！！！」

「どうだ！・・・ん？」

相手が盾から破壊されたガトリング砲を排除している時に、青いロボットから視線を外し、黒い魔導師とスカルの方を見るとスカルがジューエルシードを黒い魔導師に渡していた。

「き、貴様！何を！」

「余所見をするとは余裕だな！！！」

ダダダダダッ

「くっ！」

スカルに気を取られている隙に青いロボットは、さっきとは別の左腕と盾の隙間に装備されたガトリング砲を撃ってきた。

「くそっ！ブレイズキャノン・・・うわっ！」

ブレイズキャノンを撃とうとした時、別の方向からエネルギー弾が飛んできた。

エネルギー弾が飛んできた方向を見るとスカルが銃を構えた状態でゆっくりと近づいて来ている。

「待たせたな。さあ、相手をしてやろう。」

所持していたジュエルシードをフェイトに全て渡した後、Wのトリガーマグナムのプロトタイプ、スカルマグナムを取り出し、クロノに威嚇射撃をした。

「すまんな。」

「いえ、問題ありません。」

「そうか。あといい忘れていたが、あいつは空を飛ぶことができる。あいつが空に逃げないように注意して攻撃するぞ?」

「了解しました。」

「では……いくぞ?」

「はっ!」

俺とグフカスタムはクロノに向かって駆けだした。

「くそっ! スティンガーレイ!」

「散開!」

ステインガーレイを回避し、左右に分かれてクロノに攻撃を仕掛けた。

「グフカスタム、援護を！」

「はっ！」

ダダダダダッ

グフカスタムが3連装35mmガトリング砲を発砲する。

「ちっ！」

「ふんっ！」

「くっ！」

クロノがガトリング砲をシールドで防いでいる隙に接近し、ミドルキックを喰らわせたが、クロノはギリギリでガードした。

俺は一旦距離を取るために離れ、クロノはS2Uを構える。

「相手は一人だけではないぞー！」

今度はグフカスタムがヒートサーベルで接近戦を仕掛ける。

グフカスタムが連続で斬りかかりがバックステップやサイドステップで避け、避けきれない場合はS2Uで防ぎ、俺がスカルマグナムで援護射撃を行うがクロノはシールドで防ぐ。

「はあ、はあ、はあ、」

しかし、流石のクロノも段々と体力を消耗してきている。

「はっ！反射神経だけはいいいようだな。だがっこれは避けられるか  
！！」

グフカスタムは右手に持っていたヒートサーベルを投げ捨てた。  
クロノはグフカスタムが投げ捨てたヒートサーベルに気を取られ目  
線を一瞬離し、戻すと視界からグフカスタムが消えていた。

「！っ上か！！」

クロノが上を向くと、グフカスタムはヒートワイヤーを発射し、先  
端のアンカーがクロノの胸に張り付いた。

「しまった！！」

「目の良さが命取りだ！！」

「ぐあああああっっ！！」

ヒートワイヤーから電流を流され、クロノはその場で倒れた。

「ぐっ！ああっ！！」

そして、俺とグフカスタムはゆっくりとクロノに近づいていく。

「怯える！すくめえ！己自身の実力を活かせぬまま死んでいけえー  
！！」

「……………終わらせるぞ。」

ロストドライバーからスカルメモリを抜き、スカルマグナムのマキシマムスロットにスカルメモリを挿入した。

『SKULL MAXIMUM DRIVE!』

マキシマムドライブを発動し、スカルマグナムをノーマルモードからマキシマムモードに変形させ、クロノに銃口を向ける。

「スカルパニッシャー、これで終わりだ。」

『待つてもらえませんか?』

スカルマグナムの引き金を引こうとした時、宙にモニターが現れ、一人の女性が映っていた。

「……………どちら様かな?」

『私はそちらにいるクロノ・ハラウン執務官の上司のリンディ・ハラウンです。』

モニターに映っている女性は時空管理局の巡洋艦「アースラ」の艦長「リンディ・ハラウン」提督だった。

「ほお、苗字が同じということは。」

『はい、母親です。』

まあ、本当は知ってたけどな。

「そうか。で、なんの用だ？」

『速やかに戦闘を中止してもらえませんか？』

「先に仕掛けたのはあなたの息子だ。その台詞は自分の息子に言ったらどうだ？」

『そうですね。クロノ執務官、速やかに戦闘を中止しなさい。』

「あ、あの。もう既に動けないんですが。」

電流を流されたため、クロノの身体は痺れて動けないでいる。

『さて、急な話で申し訳ありませんが私達の艦に来てもらえませんか？』

「なぜだ？」

『謝罪も兼ねて今回の件について色々事情を聞かせてもらいたいです。』

「か、艦長！なぜ謝罪を？」あなたは黙っていないさい、クロノ執務官。『つくっ！は、はい。』

上司であり、母親であるリンディに怒られ、クロノは直ぐに黙った。

『いかがでしょうか？』

これは正直行かないと先に進まないだろうし、行くか。

「……………いいだろう。つと言いたいが、まずは奴らを片付けてからだ。」

『奴ら？』

「……………いい加減出てきたらどうだ？」

そっぴいながら俺は林の方を向く。

すると、林の中から黒いスーツ姿の男が10人程姿を現した。

「なっ！」

『なぜ結界の中に民間人が！？』

なのはとユーノは昨夜も同じようなことを体験しているのであまり驚いていないがリンディとクロノは驚いている。

「あいつらはタダの民間人じゃない。恐らくあいつらは……………」

クロノとリンディに説明しようとした時、男達は懐からMと書かれたガイアメモリを取り出し、スイッチを入れた。

「MASQUERADE！」

ガイアウィスパードの後、男達はマスカレイドメモリの端子部分を右首に当て、マスカレイドメモリが体内に入り、差し込んだ場所から液体が肉体を包みこみ仮面ライダーWの世界の怪人「マスカレイドドーパント」に変身した。

マスカレイドドーパント

地球の記憶の「マスカレイド（仮面舞踏会）の記憶」を宿したガイアメモリを体内にドーピングすることで変身する超人形態のドーパント。

しかし、変身した姿は変化するのは顔のみで衣装はそのままだ。

「やはり、ドーパントだったか。」

『あ、あれは一体！？』

「説明は後だ。グフカスタム、レンゲル、氷竜、炎竜、風龍、雷龍、ボルフォッグ、ゴルディ、そいつらを守ってやってくれ。特にそこで痺れて動けない奴をな。」

「はっ！」

「・・・」

「はい。」

「了解！」

「分かりました。」

「分かったぜ」

「了解しました。」

「任せておけ！」

グフカスタム、氷竜、炎竜、風龍、雷龍、ボルフォッグ、ゴルディ  
マーグが返事を返し、レンゲルは頷くだけだった。  
グフカスタム達の返事を聞き、俺は前に出た。

「アポロン、BGMを頼む。」

「イエス、マスター。」

アポロンは指示通りBGMを流した。

「な、何？」

「なんだこの曲は？」

「この曲、昨夜とは違う。」

「うん。今度のは歌が流れてこない。」

アポロンが選んだBGMは「劇場版 仮面ライダーW ビギンズナ  
イト」で仮面ライダースカル（鳴海 壮吉）がタブードーパントと  
マスカレイドドーパントと戦った時に流れたBGMだ。

「この台詞を言うのは今日は二度目だな。さあ、お前達の罪を・・・  
数えろ。」

仮面ライダースカルの本来の敵に決め台詞とポーズをとった後、マ  
スカレイドドーパント達は一斉に向ってきた。

「うおおおおっ！」

「ふっ！はっ！」

「がっ！」

「はあああっ！」

「せいっ！」

「ぐああっ！」

「うおおおっ！」

「はあああっ！！！」

「があああっ！！！」

最初に一人目がフックを仕掛けてくるが体制を低くて避け、相手の脇にミドルキックを入れ、二人目は後ろから襲ってきたため腹部にひねり蹴りを入れ、三人目は助走を付けてジャンプしたため、俺も直ぐにジャンプをし、ハイキックを相手の顔面の左側に入れ叩き落とした。

「うおおおっ！！！」

「……流石に鬱陶しいな。」

四人目に横蹴り、五人目にボディブローをした後、スカルマグナムを取り出し、六人目から十人目を撃った。

「ぐあああっ！」

「がああつ!!」

攻撃は加えているが未だにマスカレイドドーパント達は倒れる気配はない。

「そろそろ終わらせる。」

スカルマグナムのマキシマムスロットにスカルメモリを挿入し、マキシマムドライブを発動させた。

『SKULL MAXIMUM DRIVE!』

「スカルパニツシャー、はっ!!!」

スカルマグナムの引き金を引き、さっきはクロノに撃ち損ねたスカルパニツシャーを4、5発放った。

「くわわあああああつつ!!!」「」「」

敵が密集しているところを狙ったのでマスカレイドドーパントは十人から六人に減った。

「まだ終わりじゃないぜ?」

スカルマグナムからスカルメモリを引き抜き、ベルトのマキシマムスロットにスカルメモリを入れ、再びマキシマムドライブを発動させた。

『SKULL MAXIMUM DRIVE!』

マキシマムドライブを発動させると胸から骸骨型のエネルギーを生させた。

「これで終わりだ。はああああっ！」

発生させた骸骨型のエネルギーを回し蹴りの要領で残りのマスカレイドドーパント達に向けて蹴り飛ばした。

「くくくくくわああああっ！！！！」「」「」「」

骸骨型のエネルギーはマスカレイドドーパント達に命中し、マスカレイドドーパント達は全て消滅した。

「ふんっ」

マスカレイドドーパント達を殲滅した後、ゆっくりとなのは達のところに戻った。

「お怪我は？」

「大丈夫だ、グフカスタム。お前達もご苦労だった。そろそろ戻ってくれ。」

「はっ！」

「・・・」

グフカスタムは返事をし、レンゲルは無言で頷いた後カードに戻った。

「さて、待たせて申し訳ない。」

『い、いえ。』

「今のは一体。」

リンディとやっと痺れが治まり、立ち上がったクロノは多少混乱気味だった。

「色々聞きたいだろうがまずはそちらの艦に案内してもらえないか？話はそれからだ。」

『えっ？あ、そうですね！クロノ執務官、みなさんをアースラまでご案内して。』

「わ、分かりました、艦長。」

「氷竜、炎竜、風龍、雷龍、ボルフォッグ、ゴルデイ、お前達は先に帰っててくれ。アポロン、ギャレオンとガオーマシンに帰還信号を送ってくれ。」

「……………了解<sup>です</sup>……………」

「イエス、マスター。」

氷竜、炎竜、風龍、雷龍、ボルフォッグ、ゴルディマーグはビークル形態になり、ガオガイガーはギャレオンとガオーマシンに分離してから撤退した。

「で、では行こうか。」

クロノは魔方陣を展開し、俺達はアースラに転移された。

第十二話 登場、時空管理局！！（後書き）

ARX-7アーバレスト 「よし、今回も無事に投稿完了！」

アポロン 「お疲れ様です。」

健悟 「今回は今までより多少短いな。」

ARX-7アーバレスト 「気にするな。」

健悟 「ところで、なんでクロノの相手をスカルにしたんだ？」

ARX-7アーバレスト 「そりゃあ、色つながりもあるけど、一番の理由はクロノに「お前の罪を数えろ」って言いたかったから。」

健悟 「グフカスタムは？」

ARX-7アーバレスト 「O K A M A 傭兵さんからのリクエスト。ヒートワイヤーでのトリッキーな戦法があまり出来なかったから満足してもらえるか心配だ。」

健悟 「レンゲルは今回空気がったな。」

ARX-7アーバレスト 「………確かに。」

アポロン 「お二人とも、そろそろ次回予告をしましょう。」

健悟 「そうだな。次回 『第十三話 アースラ』です。」

ARX-7アーバレスト 「次回もお楽しみに！」





んだが。」

「あ、は、はい。」

「すみません。」

「それと。」

クロノは、なのはとユーノの時と違い、鋭い目付きで俺を見る。

「貴方もバリアジャケットを解除したらどうですか？」

口調は丁寧だが、常に警戒をしている感覚を感じた。

「・・・では、そうしよう。」

俺はロストドライバーのスロット部を閉じ、スカルメモリを引き抜き変身を解除した。

「では、こちらへ。」

再びクロノに案内された。

「艦長、来てもらいました。」

「あつ。」

案内された場所のドアが開くと中には盆栽や茶の道具に毛氈、更には獅子おどしまで用意されていた。

「お疲れ様」

毛氈の上には正座をしたリンディが笑顔で迎えてくれた。

「まあ、三人ともどうぞどうぞ、楽にして」

そういわれ、俺となのはとユーノは毛氈の上に正座をした。

しかし、一体どうやって用意をしたのか凄く気になる。

そんな疑問を残したまま、最初になのはとユーノが事情聴取が行われた。

「成程、そうですか。あのロストロギア、ジュエルシードを発掘したのはあなただったんですね。」

「っん、それで僕が回収しよう。」

「立派だわ。」

「けど、同時に無謀でもある!」

クロノに言われユーノは落ち込んでしまう。

「あの、ロストロギアってなんなんですか?」

「ああ、異質世界の遺産……って言っても分からないわね。えっと。」

ロストロギアの方からないのはにリンディとクロノが説明をしている。

俺はある程度知っているので出されていた和菓子とお茶を頂いていた。

しかし、改めて考えると本当にどうやって用意したんだ？

そして話は終盤に入り

「繰り返してはいけないわ。」

ポチャン

リンデイが抹茶に角砂糖を入れ、飲んだ。

あれが伝説のリンデイ茶か。

確か劇場版「THE MOVIE 1st」では、ミルクも入れてたな。

……あれって美味しいのか？

「これよりロストロギア、ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます。」

「「えっ」「」

「君達は今回の事は忘れてそれぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい。」

「でも、そんな。」

「次元干渉に関わる事件だ！民間人に介入してもらおうレベルの話じゃない。」

「でも！」「」

「まあ、急に言われても気持ちの整理もつかないでしょう。今夜一晩ゆっくり考えて二人で話しあって、それから改めてお話をしましよ。」

「送っていいころ。元の場所でもいいね?」

クロノが立ち上がりなのは達を送ろうとした。

「ちょっと待って。」

俺はクロノを呼び止め、睨みつけた。

「・・・なんです?」

クロノも俺を睨んでくる。

お互い睨みつける中、俺はクロノに

「・・・お茶とお菓子のかわりいいか?」

空になったお茶とお菓子のおかわりを要求した。

ズデーーン!!!

「ん?」

なぜか全員がズッコけた。

「どうした?」

「あ、あなたは!」

クロノが半分呆れ、半分怒っている。

「落ち着け、半分は冗談だ。」

「半分は本気だったのか!!」

クロノから鋭いツツコミが返ってくる。

「それは置いておくとして、なぜ貴方達が今回の件の全権を持つていく?」

「話を聞いていなかったのか? 今回の事件は次元干渉に関わる事件だ! 民間人に介入してもらおうレベルの話じゃn」俺が聞きたいのは何故今になってこの件に関わるのかということだ!」っ!何!」

「クロノ執務官、君は今、民間人に介入してもらおうレベルの話でないつと言ったな?」

「それが何か?」

「では何故、民間人に介入される前に時空管理局は行動を起こさなかつたんだ? 貴方達時空管理局は地球でいうところの警察と裁判所、そして軍隊が一つになった組織だそうだな? それならスクライアが言っていた時空間船が事故、又は災害にあったことは報告されていたらはずだが?」

「そ、それは・・・」

「・・・」

クロノは戸惑い、リンディは黙り込んでいる。

「そして、全権を持っていく理由が次元干渉に関わる事件だから・  
・っと言つことは次元干渉に関わらなければ今回の件には時空管  
理局は関わらなかつたつということになるな。」

「そ、そんなことは！」

「しかし、リンディ提督。例え貴方達がそう思ってなくても人によ  
つてはその様に聞こえることもある。」

「あっ……」

落ち込むリンディに対し、俺は更に質問を続ける。

「それに、今回の事は忘れてそれぞれの世界に戻って元通りに暮ら  
すといいつと言つがここまで関わっておきながら、はい、分かりま  
したつと言えると思うか？高町の場合はすでに魔法の存在を知つて  
いる。それなのに元通りに暮らすことが出来ると思つているのか？」

リンディは黙り、クロノは苦虫を潰した様な顔をしている。

「もし仮に貴方達が逆の立場だったらどうだ？自分達が追っている  
事件をいきなり別の部隊に任務の全権を持って行かれ、事件のこ  
とは忘れて別の任務に行けと言われても何も疑問を持たず別の任務に  
行くことが出来るのか？」

「い、いえ。」

「ならばそれと同じだ。ちなみに聞くが、地球は貴方達時空管理局の管理下にある世界なのか？」

「.....」

リンディは無言のまま首を横に振る。

「ならば、管理下に入っていない以上、貴方達時空管理局の指示に従う必要はないな。」

「！！何をふざけたことをっ！！！」

黙っていたクロノが再び入ってきた。

「ふざけたこと？俺にしてみれば貴方達の方がよっぽどふざけている様に見えるがな？この世界、地球が時空管理局の管理下であり、地球にも時空管理局の存在が知られているならある程度は同意しよう。だが、管理下の世界でもなく、地球には時空管理局なんて組織の存在は誰も知らない。にも関わらず、いきなり現れ、いきなり全権を持つて行く方が俺にはふざけていると思えるが？」

「ぼ、僕達は正義のためにやっているんだぞ！？」

「では、正義のためなら他人から全権を無理やり持っていつてもいいのか？」

「ぐっ！」

「さっきも言ったが地球は時空管理局の管理下じゃない。貴方達の指示に従う筋合いはない。もっとも礼儀を知らない人の指示には最

初っから従う気はないがな。」

「どつという意味ですか？」

リンデイが再び口を開いた。

俺はリンデイの質問に答えた。

「まず最初に貴女の息子だ。」

俺はクロノに目を向けた。

「な、なんだ？」

「彼は何故いつまでもバリアジャケットを展開しているんだ？」

俺が指摘したのはバリアジャケットだ。

「高町にスクライア、そして俺もバリアジャケット、変身を解除している。だが何故彼はバリアジャケットをいつまでも展開している。もし単なる事情聴取だけならバリアジャケットは解除していいはずだ。でも解除していない。つまりそれは俺達がかおかしな行動を取った場合すぐにでも攻撃できる様になっている。俺達のことには信用していない証拠だ。」

「ち、違う!!！」

クロノは声を上げた。

「何が違う？事実君は今もバリアジャケットを解除していない。これでは無抵抗の人間に武器を向けているのと同じだ！」

「うっ！」

「まだある。さっきの黒衣の少女についてもだ。」

「あ、あれは向こうが最初にー！」

「確かにそうだ。だが攻撃をしたのはあの子ではなく、あの子と一緒にいた狼だ。あの子は単にジュエルシードを回収しようとしただけだ。それに対して君は無警告で攻撃を行った。あの時ファング達が守ったからよかったが守ってなかったら確実に命中していた。例え向こうに攻撃されても最終警告はするべきだ。それとも時空管理局では攻撃をされた場合は問答無用で犯人を攻撃し、捕まえるのが常識なのか？」

「……」

クロノは再び黙り込んだ。

再び黙り込んだクロノに対し、俺は溜め息をついた。

「ふう、これ以上言っても無駄だな。高町、スクライア、君達が時空管理局の手を借りるかは好きにしろ、俺は止めはしない。だが、この様な正義の味方ごっこをしているつもりの組織には俺は協力はしない。」

「！！！！！」

なのはとユーノに協力しないことを告げ、立ち上がった瞬間、いきなり俺の体にバンドが掛けられた。

「えっ！」

「あっ！」

「……………何のまねだ？」

「クロノー！」

俺にバインドを掛けたのはクロノだった。

「……………」

クロノは顔をうつむかせているので顔の表情が把握出来ない。

「クロノ・ハラオウン執務官。今すぐこれを外してもらえるか？」

俺はクロノにバインドを外すように言うとクロノがボソつとなにか呟いた。

「……………ふざ……………けるな。」

「ん？」

「ふざけるな！！！」

クロノは怒鳴った。

「正義の味方ごっこをしているつもりは組織？ふざけるな！！僕は！僕と母さんは本当に正義を信じてこの仕事をしているんだ！！！！何も知らないクセに偉そうなことを言うな！！！！」

どうやらクロノの逆鱗に触れてしまったようだな。  
ま、流石に俺も挑発しすぎたか。

「クロノ！今すぐやめなs」母さんは黙ってて下さい！！！」っあ  
っ。」

クロノのあまりの怒りにリンディは引いてしまう。

「……………で、このまま俺を逮捕するのか？」

「そつだ！理由は公務執行妨害、時空管理局に対する暴言、これで  
十分だ！」

「クロノ執務官、どうしてもこのバインドを外さないのか？」

「当たり前だ！！！」

「……………最終警告だ。このバインドを外してもらおうか？」

「くどい！！！」

完全に頭に血が上ってるな。

何を言っても無駄そつだ。

「そつか。ならば、こっちもそれなりの行動をとるとしよう。」

「その状態で何ができる！？！」

クロノは俺がバインドで両腕が使えないことで何も出来ないと思っ

ているのだろう。

しかし、両腕が使えなくても出来ることはある。

「出来るさ。来い、ガタツクゼクター！！！！」

俺が叫ぶと、青いクワガタムシ「ガタツクゼクター」がジョウント（ゼクター達の特殊移動方法）し現れ、バインドを壊した。

ガタツクゼクター

「仮面ライダーカブト」の世界のライダーの装着者達をライダーに変身させるために必要な自己判断能力を持った昆虫型コア「ゼクター」の一つ。

青色をしたクワガタムシ型昆虫コアであり、装着者を「仮面ライダーガタツク」に変身させることができる。

また、ガタツクゼクターは「戦いの神」とも呼ばれ、その名の通り性格は好戦的で自らが資格者と認めない者には容赦なく攻撃を仕掛け排除する。

「な、何！？」

「青い・・・クワガタムシ？」

「なんなの・・・あれは？」

「そいつはさっきの！！！！」

なのはとユーノとリンディが突然現れたガタツクゼクターに驚く中、クロノだけ違う反応をしていた。

「こいつはガタツクゼクター、覚えておけ。」

そついいながら俺はどこからライダーベルトを取り出し、腰に装着し、右手を上げる。

そこにガタツクゼクターが飛び込んでくる。

「変身！」

『H E N S H I N !』

ガタツクゼクターをライダーベルトのバックル部に装着し、高めかつエコーが若干かかった音声が流れた後、ヒビロノカネと呼ばれる未知の金属で製造された「マスクドアーマー」が全身に展開され、ガタツクの第一形態「仮面ライダーガタツク マスクドフォーム」に変身した。

仮面ライダーガタツク

「仮面ライダーカブト」の世界の仮面ライダー。

カブトの世界の敵「ワーム」から人類を守るために結成された組織「Z E C T」で開発されたマスクドライダーシステムの一つ。

青色のボディに赤色の複眼、クワガタムシをモチーフにしている。

「あつ！」

「また別のやつに！」

「さつきと姿が違う！！」

「一体、今度は何なんだ！？」

クロノとリンディは先程見たフェニックス、スカルのどちらとも違

う姿になったことに驚き、なのはとユーノに関してはフェニックスとスカルに加え、ブレイド、ファイズとも違う姿になったので驚いている。

「今の俺は、仮面ライダーガタツクだ。いくぞ!!」

4人に名を告げた後、クロノに攻撃を開始した。

「ふっ!はっ!たあっ!」

「くっ!」

最初に俺はクロノの顔に向けて右ストレートを出したがクロノはサイドステップで右に避け、そこにすかさず左フックを出す。が今度はしゃがんで避け、しゃがんだところを右足でローキックを出す。が今度はしゃがんだ状態で前に飛び、前転をして回避し、俺の後ろに回った。

「このお!」

「ふんっ!」

クロノはS2Uを呼び出し、S2Uで攻撃するが俺は直ぐに後ろを向き、左腕でS2Uをガードし払い除け、バックステップで距離をとる。

さっきと立ち位置が逆になった。

「やるな。だが!!」

俺はガタツク マスクドフォームの両肩に装備されている2門の大

口径火器「ガタツクバルカン」を発砲しようとした。

「むっ！」

しかし、クロノの後ろにはなのはとユーノとリンディがいた。今撃てば3人を巻き込んでしまう危険性があるためガタツクバルカンの使用をやめた。

「ちっ！戦法を変更する！」

そういいながら俺は左手でガタツクゼクターのゼクターホーンに触れ、ゼクターホーンを上げた。

すると待機音が流れると同時に、ガタツクの身体に電撃が走り、腕、胸、肩、顔と次々とマスクドアーマーが浮かび上がる。

そして、今度は右手でゼクターホーンを掴む。

「キャストオフ！」

ゼクターホーンを左側から右側に倒した

『CAST OFF!』

音声の後、身体を覆っていたマスクドアーマーが弾け飛んだ。

「くっ！」

「危ない！！！」

弾け飛んだマスクドアーマーをクロノとユーノがシールドを展開し防いだ。

マスクドアーマーがパージされたことで、頭部左右に倒れていた『ガタツクホーン』が側頭部に移動、固定される。

『CHANGE STAG BEETLE!』

キヤストオフし、ガタツクホーンが側頭部に固定されたことで、クワガタムシを連想させる姿。

ガタツクの第二形態「仮面ライダーガタツク ライダーフォーム」に姿を変えた。

ライダーフォームは防御とパワー重視の第一形態「マスクドフォーム」と違い、マスクドアーマーをパージし、機動力を重視したフォームだが機動力を重視する分、防御力とパワーが低下してしまう。しかし、その代わりに超高速移動システム「クロツクアップシステム」と必殺技を出すことが可能だ。

「ま、また変わった!」

「コロコロと姿を変えたところで!」

クロノがS2Uを構えた。

「クロツクアップ!」

『CLOCK UP!』

クロノがS2Uを構えた瞬間、ベルトの脇のスイッチを押し、クロツクアップを発動させた。

クロツクアップ

前にも説明した通り、カブトの世界の敵のワーム成虫体とライダー達のライダーフォームが持つ超高速特殊移動方法。

身体を駆け巡るタキオン粒子を操作し、時間流を自在に行動できるようにする。

しかし、クロックアップの長時間の使用は装着者に負担を掛けるので、ゼクターが自動的に止めるか装着者自身が解除する。

電子音声が発声された後、俺はクロノ達の前から姿を消した。

「ふええ?!」

「き、消えた!?!」

なのはとユーノはガタツクが突然姿を消したことに混乱している。

「くそ!何処に消えた」CLOCK OVER!」・・・ぐっ!」が  
「あぁっ!」

クロノが言い終わる前に再び電子音声が発声され、その後突然手に持っていたS2Uが何かに弾かれ、次にクロノは壁に叩きつけられた。

「クロノ!」

リンディがクロノのところに駆け寄る。

「クロノ、大丈夫?!」

「は、はい。なんとか。で、でも・・・一体何が起きたんだ!?!」

クロノは先程まで自分が立っていた場所を見ると、そこには俺が立っていた。

「えっ・・・？ええええ？！」

「い、何時の間に移動を！？」

「い、一体・・・何を・・・したんだ？！」

なのはとユーノは再び混乱し、クロノは俺を睨む。

ちなみにさっきの行動を超スローで解説しよう。

クロックアップ状態

クロノがS2Uを構えた瞬間、俺はクロックアップを発動させた。

クロックアップを発動させたことでこの前のデカレンジャーとの訓練の時と同じ様に周囲が止まった様になった。

その間に俺はクロノに近づき、S2Uを弾き、力を加減し左足でクロノの脇にミドルキックを入れた後、クロックアップを解除した。

『CLOCK OVER!』

そして、再び電子音声が発声され、再び時が動き出した。

解説終了

「・・・止めを刺すか。」

ガタツクの必殺技「ライダーキック」を発動させるためにガタツクゼクターのスイッチ・フルスロットルを押そうした時、ドアが開いた。

「動くな!!」

開いたドアからデバイスを構えた武装局員が数人入ってきた。

「速やかにバリアジャケットを解除しない!!」

「……………」

俺は武装局員に言われた通り、ガタツクゼクターをライダーベルトから外し、変身を解除した。

「よし、そのまま……」

「気をつける!そのクワガタムシは!」

「行け、ガタツクゼクター!!」

変身を解除したことで一瞬気を抜いた武装局員にクロノが警告したが既にガタツクゼクターに攻撃命令を出し、武装局員を攻撃し始めた。

「うわっ!!」

「な、なんだこいつは!?!」

「いてっ!!」

「む、ムシ?!」

「くっ！」

「は、速い！！！」

「いたっ！」

「こ、こいつ！」

「あだっ！」

ガタツクゼクターが武装局員を攻撃している隙に、俺は獅子おどしに近づき、水が張ってあるのを確認した。

「よし、行けるな。」

俺は懐から龍の紋章が刻まれた黒いカードデッキを取り出し、カードデッキを左腕に持ち、水面にかざした。

すると水面に銀色のベルト「Vバックル」が出現し、水面から転送され、俺の腰に装着される。

装着されたことを確認し、右手を左斜め上に伸ばした。

「変身！！！」

左手に持ったカードデッキをVバックルに装着したことで赤と銀の特殊強化スーツが装着され、左腕には赤い龍の頭のような物が装備されている。

俺は鏡の世界「ミラーワールド」の怪物「ミラーモンスター」と戦う戦士、赤色の東洋竜型モンスター「無双龍 ドラグレッダー」と契約した、龍を従えし騎士

「仮面ライダー龍騎」に変身した。

## 仮面ライダー龍騎

鏡の中に存在し、左右反転されている以外は現実世界と同じの鏡の世界「ミラーワールド」に生息する怪物「ミラーモンスター」から現実の世界の人々を守り、自らの望みを叶える為に最後の一人になるまで戦い続ける「ライダーバトル」に参加する十三人の仮面ライダーの一人。

赤と銀の特殊強化スーツ、複眼も赤色をし、騎士と龍をモチーフにしている

平成仮面ライダーシリーズの第三作「仮面ライダー龍騎」の主演ライダー

キャッチコピーは「戦わなければ生き残れない！」

「また今までと違う！」

「い、一体どれだけの姿があるんだ?!」

「あの姿は、一体?」

再び姿を変えた俺をユーノ、クロノ、なのはが見つめる。

「今度の俺は仮面ライダー龍騎だ。」

「仮面ライダー・・・龍騎」

リンディがクロノを支えながら名前を繰り返した。

「もういいぞ、ガタックゼクター。」

ガタックゼクターは俺の命令を受理すると武装局員達への攻撃を止

め、ジョウントを使い、姿を消した。

「さて、俺もこの艦内の別の所に一旦逃げるか。じゃ、あばよとっつあん！」

「誰がとっつあんだ!!」

クロノがツツコミを入れた後、俺は水の中、ミラーワールドに姿を消した。

「えっ！」

「ま、また消えた！」

「どうなってるんだ!？」

なのは達が驚くのも無理はない。

なぜなら龍騎に限らず、龍騎の世界の仮面ライダーは鏡の世界「ミラーワールド」に入ることが出来る特殊な能力を持っている。

そして、「ミラーワールドに入るのには鏡に限らず、ガラスや水等、鏡の代わりに自分自身を映せる物ならミラーワールドに入ることが出来る。」

「と、兎に角探すんだ！」

「……………は、はい!!」「……………」

クロノ指示で武装局員が搜索に向う。  
更にクロノは通信を開いた。

「エイミィ！」

『ほいさ、クロノ君。どうしたの？』

通信の画面に映ったのは時空管理局通信主任兼執務官補佐官でアースラの管制官。

クロノの直属の部下であり学生時代からの友人で二つ年上の女の子「エイミィ・リミエッタ」だった。

「例の仮面ライダーとかいう男が艦内のどこかに逃げようとしている！」

『えっ！それ本当！？』

「ああ、だから直ぐに搜索隊の編成と艦内の索敵を行ってくれ！」

『分かった！見つけたら直ぐに連絡するから！』

「頼んだよ、エイミィ。」

『任せてよ、クロノ君』

エイミィはクロノにウィンクをし、通信を切った。

「僕も搜索に向かいます！」

「あ、あの！」

「君達も僕と一緒に来てくれ。」

「は、はい！」

「はい。」

「母さん……いえ、艦長はブリッジに。」

「いいえ、私も同行します。」

「し、しかし！」

「クロノ執務官、これは命令です。」

「わ、分かりました。」

流石に上司としての立場を利用されたはクロノも文句が言えない。

「では、行きましょう！」

そして、クロノ達も俺の搜索を開始した。

第十三話 アースラ（後書き）

ARX-7アーバレスト「いやー、面白くなってきたな。」

健悟「なんかある意味危ないことしてる気がする。」

アポロン「気にしたら負けです、マスター。」

ARX-7アーバレスト「気楽にいきましょう！」

健悟「全く。」

ARX-7アーバレスト「それにしても随分とクロノ達に対して辛口コメントだったね？」

健悟「俺は単に思ったことを言ったただけだ。それよりなんでクロノのバインドを破壊するのがガタツクゼクターだったんだ？」

ARX-7アーバレスト「え？だって強そうじゃん。」

健悟「曖昧な理由だな、おい。」

アポロン「その割にはあまり活躍しませんでしたね？」

ARX-7アーバレスト「だってあれで戦ったらクロノ危ないだろ？」

アポロン「確かに」

健悟「で、龍騎は？逃げるだけならガタツクの状態でクロックアップ使えばいいじゃん？」

ARX-7アーバレスト「理由は龍騎に変身させたかったし、ミラーワールドにも入れたかったから。」

健悟・アポロン（こいつ（この人）本当に理由が曖昧だな。（ですね。））

ARX-7アーバレスト「じゃあ、次回予告行こうか！」

健悟「はいはい。次回『第十四話 ライダーVSアースラ』です。」

アポロン「今回は主に龍騎のライダーとロボットが活躍します。」

ARX-7アーバレスト「戦わなければ生き残れない！！次回もお楽しみに！」

## 第十四話 ライダーVSアースラ

「よつと。」

アースラ内の何処かの部屋の鏡から、赤と銀の龍を従えし騎士「仮面ライダー龍騎」に変身した俺が、鏡の世界「ミラーワールド」から姿を現した。

ミラーワールドから出た俺は腰に装着されている銀色のベルト「Vバツクル」からカードデッキを引き抜き、変身を解除した。

「くつ。」

変身を解除した俺はその場で膝をつき、肩で息をしている状態だった。

「はあ、はあ、はあ」

「大丈夫ですか、マスター？」

「はあ、はあ、大丈夫。つと言いたいが、はあ、流石に疲れるな。」

流石にガオガイガーになった後に休憩をせずにスカルに変身して戦闘、それにマスクドライダーシステムがここまで身体に負担がかかるとは予想外だった。

やっぱり疲れてる状態マスクドライダーシステムを使うのはまずかったか。

まあ一番の理由はガオガイガーだろうけど。

どちらにしろガオガイガーへのファイナルフュージョンとマスクドライダーシステムの訓練も今後のトレーニングメニューに加えない

とな。

さて、何時までもここに居るわけにはいかないな。

「よっと。」

「マスター、まだ動かないほうがよろしいかと。」

「いや、恐らくもう搜索班を編成して俺を探し回っているだろうし、艦内の索敵も行おうとしているだろう。見つかるのも時間の問題だが、このまま休み続ければ見つかるのが早くなる。だから先手を打つ。」

「分かりました、マスター。」

「いくぞ、アポロン！」

「イエス、マスター！」

カードを取り出し、ドライバーに入れた。

『KAMEN RIDER!』

「変身！」

『PHOENIX!』

本日二度目の仮面ライダーフェニックスに変身した。

「それで、どうするつもりなのですか、マスター？」

「うーん、今はアースラ全体が敵だからな。こちらも数を揃えるが、既に戦術は出来てる。」

そついいながら俺はカードケースからカードを20枚近く取り出した。

「さあ、Partyの始まりだ！」

そつ言つてカードを全てドライバーに挿入した。

クロノSide

現在、僕と母さん、民間人の高町なのはとユーノ・スクライアの四人で仮面ライダー龍騎の搜索を続けているが未だに見つからない。

「くそつ！一体何処にいるんだ！！」

この艦内の何処かにいることは分かっているのに発見出来ず、僕は冷静差を失いかけていた。

「クロノ執務官、もう少し落ち着きなさい。どんな時でも冷静に行動をしないと何事も上手くいかないわよ？」

「艦長……そうですね。ありがとうございます。」

「うっん、いいのよ」

母さんは笑顔でそう言ってくれた。

母さんのおかげで落ち着くことが出来た。

「では、搜索に戻りましょう。」

気持ちが落ち着き、搜索を再開しようとした時、通信が入ってきた。

『クロノ君！搜索班第一班から連絡、仮面ライダーを発見したって  
！！』

「本当か！？場所は何処だ？！直ぐにむk」

『あつ、ちょっと待って！はい……えっ！！』

モニターの向こうでエイミイが驚いた声と顔をしていた。

「どうしたんだ、エイミイ？！」

『そ、それが、今第二班から仮面ライダーを発見したって連絡があ  
つて。』

「なに！？」

僕は混乱している。

何故第一班が今発見した仮面ライダーが別の場所にいるはずの第二  
班の所にもいるんだ？

そんなことを考えている間に更に通信が入った。

『はい……えっ！こつちも？！あつ、えええええ？?!』

「今度は何だ！？」

『今、第三班、四班、五班、六班からも仮面ライダーを発見したって!!』

「エイミイ、間違いないの？」

『はい、間違いありません!』

「一体どうなって」「答えを教えてくださいか?」「っ!!!!」

後ろから声が聞こえ、振り返るとさっきの龍騎とは違い、僕が最初に見た仮面ライダーが立っていた。

あの後、俺はアタックライド「インビジブル」のカードを使い、「フェニックスインビジブル」を発動させ、姿を消した状態で艦内を移動した。

そして俺のターゲットであるクロノを発見し、インビジブルを解除した。

「いつの間に!?!」

突然後ろに現れた俺にユーノは驚いている。

「ちょっとした特殊能力を使ったんだ。」

そう言いながら、さっきの部屋からもってきた水が入ったペットボトルを二本取り出した。

「あれって・・・水？」

「その水がどうした？」

「こっするんだ。」

二本のボトルの蓋を一本ずつ開け、二本とも逆さまにした。そして、俺の足元の左右に水たまりが出来き、ペットボトルを後ろに投げ捨てた。

「何をやる気だ？」

クロノが警戒を強める。

「出てこい、ライア、ベルデ！」

俺がそう言うと足元の水たまりの中からさっきまで俺が変身していた、仮面ライダー龍騎の世界の仮面ライダーが二人現れた。

右側の水溜りから現れたのはディエンドが「シンケンジャーの世界」と「劇場版 仮面ライダーディケイド オールライダー対大ショッカー」の時に召喚した仮面ライダー。

エイの紋章が刻まれた紅色のカードデッキとボディをし、騎士とエイをモチーフにしている。

紅色のエイ型モンスター「エビルダイバー」と契約した「仮面ライダー龍騎」の世界の仮面ライダー

「仮面ライダーライア」

次に左側の水たまりから現れたのはカメレオンの紋章が刻まれた黄色のカードデッキとボディをし、騎士とカメレオンをモチーフにしている。

黄緑色のカメレオン型モンスター「バイオグリーザ」と契約した「  
仮面ライダー龍騎」の世界の仮面ライダー

「仮面ライダーベルデ」

もちろん、このライアとベルデ、他の場所に現れたライダー達は俺  
がフェニックスドライバーを使って召喚したものだ。

「ええええええ!!??」

「み、水たまりの中から出てきた??!!」

「一体どういう原理なの!？」

やっぱり、突然水たまりから出てきたことに驚いているな。

驚くのは分かるがなのは、さっきから同じことしか言っていないな。

「おい!」

クロノが声をかけてきた。

「今のお前は誰だ!?それにそこにいる仮面ライダーはなんなんだ  
!?他の所に現れた仮面ライダーも!」

クロノは多少驚きながらも冷静に質問をしてきた。

「今の俺は・・・フェニックス。仮面ライダーフェニックスだ。」

「仮面ライダー・・・フェニックス。」

「そして、今俺の左にるのが仮面ライダーベルデ、右にるのが

仮面ライダーライアだ。」

「お前達、一体どうやってこの艦に侵入したんだ！」

「・・・」

「・・・」

クロノはライアとベルデに質問をするがライアとベルデは無言のまま。

「答えを知りたければ教えてやる。・・・俺達に勝てたらな。アポロン、全員に攻撃指令を送れ。」

「イエス、マスター。」

「インテリジエントデバイス!？」

「あなた、魔導師なの!？」

アポロンの存在を知らなかったクロノとリンディが驚いている。

「それに近い存在、つとっておこうか。」

「攻撃命令、承認確認。各員、武装の使用を許可。戦闘開始。」

アポロンがライダー達に攻撃指令を送ると左右にいたライアとベルデがVバックルに装着されている個々のカードデッキから特殊カード「アドベントカード」を引き抜き、ライアは左腕に装備されているエイを模した盾型の召喚機「飛召盾エビルバイザー」の中央部を

スライドさせ、中央部を開き、その中にアドベントカードをベントインし、再度スライドさせ、中央部を閉じ、ベルデは左太股に装備されているカメレオンの頭部を模した召喚機「バイオバイザー」からカメレオンの舌のように伸びるカードキャッチャーにアドベントカードをセットしたことでそれぞれのカードの能力が発動した。

『SWING VENT』

『HOLD VENT』

バイザーから音声が発声され、ライアはスイングベントのカードを使い、エビルダイバーの尾部を模した鞭型の武器「エビルウィップ」を装備。

ベルデはホールドベントのカードを使い、バイオグリーザの目を模したヨーヨー型の武器「バイオワイド」を装備した。

「いくぞ？」

「・・・」

「・・・」

ライアとベルデは無言のまま頷き、クロノ達に向っていった。

俺とライア、ベルデがクロノ達に攻撃を仕掛けた時と同じ頃、別の場所にいるライダー達も戦闘を開始した。

搜索班第一班

『SWORD VENT』

『SWORD VENT』

二つのバイザーから同じ音声を出し、十人近くいる魔導師達に剣と槍を向ける二人の仮面ライダーがいた。

一人は先程まで俺自信が変身していた仮面ライダー「仮面ライダー龍騎」

その隣にるのが蝙蝠コウモリの紋章が刻まれた紺色のカードデッキとボディをしている。

紺色の蝙蝠型モンスター「闇の翼　ダークウイング」と契約し、まさにその名に相応しい騎士ナイトのような姿をした「仮面ライダー龍騎」の世界の仮面ライダー

「仮面ライダーナイト」

龍騎は左腕に装備されているガントレットタイプの召喚機「龍召機 甲ドラグバイザー」の上部カバーを開き、ソードベントのカードをベントインさせ、ドラグレッダーの尾を模した剣「ドラグセイバー」を装備し、ナイトは左腰に下げていた剣型の召喚機「翼召剣ダークバイザー」の翼を開き、龍騎と同じソードベントのカードをベントインし、ダークウイングの尾部を変化させた槍型の武器「ウイングランサー」を装備し、魔導師達の向って駆け出した。

「こ、攻撃用意っ!」

魔導師達は龍騎とナイトに魔力弾を撃とうとした。

龍騎とナイトは一旦止まり、龍騎はカードデッキからカードを引き

抜き、ドラグバイザーにベントインする。

『GUARD VENT』

「撃てーっ！！」

魔導師達は魔力弾を一齐に発射した。

放たれた魔力弾は龍騎とナイトに着弾し、辺りに煙が舞い上がった。

「やったか？」

煙が舞い上がっているため、龍騎とナイトを倒したのか分からない。

『TRICK VENT』

その時、煙の向こうから再び電子音声が聞こえていた。

そして、左手にドラグレッダーの腹部を模した盾「ドラグシールド」を装備した龍騎とウイングランサーを持ったナイトが三人、煙の中から現れた。

「なっ！いい、何時の間に盾を！？」

「それに数が増えてる！！」

龍騎が魔力弾が着弾する直前に入れたのはガードベント。

ドラグシールドで己を守り、ナイトは龍騎の後ろに回り、攻撃を免れた。

そして、魔力弾が着弾し、煙が舞い上がり、敵が視界を遮られたところで、ナイトは「シャドレイリユージョン」と呼ばれる自分自身の分身を作り出すトリックベントを使い、自分の分身を二体増やし

た。

「っしゃあああ！」

「っはっ！」「っはっ！」

龍騎は気合いを入れるように叫び、右手にドラグセイバー、左手にドラグシールドを持ちながら、ナイト三体と再び魔導師達に向かっていた。

## 搜索班第二班

こちらでは今、ライダーと魔導師達との激しい銃撃戦が行われている。

そのライダーは右手に銃を持ち、牛の紋章が刻まれた緑色のカードデッキとボディ、ライダーというよりは、ロボットに近い姿をしている。

緑色のバッファロー型モンスター「鋼の巨人 マグナギガ」と契約した「仮面ライダー龍騎」の世界の仮面ライダー

「仮面ライダーゾルダ」

「ふんっ！」

バンッ！バンッ！

ゾルダが魔導師達に銃型召喚機「機召銃マグナバイザー」を発砲した。

「うわっ！」

「撃てっ！撃てーっ！」

バシュッ！バシュッ！バシュッ！

魔導師達がゾルダに魔力弾を放った。

「はっ！」

しかし、ゾルダと魔導師達の間には二人目のライダーが入る。

二人目のライダーは、ディエンドが「シンケンジャー」の世界でライアと共に召喚した仮面ライダー！

蟹の紋章が刻まれた黒色のカードデッキとメタリックオレンジのボディをしている。

メタリックオレンジ色の蟹型モンスター「ボルキャンサー」と契約した「仮面ライダー龍騎」の世界の仮面ライダー

「仮面ライダーシザース」

シザースは左腕に装備されているハサミ型召喚機「甲冑シザースバイザー」の接合部を開き、カードデッキからカードを引き抜き、ベントインした。

『GUARD VENT』

シザースはガードベントのカードを使い、ボルキャンサーの甲冑を模した盾「シエルディフェンス」で魔力弾からゾルダを守った。

「ふんっ！」

バンッ！バンッ！

ゾルダは再び魔導師達にマグナバイザーを発砲した。

「くっ！」

魔導師の右肩を銃弾が掠めた。

「大丈夫か?!」「はあああっ!!」「くっ!!」

更にもう一人のライダーが斧状の武器で近接戦を仕掛けてくる。

三人目は白虎やまの紋章が刻まれた青色のカードデッキと青と銀のボディをしている。

白虎型モンスター「デストワイルダー」と契約した「仮面ライダー龍騎」の世界の仮面ライダー

「仮面ライダータイガ」

「くそっ！」

ガキンツ!

魔導師はタイガの斧型召喚機「白召斧デストバイザー」をデバイスで受け止めた。

「はっ！」

「くっ！」

タイガの押しに負け、魔導師は一旦後ろに下がった。

「なんて強さだ!!」

「怯むな!撃ち続ける!!」

バシユ、バシユ、バシユ、バシユ、

魔導師達は魔力弾を更に撃ち続けた。

「くっ!!」

「むっ!!」

「がああっ!!」

放たれた魔力弾はゾルダ、シザース、タイガに命中した。得に前に出たタイガが一番当たり、地面を転がり、シザースはシエルディフェンスで防ぎ、後方で支援していたゾルダは少ししか当たっていない。

「よしっ!このまま一気にいくぞ!!」

魔導師達が更に魔力弾で攻撃をしようとした。

しかし、そこでゾルダが魔導師達の足元に銃を向け、発砲した。

バンッ!バンッ!バンッ!

「くっ!!」

魔導師達が怯んだ隙につき、マグナバイザーの後部のスライドを引き、カードデッキからカードを引き抜き、マグナバイザーのトリガ

―前部にあるマガジンスロット部にベントインした。

『SHOOT VENT』

バイザーから音声が発声され、シュートベントのカードを使い、ゾルダの背中にマグナギガの両足が変化した二門のキャノン砲「マグナキャノン」が装備された。

「何っ！」

「あんなのありが!？」

「ふんっ！」

魔導師達が驚いている中、ゾルダは照準を合わせ、マグナキャノンを魔導師達に向けて発射した。

「ぐああああっ！」

「うわああああ!！」

マグナキャノンが命中した。

ちなみにライダー達は非殺傷設定で召喚しているので死にはしない。魔導師達がマグナキャノンで吹っ飛ばされている間にタイガは立ち上がり、ゾルダに続くようにシザースはシザースバイザーの接合部分を開き、タイガはデストバイザーの刃の付け根の虎の頭をスライドさせ、二体はカードデッキからカードを引き抜き、シザースバイザー、デストバイザーにベントインした。

『STRIKE VENT』

『STRIKE VENT』

シザースとタイガはストライクベントのカードを使い、シザースはボルキャンサーの缺を模した武器「シザースピンチ」を装備し、タイガはデストワイルダーの両腕を模した武器「デストクロー」を装備した。

「な、なんだあれ!？」

「ふっ!」

「はっ!」

シザースとタイガはゾルダに後方から援護射撃をしてもらいながら魔導師達に向っていった。

搜索班第三班

「ふっ。今日の祭りの場所はここかあ。」

そこには、まるでこの戦いを楽しんでいるようなライダーがいた。

そのライダーは、ディエンドが「劇場版 超・仮面ライダー電王&ディケイド NEOジェネレーションズ 鬼ヶ島の戦艦」で召喚した仮面ライダー。

コブラの紋章が刻まれた紫色のカードデッキとボディをしている。紫色のコブラ型モンスター「ベノスネーカー」と契約した「仮面ライダー龍騎」の世界の仮面ライダー

「仮面ライダー王蛇」

王蛇はコブラを模した小型の杖型召喚機「牙召杖ベノバイザー」にカードをベントインする。

『SWORD VENT』

王蛇はソードベントのカードでベノスネーカーの尾部を模した武器「ベノサーベル」を装備する。

「はあああッ！」

ベノサーベル装備した王蛇は、掛け声とともに駆け出し、相手に斬り掛かった。

ガキンッ！

ガキンッ！

ザシュッ！

「があああッ！」

魔導師の一人がベノサーベルで斬られる。

「はあああッッッ！！！」

ザシュッ、

「ぐあッ！！！」

また一人が斬られたところで、西洋甲冑のような姿をした別のライダーがカードを挿れた。

『STRIKE VENT』

「ふんっ！はあああつー！」

ガキンツ！ガキンツ！グサツ！

「あああああつー！」

右腕に装備した武器で相手を刺し、相手は悲鳴を上げた。

こちらもディエンドが「劇場版 仮面ライダーディケイド オールライダー対大ショッカー」の時にライアと共に召喚した仮面ライダー。

サイの紋章が刻まれた銀色のカードデッキと西洋甲冑のようなボディをしている。

二足歩行のサイ型モンスター「メタルゲラス」と契約した「仮面ライダー龍騎」の世界の仮面ライダー

「仮面ライダーガイ」

ガイはストライクベントのカードをベントインし、メタルゲラスの頭部を模した武器「メタルホーン」を装備し、戦っている。

「はあああつー！」

ガイはメタルホーンで魔導師に攻撃した。

ザシュツ！

「ぐああああつー！」

激しくぶつかり合う音をたてながら、斬られたり、刺されたりする音と悲鳴が聞こえる等、王蛇とガイが十人近くいる魔導師達と激しい近接戦を繰り返していた。

「くそっ！各自距離をとれ！近づかなければ問題ない！」

バシユ、バシユ、バシユ、

班長の的確な指示に魔導師達は距離をとり、魔力弾を発射した。

「むっ！がああああ！！！」

「ぐっ！」

魔力弾を食らった王蛇とガイは後ろに飛ばされ、地面を転がる。

「くっ！」

ガイは再び立ち上がり、カードデッキからカードを引き抜き、左肩前部に取り付けられている召喚機「突召機鎧メタルバイザー」にベントインする。

『ADVENT』

「グオオオオオオッ！！！」

ガイが契約モンスターを召喚するアドベントを発動させ、ガイの契約モンスター「メタルグラス」が召喚された。

「な、なんだこいつは!？」

「に、二足歩行のサイ?!」

「グオオオオオツ!」

「ぐああああ!」

魔導師達がメタルガラスの存在に驚いている隙にメタルガラスは魔導師達に突進をし、魔導師達を吹っ飛ばした。

「ふっ!」

「はあっ!」

メタルガラスに混乱している隙に王蛇とガイは魔導師に近づき、近接戦闘を再開した。

捜索班第四班

互いに背中に向けた状態で二体の仮面ライダーが魔導師達に囲まれていた。

「大人しく投降しろ!」

「.....」

「.....」

魔導師一人が二体のライダーに投降を呼びかけるが二体は無言だった。

「おい！聞いてい」

相手が言い終わる前に一体のライダーが動いた。

そのライダーは、ディエンドが「仮面ライダーBLACK」の世界で召喚した仮面ライダー。

白鳥の紋章が刻まれた白色のカードデッキとボディをしている。

白鳥型モンスター「閃光の翼 ブランウイング」と契約した「仮面ライダー龍騎」の世界の仮面ライダーであり、龍騎の世界の仮面ライダーで唯一の女性であり、初の女性型仮面ライダー

「仮面ライダーファム」

ファムはカードデッキからカードを引き抜くと、ナイトのダークバイザーに似たサーベル型の召喚機「羽召剣 ブランバイザー」の翼を開き、柄の部分にカードをベントインした。

『GUARD VENT』

ファムはブランウイングの背中を模した盾「ウイングシールド」を装備した。

そして装備されると同時にウイングシールドから大量の羽毛が撒き散らされた。

ちなみにこの羽毛は相手を攪乱するために撒き散らされている。

「うわっ！なんだ!？」

「う、羽毛？」

突然羽毛が撒き散らされたことによって魔導師達は混乱している。その際にもう一体のライダーも動きだした。

不死鳥の紋章が刻まれた茶色のカードデッキと金色のVバックル、金色と茶色のボディをしている。

赤と青のオッドアイを持つフェニックス型モンスター「ゴルドフェニックス」と契約した「仮面ライダー龍騎」の世界の仮面ライダー「仮面ライダーオーディン」

オーディンは錫杖状の召喚機「鳳凰召錫ゴルドバイザー」を出現させ、カードデッキからカードを引き抜き、ゴルドバイザーの先端部の鳥状の飾りの下の部分をスライドさせ、ベントインした。

『SWORD VENT』

オーディンはゴルドフェニックスの両翼を模した剣「ゴルドセイバー」を装備し、魔導師に切り掛かった。

「ふんっ！」

ザシュツ

ザシュツ

「うわあああ！」

「ぐあああ！」

オーディンの当然攻撃したことで魔導師達は更に混乱した。

「き、貴様！！『SWORD VENT』っ！！」

ファミモソードベントのカードをベントインし、ブランウイングの

翼の一部を模した薙刀型の武器「ウイングスラッシャー」を装備し、オーディンと同じ様に魔導師に斬りかかった。

「はっ！」

ザシユ、ザシユ、ザシユ

「があああ！」

「ぐっ！」

「うわあああ！」

「くそっ！」

魔導師の一人がファムに魔力弾を撃とうとデバイスを構えた。

「ふんっ！」

ガキンッ！

しかし、そこにオーディンがゴールドセイバーでデバイスを弾いた。

「うわっ！」

オーディンとファムは互いに死角をカバーしあう戦い方をしている。オーディンが後ろから狙われればファムがウイングシールドで防ぎ、オーディンもファムが狙われれば、相手のデバイスを弾き飛ばした。オーディンとファムは順調に魔導師達を倒していった。

搜索班第五班

「はっ！」

「がっ！」

一人の魔導師が一体の仮面ライダーの左足からの膝蹴りを腹に喰らっている。

膝蹴りを喰らわせたライダーはレイヨウの紋章が刻まれた茶色のカードデッキとボディをしている。

紫色のレイヨウ型モンスターの一種「ギガゼール」と契約した「仮面ライダー龍騎」の世界の仮面ライダー

「仮面ライダーインペラー」

「このっ！」

バシユツ、バシユツ

別の魔導師がデバイスを構え、魔力弾を発射した。

「むっ！はっ！」

しかし、インペラーは龍騎の世界の全ライダーの中で最も優れたジャンプ力を持ったライダーであり、そのジャンプ力を活かし、魔力弾を回避し、更に魔導師を飛び越え、後ろに回りこんだ。

「何っ！」

魔導師が慌てて振り返った。

「ふんっ！」

「ガハッ！」

インペラーは振り返った魔導師の腹に前蹴りを入れた。  
前蹴りを食らった魔導師は後方に飛ばされた。

「う、ゲホッ！ゲホッ！」

「大丈夫か！」

仲間の魔導師が駆け寄る。

「おい！しっかりしろ！」

「す、すまん。」

前蹴りを食らった魔導師は立ち上がり、再びインペラーに攻撃しようとした。

『ADVENT』

「！！」

電子音声の後に突如、二匹のサメ型のモンスターが現れた。

「な、なんだこいつら！！」

「サ、サメ？！」

「おいつ！アイツだ！」

更に別の魔導師が、二体のサメ型モンスターの後ろに立っていたもう一人の仮面ライダーを指差した。

鮫の紋章が刻まれた水色のカードデッキとボディをしている

サメ型モンスター「アビスラッシャー」とシユモクザメ型モンスター「アビスハンマー」の二体のモンスターと契約したディケイド版の龍騎の世界の仮面ライダー

「仮面ライダーアビス」

アビスラッシャー、アビスハンマーの二体は魔導師達に向かって行った。

「ゲワアアッ！」

「グルルルッ！」

「うわっ！」

「このっ！」

アビスラッシャーとアビスハンマーが魔導師達を攻撃する中、アビスはカードデッキからカードを引き抜き、左腕に装備されたアビスラッシャーの頭部を模したコバンザメ型召喚機「アビスバイザー」の口の部分にカードをベントインした。

『STRIKE VENT』

アビスの腕にアビスラッシャーの頭状の手甲「アビスクロー」が装備され、アビスは魔導師達に鮫の姿に圧縮された高圧水流「アビス

スマツシュ」を放った。

「何！うわああっ！」

「がああああっ！」

魔導師達は後ろに飛ばされた。

「くっ！まだまだ！『SPIN VENT』っ何！？」

アビスに気を取られている隙にインペラーがギガゼールの頭部を模した大型ドリル型武器「ガゼルスタップ」を装備し、向ってくる。

「はあああっ！！」

「くっ！」

ガキンツ！

ガゼルスタップをデバイスで受け止めた。

「このっ！」

魔導師はインペラーの腹を前蹴りした。

「ぐっ！」

「くらえっ！」

バシュツ、バシュツ

前蹴りで蹴られたことで、インペラーが後ろに下がり、デバイスを向け、魔力弾を至近距離で発射した。

「がああつ！」

至近距離からまともに魔力弾を食らったインペラーは後ろに飛ばされ地面を転がった。

しかし、インペラーは直ぐに立ち上がり、カードデッキからカードを引き抜き、右足を上げ、右足の脛にあるアンクレットタイプの召喚機「怜召膝甲ガゼルバイザー」にベントインした。

『ADVENT』

「ギイイツ!!」

「ガアアアツツ!!」

インペラーがアドベントを発動させたことでガゼルタイプのモンスターが数体現れた。

「くそつ！またかよ!!」

「なんなんだよ、こいつらは!!」

「ふっ！」

「ふんっ！」

「グワアアツ！」

「グルルルッ！」

「ギイイツー！！」

「ガアアアアツッ！！」

インペラーとアビス、アビスラッシュャー、アビスハンマー、ガゼルタイプのモンスター数体が魔導師達に向かって行った。

#### 搜索班第六班

そこには同じ姿をしたライダーがいた。

これまでの龍騎達と違うカードデッキとVバツクルをした黒いボディとコオロギをモチーフにしたライダー。

黒色のコウロギ型モンスター「サイコログ」と契約した龍騎達十三人の仮面ライダーに対抗するために作られたカードデッキを使って変身する擬似ライダー。

「オルタナティブ」

そしてオルタナティブと同じ姿で唯一の違いは腕や胸の側面にプロトタイプの証であるラインが入っている。

オルタナティブのプロトタイプ「オルタナティブ・ゼロ」

オルタナティブとオルタナティブ・ゼロはカードデッキからカードを引き抜き、右腕に装備されている型召喚機「スラッシュバイザー」にカードをスラッシュし、スラッシュしたカードは青い炎を出し消滅した。

『SWORD VENT』

『SWORD VENT』

スラツシュバイザーから発声された音声は、これまでの男性の音声だった龍騎達のバイザーとは異なり、女性の音声が発声られた。

オルタナティブとオルタナティブ・ゼロにサイコロゲの両足の一部が変化した武器「スラツシュダガー」を装備し、魔導師達に切り掛かった。

「ふんっ！」

「このっ！」

ガキンッ！

魔導師の一人はオルタナティブのスラツシュダガーをデバイスで受け止めた。

「はあああっ！」

ザシュッ！

「がああっ！」

しかし、後ろからオルタナティブ・ゼロのスラツシュダガーで斬られた。

「このっ！」

別の魔導師がオルタナティブ・ゼロを後ろからデバイスで殴ろうとした。

ガキンツ！

しかし、それをオルタナティブがスラツシユダガーで防ぎ、オルタナティブ・ゼロが相手を斬った。

「ぐあっ！」

斬られた魔導師はその場で倒れた。

オルタナティブとオルタナティブ・ゼロは次の相手を攻撃しようとした。

「撃てーっ！！！」

バシユツ、バシユツ、バシユツ、バシユツ

オルタナティブとオルタナティブ・ゼロが一人に集中している隙に魔導師達は魔力弾を発射した。

「！！っぐああっ！」

「があっ！！！」

魔力弾を食らったオルタナティブとオルタナティブ・ゼロは地面を転がる。

「くっ！」

オルタナティブは立ち上がり、カードデッキからカードを引き抜き、スラツシユバイザーにスラツシユする。

『ACCEL VENT』

「はっ！」

声を発した後、オルタナティブの姿が消えた。  
そして、

「消えっ……っぐああっ！」

「どうしっ……ぐっ！」

「がっ！」

「うわぁ！」

「がああっ！」

オルタナティブが消えたと同時に魔導師達が次々と悲鳴を上げ、しやがみ込んだ。  
そして先程まで前にいたはずのオルタナティブが魔導師達の後ろに立っていた。

「な、何故だ？」

「一体……何が起きたんだ？」

オルタナティブが発動させたアクセルベントは瞬間的に超加速させる。  
超加速を使い、魔導師達をスラッシュダガーで攻撃した。

「ふんっ！」

「はっ！」

オルタナティブとオルタナティブ・ゼロはスラッシュダガーを構え、前後から魔導師達に向かって行った。

クロノチーム

「ステインガー・スナイプ！」

「おっと！」

クロノのステインガー・スナイプを俺とライア、ベルデは回避し、ライアとベルデは接近、

俺はフェニックスドライバーを向け、発砲しようとした。

「シューット!!!」

その声の後に前からピンク色の魔力弾が数発飛んで来た。前にいたライアとベルデは、魔力弾を回避しようとした。

「チェーンバインド！」

「「!!!」」

突如、翠色のチェーンが放たれ、ライアとベルデに巻き付き、動きを封じられた。

「ぐあああっ！」

「ぐあああっ！」

魔力弾を食らったライアとベルデは後ろに飛ばされ、地面を転がった。

「ライア！ベルデ！っち！」

俺は軽い舌打ちをした後、すぐにフェニックスドライバーにカードを挿入した。

『ATTACK RIDE！ BLAST！』

「はっ！」

フェニックスドライバーの銃口からフェニックスブラストが放たれた。

「ラウンドシールド！」

フェニックスブラストは全弾、翠色のシールドに防がれた。

「ちっ！どうしても邪魔をするつもりか？高町、スクライア。」

俺はライアとベルデをバインドで縛り、フェニックスブラストを防いだユーノと縛られていたライアとベルデを攻撃したのを見た。

「フェニックスさん！こんなことは止めて下さい！」

「私達は、フェニックスさんと戦う気なんてありません！だから、もう一度お話をさせて下さい！！！」

OH！出たよ。

なのはの O H A N A S H I が出たよ！

「悪いが、話すことは無い。」

バンツ！バンツ！バンツ！バンツ！

俺は再びフェニックスドライバーを構え、クロノ達に発砲した。

「あっ！」

「なのはっ！」

ユーノがなのはの前に立ち、ラウンドシールドを展開し、フェニックスドライバーの銃弾を弾いた。

「っち！」

やはり、ユーノの防御力は厄介だな。

さっきからこっちの攻撃を防がれたばかりだ。

「ありがとう、ユーノ君！！！」

「う、うん／＼／／」

おーおー、照れちゃって。

初々しいねえ。

『クロノ君！そっちの状況はどう！？』

クロノのところにエイミィから通信が入った。

「こっちはまだ戦闘中だ。戦局は五分五分と言ったところかな。他の班の状況は？」

へえー、言ってくれるな、クロ助。

『現在、どの班も仮面ライダー達に……苦戦……して……する。』

「エイミィ、どうした！？」

突如、通信モニターに乱れが生じた。

『クロ……君……応……して！』

「エイミィ、どうしたんだ！応答しろ、エイミィ！！」

やがて通信モニターにはエイミィの姿は映らず、砂嵐しか映らなかった。

「マスター。」

「ああ、どうやら上手くいったみたいだな。フェイズ2ツイに移行する。アポロン、各員に連絡しろ。」

「イエス、マスター。」

予定通りだな。

さて、あいつも動かすか。

「ベルデ！」

俺がベルデに声をかけるとベルデは頷き、カードを引き抜き、バイオバイザーにセットした。

『CLEAR VENT』

ベルデは体を透明にさせるクリアーベントのカードを使い、姿を消した。

「あっ！」

「消えた！」

「何処に行った!?!」

クロノ達はベルデが消えたことで警戒を強めた。

「あいつは用事があるから抜けさせた。」

「用事だと?」

「そつ。でも、これじゃあ二対三だからなあ。つと言っことで数回  
わせをさせてもらっぞっ。」

俺はカードケースから一枚のライダーカードを取り出し、ドライブに挿入した。

『KAMEN RIDER!』

「来い！」

『RYUGA!』

トリガーを引き、現れたのは黒い仮面ライダーだった。

「あれは・・・龍騎？」

「でも、さっきと色が違う。」

「なんなんだ、あの龍騎は。」

「こいつは、さっき俺が変身していた仮面ライダー龍騎じゃない。」

その仮面ライダーは赤き龍を従えし騎士「龍騎」と同じ姿をしている。

色は龍騎と違い、黒色のボディとVバックルに龍騎よりも禍々しい龍の紋章が刻まれたメタリックグレーのカードデッキ、そして目の形はつり上がっている。

龍騎の契約モンスター「ドラグレッダー」と同型の黒い竜型モンスターだが、その能力は全てを上回っている漆黒の龍「暗黒龍 ドラッグブラッガー」と契約した「仮面ライダー龍騎」の世界の仮面ライダーのもう一人の龍騎、漆黒の龍を従えし騎士

「仮面ライダーリュウガ」

「こいつの名は、仮面ライダーリュウガだ。」

「仮面ライダー……」

「リュウガ……」

クロノとリンディがリュウガを見ながら名前を繰り返した。

「さて、そろそろ戦いを再開するか。リュウガ。」

俺がそういうとリュウガはカードデッキからカードを引き抜き、龍騎と同じ、左腕に装備されているガントレットタイプの召喚機「暗黒龍召機甲ブラッグドラッグバイザー」にベントインした。

『SWORD VENT』

バイザーからぐもったような音声を発声された後、ドラッグブラッグの尾を模した剣「ドラッグセイバー」が装備された。

「いくぞ！」

「ふんっ！」

「はっ！」

俺とリュウガとライアはクロノ、なのは、ユーノに向かっていった。

「っいっ！」

「絶対に、お話をさせてもらいますっ！」

「いくよ！」

クロノ達も向ってくる俺達に攻撃を再開した。

しかしこの時、クロノとなのは、ユーノ、リンディは気付いていなかった。

先程、戦線を離脱した一体のライダーがこの中の一人に姿を変えたことを。

アースラ通信室

エイミイSide

「クロノ君！？応答して！クロノ君！！」

仮面ライダー達と戦闘中だったクロノ君と突然通信が途絶えてしまった。

私はすぐに別の班に応援を要請しようとした。

「繋がらない！な、なんで！？」

全ての回線を試したけど、全く繋がらなかった。

「さっきまで普通に繋がってたのに……まさかジャミング？！」

そう思った私はすぐに調べ、結果はビンゴだった。

「やっぱり！何処からかジャミングされてる！！！」

私はジャミングの発信源を調べた。  
でも、その場所はとも信じがたい場所だった。

「発信源は……どこ？」

そう、ジャミングの発信源は、今私がいるこの通信室からだったから。

「どついうこと？ここの何処からジャミングをs（カチャ）「動くな。「っ！！」」

この通信室には私以外に、誰もいないはずなのに横から声が聞こえた。

そして、私は今自分の頭に銃を突きつけられていることが直ぐに理解出来た。

「両手をゆっくり上げて、頭の上で組んで、ゆっくり立って、席から離れて、正面をこっちに向けなさい。言っとくけど変な行動をしたら、その瞬間あなたの頭に風穴が開くわよ？」

相手に言われた通り、両手を上げ、頭の上で組んで、ゆっくり立ち上がった。

その間に私はレーダーやセンサーに目を通したが全く反応がなかった。

でも、それ以前に、何故この通信室に来るまでに今まで何も反応しなかったのか。

今はジャミングが発生しているからセンサーが使えないのはまだ理解出来る。

でも、ジャミングが発生する前から既に反応してなかった。

何故こつも簡単に通信室に侵入されたのか、理解出来ないでいる。

そして、席から離れ、後ろに振り返った。  
でも、相手の姿は見えない。

「ウルズ2よりウルズ1へ、通信室を占拠及び通信管制官一名を確保。こちらのECSとX-207のミラーージュコロイドの解除を申請、許可を。」

見えない相手は誰かと通信をしている。

そして、ECS、X-207、ミラーージュコロイドと聞いたことがない単語が聞こえてくる。

「ウルズ2、了解。ブリッツ、ミラーージュコロイドを解除してもいいってさ。」

「分かりました。」

見えない相手はどうやら女性と若い男性の二人いるらしい。

「マスターモード5、アクティブセンサーで警戒を続行、ECS不可視モード解除。」

「ミラーージュコロイド解除、続いてフェイズシフト展開。」

今まで姿が見えなかった敵が姿を現した。

「ロ、ロボット……ト？」

目の前に現れた敵はクロノ君が戦ってたロボットと同じようなバリアジャケットを着た人が二人いた。

一人は全身がグレー色で頭部にはアンテナがあり、手にはアサルト

ライフルが握られて、銃口は私に向けられている。

恐らく、さつき私の頭に銃を突き付けたのは、この人だろう。

もう一人は黒と赤色の身体、右腕に身体と同じ色の盾を持っていて、盾の内側には槍が三本装備されている。

左腕には先端が尖った黄色い物体。

そして頭部には黄色いV字状のアンテナが付いている。

「ああ、最初に言っておくけど抵抗しない限り、危害は加えないから安心なさい。」

グレーのバリアジャケットを着た人が私に話しかけてきた。

「貴方達は何者なんですか？」

私は二人に質問をした。

「んー、まあ、それぐらいなら答えてもいいか。私達は今貴女の仲間と戦っている仮面ライダー達の仲間よ。」

「では、貴方達の目的はなんなんですか？」

私は二人に目的を聞いた。

「僕達の任務はあくまで、この通信室の占拠だけです。ウルズ2が言った通り、危害を加えるつもりはありません。」

黒と赤のバリアジャケットを着た人が私の質問に答えてくれた。

「こちらウルズ2、聞こえてるわ。」

ウルズ2と呼ばれる人の下に通信が入ったようだ。

「・・・ウルズ2了解、フェイズ3スリーに移行する。ブリッツ、ウルズ1から発令所を占拠したと報告が入ったわ。これより、これよりフェイズ3に移行するわよ。」

「了解です。」

「えっ!？」

私は発令所が占拠されことが信じられなかった。

「ねえ、あんた。」

そう思っていると私はウルズ2に呼ばれた。

「は、はい!」

「悪いけど、ちょっと手伝ってもらおうよ?」

そういいながら、ウルズ2は再びアサルトライフルを私の頭に突きつけた。

「わ、わかりました。」

私は一先ず言う通りにした。

そして、私は発令所の皆が無事やクロノ君達が無事であることを祈った。

アースラ発令所

現在発令所では六機のASと一機のMSによつて占拠されていた。六機のASの内、四機は通信室を占拠しているウルズ2の頭部部分を除けば、同じカラーリングとボディをしている。

前にすずかとアリスを護衛させたAS、M9ガンズバック

「全く、なんで野郎の相手をしなきゃなんないんだよ。どうせなら俺も通信室で女の子の相手がよかつたぜ。」

M9の内の一機「M9ガンズバック（クルツ・ウェーバー機）」  
（以降ウルズ6）が文句を言っている。

「まあまあ、がっかりしないで。私がいるからさ。」

文句を言っているウルズ6を励ますように声をかけたのは、通信室を占拠している「GAT-X207

ブリッツガンダム」と同じ姿をしているが機体の色は黒ではなく、赤色のブリッツだった。

その赤いブリッツは「ガンダムSEED DESTINY」の世界、コスミック・イラ C・E73年の謎の組織「ライブラリアン」がブリッツガンダムを独自で改修・再設計した機体。

ブリッツガンダムの他にも中立国「オーブ」のMS「ゴルドフレーム天ミナ」のデータも使われており、本来のブリッツガンダムの装備に背中にゴルドフレーム天ミナのマガノイクタチ、マガノシロホコと呼ばれる武器がマガノイクタチストライカーと呼ばれるストライカーパックとして装備された、ラテン語で「霧」を意味する「機動戦士ガンダムSEED VS ASTRAY」に登場したライブラリアン製MS

「LN-GAT-X207 ネブラブリッツガンダム」

「お前は興味ない。」

「どづいという意味よそれ！」

「それ位にしておけ、二人とも。」

口論をしているウルズ6とネブラブリッツに白いASが注意をした。

「なんだよ、別にいいだろう？」

「そうよ！今大事な話してるんだから邪魔しないでよ、ウルズ7！」

「はあ、やれやれ。」

怒鳴られたウルズ7と呼ばれる白いASは二体の行動に呆れ、溜め息をついた。

この白いASはM9の試作機をベースに基本的なシステム等はM9と変わらないが「ラムダ・ドライバ」と呼ばれる虚弦斥力場発生システムと言われる、使用者の「意思」を「物理的な力」に変えるオーバーテクノロジーを搭載したAS。

しかし、ラムダ・ドライバの搭載によつて稼働時間はM9よりも若干短い。

「フルメタル・パニック！」及び「フルメタルパニック！TSR」に登場した陸戦兵器。

傭兵部隊「ミスリル」の西太平洋戦隊「トゥアハー・デ・ダナン」陸戦コマンドSRT（特別対応班）所属、主人公、相良宗助軍曹の搭乗するミスリル唯一のラムダ・ドライバ搭載第三世代型AS

「ARX-7アーバレスト」

「貴様らしい加減にしないか！今は任務中だぞ！」

「はい」

「へいへい。」

「全く。」

ウルズ6とネブラブリッツを叱った黒いASは、このチームのチームリーダーで、すずかの家でアルフと戦ったAS、ファルケだった。ちなみにファルケ達がどのようにして発令所を占拠したのかを説明しよう。

数分程前、アースラの発令所では通信が繋がらなくなり、スタッフ達が混乱していた。

「駄目だ！何度やっても通信室と連絡がとれない！おい、そっちはどうだ！？」

「こっちも駄目だ！本局にすら通じない！一体どうなってるんだ！？」

「兎に角、早く艦長達と連絡を！「ウィーン」っ！！」

発令所の扉が開いたため、スタッフ達は直ぐに扉の方を見た。

「艦長！」

発令所に入ってきた人物はリンディ・ハラウンだった。

「艦長、ご無事だったんですね！」

「クロノ執務官はどうなさったのですか？」

スタッフ達がリンディに質問をする。

それに対し、リンディは返事を返さず、ただニコニコと笑っているだけだった。

流石に違和感があり、スタッフの一人がリンディに声をかけた。

「？艦長、どしたんだ（カチャツ）「動くな。」っ！」

リンディに質問をしようとした時、横から声が聞こえ、頭に何かを突きつけられた。

「おい、どうして・・・っが！」

もう一人のスタッフは、何かに体を地面に押さえつけられた。

「一体何が起こって」（ブオンツ）っ！！！」

最後の一人が何が起こっているのか分からず、混乱している時に、誰もいない所から突如ピンク色のサーベルを現れ、喉元に突きつけられた。

「動かない方がいいよ？でないと、喉が大変なことになると思っか  
ら。」

すると何処からか少女のような声が聞こえた。

「これで全員か。各機、ECS不可視モード、及びミラーージュコロイド解除。ただし、警戒は怠るな。」

「……………了解」……………」

そういうとECSとミラーージュコロイドが解除され、一人目のスタツフの頭にGDC-B 40mmライフルを突き付けるウルズ6、二人目を地面に押さえ付けるアーバレスト、三人目の喉元に功盾システム「トリケロス」に取り付けられているビームサーベルのビーム刃を突き付けるネブラブリッツ、そしてチームを指揮するファルケと周囲を警戒している三機のM9が姿を現した。

「な、なんだこいつらは？」

突如姿を現したM9、ファルケ、アーバレスト、ネブラブリッツにスタツフ達は再び混乱した。

「目標地点の占拠完了。ご苦労だったな、ベルデ。」

「……………」

ファルケがそういうとリンディの姿が、先程クロノ達と戦っていた、仮面ライダーベルデに変わった。

「か、艦長じゃない！」

「変身魔法?!」

スタッフ達が驚くのも無理はない。

ベルデが持つ「コピーベント」のカードは相手の姿をコピーすることが出来る。

ベルデはクロノ達から離れる前にコピーベントでリンディの姿をコピーしていた。

コピーベントのカードを使い、リンディの姿になれば誰にも怪しまれずに発令所に入ることが出来る。

そして、リンディの姿で相手の気を緩めたところでファルケ達がスタッフ達を抑えるのが作戦だった。

結果、見事抑えることに成功し、現在の状況になっている。

「さて、ウルズ1よりウルズ2へ、聞こえるか？」

ファルケがウルズ2に連絡をしている。

「こちらにも発令所を押さえた。これより、フェイズ3に移行せよ。」  
通信を終えると、ファルケはM9、アーバレスト、ネブラブリッツを見た。

「各員、これよりフェイズ3に移行する、いいな！」

「ウルズ7、了解です。」

「ウルズ6、いつでもいいぜ。」

「はいー！」

「ウルズ3、了解。」

「ウルズ4、了解だ。」

「ウルズ5、了解。」

ファルケが各機に確認をとり、各機はそれぞれ返事を返した。

「よし！ウルズ1よりHQへ、通信室及び発令所の占拠完了。フェイズ3への移行はいつでも可能。」

ファルケは各機の返事を聞くと、HQに報告を行った。  
フェニックス

再びクロノチーム

「ブレイズキャノン！」

『ATTACK RIDE！ BARRIER！』

クロノが放ったブレイズキャノンをフェニックスバリアで防ぎだ。

「シューット！！！」

更に、ここでののはのディバインシューターが追い討ちを掛ける。

『GUARD VENT』

「ふんっ！」

ぐもった音声の後、リュウガが俺の前に立ち、両手に装備したドラグシールドでディバインシューターを防いだ。

「はっ！」

リュウガがディバインシューターを防いだ後、ライアがなのはに接近し、エビルウィップで攻撃した。

「チェーンバインド！」

しかし、ユーノがチェーンバインドを放ち、再びライアに巻きつき、動きを止められた。

もちろん、この隙をクロノは見逃さなかった。

「ステインガースナイプ！」

クロノはステインガースナイプをライアに放った。

「があああっ！」

ステインガースナイプを食らったライアは後ろに飛ばされ、地面を転がる。

「このままじゃ、埒が明かない！アポロン、他のライダーやMSの武器とか使えないのか？」

駄目元でアポロンに聞いてみた。

「現在使用可能なのはG4とG3-Xの各種武器の非殺傷設定版のみです。」

「……………いけるのか。」

「デイケイドも激情態の時に使っていたでしょ?」

「確かにそうだが、人の心の中を読むな。」

俺は直ぐにカードを取り出し、ドライバーに入れた。

『ATTACK RIDE! GIGANT! GM-01! GX-05!』

カードによって仮面ライダーG4の多目的巡航ミサイルランチャー「ギガント」と仮面ライダーG3-Xのサブマシンガン「GM-01 スコーピオン」とガトリング式機銃「GX-05 ケルベロス」が出現した。

「リュウガ!」

俺はリュウガにギガントを渡した。

「ライア!」

「……………」

リュウガにギガントを渡した後、ライアを呼ぶとライアはカードデッキからカードを引き抜き、エビルバイザーにベントインした。

するとリュウガが持っているギガントがライアにも装備された。ライアのコピーベントのカードはベルデとは違い、武器のみをコピーするカードで、その能力を活かし、ギガントをコピーさせた。そして、俺はGM-01とGX-05を連結させ、砲身の先にGX弾を装填し、G3-Xの最強武器「GXランチャー」を完成させ、俺のGXランチャーとリュウガとライアのギガントがクロノ達に狙いを定めた。

「ふええええっ!!!!!!」

「し、質量兵器!?!」

「一体何処からだしたというの!?!」

「あんなのをここで撃つたらどうなるか、あいつは分からないのか!?!」

GXランチャーとギガントを向けられたのは、ユーノ、リンディ、クロノが焦りだした。

「大丈夫、痛みは一瞬だ!.....多分!?!」

「いや、大丈夫じゃないだろう!それに今多分って言ったよな!今絶対に多分って言ったよな!?!」

クロノが激しいツツコミを入れる。

確かに言った。

なぜなら、

「自信ないからな!!」

「持てよ!!」

またもクロノから激しいツッコミが返ってきた。

「気にするな!ファイヤー!!」

GXランチャーの引き金を引き、GX弾を発射した。

バシューーッ!

「くっ!」

GXランチャー発射の勢いで俺の体は後退させられた。

「ふんっ!」

バシュッ、バシュッ、バシュッ、バシューーッ!

「むんっ!」

バシュッ、バシュッ、バシュッ、バシューーッ!

俺がGXランチャーを発射して直ぐにリュウガとライアもギガントを全弾発射した。

「くっ!ラウンドシールド!!」

バシューーーーーッ、ドゴオオオオンッッ！！！！

ユーノがなのは達の前に立ち、ラウンドシールドを展開し、GXランチャー、ギガントのミサイル8発を全て受け爆発、辺りが爆煙に包まれた。

「……………やりすぎたかな？」

「そつでもないようですよ。」

爆煙が晴れるとユーノがラウンドシールドを展開した状態で息を乱しながら立ち続けていた。

「はあ、はあ、はあ、はあ、」

「ユーノ君！大丈夫！？」

「う、うん。大丈夫だよ、なのは。」

心配するなのはにユーノは大丈夫と答えた。

「…………マジか。」

GXランチャーの威力は仮面ライダーアギトのグランドフォームのライダーキックと同じ威力を持っている。

それに加え、ギガントのミサイル、8発も防ぎ、立ち続けているのは正直、予想外だった。

「やはり、脅威だな。ユーノの防御力は。」

「どうしますか、マスター？」

「まだ、手はいくらでもある。今は兎に角時間を（ピリリッ、ピリリッ）っ！」

突然、フェニックスドライバーが鳴り出した。

「マスター、ファルケから通信です。」

「予定通り、流石ファルケだな。アポロン、繋いでくれ。」

「イエス、マスター。」

アポロンは、通信を繋いだ。

『ウルズ1よりHQへ、通信室及び発令所の占拠完了。フェイズ3への移行はいつでも可能。』

「なんだって！」

「そんな！」

通信を聞いたクロノとリンデイが驚いた表情をしていた。

「HQ了解。この後の行動は予定通り、フェイズ3に移行してくれ。」

『ウルズ1、了解。』

ファルケとの通信を終了した。

「お、おい！一体どういうことだ！」

クロノが俺に質問をして来た。

「簡単なことだ。俺とライダー達がお前達の相手をしている間に、別働隊で通信室と発令所を制圧した。」

今回の戦術プランはフェイズ1でクロノや武装局員、搜索班を俺を含むライダーチームで陽動を行う。

その間に光学迷彩を搭載したAS、MSによる別働隊は二手に別れ、通信室と発令所に向う。

各ポイントに到達したらフェイズ2に移行、各ポイントを占拠。

占拠後のフェイズ3は人質の見張り。

これが今回の戦術プランだ。

『クロノ君・・・』

「エイミィッ！」

今まで繋がらなかったクロノ達の通信が回復した。

『ごめん、クロノ君。捕まっちゃった。』

画面に映るエイミィの後ろにライフルを構えたM91（メリッサ・マオ機）とブリッツが映っていた。

「くっ！いつの間にも別働部隊を！」

「お前達と戦う前にな。戦いとは、いつもに二手、三手先を考えて

行っものだ。」

「……それで、貴方の要求は何ですか？」

「か、艦長!？」

流石リンディだな。

俺が何か要求することを察してたか。

「こちらの要求は、まずクロノ執務官を含む、全局員の戦闘行動の停止を。」マスター!」っとうしたアポロン（シューウウウウウウン）……ッ!」

後ろから音が聞こえ振り返ると、そこには「仮面ライダーディケイド」の銀色のオーロラが出現した。

「な、何あれ？」

「銀色の……オーロラ……かな？」

「何故、アースラの中でオーロラが発生するんだ!？」

なのは達がオーロラに驚いている中、俺とアポロンだけが警戒していた。

「何故ここにオーロラが……」コッッ、コッッ、コッッ、コッッ、  
!……!」

「誰か……こっちに来てる?」

リンディがそう言った後、俺はフェニックスドライバーの銃口をオーロラの方に向けた。

聞こえてくる足音からして、一人ではなく、二人いる。

そして、オーロラから現れたのは二人の仮面ライダーだった。

「何っ!」

「あれって。」

「仮面ライダー!?!」

クロノとユーノとなのはは、オーロラから現れた仮面ライダーに驚いている。

「また、フェニックスの増援が・・・」  
「違う。」  
「っえ?」

リンディが言ったことを俺は否定した。

「あの二人は・・・味方じゃない。」

「じゃあ、あれはなんなんだ!!」

俺の答えに対し、クロノが質問をしてくる。

二人の仮面ライダーの内、一人は紫色の複眼、全身にライン状に行き渡る黄色のフォトンストリームに頭部と腰のベルトの右側のハードポイントに装備されている武器は、ギリシャ文字の<sup>カイ</sup>を模している。

そして、もう一人のライダーはオレンジ色の複眼に銀色のフォトンストリーム、腰のベルトの右側のハードポイントには銃が装備されていて、ギリシャ文字の<sup>デルタ</sup>を模している。

「……カイズ……デルタ。」

銀色のオーロラから現れた二人の仮面ライダーは、「仮面ライダー555」の世界のスマートブレイン製の仮面ライダー、「仮面ライダーカイズ」と「仮面ライダーデルタ」だった。

## 第十四話 ライダーVSアースラ（後書き）

ARX-7アーバレスト「はい、完成だ!!」

健悟「長っ！今回文、長っ！」

アポロン「確かに長いですね。」

ARX-7アーバレスト「いやー、なんか書いてたら止まらなくなっちゃって。」

健悟「今回はバトルも多いな。」

ARX-7アーバレスト「書くの大変だった。」

アポロン「ご苦労様です。」

ARX-7アーバレスト「さて、今回は早めに切り上げるぜ！次回予告よろしく！」

健悟「えっ！早っ！えっ！と、次回『第十五話 止まぬ戦い、現れた（カイ）と（デルタ）』です。」

アポロン「最初に申し上げて起きますが、もしかしたらタイトルの変更があるかもしれません。」

ARX-7アーバレスト「その時は暖かい目で見てください。次回もお楽しみに!!」

第十五話 止まらぬ戦い、現れた (カイ) と (デルタ) と九龍 (ナインド

今回も文がかなり長くなってしまいました。  
では、どつぞ！

先程までクロノ達と戦い、別働隊がアースラの通信室と発令所を占拠し、クロノ達に戦闘を停止させ、武装解除を要求しようとした。その時、銀色のオーロラが出現し、二人の仮面ライダーが現れた。

「人が疲れているときにまた厄介なのが現れたな。」

「そうですね、マスター。」

そう言いながらオーロラから現れたライダー、「仮面ライダーカイザ」と「仮面ライダーデルタ」を見た。

仮面ライダーカイザ

「仮面ライダー555」の世界の仮面ライダー！

前に俺がオルフェノクと戦った時に変身したライダー「仮面ライダーファイズ」と同じ「仮面ライダー555」の世界の大企業「スマートブレイン」が開発したライダーズギアの一つ。

ギリシャ文字の<sup>カイ</sup>を模したデザインに紫色の複眼、全身にライン状に行き渡る黄色のフォトンストリームはファイズと違いダブルストリームと呼ばれる高出力フォトンブラッドを安定供給させるために2本に分かれてマウントされている。

オルフェノク又はオルフェノクの記号を埋め込まれた人間の一部を除き、不適合者は変身解除後に灰化・死亡することから「呪われたベルト」と呼ばれる。

仮面ライダーデルタ

カイザと同じ「仮面ライダー555」の世界の仮面ライダー！

ファイズとカイザ同様「スマートブレイン」が開発したライダーズ

ギアの一つで最初期に開発されたライダーシステム。

ギリシャ文字の<sup>デルタ</sup>を模したデザインにオレンジ色の複眼、ブライトカラーのフォトンストリームをしている。

デルタのフォトンストリームはフォトンブラッドを全身に循環させるために>ビガーストリームパターン<という一体のストリームを要所で三股に分けることで逆ポトルネット効果を生み出す特殊な形をしている。

デルタにはガンマ脳波の周波数を強制的に引き上げる特殊な電気信号「デモンズイデア」を発生させ、カイザ同様、オルフェノク又はオルフェノクの記号を埋め込まれた人間の一部を除き、不適合者を極めて攻撃的な性格に変貌させる闘争本能活性化装置「デモンズスレート」が装備されている。

「ハロー、貴方が仮面ライダーフェニックスね。」

俺がカイザとデルタを見ているとカイザが俺に話しかけてきた。声からして、あのカイザの装着者は女性だ。

「そうだ。お前達は何者だ？」

「あら、聞かなくても貴方はよく知ってるでしょ？でも、まあいいわ。後ろにいる人達は私達のことを知らないだろうし、自己紹介してあげるわ。私はスマートブレイン第一特務部隊隊長、仮面ライダーカイザ！」

「俺はスマートブレイン第二特務部隊隊長、仮面ライダーデルタだ！」

カイザとデルタ（男性）は自分達の正体をなのは達に教えるのも兼ねて自己紹介をした。

その中で俺は気になることがあった。

「スマートブレイン特務部隊隊長だと？」

俺が気になったのはカイザとデルタがスマートブレインに所属していたことだ。

「別におかしな話しじゃないでしょ？つというか、さっきも言ったはずだけど貴方が一番よく分かっているはずよ。私達ライダーは一つの世界に存在せず、様々な世界、パラレルワールド並行世界に存在する者。例えば他の世界のカイザがスマートブレインに敵対していても、私のようにスマートブレインに所属しているカイザがいてもおかしくないでしょ？」

確かに彼女の言う通りだ。

ライダーの世界はオリジナルのライダーの世界があればディケイドが行ったような別の世界のライダーの世界がある。

更に「仮面ライダー555」の世界ではオルフェノクの王「アークオルフェノク」を倒し、人間とオルフェノクが共存した世界。

世界のほとんどがオルフェノクになり、人間が僅かしか生き残っていない世界。

そしてディケイドが行ったファイズの世界では大企業であるスマートブレインが高校になっていたりと様々な世界がある。

他にも龍騎やカブトでも同じような世界がある。

だから、彼女の言う通り、スマートブレインに所属しているカイザやデルタがいても不思議ではない。

「成程。では質問を変えよう。そのスマートブレインの特務部隊の隊長二人が俺に何の用だ？」

「簡単よ。貴方を排除しに来たのよ。」

俺の質問にカイザは堂々と答える。

「貴方は本来は存在しない仮面ライダー。貴方というイレギュラーがいると計画の邪魔だから排除しろって私達の上司とその関係者達から言われたけど、チャンスあげるわ。」

「チャンスだと？」

俺は再びカイザに質問をする。

「ええ、そうよ。内容はとっても簡単、私達の仲間になりなさい。」

チャンスの内容は俺の勧誘だった。

「貴方の力は敵だったらかなり厄介だけど、味方ならとても役に立つわ。貴方自身の身体能力、射撃の腕、他のライダーに限らず他の世界のロボット等への変身に召喚なんて、あのディケイドやディエンドですら持っていない最高の能力を持っている。私達の仲間になれば、「ちよっと待て!」っんん?」

俺とカイザの会話にクロノが割って入ってきた。

「スマートブレインとかイレギュラーとかディケイドとかディエンドとか一体なんの話をしている!それにあのオーロラはなんなんだ!我々時空管理局にも詳しいことを聞かせてもらおうか!」

「・・・ああ、もう。」

カイザは腰のベルト「カイザドライバー」から携帯型トランスジェネレーター「カイザフォン」を抜き取った。

「あんたさあゝ。今人が大事な話ししてんだから・・・」

カイザはターン式携帯であるカイザフォンを開き、コードを入力していく。

- 103

「邪魔すんじゃないわよ!!」

- ENTER

コードを入力し終え、カイザフォンのENTERキーを押した。

『SINGLE MODE』

カイザフォンを光線銃「フォンブラスター」に変形させ、光線を単発で発射する「シングルモード」に設定し、クロノに向け二発発砲した。

「くっ!」

クロノはフォンブラスターの光線を防ぐためにラウンドシールドを展開しようとした。

ガキンツ!ガキンツ!

「なっ!」

「えっ？」

カイザとクロノが驚きの声を出す。

カイザのフォンブラスターの光線を防いだのは先程までクロノ達と戦っていた仮面ライダー、黒いドラグシールドを持った暗黒の龍を従えし騎士「仮面ライダーリュウガ」だった。

「お、お前……何で？」

「……」

クロノはリュウガが自分を守ってくれたことが理解出来ず混乱しながらリュウガに質問をするが、リュウガは無言のままだった。

「……どういっつもりかしら、フェニックスさん？」

カイザが俺に問いかけてきた。

「何のことだ？」

「とぼけたって無駄よ。そこにいるリュウガとライア、そして召喚されるライダー達は貴方の命令に忠実に従うお人形、自我を持っていないライダーが貴方の命令も無しにその子を守るなんてありえない。

つまり、リュウガがその子を守ったのは貴方が守るように命令を出したからよ。違つかしら？」

「……正解だ。」

「貴方、さつきまでその子達と戦ってた、つまり敵でしょ？だった  
ら別に守る必要なんてないのに何で守ったのよ？あんな守る価値も  
ないのを守ったってなんの得もn（バンツ！）っ！！！！」

「・・・・・・・・」

俺は無言のままフェニックスドライバーを向け、カイザの足元に発  
砲していた。

「な、何よいきなり！」

突然撃たれたことでカイザが動揺している。

「てめえー、今なんてゆうた？」

「はっ？」

「今なんてゆうたって聞いてんねん。」

カイザが言った一言で、俺はキレた。

「守る価値がないやと？ふざけたこと言うのもたいがいにしいや！」

「あっ、えっ、あの、えっ？」

「フェ、フェニックスの喋り方が・・・」

「変わった・・・」

「でも、なんで関西弁なんだろうっ？」

「さ、さあ？」

俺がキレたことでカイザは混乱し、リンディ、クロノ、なのは、ユ  
ーノは俺の喋り方が変わったことに驚いている。

「ほんまに守る価値が無い奴ってのはなあ。お前みたいに他人の命  
を軽く見てるような奴のことゆうねん！！」

「くっ！あああ、もういいわよ！交渉は決裂よ！！本当に気に入ら  
ないわっ！私の思い通りにならない者、私を好きにならない奴は全  
て！こうなったら一人残らず、灰も残らず殺してやるわよ！（パチ  
ンッ）」

カイザは指を鳴らすと再び銀色のオーロラが出現し、カイザとデル  
タの後ろに量産型仮面ライダー「ライオトルーパー」達が現れた。

ライオトルーパー

ファイズ、カイザ、デルタ同様、スマートブレイン社がライダー騎  
兵用に開発した量産型ライダーシステム。

ギリシャ文字のOを模し、生産性を上げるためにファイズ達に搭載  
されていたフォトンストリームはオミットされ、大きなダメージを  
受けた場合でも変身が自動的に解除されない等、大幅にコストダウ  
ンがされている。

「あ、あの一団は一体？」

「あれはライオトルーパー。ある世界の大企業が開発した量産型の  
仮面ライダーだ。」

冷静を取り戻した俺は、リンディの問に答えた。

「量産型って、あんなのがまだ大量にいるのか!？」

クロノが驚いている。

「可能性はある。それとお前達は手を出さずに俺達の後ろに隠れる。」

そう言うと俺の右側にリュウガが並び、左側にライアが列んだ。

「ちよっ、ちよっと待て!どういうことだ!！」

クロノが俺に突っ掛かる。

「あいつらが、いや、俺達仮面ライダーが使っている武器は本来、怪人やライダーと戦うことを前提に開発、つまり相手を倒すために使う。君達魔導師のように非殺傷設定など存在しない。下手をすれば死ぬぞ。」

「でも、さっきまでの戦いで死者は誰も!」

「それは、俺がこの銃「フェニックスドライバー」で呼び出したライダー達は非殺傷設定にしてあるからだ。そして、唯一このフェニックスドライバーだけが君達と同じ様に殺傷設定と非殺傷設定の設定が出来る。非殺傷設定にしなければ君達なんて簡単に倒せる。」

「ちよっ!いつまでごちゃごちゃと話してんのよ!今は戦いの最中でしょうがっ!あんた達、行きなさい!！」

「……はっ！」「」

いつまでも戦わずにリンディ達に説明をしている俺に対し、カイザは痺れを切らし、カイザの命令でライオトルーパーが4人、ライオトルーパーの専用ビークル「ジャイロアタッカー」と呼ばれるライオトルーパー専用バイクのハンドグリップを取り外した武器「アクセレイガン」のコンバットナイフ形態の「ブレードモード」に変型させ、向かってくる。

「……アポロン、非殺傷設定から殺傷設定にモードチェンジだ。」

「イエス、マスター。」

ガシャンッ！

最初にフェニックスドライバーの中で何かが外れる様な音が聞こえ、

ジャキンッ！

次に何かが装填される音がし、

ピーッ！

最後に完了を知らせる音が鳴った。

「モードチェンジ、コンプリート。」

「よし。……よく見ておけ」

俺は後ろにいるリンディ達に語りかけ、カードケースからカードを取り出す。

「これが俺の、仮面ライダーフェニックスの・・・」

『ATTACK RIDE!』

そして、取り出したカードをドライバーに入れ、

「・・・本来の力だ。」

トリガーを引いた。

『BLAST!』

ババババババババツツ!!!

「「「「!!!!!!」」」」

フェニックスドライバーから放たれた弾は、先程までクロノ達と戦っていた時よりも多く発射され、弾のスピードも倍の速さでライオトルーパーに放たれた。

「「「「があああああっつ!」」」」

4人のライオトルーパーはフェニックスプラストを全弾食らい爆発、消滅した。

「す、凄い・・・」

「さつきよりも弾のスピードが速かった。」

「それに僕達と戦っていた時と弾の威力も違う。」

「あれがフェニックスの本来の力なの？」

「あっははははっつっ!!」

なのは、ユーノ、クロノ、リンディが俺の殺傷設定の威力を見て驚いている中、カイザは笑っていた。

「いやあー、やっぱり凄いわ。ブラストだけで四人のライオトルーパーを纏めて倒すんだから。・・・だから、貴方の力をもっと見せてよ!!」

シューウウウウウウン

「むっ!!」

カイザの言葉の後、再び銀色のオーロラが今度は俺達の後ろに出現し、ライオトルーパーが30人程現れた。

前にはカイザとデルタとライオトルーパーが16人程、後ろにもライオトルーパーが30人程と挟み撃ちにされた。

「っち!こりゃあ鬱陶しいな。(ピーッ!ピーッ!)っん?」

不意にフェニックスドライバーが鳴った。

「マスター、ウルズ1より緊急通信です。」

「繋げ。」

「イエス、マスター。」

『ウルズ1よりHQへ！聞こえるか！？』

通信の向こうからファルケが焦っている声が聞こえる。

「こちらHQ、どうかしたのかウルズ1？」

『先程、銀色のオーロラが出現し、その中から我々と同サイズのサベージ8機、シャドウ4機、ジン5機が現れ、現在攻撃を受けている！なお、発令所のスタッフに怪我人はいない。』

「なんだとー！」

サベージ、シャドウ、ジンだと！？

何故ASとMSが！？

ピーッ！ピーッ！

「マスター、今度はウルズ2からも緊急通信です。」

『こちらウルズ2！HQ、応答願う！』

「こちらHQ、ウルズ2状況を報告しろ！」

『さつき変な銀色のオーロラが現れ、その中からサベージ4機にジン3機程出現。現在こちらは攻撃を受けている。なお通信管制官に怪我はない。』

「そつちもか!?!」

ウルズ2の所にもASとMSが、しかし一体どうやって動いているだ?

「どうやから上手くいったみたいね。」

「何っ?」

俺はカイザの言葉に反応した。

「どういうことだ?」

「簡単なことよ。単にあつちの世界の傭兵や脱走兵、テロリスト達を勧誘してこつちの世界に連れて来てたのよ。」

「じゃあ、あのサベージ達は!」

「そつ それぞれの世界のから離れた来た連中が変身したのよ。確か、こつちの世界のバリアジャケットだっけ?それに近い状態の物だそうよ?ちなみに貴方が出した他のライダー達の所にも私の部隊を送ったわ。さて、お喋りはここまでにして、今度こそ戦いましょうか?」

カイザがそついうとライオトルーパー達が構える。

「お、おい!どうするつもりだ!?!」

明らかにこちらが不利な状況に対し、クロノが俺に聞いてくる。

「……リンディ提督、後でちゃんと直しますので本気を出してよろしいか？」

「えっ？」

俺の突然の質問にリンディは戸惑った。

「このまま本気で戦わなければ俺達全員が殺られる。だから、頼みます。」

「……それは、私の部下とこの艦を護るためですか？」

「勿論そのつもりです。」

「……分かりました。お願いします。」

リンディは少し考えた後に承認をしてくれた。

「ありがとうございます。アポロン、全ライダー及びAS、MS隊の非殺傷設定を殺傷設定に変更しろ!」

「イエス、マスター。……コンプリート!」

アポロンによってライダー、AS、MS達が殺傷設定に変更された。

「あと全部隊に通達しろ。」

「なんと?」

「この艦のスタッフを全力で守り、敵部隊を殲滅せよつてな。あと、龍騎ライダーズはファイナルベントの使用も許可と伝える。」

「イエス、マスター。」

「それじゃあ、ライア、リュウガ、後ろのライオトルーパー達は任せるぞ?」

「……………」

「……………」

ライアとリュウガは無言のまま頷いた。

「さあ、楽しませてもらうわよ!」

カイザはカイザドライバーの右側のハードポインターに装備されている<sup>カイ</sup>を模した形状の剣・銃一体型マルチウエポン「カイザブレイガン」をホルスターから抜いた。

『BURST MODE』

手前にあるレバー>コッキングレバー<を引き、濃縮フォトンプラツドの弾丸を放つガンモードを起動させる。

「ほら、デルタ。あんたもちやつちゃとしなさい。」

「……………」

「……………ん?」

デルタは返事も返さず、ボーっと突っ立っている。

「ちょっと！どうしたのよ！！」

そんなデルタにカイザは怒った。

そして、デルタはこんなことを口にした。

「……………あのさあ、俺って仮面ライダーだよな？」

「……………は？」

デルタの突然の質問にカイザはおろか、俺やなのは、ユーノ、リンデイ、クロノ、ライオトルーパー達とこの場にいる全員がポカンっとしていた。

「えっと、何？いきなりどうしたの？」

意味不明の質問をするデルタにカイザは質問をする。

「いや、なんか俺って本当に仮面ライダーのかなあ〜って思って。」

「はあ？何を言ってるのよ？」

「だってさあ〜！！俺一番最初に自己紹介してからずうずううううつつつつつと一言も話してないんだぜ！！??？」

「……………あ」

この場のライオトルーパーを除くカイザ、俺、なのは、ユーノ、リ

ンデイ、クロノの全員が今思い出した。

「普通さあ〜！仮面ライダーって凄いスポット当たるはずじゃん！  
？それなのにカイザやフェニックスばかりスポット当たって、俺  
は全然当たんねえ〜じゃん！！会話に参加しようとしても隙間がね  
えし！フェニックスの質問に答えようとしても俺が言う前にカイザ  
が全部言っちゃうし！俺影薄いじゃん！！これじゃあ俺ただの空気  
じゃん！！」

いつの間にか体育座りの状態であまりの台詞のなさと空気つぶりに  
デルタがキレた。

「あ、あんたが早く言わないのがいけないんでしょうが！！」

「ねえ、俺もう帰っていい？帰ってギャルゲーの続きしたし。」

「駄目に決まってるでしょうが！！」

ついにデルタは仕事をボイコットしようとするがカイザがそれを引  
き止める。

「……………」

この様子を見ていた俺となのは達は全員同じことを思っていた。

（なんでこいつがデルタに選ばれたんだ？）

（どうしてこの人が仮面ライダーさんに選ばれたんだろう？）

（何故この人が仮面ライダーに選ばれたんだろう？）

（どうしてこの人が仮面ライダーに選ばれたのかしら？）

（何故こいつが仮面ライダーに選ばれたんだ？）

皆がそう思っている時に

「ヘタレですね。」

「ガハッ！」

アポロンが容赦のない一言を口にした。  
その結果、デルタは更に落ち込んだ。

「機械にヘタレって言われた。機械にヘタレって言われた。」

「ちょっと！余計に落ち込んだじゃない！！！」

「申し訳ありません。私は・・・正直！！つなごとしか言わない主義なので。」

「グフッ！」

アポロンは正直のところだけを強調し、またまたデルタは落ち込んだ。

「ふっ、滑稽ですね。」

「アポロン、そのへんにしてやれ。」

流石にこれ以上はキリがないので俺はアポロンを止めた。

「機械に鼻で笑われた。機械に鼻で笑われた。機械に鼻で笑われた。」

「落ち着きなさい！あの機械に鼻なんてないでしょうが！！」

落ち込むデルタをカイザは懸命にフォローしている。

（ ）（ ）（あのデバイス、容赦ない！！）（ ）（ ）

なのは達は同じことを考えていた。

「落ち着きなさいデルタ！えーつと、ほら、あれよ！これからあいつらと戦うからさつきよりはあんたにも出番はあるわよ！つというより今まで空気だったのは戦闘であんたを輝かせるためだったからよ！なんてたつて私達ライダーは戦ってこそ活躍できるんだし！」

「！！！！そつか〜！！そくだよねえ〜！！」

デルタが若干元気を取り戻した。

「そうよ！これからがあんたがスポットを浴びるの！これからがあんたのターンよ！！」

「よっしゃー！俺の出番が、俺のターンがやってきたぜー！！」

カイザの懸命な励ましによりデルタは復活した。

「ふう、よかった、単純で。」

カイザがボソツと呟いた。

「ん？なんか言った？」

「別になんにも？」

デルタには聞こえていなかったようだ。

「さあて、待たせたわね。」

ようやくデルタが復活したのでカイザは俺のほうを向き、話しかけてきた。

「ああ、かなりな。」

それに対し、俺は若干嫌みっぽく言った。

「うっ！と、とにかくこれからが本番よ！いくわよ、デルタ！」

「おうよっ！」

さっきまで激しく落ち込んでいたはずのデルタはやる気を取り戻し、腰のベルト型トランスジェネレーター「デルタドライバー」の右側のハードポインターに取り付けられているデルタムーバーとデルタフォンが一つになった銃を取り外した。

「FIRE！」

『BURST MODE』

デルタがデルタムーバーに音声入力を行ったことで光線を発射する  
>ブラスターモード<が発動した。

「行きなさい!!」

「くくくくうおおおおお」「くくく」

カイザの命令で前方のライオトルーパーが8人、後方のライオトルーパーが25人がアクセレイガンブレイドモードにし駆け出し、カイザとデルタとカイザブレイガンとデルタムーバーを構え、残りのライオトルーパーもアクセレイガンをガンモードにし構える。

「来やがれっ!」

「ふっ!」

「はっ!」

俺の掛け声を聞き、リュウガとライアが後方のライオトルーパー部隊に向って駆け出し、俺も向ってくるライオトルーパーとデルタとカイザにフェニックスドライバーを向けた。

ほぼ同じ頃、他の場所でも防衛戦及び殲滅戦が開始された。

搜索班第一班

「撃てっ!皆殺しにしろっ!!!」

バンツ！バンツ！バンツ！バンツ！

バンツ！バンツ！バンツ！バンツ！

ライオトルーパー部隊の隊長の命令でライオトルーパー達は前後からアクセレイガン>ガンモード<で龍騎、ナイト、魔導師達に発砲した。

『GUARD VENT』

「っっはっ！」「っ」

トリックベントのカードで増えていた三体のナイトはガードベントのカードでダークウイングが変化したマント「ウイングウォール」が背中に装備され、ウイングウォールで龍騎と魔導師達をアクセレイガンの弾から守った。

『STRIKE VENT』

ナイトが攻撃を防いでいる間に、龍騎はカードをドラグバイザーにベントインし、ドラグレッダーの頭部を模した武器「ドラグクロー」が右腕に装備された。

「ウオオオオオンツ！！」

すると龍騎の契約モンスターであるドラグレッダーが雄叫びを上げながら現れた。

「な、なんだ！？」



向ってくるライオトルーパーに対し、ナイトはダークバイザーにカードをベントインする。

『NASTY VENT』

今度はナイトの契約モンスターであるダークウィングが現れ、ライオトルーパー達に超音波「ソニックブレイカー」を放った。

「ぐっ！があああっつ！！」

「な、なんだ、これは！？」

「あ、頭が痛いっ！」

ライオトルーパー達がナスティーベントによって攪乱されている間に龍騎が再びカードをベントインする。

『FINAL VENT』

「はっ！はああああっ！！」

「ウオオオオオオンッ！」

龍騎はファイナルベントを発動させ、腰を低くし構えをとり、ドラグレッダーは龍騎の周りを回る。

「はっ！」

龍騎は前方のライオトルーパー部隊に向かって走り出し、ドラグレッダーも続く。



前後合わせ、23人のライオトルーパーが龍騎とナイト、魔導師達に再び向っていく。

「っしゃあ！」

「くくくはっ！」「くくく」

「来るぞ！構えろっ！」

向ってくるライオトルーパーに龍騎はドラグセイバー、ナイトはウイングランサー、魔導師達はデバイスを構え、応戦する。

## 搜索班第二班

「くくくくくおおおおお」「くくくく」

30人のライオトルーパーが向ってくる中、ゾルダはマグナバイザーにカードをベントインした。

『FINAL VENT』

アースラの通路に突如水たまりができ、その中からゾルダの契約モンスターであるマグナギガが現れた。

「くくくくくおおおお………っお？」「くくくく」

ゾルダ達に向っていたライオトルーパー達はマグナギガが現れたことで歩みを止めた。

カチャツ、カシャンッ

ゾルダがマグナバイザーをマグナギガの背中に接続するとマグナギガは両腕をライオトルーパー達に向け、次々と武器が展開されていき、エネルギーがチャージされる。

「ま、まずい!!退避し」

カチッ

ライオトルーパーが言い終わる前にゾルダはマグナバイザーのトリガーを引いた。

バンッ、バンッ、バンッ

バババババツ

バシユ、バシユ、バシユ、バシユ

ドッ、ドッ、ドッ、ドッ

バリッ、バリバリバリッ

マグナギガの全身から大量のミサイルやレーザー等が一斉に発射された。

「う、うわあああっ!!!!!!」

「「「「「あああああッ!!!!!!」」」」」

ドゴオオオオオオオオオオオ

強力な火器と大量の弾やミサイルで広範囲に攻撃するゾルダの必殺技「エンドオブワールド」を食らった後方のライオトルーパー部隊は1人残らず消滅し、通路の床や壁は所々穴が開いたり、焦げたりしていた。

「な、なんだあの威力は！」

「す、凄い！」

魔導師達はゾルダのエンドオブワールドの威力に驚いていた。

「ば、馬鹿なっ！」

「一瞬で全滅だと!?!」

前方のライオトルーパー達は後方のライオトルーパー達が一瞬で消滅したことで動揺している。そして、ライオトルーパー達が動揺している間に今度はタイガがデストバイザーにカードをベントインする。

『FINAL VENT』

「ガオオオオオオッ！」

「何!?!があっ！」

タイガの契約モンスターであるデスワイルダーが現れ、ライオトル

パーの一体を引きずりながらタイガに向っていく。

「はあああああつ」

タイガはデストワイルダーが向ってくるのをデストクローを構えながら待つ。

「ガオオオオオツ！」

ガリガリガリガリガリッ

「がああああああ」

やがてデストワイルダーがタイガに近づき、

「ふんっ！！」

「があっ！」

近づいたライオトルーパーにデストクローを突き立てた。

「うわあああああつ！！」

ライオトルーパーはタイガの必殺技「クリスタルブレイク」を食らい結晶爆発を起こし消滅した。

「な、なんなんだ、あの強さは！？」

「く、くっそー！！撃てっ！撃てーっ！！」

ライオトルーパー達はアクセレイガンをガンモードにし、射撃体勢に入るがその前にゾルダが動き出していた。

『SHOOT VENT』

ゾルダはもう一枚のシュートベントでマグナギガの両腕を模し、ゾルダ自身の身長を上回る巨大な大砲「ギガランチャー」を装備し、前方のライオトルーパー部隊に向ける。

「な、何!?!」

「ちょ、ちよっとまて」

「ふんっ!?!」

ドッ、ドッ、ドッ、

ゾルダはライオトルーパーの言葉を最後まで聞かず、ギガランチャーを発射した。

「「「「「う、うわあああああっ!?!?!?!?!」「」「」「」

ギガランチャーを食らい、ライオトルーパー達の数は19人に減らされた。

「ふっ!」

「はっ!」

そして、シザースピッチを装備したシザースとデスクローを装備

したタイガは、残ったライオトルーパー達に向かって行った。

### 搜索班第三班

ガキンツ、ガキンツ、ガキンツ、ザシユツ

「うわぁあっ！」

「ぐあっ！」

「ふっ！祭りだ、祭りだぁーっ！」

そういいながら王蛇はベノサーベルでライオトルーパーを斬りつけていく。

「はっ！」

ザシユツ

「があっ！っつ、てめえー何しやがる！」

王蛇が後ろを振り返ると王蛇を斬りつけたライオトルーパーがアクセレイガン、ブレードモードを構えていた。

「このやー（バン、バン、バン）っがああっ！」

王蛇がライオトルーパーに気を取られている隙に後ろから別のライオトルーパー達にアクセレイガン、ガンモードで射撃された。

「てめえら、調子に乗るなよっ！」

『ADVENT』

「シャアアアアアッ！」

王蛇がベノバイザーにカードをベントインし、アドベントを発動させ、ライオトルーパー達の後ろに王蛇の契約モンスターのベノスネーカーが現れ、襲いかかった。

「何っ！うわああっ！」

「ぐわああっ！」

「ぐわああっ！」

ライオトルーパー達はベノスネーカーの頭部両脇についている刃「ベノハーシユ」やベノスネーカーが吐き出す毒液で攻撃されている。

「ふんっ！」

ザシユ

「うわああっ！」

今度は王蛇がライオトルーパーの後ろから斬りかかった。

「はああ………」

『FINAL VENT』

王蛇は首を回した後、ベノバイザーにカードをベントインし、ファイナルベントを発動させ、ライオトルーパーに向かって走り出し、ベノスネーカーも王蛇の後ろにつく。

「はあああああつ・・・はっ！」

「シャアアアアアアッ！」

王蛇は空中に飛び上がり、ベノスネーカーが吐き出した毒液の毒液で勢いを乗せる。

「はあああつ！！！」

「くくくわあああつ！！！！」

王蛇の必殺技である連続蹴り「ベノクラッシュ」を食らい、ライオトルーパーが3人消滅した。

前方ではガイとガイの契約モンスターであるメタルゲラスがライオトルーパー部隊と交戦していた。

「はあつ！」

ガイがメタルホーンでライオトルーパーを攻撃する。

グサッ

「ぐあああつ！」

「くくく！！」

「グオオオオオツツ!!」

「うわっ!!」

別のライオトルーパーがガイに向っていくがメタルガラスによって阻止される。

「くそっ!各員射撃に変更しろ!!」

バン、バン、バン

ライオトルーパー達は格闘戦から射撃戦に変更するがガイは高い防御力を有するライダーであるためアクセレイガンの射撃をビクともしていない。

『FINAL VENT』

ガイがファイナルベントを発動させるとメタルガラスはガイの後ろに回る。

「はっ!!」

ガイはジャンプをし、メタルガラスの肩に乗るとメタルガラスはガイを乗せたままライオトルーパー達に向って走り出す。

「はあああっ!!」

「くくく、うわあああっ!!」「くく」

高速で突進し、目標を粉砕するガイの必殺技「ヘビープレッシャー」を食らい、ライオトルーパーは爆発、人数は17人に減らされた。

「なんて奴らだ。」

「お、俺達がここまでやられるなんて。」

「くそ、怯むな！いくぞっ！！」

「くっくっ、うおおおおっ！」「くっく」

多少戦意を失いながらライオトルーパー達はまだ向ってくる。

「ふっ！」

「はっ！」

王蛇とガイも向ってくるライオトルーパー達にそれぞれの契約モンスターと向っていった。

#### 搜索班第四班

こちらでは、既に戦闘は終わっていた。

残っていたのはライオトルーパーの一部の残骸と前後に勝利を勝ち取った金と白の二体のライダーとその二人のライダーの間で守られていた魔導師達だけだった。

勝負がついたのは、ほとんど一瞬だった。

「くっくくはあああああっ」「くっく」

前後からライオトルーパー部隊が迫ってくる中、最初に動いたのは白いライダー、ファムだった。

『FINAL VENT』

「クエエエエツ！」

「な、なんだ!？」

後方から迫ってきたライオトルーパー達の後ろからファムの契約モンスターであるブランウィングが現れた。

「クエエエエツ！」

「くくくう、うわあああつ!」「」「」

ブランウィングは翼で突風を起こし、その突風でライオトルーパー達が飛ばされた。

「ふっ!はあああつ!・・・ふっ!はっ!たあつ!」

「うわああああつ」

「ぐあああああつ」

「があああああつ」

突風で飛ばされ、向ってくるライオトルーパー達をファムはウィングスラッシャーで次々と両断していく。

「はあああああつ!」

「ぎゃあああつ!!!」

ファムが後方のライオトルーパー部隊の最後の1人を斬り終えたところで、今度はオーデインが動きだした。

『FINAL VENT』

ファイナルベントを発動させるとオーデインの後ろにオーデインの契約モンスターであるゴルドフェニックスが現れ、オーデインの背中に合体し、オーデインは宙を浮き、眩い黄金の光を放った。

「な、なんだこの光は!？」

「ま、眩しい!!」

黄金の光が辺りを包み、光が収まると前方にいたはずのライオトルーパー部隊の姿がなかった。

オーデインの必殺技「エターナルカオス」によって消滅したからだ。

「一体・・・何が起こったんだ？」

「や、さあ?」

突然ライオトルーパーが消滅したことに魔導師達はただ驚くことしか出来なかった。

インペラーは前、アビスは後ろを向き、それぞれのバイザーにカードをベントインする。

『FINAL VENT』

「ギイイツ!!」

「ガアアアアツツ!!」

「ギヤアアアアツツ!!」

『FINAL VENT』

「グオオオオンツ!!」

インペラーとアビスはそれぞれファイナルベントを発動させ、インペラーのところには多数のレイヨウモンスターが現れ、アビスの契約モンスターのアビスラッシャーとアビスハンマーがホオジロザメ型モンスター「アビソドン」に合体し、ライオトルーパー部隊に襲い掛かる。

「ギイイツ!!」

「ガアアアアツツ!!」

「ギヤアアアアツツ!!」

「うわあああッ!!」

「くっ!!」

「ぐああああっ！！！！」

多数のレイヨウモンスターが次々とライオトルーパー達に攻撃を加える。

「はあああっ！」

「がああああっ！！！！」

ライオトルーパーの1人が必殺技である左足の飛び膝蹴り「ドライブディバイダー」を食らい爆発した。

そして、アビソドンは目を横に伸ばし、エネルギー弾を発射するシユモクモードを発動させライオトルーパー達にエネルギー弾を発射した。

ドドドドドドドドツッ！！

「うっ！」

「ぐああああっ！！！」

エネルギー弾を発射し終え、今度はアーミーナイフ状のノコギリモードを発動し、ライオトルーパーに斬りかかる。

「グオオオオンッ！」

「ぎゃああああっ！！！」

「がああああっ！！！」

アビソドンに斬られたライオトルーパーは次々と爆発し、消滅していった。

「ふんっ！」

「ふっ！」

インペラーとアビスはそれぞれの契約モンスター達の攻撃でダメージを負っているライオトルーパー達に更に追い討ちをかけるため、ガゼルスタップ、アビスクローを装備し、向かって行った。

搜索班第六班

こちらの二体のライダーもインペラーとアビス同様、すぐにファイナルベントを発動させる。

『FINAL VENT』

『FINAL VENT』

オルタナティブ、オルタナティブ・ゼロがファイナルベントを発動させると二体の契約モンスターであるサイコログが一体ずつ現れ、バイク形態「サイコロダー」に変型した。

「はあっ！！」

オルタナティブ、オルタナティブ・ゼロはサイコロダーに乗り、コマのように回転させながらライオトルーパー達に向かっていく。

「うわあああっ！！」

「「「ぎゃああああつ!!」」」

オルタナティブ、オルタナティブ・ゼロの必殺技「デッドエンド」を食らい、ライオトルーパー達は前後合わせ18人に減らされた。

「くそっ!」

「なめやがって!!」

ライオトルーパー達はアクセレイガンを構え、オルタナティブ、オルタナティブ・ゼロに向かっていく。

「ふんっ!」

「むんっ!」

オルタナティブ、オルタナティブ・ゼロもスラッシュダガーを構え、ライオトルーパーに立ち向かう。

アースラ通信室

エイミイSide

今日は信じられないことばかり起こっている。

いきなり通信室にオーロラが発生し、その中から数体のロボットが現れて、持っていた銃を私達の方に向けてきた。

「隠れてっ!」

「ぎゃっ!」



「オーロラの説明は無理だけど、ロボットの説明はしてあげるわ。  
あのロボットはある世界の戦闘用の兵器で、灰色の機体はMS、モビルスーツ残  
りはASアーム・スレイブって呼ばれているわ。」

「モビルスーツ・・・アーム・スレイブ？」

「ちなみに私とブリッツをその種類に分けると私はASでブリッツ  
がMSなの。」

モビルスーツにアーム・スレイブ・・・どれも全く聞いたことがな  
い言葉ばかり。

「やっと来たわね。」

「えっ？」

私が考え事をしているといつの間にか私の足元にウルズ2が持つて  
いるライフルとは違うライフルとそのライフルのマガジンが10個  
近くあった。

「さっきまで何も無かったのに。これって一体？」

私はすぐにウルズ2に聞いた。

「フェニックスが本気を出せって言うてるのよ！送ってくるのが遅  
いけど！」

そっぴいながらウルズ2はライフルを手取る。

「ブリッツ、あんたの方は？」

「こつちもセーフティが解除されていますからいけます!」

「OK!あ、あんた耳塞いでなさい、すうううう」

私は言われた通り耳を塞ぎ、それを確認するとウルズ2は息を吸い  
?そして、

「ロツクンツロオオオルっっ!!」

ババババババババババツツ!!

そう言うと相手にライフルを向け発砲した。

「がっ!」

「ぐああっ!」

「くそっ!!!」

ウルズ2が放った弾は相手の腕や肩、足に次々と当たる。

「はっ!」

バシユ、バシユ、

今度はブリッツが盾から緑色のエネルギー弾を発射した。

「うわっ!くそっ!!!」

ブリッツが放ったエネルギー弾は相手の銃に当たり銃が爆発した。

「さあ、反撃開始よ！」

アースラ発令所

上と正面の両方から弾が飛んでくる中、こちらでもウルズ2同様、ファルケ達にライフルとマガジンが送られ、ウルズ6にはスナイパーライフル、アーバレストには散弾砲も送られた。

「へっ！こいつがあればいけるぜ！」

「同感だな。」

「俺の右肩のお礼をしてやるぜ！」

「派手にやるか。」

「ちょっといつまで喋ってるのよ！PS装甲でも痛いんだからね！」

反撃出来ることに喜びを感じていたウルズ6、ウルズ4、ウルズ3、ウルズ5に通信室のブリッツ同様、PS装甲で「フルメタル・パニック！」に登場するソ連製第二世代型AS「RK-92 サベージ」、同じく「フルメタル・パニック！」に登場し、ミスリルのM9と同等の性能を持つが電子兵装等では劣っているソ連製第三世代型AS「Zy-98 シャドウ」、「ガンダムSEED」に登場し、C・コスミック・イラEの世界の初のMSである「ザフト軍」の初代制式主力汎用量産型MS「ZGMF-1017 ジン」の実弾を全身を盾にしなから、今までファルケ達やスタッフを守っていたネブラブリッツがウルズ

6 達に文句を言う。

「ああ、すまなかつたなネブラブリッツ。では、俺とウルズ7で敵部隊に突っ込む、俺達が向ったらベルデはすぐにファイナルベントで敵の1人を無力化、ウルズ6は後方から援護しろ。」

「……」

「了解だ。」

「ウルズ3、4、5はスタッフを守りつつウルズ6同様援護、ネブラブリッツは現状を維持だ。」

「了解。」

「ええーっ！私まだこのままなの!？」

ファルケはネブラブリッツに謝罪をし、全員に作戦を説明し、ベルデは無言で頷き、ウルズ6、3、4、5は返事を返し、ネブラブリッツは再び文句を言う。

「我慢しろ。準備はいいな、軍曹？」

ファルケがアーバレストに確認を取る。

「肯定です、中尉。」

ファルケの質問にアーバレストは返事を返す。

「よし。では……いくぞっ！」

「了解っ！」

ファルケとアーバレストが同時に敵部隊に向って走り出す。

「馬鹿めっ！死にに来たのかよっ！！」

サベージ、シャドウ、ジンはライフルをファルケとアーバレストに一斉に向ける。

「牽制するぞっ！」

「了解っ！」

ファルケは上、アーバレストは正面に頭部に搭載されている「AM11 12.7mm チェーンガン」を発砲、敵を牽制する。

「うわっ！」

「くそっ！」

敵はチェーンガンで怯んでいる隙にベルデがバイオバイザーにカードを入れた。

『FINAL VENT』

ファイナルベントが発動するとサベージ達の後ろにベルデの契約モンスターであるバイオグリーザが現れ、自分の舌を伸ばした。

「はっ！」

ベルデは高く跳び上がり、バイオグリーザの舌に自分の足を巻きつける。

「むんっ！」

「うわっ！」

そのまま振り子の要領で相手に向かっていき、敵シャドウを捕獲する。

「はあああっ！！」

「があああっ！！」

捕獲されたシャドウはパイルドライバーの要領で地面に頭から激突させるベルデの必殺技「デスパニッシュ」を食らった。

「ふんっ。」

「がはっ！！！・・・あっ。」

ベルデのデスパニッシュでシャドウは沈黙した。

「お、おいっ！大丈夫か！！！」

「いっ！っ！」

上のサベージ達が全員ベルデにライフルを向ける。

「今だ、ウルズ7！」

「了解！！！」

ベルデが上の敵の1人を沈黙させたことで上の敵の目は全てベルデにいったためファルケ達側の警戒が無くなった。

その隙を付き、ファルケとアーバレストは上に跳び上がる。

「やるーっ！！！」

正面にいたサベージ達が跳び上がったファルケとアーバレストにライフルを向ける。

「死んっつがああああ！！！」

「俺達を忘れてんじゃねえよっ！！！」

ファルケとアーバレストが跳び上がったことで正面がクリアになり、後方で控えていたウルズ6がスナイパーライフル、ウルズ3、4、5が40mmライフルでファルケとアーバレストの援護射撃をする。

「ぐっ！！！」

「がっ！！！」

「ぐわああっ！！！」

M9達と違い、防御役になるネブラブリッツや最低でも椅子等の遮蔽物が無いため隠れることも出来ず、次々と弾を食らう。

「おいどうしt・・・うわっ!」

上にいたジンが下の騒ぎに気付き、下を覗くと跳び上がったファルケとアーバレストが通りすぎ、通りすぎる際にアーバレストが「OTOMERARA「ボクサー」57mm散弾砲」でジンの左足を打ち抜いた。

「何だ!？」

ジンの悲鳴とボクサーの銃声でベルデに気を取られていたサベージ達が一斉に後ろを振り返る。

ファルケは前腕部、手首したに設置されている「XM18 ワイヤーガン」を発令所の天井に向けて発射し、ワイヤーを使い更に上昇し、アーバレストはサベージ達の目の前に着地する。

「このっ!」

サベージ達はすぐにアーバレストにライフルを向ける。

「動くな、ウルズフ!」

「何!？」

サベージ達が見上げるとワイヤーで上昇したファルケが40?ライフルを発砲しながら落下してくる。

「く、くっそ!」

「うっ!」

「がああっ!」

「ぐわあああっ!」

頭上から降り注ぐ銃弾の雨にサベージ達は怯み、更に降り注ぐ銃弾によって1機のジンが右腕、シャドウ1機が両足、2機のサベージの内、1機が右足と左腕を、もう1機は胴体を撃ち抜かれた。

ファルケは落下後、サベージ達の後ろに着地し、しゃがんだ状態で右足で1機のサベージの足を払う。

「うおっ!」

足を払われたサベージはバランスを崩し、後ろに倒れ、ファルケは刀身部分がチェーンソー状になっているグルカナ이프の形状をした「IAI『クリームゾンエッジ』単分子カッター」でサベージの両腕を斬った。

「があああっ!」

「ヤロツ!」

ジンが銃を捨て、重斬剣で斬りかかる。

「ふんっ!」

「ぐわっ!」

ファルケは刀身部分に炸薬が内蔵された投げナイフ「ロイヤル・オ

ードナンスM1108 対戦車ダガー」をジンの頭部と胴体の隙間に投げ、刺さった対戦車ダガーは爆発した。

「責様っ……がつ！」

また別のサベージはファルケにライフルを向けた瞬間、アーバレストに足をボクサーで撃ちぬかれ倒れる。

「く、くそーーーっ！！！」

サベージは背中に装備されていた「ゼーヤB3M「グローム」HEATハンマー」を取り、アーバレストに向かっていく。

「………うるさい。」

「ぐっ！！！」

アーバレストもファルケ同様対戦車ダガーをサベージの頭部に投げ、沈黙させた。

「上の無力化は完了、見事だ軍曹。」

「ありがとうございます、中尉。」

「ふっ。さて、下にいる残りも片付けるぞ！」

「了解！」

そういつてファルケとアーバレストは銃に弾をリロードし、残りも無力化するために上から跳び降りた。

クロノチーム

「スマートブレインにはスマートブレインだな。」

『KAMEN RIDER!』

「変身!」

『FAIZ!』

フェニックスドライバーにカードを入れ、以前変身し、カイザとデルタと同じ世界の仮面ライダー「ファイズ」に変身した。

「あれは、ファイズさん!」

「また変わった。」

「ふんっ、ファイズで私達を倒せると?」

「ああ、ファイズはお前らと違いってこいつがあるからな!」

『FORM RIDER! FAIZ AXELFORM!』

俺はフォームライドを使い、トレーニングの時にサベージに使った「ファイズ アクセルフォーム」にフォームチェンジした。

「!!!しまった!!!」

「これって……まずいんじゃない？」

アクセルフォームにフォームチェンジした俺を見て、カイザとデルタはうろたえている。

「アポロン、BGM。今回はサビからいい。」

「イエス、マスター。」

今回のBGMは「仮面ライダー555」の「EGG eyes  
lazing over」だ。

「ま、またか!？」

「一体何処から流れてるの!？」

突然BGMが流れたことでクロノとリンディは驚いている。

「リュウガ。」

「……?」

後方で戦っていたリュウガは俺に呼ばれて振り返る。

「決めるぞ?」

「……」

俺がそう言つとリュウガは頷き、カードを引き抜く。

「いくぜ。」

俺はファイズアクセルのスタートスイッチを押し、リュウガはブラッグドラグバイザーにベントインする。

『START UP』

『FINAL VENT』

「はっ！」

「ウオオオオオオンッ！」

ファイズアクセルから音声が発せられた後、俺は超音速モードに入り、リュウガはファイナルベントを発動させ、リュウガの契約モンスターであるドラグブラッカーが現れ、龍騎と同様にリュウガの周りを回る。

「あっ！」

「また消えた！」

「あの仮面ライダー。龍を召喚した！」

「黒い・・・龍・・・」

『FINAL ATTACK RIDE! FAIZ!』

なのはとユーノが俺が消えたことに驚き、クロノとリンディはドラグブラッカーに驚いていると機械音声が聞こえ、その後ライオトル

パー達が円錐状の赤い光にロックオンされる。

「うっ！あああっ！」

「う、動けんっ！！」

ロックオンされたことでライオトルーパー達の動きは封じられた。

「ふっ！」

「ぐわっ！」

「はっ！」

「があああっ！」

「やあっ！」

「うわああっ！」

「たあっ！」

「がっ！」

「ふんっ！」

「ぐっ！」

「てやあっ！」

「うわあああつ！」

やがて、ライオトルーパー達をロックオンしていた円錐状の赤い光は複数の掛け声の後に次々とライオトルーパーに刺さる。  
ファイズ アクセルフォームの必殺技「アクセルクリムゾンスマッシュ」を食らいライオトルーパー達が爆発する。

『THREE・・・TWO・・・ONE・・・TIME OUT』

「はあああああつ！！！」

「ギャオオオオンツ！」

「「「うわあああああつ！！！！」「」「」

アクセルフォームが終了し、ファイズからフェニックスに戻ったと同時に後方のライオトルーパー達はリュウガの必殺技「ドラゴンライダーキック」を食らい、消滅したと同時に歌も終わった。

「う、嘘だろ！？」

「スマートブレイン第一、第二特務部隊のライオトルーパー達を、私達の部下がこんなにあつさり。」

「・・・まだ続けるか？」

カイザとデルタに俺はフェニックスドライバーを向け、リュウガはドラグセイバー、ライアはエビルウィップを構える。

「ど、どうするー！？」

「くっ、ここは撤退をするしか・・・（シュウウウウウウウん）っ！  
！！」

「んっ！？」

カイザ達は撤退しようしていたその時、カイザ達の後ろにまたオーロラが出現した。  
そして、誰かがこちらに向って歩いてくる音がしている。

「全くあれだけの戦力で向って行ったくせに返り討ちとは情けねえ  
なお前ら。」

オーロラの向こうから男の声が聞こえてきた。

「なっ！」

「何故貴方がここにいるのですか、ミスタ・Fe！！」  
アイアン

「こっちの任務が終わったんでな、見物に来たんだよ。」

やがて、男はオーロラから姿を現した。

俺は現れた男を見て驚いた。

「お前は・・・ガウルン！！！」

現れた男は「フルメタル・パニック！」に登場した残忍残酷で冷酷  
非情な性格の9つの国籍を持つテロリスト。

「フルメタル・パニック！」の主人公「相良宗助」とその所属組織  
「ミスリル」を苦しめた男「ガウルン」

「ほお、俺のことも知っているのか。仮面ライダーさんよう。」

「何故貴様がここにいる？」

「そんなの簡単だろうが。俺がこいつらの組織「スマートブレイン」だったか？その上の連中と他の関係者に雇われたからだよ。」

「俺が聞きたいのはそこじゃない！何故貴様が生きている！貴様は自分の世界で死んだはずだ！」

そう、ガウルンは既に死んでいるはずだった。

ガウルンは「フルメタル・パニック！TSR」で宗助に射殺され、更に宗助を道連れにするためにベットに仕掛けていた爆発物の爆発で吹っ飛んだはず。

「ああ、確かにあの時俺は死んだはずだった。だが、ご覧の通り俺は生きてる。身体の方も再生治療のおかげで元通りだ。」

「再生……治療！」

「確か、イノベーターとかいったか。そいつらのおかげでな。」

「イノベーターだと!？」

ガウルンだけでなく、イノベーターも関わっていることに俺は更に驚かされる。

「さて、話はこれで終わりだ。そろそろ俺も戦わせて貰うぜ。変身。」

「

「システム起動。」

ガウルの首に下げられていたドックタグが光を放った。光が収まり、ガウルンを見ると銀色のロボットに姿を変えていた。

「何なの、あのロボットは？」

「僕が戦った青いロボットとも違う。」

リンディとクロノはガウルンが変身した姿に警戒する。

「フェニックスさん、あれが何か知ってますか？」

ユーノが俺に尋ねる。

「……ヴェノム。」

「ヴェノム？」

ヴェノム

正式名は「コダール」と呼ばれている。

頭部分にポニテール状の放熱索が設けられている「アマルガム」と呼ばれる組織のラムダ・ドライバ搭載第三世代型AS。

現在のガウルンは「Plan 1056 コダール初期型」の姿をしている。

「お前もミスリルの連中と同じ言い方をするのか。」

「……その姿、初期タイプか。」

「その通りだ。そこまで知ってるとは流石に驚くぜ。今はまだ完全に調整が出来ていないが、こいつでも十分な力があることも知っているんだろ？」

「ラムダ・ドライバか。」

「ご名答だ。正解したから褒美をやるぜ！」

そういつとガウルンは「マウザーMGK35mmライフル」を向け、発砲した。

「ぐああっ!!」

「フェニックスさんっ!!」

35mm弾を食らい、俺は吹っ飛ばされた。

「つつう〜!このっ!!」

フェニックスドライバーの銃口をガウルンに向け、4 / 5発発砲した。

「ふんっ。」

しかし、放たれた銃弾はガウルンに届かずガウルンの前で止まり、消滅した。

「な、なんだ今のは!?!」

「っち！ならこれでどうだ！！」

驚いているクロノを無視し、フェニックスドライバーにカードを入れた。

『ATTCK RIDE！ BLAST！』

フェニックスブラストがガウルンに襲いかかる。

「ほお、中々速いな。だがっ！」

ガウルンが左手をかざすとフェニックスブラストが全弾止められ、爆発した。

「これも駄目か、ならば！」

カードケースからカードを取り出しドライバーに入れた。

『AS RIDE！』

「変身！」

『ARBABLEST！』

俺はガウルンに対抗するために「ARX-7アーバレスト」に変身した。

「！ふっ、ふふ、ふっははははははっ！！」

俺がアーバレストに変身すると突然ガウルンが笑い出した。

「こいつぁ驚いたぜ。まさか、カシムの機体にまで化けるとわな。楽しくなりそうだぜ!!」

「いくぞっ!」

『ATTACK RIDE! BOXER!』

アタックライドでアーバレストの武装の「57mmボクサー散弾砲」を装備し、ガウルンに発砲する。

「ふんっ!」

しかし、ボクサーの弾はフェニックスドライバーの弾やフェニックスプラスト同様、ラムダ・ドライバによって防がれた。

「まだまだっ!」

今度は2枚のカードを取り、2枚連続でカードをドライバーに入れる。

『ATTACK RIDE! ANTI TANK DAGGER!  
! MONOMOLECULAR CUTTER!』

アタックライドで「対戦車ダガー」と「単分子カッター」を装備した。

「くらえっ!」

対戦車ダガーをガウルンに向けて投げた。

「はっ！そんなもんで。」

ガウルンはラムダ・ドライバで対戦車ダガーを潰した潰された対戦車ダガーは、爆発を起こし爆煙が舞い上がった。その瞬間、俺はボクサー散弾砲を捨て、走り出す。

「ふん。たかが戦車ダガーごときで。「はあああつ！」っ！！」

舞い上がった爆煙を煙幕の代わりにし、ガウルンに接近し、単分子カッターを振り下ろす。

「ちっ！」

しかし、ガウルンも単分子カッターを取り出し、互いのカッターがぶつかり合い火花を散らす。

「少しは出来るようだな。だがっ！」

「くっ！」

ガウルンは更にパワーを上げ、俺は押されてしまい一旦距離を取った。

「おいおい、この程度なのか？お前もカシムのようにラムダ・ドライバを使ったらどうだ？」

ガウルンが余裕そうに聞いてくる。

「……」

カードケースからカードを取り出し確認するが、やはりラムダ・ド  
ライバのカードには何も描かれていない状態だった。

「くっ、ライア！」

「……」

ライアは無言で頷き、カードをエビルバイザーにベントインした。

『FINAL VENT』

ファイナルベントを発動させるとライアの契約モンスターであるエ  
ビルダイバーが現れ、ライアはエビルダイバーの背中に乗り、必殺  
技「ハイドベノン」を食らわせようとした。

「甘いぜっ!!！」

ガウルンはライアの再び左手をかざすとライアのハイドベノンを止  
めた。

「!!!!！」

そして、ガウルンは左手をかざした状態で右手で青白い球体の塊を  
作った。

「受け取りな！」

「がああああっっ!!！」

放たれた球体はライアを両断し、ライアは爆発を起こし消滅した。

「はっ、仮面ライダーってのは所詮こんなもんなのかあ？」

「くそっ！」

俺は次のカードを取り出そうとカードケースに手を伸ばした。

「CHECK！」

『EXCEED CHARGE』

「！！しまった！」

音声で聞こえた後、俺は反射的に前を見た。

するとデルタのデルタムーバーから三角錐状の光が放たれ、俺はポイントされた。

「う、があああっ！」

ポイントされたため、俺は動けないでいる。

「よっしゃあっ！これで決めるぜ！！！」

「いいからさっさと決めなさいよ。」

「ふんっ、手応えがなかったな。がっかりだぜ。」

「OK、俺に任せろ！どりゃあああああっ！！！」

デルタが跳び上がり、必殺技「ルシファーズハンマー」を俺に食らわせようとしている。

「マスター!!」

アポロンが俺に叫ぶ。

でも、動けない。

「く……そ……」

諦めかけたその時だった。

「ブレイズキャノン!!」

「ぎゃああああっ!!」

ルシファーズハンマーを食らう寸前に後ろから青い魔力砲が放たれ、空中のデルタに当たり、デルタは飛ばされた。

「なっ!!」

「ああん？」

「痛たたたっ。何すんだよお前!!」

デルタが魔力砲を放った人物、クロノに文句を言う。

「あんだ、何のつもり？」

カイザがクロノに質問をする。

「その人物にはまだ色々と聞きたいことがある。だから、やられては困るんだ！」

「……あんたさあ、私さつきも同じこと言わなかったっけ？ 邪魔すんじゃないわよって!!」

カイザはカイザブレイガンを向け、発砲した。

「ぐっ！」

クロノはシールドを張ろうとしたが間に合わず、フォトンブラッドの弾がクロノの左肩を掠めた。

「クロノ！」

リンディがクロノに駆け寄る。

「クロノ、大丈夫？」

「は、はい。掠めただけです。」

「んん？ その反応の仕方、お前ら親子か。なら纏めて始末してやるよ。」

ガウルンが再び青白い球体の塊を作り出す。

「やめ……ろ……ガ……ウルンっ！」

俺は未だにデルタのポインターで動きを封じられている。

「安心な仮面ライダー。お前もすぐにこいつらの後を追わせてやるからよ。」

「や……める!!」

「じゃあな!!」

ガウルンが球体を放とうとする。

「つつつやめろおおおお!!!!!!」

デルタのポインターを無理やり破壊し、リンディ達の前に出た。

「一緒に吹っ飛びやがれ!!」

ガウルンの手から球体が放たれた。

「やらせて、たまるかああああつつ!!」

「システム起動!!」

俺が叫ぶと、俺の身体、アーバレストの背中から放熱板が展開され、青白い斥力場が発生し、ガウルンが放った球体とぶつかり、消滅させた。

「何っ!？」

「何が……起きたの?」

「はあ、はあ、はあ、今は・・・」

「エマーゼンシー緊急システム及びラムダ・ドライバ正常に作動、ギリギリで間に合いましたね。」

クロノ、リンディ、そして俺が啞然としているとアポロンが話し出した。

「アポロン、今はまさか。」

「イエス、マスター。今のがラムダ・ドライバの力です。」

「でも、ラムダ・ドライバのカードは・・・」

「それに関しては後で説明します。現在のラムダ・ドライバの使用には限りがあります。」

「どれぐらいだ？」

「5分が限界です。正確的には、残り4分23秒です。」

「・・・分かった。」

残り時間を確認し、構えと取った。

「ふっふっふ。ついにラムダ・ドライバまで使ってきたか。ますます楽しくなってきたじゃねえか!!!」

ガウルンが単分子カッターを構え、向かってくる。

「くっ！」

俺も単分子カッターを取り、ガウルンの攻撃を受け止めた。  
俺を破壊しようとするガウルンの斥力場、その攻撃から自分を守る  
うとする俺の斥力場が互いにぶつかり合う。

「はっ、思い出さず。俺が初めてカシムの白いASとラムダ・ドラ  
イバで戦った日のことをっ！！！」

「あっっそ！！！」

「むっ！」

俺は力を振り絞り、ガウルンを押し返し、バックステップで一旦距  
離をとった。

そして距離をとると同時に先程捨てたボクサー散弾砲を拾い、ガウ  
ルンに構えた。

「くらええええええええ！！！」

ボクサー散弾砲から斥力場の力が加わった弾が発射された。

「ちっ！！！」

ガウルンは左手をかざし、弾を防ぐ。

しかし、それでもまだ弾の勢いは死んでいない。

「くっ！くっ！くっ！くっ！！！」

ガウルンも弾に突破されまいと力を込める。

そして、

ドガアアアアアアアアアアン！！

爆発が起こった。

周りは忽ち爆煙に包まれた。

「はぁ、はぁ、はぁ、やったか？」

「まだ不明です、マスター。」

警戒を強める。

「ふっ、ふふふっ！」

「！」

煙の中からガウルンが姿を現し、俺は再びボクサーを構える。

「本当ならまだまだやり足りないんだがな。くっ！」

ガウルンがよろける。

「オーバーヒートだ。これだから未完成の機体は困るぜ。」

そついうとガウルンの後ろに銀色のオーロラが出現した。

「今回は引かせてもらっぜ、行くぞお前ら。」

「ちっ、しょうがないわね。」

「覚えてるよ!!」

ガウルン、カイザ、デルタはオーロラの中に消え、オーロラも消えた。

ガウルン達が撤退したのを確認するとアーバレストの一部の装甲が開き、体内の熱が排出された。

「はあ、はあ、はあ、」

「マスター、各チームより連絡、敵部隊は銀色のオーロラで撤収したとのことです。」

「そう・・・か。」

アーバレストを解除し、フェニックスの状態でリンディ達に近づいた。

「大丈夫・・・か？」

「あ、ああ。僕の掠り傷ぐらいだから問題ない。」

「そう・・・か・・・よかつて・・・」

クロノ達の安全を確認をし終わると突然足に力が入らなくなり、変身が解除され俺は倒れた。

「あっ!」

「ちょ、ちょっと!」

「だ、大丈夫ですか!？」

「しっかりしろ!！」

意識が朦朧とする中、フェニックスの変身だけで無く、オールドライドの効果も解除された。

「えっ?」

「じ、これは……」

「子ども?」

「の、野田……君?」

なのは達が驚く中、俺の意識がだんだんと薄れていった。

第十五話 止まらぬ戦い、現れた（カイ）と（デルタ）と九龍（ナインド

ARX-7アーバレスト 「いやー、久しぶりに投稿したなあ。」

健悟「今回は話が更にカオスになっているな。」

アポロン「全くです。」

ARX-7アーバレスト 「これはこれで、色々と盛り上がると思  
うけど。」

健悟「それにしても相変わらず文が長いな。もう少し読者のことも  
考えたらどうだ？」

ARX-7アーバレスト 「だって気づいたらいつの間にかこんな  
に書いてたんだもん。」

健悟「……まあ、頑張れ。」

ARX-7アーバレスト 「うん。さーて、そろそろ次回予告いこ  
うぜー！」

健悟「次回『第十六話 休息と交渉』です。」

アポロン「みなさまのご意見とご感想をお待ちしています。」

ARX-7アーバレスト 「次回もお楽しみにー！」

## 第十六話 交渉（前書き）

タイトルを多少変更しました。  
では、どうぞ！

## 第十六話 交渉

「う、うううん……？」

目を覚ますと俺はベットで寝ていた。

「……知らない天井だ」

「何をお決まりの台詞を言っているのですかマスター」

「アポロン？」

「我々もいます」

寝た状態で首を左側に向けると椅子の上にフェニックスドライバー、アポロンが置かれ、ファルケ、アーバレスト、ウルズ2、ウルズ6、ブリッツ、ネブラブリッツ、龍騎、ナイト、ゾルダ、タイガ、ガイ、アビス、オーディン、ファム、リュウガ、オルタナティブ、オルタナティブ・ゼロが立ち並んでいた。

王蛇、シザース、インペラー、ベルデは壁にもたれかかっていた。次に右側を見ると入り口の横にM9が1体立っていた。

「ここは……一体、それに俺は……」

「ここはアースラの医務室です。マスターは戦闘終了後に意識を失い倒れたのです。恐らく休憩無しでの連続戦闘、ガオガイガーへの合体、慣れていないマスクドライバーシステムの使用、緊急システムでのラムダ・ドライバの使用が原因と思われる」

「そうか。・・・あっ」

「どうしました、マスター？」

「・・・身体、縮んでる」

俺の身体が20代の身体から小学3年生の身体に戻ってることに気付いた。

「こちらにも戦闘の影響でオールドライドの効果が解除されました。皆様驚かれていましたよ」

「・・・皆様ってことは、高町も？」

「イエス、正体がバレました。そして、とても驚かれていました」

「そうか」

高町に正体がバレたか。  
後で説明するのが面倒だな。

「俺はどれ位意識を失っていた？」

「8時間42分46秒です」

細かいな、コイツ。

「そうか。ところで何でライダーやファルケ達がまだ居るんだ？戦闘は終わったからカード戻っていいんだぞ？」

「そうなのですか・・・（ピリリッ、ピリリッ）っ！」

アポロンが何か言おうとした時に通信が入った。

「マスター、外のM9、ウルズ4、5から通信、リンディ提督達がマスターに面会したいそうですが、いかがなさいますか？」

M9の数が足りないと思ったら、残りは外にいたのか。

「問題ない、通してあげてくれ」

「・・・イエス、マスター」

アポロンが歯切れの悪い返事を返すとドアが開き、リンディとクロノ、エイミィ、なのは、ユーノ、数名の武装局員が入ってきた。そして、何故かライダーとファルケ達が警戒をしている。

「目が覚めたのね」

「ええ、先程」

「お、おはよう野田君」

「おう、おはよう高町」

「えっと、座っていいかしら？」

「どうぞ」

リンディが椅子に腰掛け、俺も身体を起こした。

「ああ、無理しないで、そのままでもいいわよ」

「いえ、大丈夫です」

「そう、気分はどうかしら?」

「大丈夫です」

「よかった。それで、目を覚まして早速で申し訳ないんだけど、色々お話を聞かせてもらえないかしら?」

「俺のことやさっきの敵について……ですか?」

「ええ」

「……お断りします」

「……」

「何っ!」

「えっ!?!」

俺が断るとリンディは黙り、クロノとエイミィは驚きの声を出す。

「……理由を聞かせてもらえないかしら?」

リンディは優しい声で質問をするが目はとても真剣だった。

「俺は貴女方の味方ではありませんから」

「でも野田君、さっき私達を助けてくれた！」

なのはが若干動揺しながら言う。

「高町達だけではあいつら、ライダーやロボット達を倒すことが出来なと思ったから戦っただけだ。それにあいつらの狙いは俺だった。無関係の貴方達を巻き込む訳にはいかなかったから一時的に守っただけで、味方もなっただ覚えはない」

「あっ」

「どうしても、教えてくれないのかしら？」

再びリンディが質問してくる。

「はい」

「そう。では、質問を変えます。どうしたら、貴方は私達の味方になっくれますか？」

「か、かあさっつ、艦長!？」

リンディの質問にクロノが驚いた。

「.....」

「.....」

俺とリンディは黙ったまま互いを見る。

「……………はあ、こうゆう時はどうすればいいのか分からないんですか？」

「な、何が言いたんだ!？」

「こおゆう時は断られる可能性があったとしても、駄目元で頼んでみるのが普通だと思いますが？」

「……………え?」「……………」

俺の台詞にリンディ達がポカンとしていた。

「それもそうね」

リンディは椅子から立ち上がり、俺に頭を下げた。

「お願いです。私達時空管理局に貴方の力を貸してくれませんか？」

「……………お断りします。俺は時空管理局を信用出来ませんから」

「そう……………ですか」

「どっちなんだ!」

「落ち着けクロノ執務官」

「落ち着いていられるか!人に期待させておいて結局その答えか!」

ギャーギャーと五月蠅いなコイツは

「はあ、人の話をちゃんと聞いてたのか？」

「どう言う意味だ！」

「俺は時空管理局は信用出来ないと言ったが貴方を信用出来ないとは言っていない」

「……えっ？」「……」

再びクロノとエイミィ、なのは、ユーノがポカンとしている。

「それって、個人としてなら信用してくれるってことなのかしら？」

リンディは冷静に質問をしてきた。

「そう思ってくれて構いません」

「……そう、分かりました。では、ここからは時空管理局員としてではなく、私個人として改めてお願いします。貴方の力を私に貸してください」

リンディが再び頭を下げた。

「分かりました。ただし、条件があります」

「条件？」

「はい。まず話すことは話しますが今は極一部分のことしか話さない。

次に俺の存在を上にも報告せず、これまでの戦いで入手、及び今後の戦い入手する俺に関する全ての記録を時空管理局の渡さないで下さい」

「どうしてなの？」

「自分で言うのもなんだが、俺の力は強力すぎる。もし俺の力を知ったら悪用しようとする者が現れる可能性がある」

俺は質問をしたエイミーに説明した。

「ところで、高町にスクライア、ここにいるってことは管理局に協力するのか？」

「う、うん。」

「は、はい。」

「そうか。ならば、今後の俺の戦果は全てクロノ執務官、高町、スクライアの戦果として報告してください」

「えっ？」

「もし、この条件を受け入れてもらえないのなら協力はお断りします」

「なるほど。分かりました、その条件を飲みましょう」

「ありがとうございます」

俺はリンディに頭を下げた。

「それじゃあ……えーっと野田君でいいのかしら？」

「ああ、はい、そうです。野田 健悟といます。よろしくお願ひ  
します」

「よろしくね健悟君。あ、こちらの子は通信主任兼執務官補佐の  
イミィよ」

「エイミィ・リミエッタです、よろしくね」

「こちらこそ」

「さて、早速色々と聞きたいんだけどいいかしら？」

「どうぞ」

「最初の質問だけど、さっきまで大人の姿をしてたけど、今はその  
姿よね？あれは、一体どういうことなの？」

あー、やっぱりその質問をしてくるかあ。

まあ、大人がいきなり子どもの姿になったら驚くよな。

「あの姿は特殊な能力を使って姿を変えていたんです。貴方方魔導  
師で言うところの変身魔法のようなものです」

「変身魔法のようなものねえ」

「はい」

「ちなみに今の姿が本来の姿なんだよね？」

「はい、そうです」

まあ、本当は18歳なんだけどな。

「あ、あのお。私も質問してもいいですか？」

なのは小さく手を上げている。

「ええ、大丈夫ですよなのはさん」

リンディが笑顔で返事を返した。

「えっと、野田君」

「なんだ？」

「仮面ライダーって一体なんの？」

うーん、ある意味なのはらしい質問だな。

まあ、この質問も直ぐに来ると思ってたけどな。

「あー、話してもいいけど多少長いぞ？」

「うん、大丈夫だよ」

「皆さんは？」

「大丈夫よ」

「それなら「マスター」つなんだ？」

俺が話そうとした時にアポロンが割り込んできた。

「本当に話すおつもりですか？」

「そうだが、何か問題でもあるのか？」

「……いいえ、マスターがそうご決断したのであれば私は何も言いません。割り込んでしまって申し訳ありません。」

「？まあ、別にいいが。では、高町の質問の仮面ライダーについてつだったな」

「うん」

「リンディ提督やクロノ執務官達時空管理局やスクライアはもちろん知っていると思うが、この世界の他にもいくつもの世界がある。その中には見た目は同じ世界ではあるが実は異なった世界、つまり並行世界も存在する。そして、仮面ライダー達はそれぞれ別々の世界でそれぞれの世界の敵から平和を守るために戦う戦士、それが仮面ライダーだ」

「それぞれの世界と敵？」

「俺がクロノ執務官と戦った時に変身したライダー「スカル」は、『仮面ライダーW』と呼ばれるライダーの世界の仮面ライダーで、「ドーパント」と呼ばれる怪人と戦い、「ガタック」は『仮面ライ

「ダーカブト」の世界で「ワーム」と呼ばれる怪人、「龍騎」は「仮面ライダー龍騎」の世界で「ミラーモンスター」と呼ばれる怪人、そしてフェニックスの時に一時的に変身した「ファイズ」は「仮面ライダーファイズ」の世界でオルフェノクと呼ばれる怪人と戦っている。今言った他にもまだライダーとその世界がいくつも存在している」

「ドーパントって確か地上で君が結界内で戦った連中のことか？」

「それにオルフェノクって小規模次元震が起きた時に現れたあの灰色の怪人のことですか？」

クロノとユーノがドーパントとオルフェノクに遭遇したことを思い出す。

「その通りだ、クロノ執務官、スクライア。あの時に戦ったのがマスカレイドドーパント、そしてスコープオンオルフェノクだ」

「ドーパント、オルフェノク・・・それは一体どういう存在なのか詳しく聞かせてもらおうか？」

「別にいいが、その代わりに条件を追加させてもらおうぞ？」

「なっ！？なんでそうなる！！」

俺が条件を追加することを告げるとクロノが怒鳴った。

「俺は本来なら隠しておきたいことを話すんだ、それは俺にとってデメリットでしかない。だから協力し話す代わりに俺が出す条件を飲んでもらう、これなら俺にもメリットがある。ギブアンドテイク

ってやつだ」

「ふざけるな！そんなことがd「クロノ」っ艦長……」

リンディがクロノの名前を呼ぶとクロノは黙った。

「それで、追加の条件とは？」

「最低限の指示には従いますが、俺に独自行動することを許可して貰いたい」

「なんだと!?!」

クロノ、今俺はリンディと交渉してるのにどうしてお前がすぐに反応するんだ？

「どうしてかしら？」

……リンディさん、ちょっと目が怖いです。

「俺は出来るだけ個人で行動する方が気が楽だからだ。俺はワンマンアーミー、たった一人の軍隊なのさ」

「「「「??.?」」」」

皆が首を傾げた。

ミスターブシドー、やっぱりこの台詞は意味不明みたいだよ？

「で、どうなんですか？受け入れて貰えますか？」

「もし、仮に断つたら？」

「今された質問以降の質問には一切返答しません」

「……分かりました。その条件も受け入れましょう」

少し考えた後、リンディは条件を飲んだ。

「ありがとうございます。では、ドーパントとオルフェノクについてでしたね？」

「ええ」

「ドーパントは地球のあらゆる記憶が収められているガイアメモリと呼ばれるUSBメモリ型の生体感応端末を身体にドーピングすることで使用者をドーパントに変身させます」

「そういえば、確か野田君も同じ様なやつを持ってなかったっけ？」

「ああ、あるぞ？」

俺は懐から「S」と書かれた黒いガイアメモリ「スカルメモリ」を取り出した。

「これが俺を仮面ライダースカルに変身させたガイアメモリ、スカルメモリだ」

「…………へえ…………」

なのは達がスカルメモリを珍しそうに見る。

「このガイアメモリ、あいつらが使っていたのと少し違うな？」

「ああ、このガイアメモリは純正型のガイアメモリなんだ」

「純正型？」

「ガイアメモリには俺が持っている純正型とあいつらが使っているタイプがある。俺が使っているガイアメモリは大丈夫だが、あいつらが使用しているガイアメモリは使い続けると使用者の感情や精神を蝕んでしまう危険なタイプなんだ」

「感情や精神を蝕む・・・」

「そんな危険な物があるなんて」

「そしてオルフェノクは人類の進化形態と呼ばれ、死者が蘇った怪人のことです」

「！！死者が・・・蘇った怪人！？」

「そんな馬鹿な！」

リンディとクロノが驚く。

まあ、普通は信じられないだろうけどな。

「本当です。しかしオルフェノクになるには適正があり、適合しなかった人間は灰となり、死亡します。」

「では、あの男性は適合したからオルフェノクになれたんですか？」

「その通りだ」

「でも、どうしてその仮面ライダーの世界の怪人達がこの世界にいるんだろう」

「恐らく、オーロラを使ってこちらの世界に来たんだろう」

「あの銀色のオーロラか!？」

クロノの質問に俺は頷いた。

「あの銀色オーロラは一体何なの？」

「あのオーロラは、並行世界を渡り歩くためのもの、簡単に言えばゲートだな。」

(しかし、あの銀色のオーロラは、海東にキバーラ、鳴滝と「仮面ライダーディケイド」に関する人物が使うものなのに、なんで「フルメタル・パニック!」のガウルンがああオーロラを使ってるんだ? あ、そういえば)

俺はあることを思い出し、椅子に置いてあるフェニックスドライブバーを手を取った。

「アポロン、そろそろ説明してくれないか？」

「何をですか？」

こいつ、忘れてるな。

「ガウルンと戦った時、俺がアーバレストになった時、なんでカードを使つてないのにラムダ・ドライバを使えたのかだ」

「確かにマスターはラムダ・ドライバのカードを使用していません。しかし、私の中には緊急時のみにカードを使用せずにその機体の特殊システムを発動させることが出来る緊急システムエマーシエンシーが搭載されています」

「ほおー」

「しかし、緊急システムによるシステムの解放の限界時間は5分が限界であり、一度使用すると約一ヶ月は使用出来ません」

「成程」

「一ヶ月かあ。」

俺自身も頑張らないといけないけど、出来ればその間にカードの封印が解けていればいいが。

「ねえねえ、健悟君」

「はい？」

「そろそろ、そのデバイスについて説明してくれないかな？」

そついいながらエイミィはフェニックスドライバー「アポロンを指さす。」

「いいですけど、その代わりに条件追加で」

「またか！」

「…………クロノ、一々うるさい。」

「落ち着きなさいクロノ執務官」

リンディがクロノに注意をする。

「は、はい」

「それで、次の条件の内容は？それと他にも条件があるならついでに全部言っして下さい」

「…………分かりました。では、条件を出させてもらいます。まず俺の相棒、アポロンや他のライダーシステム等の解析及び俺の許可無しで触れることは一切許しません」

「何故ですか？」

「さっきも言ったように俺の、いや、ライダーの力を悪用する者が現れる可能性がある。それを防ぐためにもデータを取らせる訳にはいかないのです」

「しかし……」そこまでにしてはどうですか、リンディ・ハラオウン提督？」「っ！」

「ファルケ……」

リンディが話続けようとした時、ファルケがリンディに話しかけた。

「我々の指揮官、健悟隊長はデータを取らせないとっている。それをどうしても取ると言っているのであれば……」

『ADVENT』

『SWORD VENT』

『SHOOT VENT』

『SWORD VENT』

『STRIKE VENT』

『STRIKE VENT』

『HOLD VENT』

『SPIN VENT』

『STRIKE VENT』

『STRIKE VENT』

『SWORD VENT』

『SWORD VENT』

『SWORD VENT』

『SWORD VENT』

『ADVENT』

「ウオオオオオンッ！！」

ファルケの言葉を合図に上から龍騎、ナイト、ゾルダ、王蛇、シザース、ガイ、ベルデ、インペラー、タイガ、アビス、ファム、オーデイン、オルタナティブ、オルタナティブ・ゼロ、リュウガはカードデッキからカードを引き抜き、カードをバイザーにベントイン、スラッシュし、アドベントでドラグレッダー、ドラグブラッカーを呼び出した龍騎とリュウガ以外はソードベント、ストライクベント、ホールドベント、スピンベントのカードでそれぞれを武器を装備し、ブリッツとネブラブリッツはトリケロスに装備されている50mmレーザーライフルを構え、アーバレストはボクサー散弾砲、ウルズ2、ウルズ6、ウルズ3は40？ライフルを構え、更に外にいたウルズ4、ウルズ5が部屋に入り、ウルズ2達同様40？ライフルを構え、ファルケは「クリムゾンエッジ」単分子カッターを抜き、刃をリンディ達に向ける。

「我々も容赦しませんよ？」

「くっ！！」

ファルケ達が構えるとクロノはS2Uを起動させ、魔導師達もデバイスを起動し、構える。

「止める、ファルケ。武器を下ろせ」

俺はファルケ達に武器を下ろすように言った。

「しかし、隊長」

「聞こえなかったのか？武器を下ろせ、ウルズ1」

今度はファルケをコールサインで呼んだ。

「分かりました」

ファルケが単分子カッターを仕舞うと全員武器を下ろし、ドラグレッツダーとドラグブロッカーはミラーワールドに戻り、ウルズ4、5も再び部屋の外の警備に戻った。

「では、条件の続きを言わせていただきます」

俺は引き続き、追加の条件を出した。

「次の条件は今回の事件に関わっている少女、フェイト・テストアロツサとその関係者を逮捕した場合、無罪放免とまでは言わないが、ある程度罰を軽く出来るようにしてもらいたい」

「なっ！何故だ」その次の条件だが「っ聞け！！」

「クロノ執務官にはフェイト・テストアロツサに手を出させないでほしい」

「なんでだ！！」

「だってお前がいると色々邪魔だもん」

「ふざけるな」そして、最後だが「だから聞けって!!」

「この事件が解決出来た場合、何か報酬をもらう」

「報酬……ですか？」

「ええ」

「……ちなみに断った場合は？」

「その場合は協力するのを辞めます。俺は自分にメリットのないこととはしない主義なので。あとこれまで出した条件、まあクロノ執務官が手を出さないってのはまだ大目に見るとして、それ以外の条件を一つでも破った場合、残念ですが、俺は全力で貴方達を潰し、時空管理局を破壊します」

「脅すつもりか！」

「そう思ってもらって構いません。それでどうしますか、リンディ提督？」

「……一ついいかしら？」

「どうぞ」

「貴方はさっき、ギブアンドテイクつといいましたね？確かに今の条件を私達が飲めば、貴方にとってはメリットにはあるわ。でも、それだと逆に私達にはデメリットにしかならない。さっきと言っていることと矛盾していますか？」

ほう、中々鋭いな。

「メリットならありますよ。俺が協力することで貴女方の戦力は上がる。更に俺の活躍をクロノ執務官、高町、スクライアの物にする。ことで彼らの評価も上がる。そして何より、さっきの様にライダー達やライダーの世界の怪人、ロボット達に襲われた時は俺が相手をする。恐らく貴方達の力ではライダーや一部のロボットならまだしも、怪人やラムダ・ドライバ搭載機には対抗出来ないでしょうしね」

「ラムダ・・・ドライバ？」

「さっき、健悟君がデバイスと話してた時にも言ったよね？」

「野田君、ラムダ・ドライバってなんなの？」

「ラムダ・ドライバは、使用者の強い意志を物理的な力に変換する特殊な兵器システムだ」

まあ、俺自信もまだラムダ・ドライバについては、不明な点が多いけどな。

「意思を物理的な力に変換って具体的にはどんなものですか？」

「例えばだが、自分や仲間を守りたいと強く想うことで相手が撃った弾を跳ね返したり、無力化したり、攻撃面では逆に相手の防御や装甲を貫くと想うことで銃火器の威力を上げたり、更にはなんの武器を無しで相手をバラバラにしたり、車両に乗っている場合は内部のみを破壊することも出来るんだ」

「そんな馬鹿なことがあるか！」

「信じられないかもしれないが真実だクロノ執務官。現にあの時、ラムダ・ドライバの力を目の当たりにしたはずだ」

「あの銀色のロボットのことですね？」

「その通りだ、スクライア」

なのは、ユーノ、クロノ、リンディが俺とヴェノム戦を思い出す。

「そんなに凄かったの？」

あの場に居なかったエイミーがクロノに聞いた。

「ああ、彼が放った銃弾が全く効かなかったり、仮面ライダーの1人が放った必殺技を止めて、一撃で撃破したんだ」

「一撃で・・・」

「ああ、ちなみにあの機体はまだ未完成の機体で、完成型は量産もされているぞ？」

「！！あの威力で未完成で量産型だと！？」

まあ、俺もあれが量産型って知った時は驚いたけどな。

「・・・それで、あのラムダ・ドライバの対応策はあるですか？」

「現段階ではつきり言えることはラムダ・ドライバに対抗するには

ラムダ・ドライバによって発生される防御力を上回る程の攻撃を行うか、こちらにも相手と同じラムダ・ドライバで対抗するしか方法はありません」

「……………」

「……………」

リンディ達は黙り込んでしまった。

「話を戻しましょう。俺が出した条件は飲んでもらえますか？飲んでいただけるとすれば、今後ライダーやラムダ・ドライバ搭載機が現れた場合、対抗は俺が行いますし、今回の事件も手伝います。あとリンディ提督達だけ特別にある程度のライダーや怪人、あのロボット達の情報を教えることも約束しますがどうしますか？」

「あのロボット達って、アーム・スレイブとモビルスーツのこと？」

「！！何故その呼び方を？」

「えっと、ウルズ2に教えてもらって」

「……………」

俺はウルズ2を見る。

「ああ、大丈夫だって。教えたのは呼び方だけでそれ以外は教えてないから」

……………ならいいか。

「アーム・スレイブとモビルスーツとは一体？」

「ここから先は、条件を飲んでいただければ話します」

「……………最後にもう一ついいかしら？」

「なんです？」

「貴方は条件の中にあの黒衣の少女とその関係者の罪を軽くするよ  
うに言っていました。何故貴方がそのような条件を出すんですか  
？あの子とどう言う関係なんですか？」

「うーん、一番面倒臭い質問するな。」

皆の視線、特になのはとクロノが凄く見てるよ。

「別になんの関係もありませんよ。俺があの子に手助けをしていた  
のは単なる気まぐれです。それにあの子には何か特別な事情がある  
気がするんですよ」

「特別な事情ですか？」

「ええ、まあただの勘ですけど」

一応半分は嘘、半分は真実を言ったけど、これで通じるだろうか？

「……………分かりました。不可解な点もありますが、ライダーや  
怪人、そしてラムダ・ドライバに対して有効的な手段がない以上、  
被害を最小限にするためにも、改めて協力をお願いします」

「では、条件を全て飲んで頂けるのですね？」

「ええ」

「よ、よろしいんですか艦長！？このような無茶苦茶な条件を飲んで！」

「クロノ執務官、貴方が言いたいことは分かるわ。でも、貴方も見たようにあのラムダ・ドライバの力は強力よ。今の私達にラムダ・ドライバの対抗手段がない以上、同様もしくは強力な持つ彼に頼るしかないわ。それに情報も色々必要だわ」

「そ、それはそうですが……わ、分かりました。艦長の指示に従います」

「ありがとう、クロノ」

クロノは若干納得が出来ていないままリンディの指示に従い、そんなクロノにリンディは笑顔でお礼を言った。

「それで話しを戻しますけど、さっきエイミーが言ってたアーム・スレイブとモビルスーツについて説明してくれないかしら？」

「アーム・スレイブは略してASとも呼ばれ、そこにいるファルケ、アーバレスト、ウルズ2、3、6、外にいるウルズ4、5のことで、本来の大きさが約9m程の陸戦型のロボットで発令所、通信室、そして俺と戦ったガウルンが変身したヴェノムもアーム・スレイブです。モビルスーツは発令所と通信室に現れたロボットとそのブリツガンダムとネブラブリツガンダムの中で、基本的には約18m程ですが、それぞれの世界によって違い、大きい機体で約24

m、小さい機体で約15m程のロボットです。機体によっては地上用、水中用、水陸両用、航空用、宇宙用、宇宙と地上の両方で戦うことが出来るバリエーションが豊富なロボットです。このロボット達もこの世界やライダーの世界とも違う、別の世界の物です」

「つまりは、質量兵器ということですね？」

「そうですね」

「凄い、宇宙でも戦えるんだ」

「野田君、ガンダムってなんなの？」

「ガンダムは、特定の機体と言われる場合もあるけど、俺自身としては、ガンダムは力の象徴のような物だと思っている」

「力の象徴・・・」

「で、何故そのガンダムやAS等の大型のはずのロボットがこのサイズで、尚且つここに居て動いているんだ？」

「ああー、クロノいい質問をしてくれた！

これでアポロンを紹介しやすくなった。

「それはこいつのおかげだ」

そっついながら俺はフェニックスドライバーを手に取った。

「そのデバイスって一体何なの？」

「こいつの名称はフェニックスドライバー、Aエコールサインはアポロンだ」

「よろしくお願いします、皆様」

「あ、えっとよろしくお願いします」

「ど、どうも」

「よろしくね」

「ああ」

「こちらこそ」

アポロンの挨拶になのは、ユーノ、エイミー、クロノ、リンディが返事を返した。

「このフェニックスドライバー、アポロンがあるから俺は仮面ライダーフェニックスに変身出来たり、他のライダーやファルケ達を召喚したり出来る」

「召喚って、あの人達を呼び出したってこと？」

「ああ、これを使って」

俺はなのは達にライダーカードを見せた。

「これってカードだよな？」

「はい。カードです」

「これでどうやって召喚するんだ？」

「それにこのカードの仮面ライダーさんってさっき野田君と戦った仮面ライダーさんだよな？」

「うーん、まあ口で説明するよりも見てもらったほうが早い。よろしいですか、リンディ提督？」

「構わないけど、身体は大丈夫なの？」

そう言われると少し心配だな。

「アポロン、どう？」

「多少なら問題ないはずですよ」

ならいいか。

「じゃあやるか」

俺はベットから下り、フェニックスのカードを手を取った。

「そのカードは何に使うの？」

「見れば分かる」

質問してきたエイミーにそう言って、フェニックスドライバーにカードを入れた。

『KAMEN RIDER!』

「変身!」

『PHOENIX!』

トリガーを引き、仮面ライダーフェニックスに変身した。

「ふえ〜」

「か、身体が・・・」

「大きくなってる」

「凄いわねえ」

「ええ、本当に」

「高町、さっきのカードを」

「う、うん」

なのはからライダーカードを受け取った。

「ありがとう」

なのはから受け取ってすぐにフェニックスドライバーにカードを入れた。

『KAMEN RIDER! DELTA!』

トリガーを引くと数時間前に戦った「仮面ライダー555」の世界のスマートブレイン製仮面ライダー「仮面ライダーデルタ」が出現した。

「……………おおおお」「……………」

「………とまあ、こんな感じだ」

「今のつてあの黒い仮面ライダーさんの時と同じ」

なのはが黒い仮面ライダー＝リュウガを見る。

「その通りだ。今のように召喚したライダーやAS、MSは召喚後は俺の命令に従ったり、独自で判断して動いたり出来る。又召喚する直前や戦闘中に非殺傷か殺傷かを設定出来る」

「はい、質問があります」

エイミイが手を上げて質問をしてきた。

「どっぞっ？」

「そのASとMSって喋ったりしてるけど、なんでライダー達は一言も話さないの？」

いや、一応喋る奴はいるはずだぞ？

実際ディエンドが召喚したイクサとサイガは喋ってたし。

とりあえず適当に答えよう。

「えーっと、MSやASの場合はその機体に搭乗したパイロットが擬似人格として使われているんだけど、ライダーにはそれを採用してないだけ、でも中には喋る奴もいる」

「搭乗したパイロットが擬似人格として使われているってどういうことなの？」

「そのままの意味です、リンディ提督。さっきも言ったようにMSとASはそれぞれ別の世界のロボット。そして、大型のロボットを動かすにはパイロットが必要になります。そこにいるファルケ達は本来の世界で自分達に搭乗したパイロットの人格を擬似人格として使っています。しかし、これはあくまで特定の機体に搭乗したパイロット、つまり専用機に搭乗した人物限定でそれ以外、量産型の機体はただのAIです。しかし、AIでも戦闘能力、判断能力等はかなり高レベルのものです」

「……………」

「ん？」

説明が終わると何故かなのは達がポカンとしていた。

「どうした？」

「いや、なんというか。あまりに凄すぎて」

「あんなカード一枚で変身したり、他の仮面ライダーやこれ程高性能なロボットを召喚出来るなんて」

「もしかして、さっきの大人の姿をしていたのも、そのカードが関

係してるんですか？」

おお、鋭いなユーノ。

「ああ、その通りだ。このオールドライドと呼ばれるカードを使うことでカードの表面に書かれた数字、例えば20と書かれていたら20歳の平均的な身体に使用者の容姿等を変えるんだ」

「へえ」

「あと野田君、あの時ファイズさんやあそこの白いロボットさんの姿になつたよね？」

「ああ、ライダーは限定されているがロボットの方ならほぼ無制限であらゆる機体に姿を変え、そのライダーや機体の武器や特殊能力、システムまで使うことが出来る」

まあ、システムの方は今はカードが封印されてるけど。

「ちよつといいか？」

クロノがさつきより若干声のトーンを落とし、質問をしてきた。

「……何か？」

「そのデバイス、ロボット、仮面ライダーへの変身と召喚、大人の容姿については、ある程度は理解出来た。だが、一つだけ理解出来ないことがある」

うわぁー、なんか面倒な質問されそうだなあ。

「一応聞いてみるか。」

「何です?」

「君がどうやってそのデバイスを手に入れたことだ」

はい、予感的中々。

まあ、聞かれる可能性はあったけど。

「高性能なAI、並行世界のライダーやロボットの召喚に変身。それだけじゃない、僕達時空管理局ですら、並行世界についてはまだ詳しくは解っていないのも関わらず、並行世界や並行世界から来た敵についての情報を持っている。あの時の戦いで紫の目の敵が言っていたディケイドとディエンドとは何だ!君は一体何者なんだ!?」

前言撤回、結構予想外の質問されてる!

どうしよう……。

ディケイドとディエンドだけは話して他はなんとかして誤魔化すか。

「……仮面ライダーディケイド、仮面ライダーディエンドは俺のライダーシステムの元になった仮面ライダーだ。ディケイドはライダー限定で他のライダーに変身出来る代わりに召喚が出来ず、ディエンドはライダー限定で他のライダーを召喚出来る代わりに変身が出来ない。俺のライダーシステム、フェニックスドライバーはディケイドとディエンドのハイブリッド型、ディケイドとディエンドの長所のみを取り込み、更にライダー以外の召喚も出来る様に作られている。俺が話せるのはここまでだ」

「そんなので納得出来ると思ってるのか」「いい加減にしたらどうだ?」「っ何!?!?」

再びファルケが割り込んでくれた。

「君は同じことを繰り返したいのか？」

再びファルケ達が武器を構えようとした。

「止めろってファルケ」

俺はファルケ達が武器を持つ前に止めた。

「……了解しました。申し訳ありません」

「いや、問題ない。さて、クロノ執務官」

「……何だ？」

「貴方が納得出来ないのは俺自信も分かっています。しかし、今はまだ話すことが出来ません。ですが、時がくれば話します。俺のことや、アポロンのこと、全て話します」

あまりに真面目なことなので敬語になってしまった。

「……本当だな？」

「はい、必ず」

「……」

「……」

俺とクロノが無言のまま互いを見る。

「……………分かった、その時がくるまで待とう」

「ありがとう」

なんとかクロノ納得してくれた。

「さて、いきなりで申し訳ないんですけど、頼みがあるんです」

「なんですか？」

「俺、一旦家に帰りたんですけど。学校のこととか色々ありますし」

「ああ、その、実は……………」

「あの時の戦いのせいで、今はほとんどのシステムがダウンしてて、今修理中なんだよ」

「それに君のライダー達やロボット達も攻撃で所々穴が開いたりしてるから、その修理も行ってるから時間が掛かる」

「ああー、そういえばそうだったな。」

「あー、大丈夫だ。すぐに直そう」

「はい？」

「出来るのか？」

「ああ、多分こいつらならすぐに直せるだろう」

そっぴいなながらカードケースからカードを一枚取り出し、フェニックスドライバーに入れた。

『BRAVE RIDER! CARPENTERS!』

「……………」

「よし」と

俺は一旦カードをフェニックスドライバーから引き抜いた。

「何も出てこないよ？」

「大丈夫、大丈夫。これからが本番だ」

再びカードをフェニックスドライバーに入れた。

『BRAVE RIDER! CARPENTERS!』

「出て来い！」

トリガーを引くと、「勇者王ガオガイガー」に登場した作業用のロボット「カーペンターズ」が現れた。

カーペンターズ

ツールロボ「ブライヤーズ」を基に設計され、戦闘で被害を受けた



「本当にあのロボットは大丈夫なのか？」

「大丈夫、信用しろ」

15分後

「なっ？言った通りだろ？」

「あ、ああ」

「本当、凄いわねえ」

「まるで新品みたいだよお」

カーペンターズから修復完了の連絡が入り、その様子を見に通信室に行くときつきまで滅茶苦茶になっていたらしい（俺はその現場をみてなかったから知らん）コンソールやモニター、壁は完全に修復され全ての機能が回復していたらしい。

そしてそれは発令所も同様だったらしく、更に一番被害が酷かった、ゾルダのファイナルベント「エンドオブワールド」が放たれた廊下は本当に戦闘が起こったのかと思うくらい綺麗になっていたらしい。ちなみに、カーペンターズが修復作業をすることをスタッフに伝達するのを忘れていたため最初の5分間はアースラの中が大騒ぎになっていた。

「あのロボットは一体なんの？」

「それについては後日改めて説明します」

「分かったわ」

「じゃあ、座標はあの公園でいいかな？」

「ええ、お願いします。あ、そうだ。クロノ執務官」

俺はあることを思い出し、クロノを呼んだ。

「ん、なんだ？」

「あの時、助けてくれてありがとう。おかげで助かった」

俺は、あの時デルタの「ルシファーズハンマー」から助けてもらった時のお礼を言っていなかったたので今言った。

「べ、別に！あの時も言ったように、君から聞かなければならないことが色々あったから助けただけだ！」

素直じゃねえなコイツは。

「そ、その、僕の方こそ感謝している」

「？」

「き、君も一応、僕や母さん達を守ってくれたしな」

「……ツンデレか、コイツ。」

「気にするな。それと色々失礼なことを言つてすまない」

「ふん！」

「さて、じゃあそろそろ一旦戻るか。アポロン、ファルケ達も戻してくれ」

「イエス、マスター」

アポロンが返事を返すとファルケ達が一瞬で消え、カードに戻った。

「本当に凄いねえ」

「エイミーさん、感心してないでそろそろお願いします」

「ああ、ごめん、ごめん！」

「では、また後日会いましょう」

「ええ」

「ああ」

「うん」

「はい」

「それじゃあ、転送！」

皆にあいさつをした後、俺は転移魔法によって一旦、海鳴市に戻った。

## 第十六話 交渉（後書き）

ARX-7アーバレスト「ふう〜、なんとか書けた」

健悟「やっとアースラから離れたな」

アポロン「長居しすぎです」

ARX-7アーバレスト「まあ、そう言わないでよ」

健悟「しかし、交渉の内容、これも中々無理があったんじゃないか？」

アポロン「説得の方も」

ARX-7アーバレスト「気にするな！」

健悟「駄目作者」

ARX-7アーバレスト「うるさい！」

アポロン「そんな駄目作者から何やら発表があるらしいですよ？」

健悟「何？」

ARX-7アーバレスト「実はこの小説『少年が望んだ世界と力』のPV数90000、ユニーク数10000人になりました！」

健悟「はっ！？マジで!？」

アポロン「私も確認しました。マジです」

ARX-7アーバレスト「これも皆様のおかげです！本当にありがとうございました！」

健悟「信じられねえ」

アポロン「ご安心を、マスター。作者が一番驚いてますから」

ARX-7アーバレスト「では、この話は次回に持ち越すとして次回予告行こうか！」

健悟「お、おう！次回『第十七話 一時帰還』です」

アポロン「みなさまのご意見とご感想をお待ちしています。」

ARX-7アーバレスト「次回もお楽しみに！！本当にありがとうございました！」

## 第十七話 一時帰還

海鳴市、海鳴臨海公園

アースラから転移魔法で転送され、まず最初に空を見ると、うつつすらと空が明るくなっていた。

「……アポロン、今何時だ？」

「現在午前5時58分26秒です、マスター」

相変わらず細かいな。

しかし、朝の6時かぁ。

家に戻って少し休憩してから学校に行くか。

「じゃあ、家に戻るか」

「マスター、その前に少しよろしいでしょうか？」

「どうした？」

「大変申し訳ありませんが本日はお休みをもらってもよろしいでしょうか？」

「別にいいけど、珍しいなお前が休みたいなんて。っと言うか初めてだな。どうしたんだ？」

「ファルケ達を長時間召喚していたためパワーを使いすぎました」

ああ、成程な。

「分かった。今日はゆっくり休め」

「ありがとうございます。それとマスター」

「何？」

「本日は護身用としてフェイスフォンを持って行って下さい」

「なんでフェイスフォンなんだ？」

「いざっという時にオートバジンとか呼べるでしょ？あと新しいコードを登録しておきましたので、いざっという時に使ってください」

「新しいコードってなんだ？」

「それは楽しみです」

「……出来れば使うことがないことを祈りたいな。」

「マスターが学校に行っている間にパワーを回復させつつ、学校をしばらく休む手配をしておきます」

「そうだな。頼むぞ、アポロン」

「イエス、マスター」

「そうゆう訳で高町さんはご家庭の事情で学校何日かお休みするそうです」

あの後家に帰り、軽いシャワーを浴び、朝食を食べて学校に行き、今は原作通り先生がなのはが学校を休む説明をしている。

「高町さんがお休みの間、ノートとプリントは・・・」

「はい！私がつ！」

アリサが真っ先に手を上げた。

「アリサさん、じゃあよろしくね」

「はい！」

最近まで喧嘩してたのに、本当になのほのほのことを大切に思っているんだな。

そう考えながら、ふと横を見るとさすがが嬉しそうに笑っていた。恐らくすずかも同じことを考えてたんだろう。

「そっか。健悟君もお休みするんだ・・・」

「あんたも家庭の事情なの？」

「ああ、そんなとこやな」

昼休み時間、屋上で昼食を食べながら俺はすずかとアリサに俺も何日か学校を休むことを話した。

ちなみに今日は関西弁の気分だったので関西弁で喋ってる。

「なんだか寂しいな。なのはちゃんがお休みして、今度は健悟君もお休みするなんて」

「さすがが悲しそうな顔をしている。」

「大丈夫やってすずか。一生の別れって訳やないんやから」

「そうだけど・・・」

「やっぱり元気にならないなあ。」

「すずか・・・」

俺はなんとなく右手をすずかの頭に手を乗せ、初めて出会った時に様に頭を撫でた。

「あっ／＼／」

「すずかが元気あらへんと俺も元気でてこうへん。せやから、そんな顔しんといてえや。俺はすずかが悲しんでる顔より、笑顔のすずかが好きやねんから」

「す、好き／＼／」

「うん、せやから元気だし、なっ？」

「う、うん！／＼／ありがとう健悟君！おかげで元気が出てきたよー！...」

「そっおか」

うん、元気になってよかった。  
でも、なんで顔が赤いんだ？

「ああ、あと悪いねんけど、休みの間のノートとプリント頼めへん？」

「うん、もちろんだよ！！任せて健悟君！」

「お、おう。ありがとうなあ」

な、なんか凄い元気になったな。  
まあいいけど。

あ、ノートとプリントといえば

「.....」

「な、何よ？」

俺がアリサをじーっと見ていると、アリサが反応してきた。

「いやあ、ほんまにアリサは友達思いやなあって思ってたな」

「なんのことよ？」

「さっき先生が高町のノートとプリントを誰かに頼もうとした時、  
アリサすぐに手上げたやろ？」

「あ、あれは別につ！」

アリサは慌てだし、すずかはクスクスと笑っている。

「まあ、アリサのそうゆう優しいとこ、俺は好きやで?」

「なっ／＼／!」

ん?

なんで赤くなつたんだ?

「す、すす、す、す・・き・・って!!??／＼／」

なんか、壊れたラジオみたいになつたな。

「・・・」

それに気のせいか、すずかが若干怒ってるような気がする。

「??二人とも、どうかしたんか?」

「!べ、別に、な、何もないわよ!／＼／」

「なんでもないよ?」

何もないって言うてる割にはまだ顔赤いし、すずかは顔は笑ってるけど目が笑ってないように見えるんだよな。

なんか怖いけど、深く考えないようにしよう。

「まあ、それならかまへんk(キイイイイイン)ど・・っ!」

突然俺は耳鳴りに襲われ、すぐに辺りを見渡した。

(なんだ？今の耳鳴りは？)

「健悟？」

「どうかしたの？」

どうやらアリサとすずかには聞こえてなかったようだ。

(やっぱり気のせいか？)キイイイイイン(っ!!！)

そう思った時に再び耳鳴りが響き渡った。

その結果、一つの確信が出来た。

「気のせいじゃない！」

そういつて俺は屋上から飛び出した。

「あ、ちよつと健悟！」

「ま、待って健悟君!!！」

飛び出した俺はすぐに誰もいない場所を捜すが、ここは学校、しかも休み時間なので、人のいない場所がなかなか見当たらない。

「ちっ!どうすれば・・・ん？」

俺が軽く舌打ちをした後ちよつと保健室から先生が出ていくのが見

えた。

「いけるか？」

俺は保健室に入り、ドアを閉め、誰かいないか確認する。

「よし、いけるな」

誰もいないことを確認するとカードデッキを取り出し、鏡にかざそうとした時、保健室のドアが開いた。

「!?!」

「ちよつと健悟！」

「健悟君！」

保健室に入ってきたのは屋上から追いかけてきたアリサとすずかだった。

誰かと思つて、今のは正直かなり驚いた。

「脅かさんといてや」

「それはこっちの台詞よ！いきなり屋上を飛び出して！」

「どうかしたの、健悟君？」

「ちよつと急用が出来たんや。悪いねんけど先生には腹痛でトイレに行つてるとかで、適当に誤魔化しといってくれへん？」

「はあ？何よ急用って？」

「悪いけど、はよう用事を終わらせな授業に更に遅れることになるからこのことは後で説明するわ」

そういつて俺は牛の紋章が刻まれた緑色のデッキ、「ゾルダのカードデッキ」を鏡にかざし、Vバツクルが装着された。

「な、何！？」

「鏡からベルトが！！」

「これもちゃんと後で説明するから。変身！！」

ゾルダの装着者、北岡秀一の変身ポーズを取り、カードデッキをVバツクルに装着し、俺は「仮面ライダーゾルダ」に変身した。

「じゃあ、ちよっと行ってくる」

「行くって・・・」

「何処に行くの？」

「鏡の中」

そういつて俺はミラーワールドに入ってしまった。

アリサSide

いきなり健悟が屋上を飛び出し、私とすずかは健悟を追いかけた。

健悟を追いかけて保健室に入ると健悟が鏡の前で何かをしようとしていて、私とすずかが入ってきたことに健悟は驚いていた。

私達が健悟に事情を聴くと「急用が出来たから先生を適当に誤魔化しといてくれへん？」っと言うと私は理由を聴いたが、健悟は「後で説明する」っと言うと緑色の物を鏡に映すと鏡からベルトが出てきて健悟の腰に装着された。

私達が驚いているのに対して「これも後で説明する」っと言ってベルトに緑色の物を入れて、前に変身していた仮面ライダーとは違う姿に変わった。

変身した姿は前と同じ様に私達と同じくらいの大きさから大人の大きさに変わった。

変身した姿で、健悟は「ちよつと行ってくる」と言い、私達は何処に行くのかを聴くと「鏡の中」っと言って、言葉通り鏡の中に入っていた。

「ええっ！ちよつと！？」

「け、健悟君！？」

私とずずかは、健悟が入っていった鏡を調べたけど、鏡は普通の鏡で、私とずずかししか映っていなかった。

「どうなってるのよ？」

「分からないけど、健悟君が後で説明してくれるって言ってたし、今は戻ってくるのを待とうよ」

「そ、そうね」

ずずかに言われ、今は健悟が戻るのを待つことにした。

（もう、何がなんだかわけわかんないわよ！こうなったら戻ってきて

たら徹底的に聴いてやるんだから！)

ミラーワールド内

ミラーワールドに入り、俺は辺りを見渡した。

「……………」

保健室にはいないことを確認し、右腰に提げているマグナバイザーを手に取り、保健室のドアを開け、廊下に出た。マグナバイザーを構えながら校内を歩く。

「一体何処にいるんだ？」

二階に上ろうと窓に背中を向けたその時だった。

パリンッ！

「！つぐあぁあっ！！」

窓ガラスが割れた音が聞こえ、振り返るとブーメランのような武器で攻撃された。

「いつつつ、なんなんだ？」

「グルルルルッ」

ブーメランが飛んできた方を見ると、そこにはカミキリ虫型のミラーモンスター「ゼノバイター」がいた。

「やっぱり、あの時の耳鳴りはミラーモンスターが現れたからか。にしても、てめえーいきなり何しやがる!!!」

バンッ！バンッ！バンッ！

耳鳴りの原因が分かってよかったが、いきなり攻撃されたことに腹が立ち、俺はマグナバイザーをゼノバイターに向けて発砲した。

「グルルルルッ！」

ゼノバイターは手に持っていたブーメランでマグナバイザーの弾を弾き、何処かに走って行った。

「あつ！待てよこのやるうっ!!!」

俺はすぐにゼノバイターを追いかけた。

「くそっ、見失った！確かにこっちに来たと思ったんだが」

ゼノバイターが逃げたはずの場所、グラウンドを見渡した。

「何処に消えたんだ・っがああっ!!!」

グラウンドを見渡していると後ろからゼノバイターの攻撃を食らった。

「このヤロオ、あんまり調子に乗るなよ!!」

カードデッキからカードを引き抜き、マグナバイザーにベントインした。

『STRIKE VENT』

「はっ！」

ストライクベントを発動し、マグナギガの頭部を模した武器「ギガホーン」を装備し、マグナバイザーを撃ちながらゼノバイターに向かって行った。

「グルッ！」

マグナバイザーの弾を受け、ゼノバイターが怯んだ。

「はあっ！ふっ！おりゃあー！」

ゼノバイターに接近し、顔の右側を殴った。

ゼノバイターが左手に持ったブーメランで切り掛かるがマグナバイザーで弾き、ギガホーンでゼノバイターの腹部を突いた。

「グルルルッッ！！」

ゼノバイターは吹っ飛び、校舎の壁にぶつかった。

「これで終わりだ」

マグナバイザーにカードをベントインした。

『FINAL VENT』

ファイナルベントを発動させると俺の前に水溜まりが出来、その中からマグナギガが現れ、マグナギガの背中にマグナバイザーを接続し、マグナギガが発射体制に入った。

「グッ！グルルルッ！！」

「チェックメイトだ。くたばれええっ！！」

バンッ、バンッ、バンッ

バババババッ

バシユ、バシユ、バシユ、バシユ

ドッ、ドッ、ドッ、ドッ

バリッ、バリバリバリッ

マグナバイザーのトリガーを引き、ゾルダの必殺技「エンドオブワールド」を放った。

「グルルルルッッ！！！！」

ゼノバイターに向って大量のミサイル、レーザーが発射され大爆発を起こし、周りに爆煙が舞い上がった。

「ふう、お〜わりっつと」

俺は後ろを振り返り、現実世界に戻ろうとした。



現実世界

ミラーワールドから戻った俺はゾルダのカードデッキをVバックルから引き抜き、変身を解除した。

「ふう〜。なんかあったな。それにまだ保健の先生も帰ってきてないようやし。あ、今何時や？」

時間が気になった俺は保健室の壁に掛けてあった時計を見た。

「ああ〜、昼休みあと少ししかないな。とりあえず、すずか達の所に戻るか」

時間を確認した後、俺はすぐに保健室を出てすずか達の所に戻った。

放課後、学校でのこと話すために俺とアリサとすずかは、町のとあるオープンカフェに来ていた。

「さあ、話してもらおうわよ健悟！」

「その前に一つええか？」

「何よ？」

「習い事とかはどうしたん？」

「今日はお休みだから大丈夫だよ？」

「だからこうやってここに来てるんじゃない！」

まあ、それが当たり前か。

「そっか。それで何処から話せばいい？」

「全部！！！！」

アリサとすずかがシンクロした！！

まあ、確かに全部話さないと納得しないだろうな。  
特にアリサが・・・

「あんだ、今私に対してなんか思ったでしょ？」

感ずかれた！！

こいつ、ニュータイプかつ！！

「いや、なんにも」

とりあえず誤魔化した。

「ならいいわ。それで、あの時の姿は一体なんなの？なんで鏡の中に入れた訳？」

一応納得したアリサがさっそく質問してきた。

「あの姿は「仮面ライダーゾルダ」と呼ばれるフェニックスとは別の仮面ライダーだ」

「仮面ライダー・・・ゾルダ」

「あんだ、フェニックス以外にも変身出来たのね」

「まあな」

「そういえば、今日はアポロンさんはどうしたの？」

「色々あつて今日は休憩だ。それに今日の場合、フェニックスではなく、ゾルダの方がミラーワールドで戦えるしな」

「ミラーワールド？」

「今俺達がいるこの世界、現実世界とは左右反転している以外は全く同じ。鏡の中に存在し、ライダーに変身するための16存在するカードデッキの一つを有するライダーだけが行き来出来る世界、それがミラーワールドだ」

「鏡の中の世界・・・」

「これがその16存在するカードデッキの一つだ」

俺はズボンのポケットからゾルダのカードデッキを取り出し、テーブルに置いた。

「これってさっきあんだが保健室の鏡に翳してた」

「これを鏡に翳した後鏡からベルトが出てきたよね？」

「あのベルトはVバックルと呼ばれるベルトで、あのベルトにこのカードデッキを差し込むことで仮面ライダーに変身することが出来る、ミラーワールドに入ることが出来るようになる」

「でも、鏡が無い時はどうするのよ?」

「別にVバックルを装着するためには鏡だけじゃなくてもいいんだ。例えば・・・それとか」

俺はテーブルの上に置かれている水の入ったコップを指差した。

「お水?」

「あと・・・あれとか」

今度は窓を指差した。

「窓?」

「そう、水やガラス等の鏡と同じ様に自分を映すものであればVバックルを装着し、ミラーワールドに出入りすることが出来る」

「へえ」

「ところで、なんで健悟はそのミラーワールドに行ったのよ?」

「ミラーモンスターを倒しに行った」

「「ミラーモンスター?」」

「ミラーワールドに生息するモンスターで、放っておけば、人に危害を加える危険な奴らだ」

「でも、どうして健悟君はそのミラーモンスターが現れたのが分かったの？」

「このカードデッキを持っているとミラーモンスターが現れた時に耳鳴りがするんだ。それでミラーモンスターが現れたかどうかが分かるんだ」

俺は注文していたコーヒーを一口飲んだ。

……温くなってるな。

「へえ」

「ねえ健悟、もしかしてあのアポロンやそのデッキ以外にも仮面ライダーに変身するアイテム的な物持ってるの？」

この質問は……答えてもいいか。

「ああ、あるぞ」

「まだあるんだ」

「それで、なんで健悟はそんなもの持ってるのよ」

うん。

この質問はNGだな。

「それについて」「あら、すすずか？」「……ん？」

アリサに答えようとした時にすずかの名前を呼んだのは、すずかの姉「月村忍」だった。

その隣には、なのはの兄で忍さんの恋人である「高町恭也」と妹であり、なのはの姉である「高町美由希」もいた。

「あ、お姉ちゃん！それに恭也さんと美由希さん！」

「やあ」

「こんにちはすずかちゃん、アリサちゃん」

「こんにちは」

「あれ？君は確か温泉の時に一緒にいた、え〜っ」と

あゝ、俺の存在忘れられてるなあ。

「確か、野田健悟君よね？」

「はい、そうです」

おお、忍さんは覚えててくれたいた。

「ふふふ、いつもすずかがあなたの話ばかりしているのよ」

「お、おねえちゃん！！／＼／＼」

すずかが顔を赤くしている。

つとつかすずか、俺の話しばっかりしてるのか？

「ああ、そうだった、そうだった。健悟君だったね。ごめんね忘れてて」

美由希さんが俺の名前を思い出し、忘れてたこと謝罪してくれている。

「あ、いえ、大丈夫です。別に気にしてませんか」(ギイイイイン)っ!!」

美由希さんに気にしていないっと思うところで突然、ミラーモンスターが現れた時とは別の耳鳴りが聞こえ、俺は席を立ち上がり、辺りを見渡した。

「健悟君？」

「どうしたのよ？」

「(この耳鳴り、ミラーモンスター？いや、違う。それにこの感覚・・・)すまん、金はここに置いておくから!!」

俺はコーヒー代をテーブルに置き、鞆を持って走り出した。

「あ、健悟君！」

「ちょっと、待ちなさいよ健悟!あつ、すいませーん!!お金ここに置いておきまーす!!」

俺はとにかく走った。

と言うより走ることしか出来なかった。

何故なら自分でも何処に行こうとしているのか分からないからだ。しかし、それでも走るには理由があった。

（一体何なんだ、この呼ばれているような感覚は！？）

何者かに呼ばれているような感覚。

その感覚だけを頼りに俺は走って行った。

やがて俺は海沿いの道に辿り着いた。

そして、呼ばれている感覚は今も続いている。

「一体、ここに何が・・・っ！」

右側から気配を感じた俺はすぐに右を向いた。するとそこには無数の怪人達がいた。

「おいおい、よりによってこいつらかよ。だから、なんなミラーモンスターが現れた時に似た感覚だったのか」

俺の中の謎が次々と解決されていく。

「さあ、相手をしてやるよ。アンノウン共！」

俺は海沿いの道に広がっている「仮面ライダーアギト」の世界の怪人「アンノウン」達を睨みつけた。

第十七話 一時帰還（後書き）

ARX-7アーバレスト 「今回も無事投稿出来たな」

健悟「そうだな」

アポロン「お疲れ様です」

ARX-7アーバレスト 「さて、今日のお題は前回に引き続きP  
Vとユニーク数について語りましょう！！」

健悟「PV数90000アクセス、ユニーク数10000人かあ。  
凄いな」

アポロン「マスター、ここで訂正があります」

健悟「何？」

アポロン「先程、調べたところ、PV数は105,000アクセス、  
ユニーク数11,000人になっていました」

健悟「また増えてる！！」

アポロン「また、お気に入り登録数が最近80件になっていました」

健悟「こつちも増えてる！」

アポロン「ちなみに作者としてこの結果をどう思いますか？」

ARX-7アーバレスト 「いやあ、ねえ？正直に言っと予想外でした。まさかここまで見てくれてる人が、更に80件もお気に入りに入ってくれてる方々がいるとは、この小説を書き始めた時は50もいかなかったと思ってたのに」

健悟「本当に感謝だな」

ARX-7アーバレスト 「本当にその通りです。このような力オスな小説を読んでくれて、お気に入り登録してくれて正直から嬉しいです。えー、読者の皆様本当にありがとうございます！」

健悟「ありがとうございます」

アポロン「ありがとうございます」

ARX-7アーバレスト 「これからも頑張つて書きますので、少年が望んだ世界と力」をよろしく願います！！」

健悟「よろしく願います」

アポロン「よろしく願います」

ARX-7アーバレスト「では、そろそろ次回予告と行きましよう！」

健悟「了解、次回『第十八話 折角帰つたのに休む暇がない』です」

アポロン「なんだか前にも同じようなタイトルがあったような気がします」

ARX-17アーバレスト「気にしないでくれ」

アポロン「まあいいでしょ。みなさまのご意見とご感想をお待ちしています」

健悟「またするのはこの作品で出してほしい仮面ライダー、MS、MA、AS、スーパー戦隊、バルキリー等、様々なロボットやヒーロー達を募集しています。ライダーは平成、昭和どちらでも構いません！」

ARX-17アーバレスト「もちろん、スパロボOGや勇者シリーズなども可能です。登場するのはいつになるか分かりませんが、リクエストして頂いたものは出来るだけ登場させます！では、次回もお楽しみに！！」

第十八話 折角帰ったのに休む暇がない（前編）（前書き）

今回はちょっと悪ふざけが入っていますので最初に謝っておきます！  
すいません！！

あとタイトルを変更し、前半と後半に分けることにしました。  
では、どうぞ！

第十八話 折角帰ったのに休む暇がない(前編)

最近の俺はどうやら怪人達に人気のようだ。

「全く、人気者はつらいな」

「エアア」

アンノウン達は持っている武器を構え、向ってきた。  
戦う気満々のようだ。

「数は……軽く80くらいはいるな、全く！」

俺はアンノウンを撃退するためにアギトの変身ベルト「オルタリング」を出現させようとした。

「健悟君！」

「健悟！」

「……！」

後ろを振り返るとすずかとアリサ、忍さん、恭也さん、美由希さんがこちらに向ってくる。

「馬鹿！来るな、逃げる……！」

「何言ってる！お前も逃げろ……！」

「健悟君、早くこつちに!」

「アアアアア!」

恭也さんと美由希が俺に逃げるように言っている間にアンノウン達  
が接近しており、武器を振り上げた。

「あぶない!」

「健悟君!」

「健悟!」

忍さんとすずかとアリサが叫んでいる。

(間に合わない!)

諦めかけたその時だった。

バババババババババツツ

「ガアアアツ!」

「えっ!?」

アンノウン達がいきなり銃撃された。

「な、何今の!」

「一体何処から?」

バラバラバラバラ（ファンファンファン）

ブオオオンツ！（ファンファンファン）

俺を含めた全員がいきなりの銃撃の混乱していると上空からローター音とサイレン音が聞こえ、更に地上からはバイクの吹かした音と上空と同じくサイレンの音が聞こえてきた。このサイレンの音に聞き覚えがあった。

キイイイツ！！

そして、俺とアンノウンの間に白と黒と紫のラインが入った白バイが止まり、上空では白バイと同じカラーリングの攻撃用ヘリが俺の真上でホバリングしていた。

「！きよ、恭ちゃん！あ、あ、あれ！！」

美由希さんが驚きながた白バイを指差した。

何故ならその白バイには誰も乗っていないからだ。

「む、無人！？」

「そんな馬鹿な！」

「どうなってんのよ！」

無人の白バイに忍さん、恭也さん、アリサが驚いている中、俺だけは落ち着いていた。

何故なら俺の前にいる白バイと真上でホバリングをしているヘリは、

簡易AIを搭載した「勇者王ガオガイガー」に登場し、GGG諜報部のボルフォッグの専属サポートロボット「ガンドーベル」と「ガングルー」だった。

ガングルー

ボーイングノシコルスキー・RAH-66・コマンチに酷似したヘリコプターから人型に変形し、頭部部分は鷲をイメージしたデザインのガンマシン。

ガンドーベル

白バイからホバーバイク、人型に変形し、頭部部分は犬をイメージしたデザインのガンマシン。

「お前達……」

『ガガ……お待たせしました！ガガ……大丈夫かな？』

ガンドーベルのラジオがいきなり動き出した。

「今度はラジオが……！」

「……会話……のつもりか？」

『ガガ……正解です！ガガ……素晴らしいですねえ〜！』

今度は真上でホバリングしているガングルーから聞こえてきた。

「エアアアツ！」

先程ガングルーの銃撃を受けたアンノウン達が再びこちらに向って

くる。

「健悟君!?!」

さすがが叫ぶが、俺はさっきのように慌てなかった。

「ガングルー、ガンドーベル、システムチェンジ!?!」

俺の命令を受けたガングルーとガンドーベルはサイレンの音を鳴らしながらビークル形態から人型のロボット形態にシステムチェンジした。

「う、嘘……」

「バイクとヘリコプターが」

「ロボットに」

「変形した!?!」

「凄い……」

「全員耳を塞げ!」

「「「「「え?」」」」」

「早く!?!」

「「「「「うん」」」」」

美由希さん、忍さん、恭也さん、アリサ、すずかがガングルーとガンドーベルの変形に驚いている中、俺は全員に耳を塞ぐように言った。

「よし！ガングルー、ガンドーベル！照準合わせ開始、攻撃目標、アンノウン！！」

全員が耳を塞いだのを確認し、ガングルーとガンドーベルに照準をアンノウンに合わせさせた。

「攻撃開始！！！！」

バババババババババツツ！！！！

攻撃命令を出し、俺が耳を塞ぐとガングルーはイーグルガン、ガンドーベルがドーベルガンと呼ばれる胴体に搭載されているマシンガンから轟音を上げながら銃弾が次々を放たれる。

「ガアアアツ！！！！」

「エアアアツ！！」

ガングルーとガンドーベルの攻撃でアンノウン達が怯み、動きが止まった隙にすずか達を避難させようとした。

「よし、皆さん今のうちに避難を・・・そうはさせないわよ？」  
「！！」

すずか達を避難させようとした時にすずか達の後ろから声が聞こえてきた。

俺は前を、すずか達は後ろを振り返り、声をかけてきた人物を見た。そこには声をかけてきたと思われる手にアタツシユケーヌを持った金髪のポニーテールの10代後半ぐらい少女と眼鏡を掛けており、少女と同じ10代後半ぐらいで手にアタツシユケーヌを持った少年と黒いスーツに黒いソフト帽に黒いサングラスを掛けた男達が10人程、更にアメリカのSWAT、日本のSAT等、特殊部隊の格好をした男達が10人程立っていた。

「ハロー、また会ったわね仮面ライダーフェニックス。あ、今は野田健悟の方だったわね」

金髪のポニーテールの女が俺に話しかけてきた。その声と話し方には聞き覚えがあった

「その声、その喋り方、あんたまさか、カイザか！」

数時間前にアースラ内で戦った「別のファイズの世界」のカイザの声と似ていた。

「ご名答！流石ねえ、野田健悟君」

「というこは、その眼鏡がデルタか？」

俺は眼鏡の男を見た。

「おう！そうだぜえ、この俺があ那时的デルタ様だ！っていうか眼鏡って呼ぶな！！」

眼鏡の男は無駄にテンションが高いな。それに怒られた。

しかし、この二人の姿と声・・・どこかで見たことと聞いたことがあるような。

「俺はあんたらの名前を知らない。だから、特徴があるもので呼ばせてもらった」

「そういえば、私達は名乗ってなかったわね。いいわ、名乗ってあげる！スマートブレイン第一特務部隊隊長、仮面ライダーカイザの正装着者、霧夜エリカ！！」

「スマートブレイン第二特務部隊隊長、仮面ライダーデルタの正装着者、鮫永新一！シャークと呼んでいいぜ！」

「霧夜エリカ、鮫永新一！？」

俺は二人の名前を聞いて「つよきす」と呼ばれるゲームに登場していたヒロインの一人「霧夜エリカ」と主人公の幼馴染の「鮫永新一」であることを思い出した。

恐らく彼女らは「別の世界」の霧夜エリカ（以降 姫）と鮫永新一（以降 フカヒレ）なのだろう。

「さて、それじゃあそろそろ始めましょうか」

姫が手に持っていたアタッシュケースからベルト型変身ツール「カイザドライバー」を取り出すと隣にいたフカヒレもアタッシュケースから「デルタドライバー」を取り出し、腰に装着し、その後ろにいた黒いスーツの男達も懐から「スマートバツクル」を取り出し腰に装着した。

「この前の借りを返してあげるわ！！」

- 913 ENTER

『 STANDING BY 』

姫がカイザフォンに変身コードを入力し、待機音が流れ、カイザを閉じた。

「変身！」

「俺もいくぜ、変身！」

『 STANDING BY 』

フカヒレがデルタフォンに音声入力し、待機音が流れた。

「変身！」

姫がカイザフォンをカイザドライバーのフォンコネクターにセットし、フカヒレはデルタフォンをデルタドライバーの右側に取り付けているデルタムーバーに差し込み、黒いスーツの男達はスマートバツクルの立ち上がっているスマートブレインのロゴマークが入った部分を左側に倒した。

『 COMPLETE 』

音声が発せられベルトから光が放たれると姫は仮面ライダーカイザ、フカヒレは仮面ライダーデルタ、黒いスーツの男達はライオトルーパーに変身した。

「うおおおおおつ!!!」

残りの特殊部隊の格好をした男達はそれぞれステイングフィッシュオルフェノク、エレファントオルフェノク、オックスオルフェノク、オクトパスオルフェノク、アルマジロオルフェノク、バットオルフェノク、フロッグオルフェノク、ムースオルフェノク、ワイルドボアオルフェノク、ロングホーンオルフェノクに姿を変えた。

「な、なんなよのあれ!!」

「灰色の怪物・・・」

「一体どうなってるの!?!」

アリサと恭也さんと美由希さんが特殊部隊員がオルフェノクに姿を変えたことに驚いている。

俺はこの状況を整理した。

後ろにはアンノウンがいるが今はガングルーとガンドールベルが防いでくれている。

しかし前にはカイザとデルタとライオトルーパーとオルフェノク、正直状況は最悪だ。

「ちっ!一時退却だ!!」

この状況を打破するために俺は一時退却することを決め、ズボンのポケットに入れておいたファイズフォンを取り出し、コードを入力した。

『AUTO VAJIN COMECLOSER』

コードを入力した後、更に別のコードを入力した。

- 9821 ENTER

『SIDE BASSHER COMECLOSER』

そして最後に今朝アポロンに教えてもらい、新たに登録された新コードを入力した。

- 391821 ENTER

『G TRAILER COMECLOSER』

「ふふふふ」

姫は笑い、ゆつくり歩み寄りながらカイザドライバーの左側のハードポインターに装備されたデジタルカメラ型パンチングユニット「カイザショット」を取り、カイザフォンのプラットフォームからミッシオンメモリーを引き抜き、カイザショットに挿入した。

『READY』

姫はカイザショットを右手に装備し、ライオトルーパー達はアクセレイガン、ブレードモードを構え、フカヒレはデルタムーバーをハードポインターから取り外した。

「FIRE」

『BURST MODE』

フカヒレはデルタムバーの>ブラスターモード<を起動させ、銃口をこちらに向けた。

「はっ！」

フカヒレがデルタムバーのトリガーを引こうとし、姫とライオトールーパーとオルフェノク達が俺達に向かって駆け出そうとした。

ブオオオンッ！

ブオオオンッ！

「ん？」

「なんだ？」

姫達の後ろからバイクの吹かし音が聞こえ、姫達は後ろを振り返った。

すると無人の二台のバイクが猛スピードでこちらに向って走行してきた。

ブオオオンッ！

ブオオオンッ！

「ぐおっ！」

「ぐっ！」

「ぼおっ！」

猛スピードで走ってきた二台のバイクはオクトパスオルフェノクとアルマジロオルフェノク、そしてフカヒレを轢いた。

キイイイッ！！

キイイイッ！！

そして無人のオートバイ「オートバジン」とサイドカー「サイドバツシャー」の二台は俺達の前に止まった。

サイドバツシャー

仮面ライダーカイザの専用ビークル、オートバジン同様「仮面ライダーファイズ」の世界の大企業、スマートブレインの子会社であるスマートブレインモーターズ製の可変型バリアブルビークル。

「ま、また無人のバイク！？」

「一体なんなの？」

「おい野田！あれはなんなんだ」

「説明は後で！」

美由希さんとアリサが再び現れた無人のバイクに驚き、恭也さんは俺に説明を求めてきたが後にしてもらい、再びファイズフォンにコードを入力した。

- 5826 ENTER

『AUTO VAJIN BATTLE MODE』

- 9826 ENTER

『SIDE BASSHER BATTLE MODE』

オートバジンとサイドバツシャーに>バトルモード<のコードを入力するとオートバジンは以前ファイズギアを届けてくれた時と同じロボット形態に変形し、サイドバツシャーは大型二足歩行型重戦車形態に変形した。

「お、おい！嘘だろ！？」

「オートバジンにサイドバツシャーですって！あんなのまで持つてるの！？」

「ひ、姫！カイザなんだからバツシャーあるでしょ！？早く呼んでくれよ！..！」

「無理言わないでよ！私のサイドバツシャー、今日はメンテの日なの..！」

「うっそおおん..！」

「オートバシン、攻撃開始だ！」

ダダダダダダダダダダッ

姫とフカヒレが言い合ってる間に俺はオートバジンに攻撃命令を出した。

命令を受けたオートバジンは電子音を鳴らしながら頷き、16門のガトリングマズルを装備した前輪「バスターホイール」を姫達に向け、激しい連射を鳴らしながらバスターホイールを発射した。

「ぎゃあああ!! やばいやばい!!」

「くっ!」

「がつ!」

「ぐああっ!」

姫達がオートバジンのバスターホイールの弾で怯んでいる。

「ちっ! あんた達、行きなさい!!」

「くくくくくくはっ!」

姫の命令を受け、オルフェノク達が向って来るが、俺はファイズフオンにサイドバツシャーの攻撃命令コードを入力した。

- 9 8 1 4    E N T E R

『SIDE    BASSHER    GET    INTO    THE    AC  
TION』

攻撃命令コードを受けたサイドバツシャーは、直ぐに右腕を前に出



達を守ってくれている時、サイレンを鳴らしながらファイズフォンで呼んだもう一台の車両がようやくやってきた。

「今度はなん・・・だあああっ!!」

キイイイツ、プシユツ

フカヒレを轢き、俺達の横にGトレーラーが停車した。

「皆、乗って！早く！」

「う、うん！」

「ええ！」

「分かった」

「すずか！」

「うん！アリサちゃん！」

「分かってるわよ！」

「いつててて、くそお。よくも俺を轢きやがったな！」

Gトレーラーに轢かれて倒れていたフカヒレは起き上がり、デルタムーバーを構えた。

そして、デルタムーバーの銃口はアリサに向けられていた。

「！アリサ！！」

俺はアリサに飛びついた。

「え？・・・きゃっ！！！」

「っっ！」

デルタムーバーの光線が俺の左腕をかすめた。

「ちっ！」

- 106 ENTER

『BURST MODE』

俺は舌打ちをした後、ファイズフォンを横に折り曲げ、光線銃>フオンブラスター<に変え、光線を3連射することが出来る>バーストモード<のコードを入力し、バーストモードを起動させ、光線をフカヒレに発射した。

「くらえー！」

「へ？ぎゃあああ！！！」

フカヒレにフオンブラスターの光線が命中し、火花を散らしながら後ろに倒れた。

「アリサ、怪我はないか？」

「う、うん」

「よし、なら早くGトレーラーに乗れ」

「わ、分かったわ」

アリサに怪我がないことを確認し、急いでGトレーラーに乗せた。

「ガングラー、ガンドーベル、オートバジン、サイドバッシャー、  
一時撤退するぞ！」

『ガガ・・・分かりました』

『ガガ・・・急ごうぜ』

- 9889 ENTER

『SIDE BASSHER VEHICLE MODE』

ファイズフォンでサイドバッシャーをビークルモードに戻すコード  
を入力し、それを見たガングラーとガンドーベルもビークル形態に  
システムチェンジした。

「ガングラー、オートバジン、援護しろ！出せ！！」

命令を出すと後部ハッチが閉まり、Gトレーラーは急発進した。

Gトレーラーが急発進するとガンドーベル、サイドバッシャーも走  
り出した。

「逃がさなバババババババ」っ・・・くっ！！」

姫がGトレーラーを追いかけようとしたがオートバジンとガンゲル  
ーの上空から攻撃で妨害された。

Gトレーラー内

なんとかあの状況から脱出することが出来、俺は少しだが安心して  
いた。

しかし、それは俺だけで、すずか達の方はまだ不安な気持ちだろう。

「……………」

「……………」

「……………」

何か言いたそうに恭也さんと忍さんと美由希さんが俺をジッと見て  
いる。

今の俺に不安があるとしたらこっちだな。

しかも恭也さんの目が怖い。

「ねえ、健悟君」

そう考えているとすずかが話しかけてきた。

「この車、何処に向かっているの？」

そういえば、俺もGトレーラーが何処に向かって走っているのか知ら  
ないな。

「えーつと・・・」現在このGトレーラーは戦闘の影響を減らすためにこの先にある工場地帯に向かって走行しています。「だそつだ。・・・ん？」

俺は声が聞こえた方を見た。

「どうも、マスター」

そこには何故かアポロンがいた。

「じゅ、銃が喋ってる・・・」

忍さんがアポロンを見て驚いている。

「あれ？なんているの？」

「マスターがGトレーラーに出動命令を出したので、心配だったので私も来たのです。それよりマスター、早く左腕の治療をしたほうがよろしいのでは？」

アポロンに言われ、左腕を見るとかすめた場所から出血して、制服に血が染み込んでいた。

「健悟君、血が！！」

「あんだ、まさかさっきので！？」

「多分な。アポロン、医療キットは何処だ？」

「1番左の網棚の上にあります」

「分かった」

アポロンに教えてもらい、医療キットを取ろうとしたが

「・・・届かん」

届かなかった。

背伸びを試してみたがやっぱり届かなかった。

脚立を探したがGトレーラーにはそんな物は置いてなかった。

「はい」

「え？」

どうやって取るうかと考えていたら美由希さんが医療キットを取ってくれた。

「これ、いるんでしょ？」

「ありがとうございます」

「いえいえ」

美由希さんにお礼を言って医療キットを受け取り、すぐに治療にとりかかった。

「くっ！」

痛みを堪えながら上着を脱ぎ、血を拭き採り、包帯を巻こうとした

が片腕のせいで上手く巻くことが出来ない。

「貸してっらん」

「え？」

「片手じゃやり難いでしょ？」

「……………お願いします」

「はいはい」

俺が包帯を巻くのにてこずっていると再び美由希さんが手を貸してくれた。

「はい、終わったよ」

「ありがとうございます」

美由希さんに包帯を巻いてもらった後、医療キットから筒状の物を取り出し、左腕に当て、中に入っていた痛み止めを打った。

「つつふう〜、これで少しはマシだな・・・あの、健悟・・・なんだ？」

治療を終えるとアリサが落ち込んだ表情で俺に声をかけてきた。

「ごめん、私のせいよね？その、怪我したのって」

どうやら俺が怪我をしたことを機にしている様だ。

「これはアリサのせいじゃない」

「でも……」

「これは俺が避けきれなかったのが悪いんだ。だから別に気にするな」

そういつて俺はアリサの頭を撫でた。

「！！あ、ありが……とう／＼」

そして何故かアリサの顔を赤くなってる。  
熱でもあるのか？

「マスター」

アリサの頭を撫でているとアポロンが話しかけてきた。

「ガングルーとオートバジンが合流、オートバジンが着艦許可を求めていますがいかがなさいますか？」

「着艦を許可する。ハッチを開いてやってくれ」

「イエス、マスター」

アポロンがハッチを開けると上空にいたオートバジンがGトレーラーに着艦し、オートバジンが入るとすぐにハッチが閉められた。

「ご苦労だったな、オートバジン」

オートバジンが電子音を鳴らしながら頷き、俺はオートバジンの胸部にあるスイッチを押した。

>VEHICLE MODE<

オートバジンをバトルモードからビークルモードに戻した。

「な、何今の！」

オートバジンに真っ先反応したのは忍さんだった。  
流石機械好き、目がキラキラしてる。

「後で説明します。アポロン、Gトレイラーの速度を上げる。恐らく追撃が来るはずだ。あと索敵警戒も怠るな」

「イエス、マスター」

アポロンに指示を出した後、俺は壁の開閉スイッチを押した。  
壁が開き、中からG3・XユニットとG4ユニットが姿を現した。

「な、なんなのこれ！」

G3・XユニットとG4ユニットを見て一番最初に反応したのは忍さんだった。

目のキラキラが更に増した。

「えーっと、これについても後で説明を「おい」・・・っ！」

「いい加減そろそろ説明してくれないか？さっきの怪物達や男と女

が特撮のヒーローの様な姿に変わったことやこのバイクや外にいるヘリやバイク、この警察のトレーラー、そしてその喋る銃に特撮ヒーローの様な物についてさっきから後で説明すると言っているが一体いつになったら説明してくれるんだ？」

やばい、恭也さんが怒ってる！

本当に怖い！！

「はぁ・・・分かりました、説明しますよ。」

俺はこれ以上恭也さんを怒らせるのが怖いので説明することにした。

「先程の怪人、一番最初に現れた怪人は「アンノウン」と呼ばれている怪人です」

「アンノウン？」

「アンノウン・・・軍事用語で「国籍不明」って意味ね」

「次に現れた灰色の怪人は「オルフェノク」と呼ばれている怪人で彼らは死者が蘇った怪人なんです」

「死者が・・・」

「蘇った怪人？」

「馬鹿な！」

「嘘でしょ？」

忍さん、すずか、恭也さん、アリサがアースラでリンディ達に説明した時と同じ様に信じられないという表情をしている。

「流石にこんな状況下で嘘をつきませんよ」

「・・・分かった信じよう。で、あの特撮ヒーローの格好をした奴らはなんなんだ？」

「あれは・・・仮面ライダーです」

「「仮面ライダー？」」

「なんだそれは？」

「仮面ライダーは・・・」「ビー、ビー、ビー、・・・っ！」

恭也さん達に仮面ライダーの説明をしようとした時、Gトレーラー内に警報が鳴り響いた。

「な、何！？」

「どうしたの！？」

警報が鳴ったことでアリサとすずかが戸惑い始めた。

「アポロン、状況を説明しろ！」

「前方約1km先に多数の反応あり、敵数約40です。現在の速度からして接触まであと48秒です」

「敵の種類は？」

「そこまでは不明です。しかし、先程のアンノウンやカイザ達の可能性もあります」

「現在のお前の状態は？」

「まだ最終調整が終わっていません。出撃可能まであと30分は必要です」

「……分かった」

俺は確認をすると壁にかけてあるG3-Xの、GM-01 スコーピオン、GG-02 サラマンダーのグレネード部、GX-05 ケルベロス、G4のGM-01改四式を取り出し、各武器にマガジンを装填した。

「ちょ、ちよつと健悟！何やってんのよ!？」

「アポロン、速度減速。あとG3-XとG4の武器をいつでもアクティブ出来るように準備しておけ」

「イエス、マスター」

アリサの質問に答えず、戦闘の準備を進めた。

「敵を目視で確認。敵はグロンギです」

グロンギか、また厄介なのが来たな

グロンギ

残虐かつ闘争心が旺盛な性格をした人類に極めて近い戦闘種族。

「迎撃する。停車しろ！」

「イエス、マスター」

アポロンがGトレーラーを停車させた。

「映像をモニターに回せ」

「イエス、マスター」

Gトレーラー内のモニターに外の映像が映された。

「なんだあいつらは？」

「あいつらは……グロンギ」

「グロンギ？」

「……アポロン、後を頼む」

「イエス、マスター」

「おい、待て！どうするつもりだ！」

俺がGトレーラーから下りようとするすると恭世さんが呼び止めた。

「あいつらを倒してきます。皆さんはここに居て下さい」

「何言ってるの、危険よ！」

「さっきのロボット達に任せれば！」

忍さんと美由希さんが俺を止めようとするが俺は首を横に振った。

「彼らにはこのGトレーラーを守らせないと、それにさっきの連中が来る可能性もあります」

そういつて俺はビークルモードのオートバジンに近づき、胸のボタンを押し、オートバジンをバトルモードにした。

『BATTLE MODE』

「オートバジン、皆を頼む」

オートバジンは電子音を鳴らしながら頷いた。

「アポロン、ハッチをひ」「駄目！」「……………」

「すずか、アリサちゃん……………」

アポロンにハッチを開けるように命令しようとした時、アリサとすずかが叫んだ。

二人を見るとすずかの方は目尻に涙を溜めていた。

「駄目、行ったら駄目！アポロンさんが使えないのに…………危ないよ……………」

「そうよ！それにあんた怪我してんのよ！」

「そうだな。でも、あいつら倒さないと」

「だから！」

「大丈夫。手段はまだある」

「でも……でも！」

すずかの目から涙が流れた。  
はぁ、しょうがないな。

「大丈夫だつて。ほら泣くな」

俺はすずかの涙を拭いた。

「ちゃんと戻ってくるから安心しろ二人とも」

「……」

「俺を信じる」

「……分かったわよ」

「アリサちゃん……」

「その代わり、絶対帰ってきなさいよ！！」

アリサがビシッと人差し指を俺に指した。

「・・・分かったよ。アポロン、ハッチを開ける」

「イエス、マスター」

「・・・あとアポロン」

「何ですか？」

「返事する時、「イエス、マスター」だけじゃなんか微量だし。別の返事を考えたらどうだ？」

「何故です？」

「なんとなく」

「・・・では、ラー ज्याでどうでしょうか？」

ふむ、フルメタのアーバレストの「アル」やM9に搭載されているAIと同じ返事か。

うん、このほうがいいな。

「それにしよう。じゃあ頼むぞ？」

「ラー ज्या」

アポロンがGトレーラーのハッチを開けると俺はGトレーラーを降り、ハッチが閉められた。

「ガングルー、ガンドーベル、サイドバッシャー、Gトレーラーを

守れ」

『ガガ・・・お任せ下さい』

『ガガ・・・気をつけて』

ガングルーとガンドーベルとサイドバツシャーに命令し、ガングルーとガンドーベルが返事を返すと俺はグロンギとGトレーラーの間に進み立ち止まった。

「さーってとまずあいつらの言葉を調べないとな」

目を閉じ、Wのフィリップと同様、俺の頭の中にあるデータベース『次元の本棚』に入った。

「検索を始めよう。キーワードはクウガの世界、グロンギ、言葉」

無数の本棚の中から不要なものが排除され一冊の本が残った。

「・・・なるほど」

本棚で調べ終わった俺は身を開き、グロンギ達に話かけた。

「ゴギ、ゴラゲダチ！」（おい、お前達！）

「ルツ！ボゾグ、「リント」ンズンザギゼ、バゼパセパセンボドダゾギデデギス」（むっ！小僧、リントの分際で、何故我々の言葉を知っている！）

俺がグロンギ語で語りかけると上級のグロンギ、ヤマアラシ種怪人

「ゴ・ジャラジ・ダ」が答えた。

「ゴノバボドゾグゼロギギ。ゴラゲダチンロブデジゾギゲ」（そんなことどうでもいい。お前達の目的を言え）

「・・・ズ、ギギザソグ。ガンババビギス「リント」ゾパダゲ。ガンババビバ「リント」ゼガシバガサズジギバチガサゾロツロボンベザギゾバポジス」（・・・ふ、いいだろう。あの中にいるリントを渡せ。あの中にはリントでありながら不思議な力を持つ者の気配を感じる）

不思議な力を持つ者？  
すずかと忍さんのことか？

「ゴドバジブパダゲダ、ギボチパダグベデジャスゾ？」（大人しく渡せば、命は助けてやるぞ？）

「ボドパダダサ？」（断つたら？）

「ギガラゾボソグザベザグ、ゴドパスシジュグガゾボヒガス？ガボババビギス「リント」パスツギン「リント」ゼパバギ。ギパダパセパセトゴバジザ。ゴンバロボグギビデギスギリバゾb「ゴセギジヨグ」・・・っ！」（貴様を殺すだけが、断る理由が何処にある？あの中にいるリントは普通のリントではない。言わば我々と同じだ。そんな者が生きている意味などn（それ以上・・・）・・・っ！）

「ゴセギジヨグギデデリソ。ガボババビギスジャツガバギダサゾググス？ロギバギデダサ・・・ゴセパゼダダギビジュスガバギゾ！」（それ以上言ってみる。あの中に居るやつが泣いたらどうする？もし泣いてたら・・・俺は絶対許さないぞ！！！！）

まあ、どっちみち許すつもりないけど。

「バ、バゼザ!?バゼビガラパバズツギン「リント」ゼババギロボ  
ンダレビゴボラゼギバス!」(な、何故だ!?何故貴様は普通の  
リントではない者のためにそこまで怒る!!)

「ジャブゾブギダバサザ」(約束したからだ)

「ジャブゾブザド?」(約束だと?)

「ゴセパジャブゴブギダド「スズカ」。ビスツベスジャツサバサゾ  
ゴセグゼダダギビラロデデジャステデゾ「スズカ」」(俺はずずか  
と約束した。ずずかを傷つける奴らから俺が絶対に守ってやるって)

俺が始めてライダーに変身し、ずずかとアリサを助けたあの日に泣  
いていたずずかとした約束。

「ゴラゲン、ゴラゲダチンゲギゼ・・・ボセギジョグバリザゾバガ  
グドボソバンデ、ゴセパリダブバギグ「スズカ」」(お前の、お前  
達のせいで・・・これ以上ずずかが涙を流すところなんて、俺はみ  
たくない!ずずかには、いつでも笑っていて欲しい!)

「バビ!」(何!)

「ザベジャバギ「スズカ」!ドロザチロ、バゾプロ、ゴボラパシン  
ジドダチンバリザロリダブバギン「スズカ」!ゴボジドダチビロパ  
サデデギデゾギギ!ザガサ、ゴボジドダチンゲガゴゾラロスタレビ、  
ゴセパギバス、ゴギデダダバグ!」(ずずかだけじゃない!ずずか  
の友達も、家族も、その周りの人達の涙もみたくない!その人達に

も笑っていて欲しい！だから、その人達の笑顔を守るために、俺は怒り、そして戦う！！）

うわー、久しぶりにこんな大声で叫んだなのどいてえ〜

「ビガラ、バビロボダ！」（貴様、何者だ！！）

「ドゴシグガシンバレンサギザザ。ゴドゲデゴベ！」（通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ！）

両手を腰の前でかざし、変身ベルト「アークル」を出現させた。

「ゾ、ゾセダデスドン「クウガ」！」（そ、それはクウガのベルト！）

アークルを出現させ、右手を左斜め上に伸ばすと同時に左手を左腰に添えた。

そして、右腕の位置を左から右へゆっくりと移動させた。

「変身！！」

叫んだ後、右手を左手の上に移動させ、左手でアークルの左腰にあるスイッチを押し込んだ。

身体を開き、アークルが唸りを上げていくと、俺は古代リントの戦士『仮面ライダークウガ』に変身した。

仮面ライダークウガ

古代民族リントが霊石アマダムを埋め込んで作ったベルト「アークル」を装着して変身し、戦闘種族「グロンギ」と戦う仮面ライダー。

クワガタムシをモチーフにしている。

平成仮面ライダー作品の第一作「仮面ライダークウガ」の主演ライダー。

キャッチコピーは「A NEW HERO・A NEW LEGE  
ND」

「いくぜっ!?!」

「ギベ!」(行け!)

俺が走り出すとゴ・ジャラジ・ダが命じ、他のグロンギ達が俺に向かって走り出した。

「おらあっ!」

「ガッ!」

俺は最初に向ってきたグロンギの左頬を右手で思いっきり殴った。

「グゴゴゴ!」(うおおお!)

「ふん!」

唸りながら向ってきたグロンギの腹部に横蹴りを入れた。

「グッ!」

「ゴボセ!」(おのれ!)

「ギベ、クウガ!」(死ね、クウガ!)

今度は2体が前後から向ってきた。

「ザラセ！」（黙れ！）

俺は前から向ってくるグロンギに向って行った。

「ブサゲ！」（くらえ！）

「ふん！」

前のグロンギは俺の顔に殴りかかってきたが、それを右手で受け止めた。

その隙に後ろのグロンギが向ってきた。

「ロサダダー！！」（もらったー！！）

「ガラギバ」（甘いな）

前のグロンギの拳を受け止めた状態で後ろから来たグロンギにひねり蹴りを食らわせた。

「グッ！」

ひねり蹴りで後ろにいたグロンギを怯ませると前にいるグロンギの右腕を左手で掴み、両手で前に引き寄せ、背中をグロンギの身体に合わせ、力いっぱい投げた。

「グゴッ！」

「ガッ！」

投げ飛ばしたグロンギはひねり蹴りを食らわせたグロンギとぶつかった。

「ゾグギダ！ボボデギゾバ？」（どうした！この程度か？）

「ゲゲギ！チヨグギビボスバ！」（えーい！調子に乗るな！）

俺が挑発するとゴ・ジャラジ・ダが向ってきた。  
単純だな。

「これで決める！」

足のコントロールリングから封印エネルギーが右足に収束されていく。

「ハアアアアっ、ハッ！」

ゴ・ジャラジ・ダに向かって走り出し、跳び上がった。

「ハアアアアッ！」

ゴ・ジャラジ・ダにクウガの必殺技「マイティキック」を食らわせようとしたその時だった。

「がああっ！！！」

何処からか光線が放たれ命中し、落下した。

「くっ！一体誰が「ブオオオン！」っ！！」

音が聞こえた方を見るとジャイロアタッカーに乗ったライオトルーパー、オルフェノク、カイザ、突進態になったエレファントオルフェノク、そして上空にジェットスライガーに乗ったデルタ、そしてさっきのアンノウン達がいた。



健悟「完全R18バージョンじゃん!!」

ARX17アーバレスト「気にするな!」

健悟「気にするわ!!確かにそれ聞いたらなんか当てはまるっちゃあ当てはまるけど。悪ふざけにもほどがあるぞ!!」

ARX17アーバレスト「だが、私は謝らない!!」

健悟「所長!!」

アポロン「ニ 動ネタはいいですから。とりあえず謝罪しましょう」

ARX17アーバレスト「うん」

健悟「そうだな」

アポロン「では、せーの」

ARX17アーバレスト・健悟・アポロン「すいませんでした!!」

ARX17アーバレスト「では、次回予告に行こう!」

健悟「切り替え早!!」

アポロン「次回『第十九話 折角帰ったのに休む暇がない(後編)』です」

健悟「お前も早!!」つか俺の役割取られた!!」

アポロン「みなさまのご意見とご感想をお待ちしています」

ARX-7アーバレスト「次回もお楽しみに!!」

第十九話 折角帰ったのに休む暇がない（後編）（前書き）

今回は今までで一番長いです！

そしてバトルも熱い+多いです！

では、どうぞー！！

## 第十九話 折角帰ったのに休む暇がない（後編）

「くそっ！追いついてきやがったか！」

「あら、今日はフェニックスじゃないのね？だったら倒しやすいわね」

俺がフェニックスではなく、クウガの姿であることに姫が余裕そうにしている。

正直ムカつく。

「簡単にやられるかよ！」

俺は姫に向って走り出した。

「うおおおおっ！・・・っがああっ！！！」

しかし、地上のライオトルーパー達のアクセレイガン、ガンモードとジェットスライガーで上空にいたフカヒレのデルタムーバーの銃撃を食らって飛ばされ、地面を転がった。

「ナイス！フカヒレ君、ライオトルーパー達！」

「でしょでしょ！俺だっぴゃるときはやるぜ！」

姫はフカヒレとライオトルーパー達にグッドサインを出し、ジェットスライガーに乗ったフカヒレは姫に誉められて喜んでいる。

「くそっ！」「グゴゴ！」・・・っ！

姫達に気をとられていると今度はグロンギ、アンノウンが向ってきた。

「ちっ！ふっ！はっはっ！・・・っおらぁ！」

「グッ！」

「ゴッ！」

「エアッ！ガアアアッ！！！」

向ってくるグロンギとアンノウンに舌打ちをし、グロンギの一体に前蹴りを食らわせ、別のグロンギの腹に右と左を交互にパンチを入れ、後ろから迫ってきたアンノウンには後ろを振り返った勢いを利用した右アッパーを顎に入れ、浮かび上がったのを確認し、そのまま左ストレートを腹に入れた。

（・・・なんだこれは？）

俺はグロンギとアンノウンと戦っている最中にあることを感じていた。

（ほんの僅かだが、何故こんな違和感を感じてるんだ！）

今の俺は自分の動き等に若干の違和感を感じていた。

「さーって、あの男をあいっつらにまかせてっ」と

「たあっ！！・・・むっ！」

俺が違和感の原因を考えながらグロンギ、アンノウンの相手をして  
いると姫やライオトルーパー、オルフェノク達がGトレーラーに向  
って歩きだした。

「まずい！ガングルー、ガンドーベル、システムチェンジ！サイド  
バツシャー、バトルモード起動！」

> BATTLE MODE <

サイドバツシャーからバトルモードの音声が流れるとサイドバツシ  
ャーはバトルモードに変形し、ガングルーとガンドーベルもサイレ  
ンをサイレンを鳴らしながらロボット形態にシステムチェンジした。

「げっ！また！？」

「ガンドーベルは地上、ガングルーは上空を担当しろ！サイドバツ  
シャーは地上と上空を交互に援護！敵をGトレーラーに近づけるな  
！攻撃開始！！」

バババババババツ

ドンッ、ドンッ、ドンッ、ドンッ、ドンッ、ドンッ、ドンッ、ド  
ンッ、

「うおっ！ちよっ！」

「もう、またあ！？」

「くっ！」

「ぐわっ!！」

ガンドールベルとサイドバツシャアの攻撃でGトレーラーに向かう姫、ライオトルーパー、オルフェノクの進行を止め、上空はガンゲルールの攻撃をジェットスライガーに乗ったフカヒレが一生懸命避けている。

「くっ!どうやらあいつを先に倒さないといけないみたいね!！」

姫達は標的をGトレーラーから俺に変更した。

『BURST MODE』

姫がカイザブレイガンホルスターから抜き、コッキングレバーを引きガンモードを起動させた。

「はっ!！」

「ぐあああっ!！」

カイザブレイガンから放たれた濃縮フォトンブラッドが俺に命中した。

「このっ!」「ゴゴゴッ!」「くっ!！」

姫に向っていこうとしたらグロンギによって邪魔をされた。

「ええいっ!このっ!ぐわっ!！」

グロンギも相手をしていると今度は後ろからアンノウンに攻撃された。

「エアア！」

俺を後ろから攻撃したアンノウンが振り上げた杖状の武器を振り下げた。

「あんまり調子に！」

アンノウンの武器が身体に当たった。

「ぐっ！のんなよ！！！」

武器が身体に当たった時に相手の武器を掴み、アンノウンを前蹴りして離れさせ、武器を奪った。

「ガッ！」

「借りるぞ？超変身！！！」

アンノウンから武器を奪うと変身の時とは別の音がアークルから放たれ、赤色だった体とアークルの中央の色を青色に変わった。

基本フォームのマイティフォームよりも跳躍力と俊敏さに優れた青色のクウガ。

邪悪なる者ならば その技を無に帰し 流水の如く邪悪を薙ぎ払う戦士。

クウガの特殊形態、水を司る戦士「仮面ライダークウガ ドラゴンフォーム」にフォームチェンジした。

ドラゴンフォームに姿を変えると手首あるハンドコントロールリン

グからアマダムが持つ、物質を原子・分子レベルで分解・再構成する能力「モーフィングパワー」によってアンノウンから奪った武器はドラゴンフォーム専用の武器「ドラゴンロッド」に変換された。

「ふっ！はあああっ！！！はっ！」

「ゴッ！」

「ガッ！」

ドラゴンフォームにフォームチェンジし、ドラゴンロッドを使いグロンギ、アンノウンを薙ぎ払っていく。

「ゴボセ、クウガ！」（おのれ、クウガ！）

右側からグロンギが向ってきた。

「たあっ！」

「ガッ！」

向ってきたグロンギにドラゴンロッドの先端を突き立て、封印エネルギーを流し込んだ。

「うおおりやああっ！！！」

「ガアアアツッ！！！！！」

クウガ ドラゴンフォームの必殺技「スプラッシュドラゴン」を受けてグロンギは爆発した。

『READY』

「はああああっ!!！」

「くっ！」

グロンギの一体を倒してすぐ、姫がカイザブレイガンにミッションメモリーを入れ、ブレードモードを起動させ、姫のカイザブレイガンと俺のドラゴンロッドがぶつかつた。

「あんたもよくやるわよね?こんな数の相手をたった一人で」

「お褒めの言葉をありがとう」

「でも、そろそろウザイから消えなさい！」

「くっ！」

カイザブレイガンでドラゴンロッドを払い除けると姫は横に飛ぶと俺の目の前にアクセレイガン ガンモードを構えたライオトルーパー達が目に入った。

「やりなさい！」

姫の言葉を合図にライオトルーパー達から光線が一斉に放たれた。

「ぐああっ!!！」

ライオトルーパーの一斉射撃を食って飛ばされ、地面を転がった。

「うっ、このやる・・・おおおおっ!!」「っ何!？」

飛ばされた俺はすぐに立ち上がりドラゴンロッドを構えようとしたがオックスオルフェノクが握り手状の鉄球を振り回しながら俺に向ってくる。

「そんなもん!っくっ!!」

「避けるんじゃないわよ」

オックスオルフェノクの攻撃を避けようとした時、姫のカイザブレイガンのフォトンブラッド弾によって封じられた。

「うおおおおっ」

「っがはっ!!」

オックスオルフェノクの3tある鉄球が俺の腹に入り、肺から空気が押し出された。

今のクウガのフォーム、ドラゴンフォームは跳躍力と俊敏さに優れる代わりに基本フォームのマイティフォームよりもパワーと耐久性が低下してしまう。

耐久性が低いため、さっきの攻撃で受けた痛みはかなりのものだった。

「し、しまった・・・ぐっ!!」

体に走る痛みを耐えようとするが敵の攻撃は次々とくる。

グロンギが俺の顔、腹を殴り、反撃しようするとアンノウンが後

る、空から襲い掛かる。

そのアンノウンの相手をしようとする今度はライオトルーパーがアクセレイガンで斬りかかり、振り返ると別のライオトルーパーのアクセレイガンと姫のカイザブレイガンのガンモードの射撃を食らってよるけ、オルフェノクが腹を殴り、蹴り、ライオトルーパーのアクセレイガンで斬られた。

「うっ！がっ！はあ、はあ、ぐっ！ぐはっ！がああっ！！」

Gトレーラー内

アポロンSide

現在Gトレーラーのモニターで私とすずか様、アリサ様、忍様、美由希様、恭也様とともにボロボロになりながらグロンギ、アンノウン、オルフェノク、カイザ、デルタ、ライオトルーパーと戦うマスターの戦闘を見ている。

「マスター！」

「健悟君！」

「健悟！」

「1人相手にあんな大勢で・・・」

「酷い。このままだとあの子が・・・」

傷つくマスターを見て私と涙を浮かべたすずか様とアリサ様が叫び、忍様と美由希様は残酷な光景に声を震わせている。それにしてもマスターの動きが鈍いですね。

恐らくまだクウガに慣れていないせいでしょう。

「ロボットさん、お願い！！健悟君を助けてあげて！！」

すずか様はオートバジンにマスターを助けることを頼んでいます、オートバジンは首を横に振った。

「どうしてよ！どうして健悟を助けないのよ！！あんたも、外のロボットも！！」

マスターを助けに行かないオートバジンにアリサ様は怒鳴った。

「彼らを責めないで上げて下さいすずか様、アリサ様。これは仕方がないことなのです」

「アポロンさん？」

「仕方がないってどういうことよ！？」

すずか様とアリサ様が私の方を向き、アリサ様は今度は私に怒鳴ってきた。

「落ち着いて二人とも。あの、アポロン・・・だっけ？なんで仕方がないの？」

美由希様がすずか様とアリサ様を静めてくれ、私に優しく話しかけてくれた。

「そこにいるオートバジン、外にいるガングルー、ガンドーベル、サイドバッシャーの重要任務は皆様を守ることです。もしマスター

を助けにいったら守りが手薄になり皆様に危険が及ぶ可能性があります。ですからマスターは自分よりも皆様を守ることを最優先にする様に命令を出されました」

「でも、このままじゃ健悟君が!!」

「皆様の命を守る。それがマスターの……仮面ライダーの使命です」

「…………ちよつといいか？」

今まで話さなかった恭也様が話しかけてきた。

「さつき野田言ってた仮面ライダーってのはなんなんだ？」

「きよ、恭ちゃん！今はそんなこと聞いている場合じゃ……」

「答える」

「…………分かりました。全てではありませんが極一部でよろしいのであればお話します」

「…………いいだろう」

最初は迷いましたがここまで関わっては誤魔化すのも難しいでしょう。

恭也様も私の提案に乗ってくださいましたし、話すとしましょう。

「仮面ライダーは本来、こことは違う別の世界でそれぞれの世界の怪人と戦い、人々の平和を守るために誕生した戦士です」

「このことは別の世界・・・よくマンガにある平行世界ってこと？」

「その通りです、忍様」

「でもあの怪人達の中にも仮面ライダーがいるよね？」

「残念ながら存在するライダー全てが正義とは限りません」

「でも、さつき平和を守るための戦士だって」

「私でも矛盾を言っていることは分かっています。確かに平和を守るために戦うライダーもいますが、その力に溺れ、悪の道を歩いてしまふライダーもいます。別の世界で平和のために戦っていたライダーが別の世界では平和を乱すライダーになっていることはあります。あそこにいるライダー「カイザ」と「デルタ」も同じです」

「あの人達も？」

「あのカイザとデルタのライダーシステムはオリジナルの世界では装着者によっては悪事をしていました。しかし、正装着者に使用された時は平和を守るために戦っていました」

「オリジナルの世界って・・・」

「彼らが最初に誕生した世界です。やがてオリジナルの世界以外の世界でも別のカイザとデルタが誕生し、それが善のために使われているのか、それとも悪のために使われているのか、それはその世界しだいですが」

「なるほどな。しかし、何故そんな別の世界の怪人や仮面ライダーがここに現れ、野田が仮面ライダーになっているんだ？」

流石に今の段階で真実を話すのはまだ厳しいですね。  
ここはなんとか誤魔化しましょう。

「あの怪人やライダー達は何らかの理由でこの世界に現れてしまったのです。そして申し訳ありませんがマスターがライダーになれる理由については極秘事項なのでこれ以上お話出来ません。しかし、マスターが仮面ライダーとなり戦うのは皆様を守りたいからです」

『があああつ！！！！』

皆様に説明をしているとモニターからマスターの悲鳴が聞こえてきた。

「！健悟君！！」

「健悟！！」

「……………美由希、行くぞ」

「えっ！？」

「きよ、恭也！？」

恭也様の言葉に美由希様と忍様が驚き、もちろん私も驚いている。

「恭ちゃん、行くなって何処に？」

「野田を助けに行く」

「お待ち下さい恭也様。何故急にマスターを助けようとしてくれるのですか？」

「ある程度聞かせてもらったが、まだお前や野田に聞きたいことが沢山ある。このままだと野田から話を聞けないからな。だから助ける」

「もう、素直じゃないなあ恭ちゃん。本当は単に野田君を助けたいだけのクセに」

「う、うるさい。行くぞ！」

「うん！」

恭也様と美由希様がGトレーラーから降りようとしたがオートバジンはお二人を止めた。

「お、おい！」

「お願いだから行かせてロボット君！」

お二人がオートバジンに行かせるように頼んでいるがオートバジンは首を横に振っている。

「恭也様、美由希様、お二人のお気持ちはとても嬉しいです。しかし、生身でグロンギやアンノウン、オルフェノク、ましてやカイザ、デルタ、ライオトルーパーを相手にするなど自殺行為です」

「大丈夫。戦いには自身があるから」

「そういう問題ではありません。ライダーではない貴方が敵の攻撃を受ければ最悪死ぬ可能性もあります。更に皆様を守ろうとしてマスターは更に無茶をするはずですよ！」

「そ、それは・・・」

「くっ！」

お二人のマスターを守ろうとしてくる気持ちはとても嬉しい。しかし、ライダーでない一般の方を危険にさらす訳にはいかない。

(今から氷竜達にスクランブルを出しても到着に多少の時間がかかりますね。その間の時間稼ぎさせ出来れば)

「ちょっと!」

私はほぼ最終手段として氷竜達を呼ぶことにしたが時間がかかるのでその時間稼ぎを考えていた時、アリサ様に声をかけられた。

「なんですか？アリサ様」

「あんたを使えば仮面ライダーになれるんでしょう？だったら私が戦うから使わせなさいよ!」

「申し訳ありませんが私は完全にマスター専用のライダーシステムです。使うにはマスターの許可が必要です。そしてそれ以前に私が可動可能まで後19分49秒の時間が必要です」

「だったらあんた以外のライダーシステムってのを貸しなさいよ！他にもあるんでしょ！？」

「！！何故そのことを？」

「健悟に教えてもらったのよ！」

「……マスター、何を教えてるんですか。」

「それどうなの！使えるの？」

「確かに他のライダーシステムは現在活動可能状態にあります。しかし、お貸しすることは出来ません。」

「どうしてよ！！！」

「ライダーシステムをマスター以外の方にお貸しすることは禁じられています。それにマスターの承認もなければいけません」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ！！！」

「アリサちゃんの言う通りだよ！アポロンさんお願い！ライダーシステムを貸して！このままだと健悟君が……健悟君が！！！」

「さすが様が涙を流し、アリサ様も目に若干涙を溜めている。」

「俺からも頼む。野田を助ける力があるなら俺達に貸してくれ」

「アポロン、お願い！」

「お願い！」

アリサ様とすずか様だけでなく、恭也様と美由希様、そして忍様が頭を下げている。

しかしあることだけは確認しておく必要がありますね。

「皆様に確認したいことがあります」

「何？」

「何よ？」

「何だ？」

「何を？」

「何？」

「どうして皆様は自らを危険にさらしてまでマスターを助けたいのですか？」

「そんなの決まってるわ！」

アリサ様が私に叫んだ。

「大切な友達が傷ついてるのに助けてあげられないのがムカつくのよ！だから助けられる力があるなら助けてあげたいのよ！」

私の質問にアリサ様が最初に答えた。

「わ、私は・・・健悟君を助きたい！！何も出来ないかも知れないけど、それでも助けてあげたい！！私も誰かを守りたい！！助けられるだけなんて嫌！それに、健悟君に死んで欲しくない！私にとつて健悟君は大切な人なの！！」

さすが様が涙を流しながら答えた。

つと言うより、今凄いい台詞をいいましたね。

・・・録音してて正解でした。

「俺は、さつきも言った通りまだあいつに聞きたいことがあるからだ」

恭也様は照れくさそうに答えた。

「私はあの子が一生懸命、私達を助けてくれようとしてくれるから私もあの子を助けてあげたいんだよ？」

美由希様が笑顔で答えてくれた。

「私も美由希さんと同じ気持ちだし、さすがが大切に思っている子なら私も守ってあげたい」

忍様も美由希様と同じ、笑顔で答えてくれた。

どうやら皆様がマスターを助けていたい気持ちはとても強いようですね。

「では、最後の質問です。貴方方に戦う覚悟と罪を背負う覚悟はありますか？」

「私達に」

「俺達に」

「戦う覚悟と」

「罪を背負う覚悟が」

「あるかどうか？」

私の質問にすずか様、恭也様、アリサ様、美由希様、忍様が首をかしげる。

「グロンギやアンノウンなど一部の怪人は別ですが怪人の中にはオルフエノクのように人間の姿になっている者もいますし、ライダーになってる者はほとんどが人です。それでも皆様は彼らと戦うことが出来ますか？そして仮に戦い、敵を倒した時、自分が犯した罪を受け入れ戦い続けることが出来ますか？」

「……………」

一時的な感情だけで戦っては敵を倒した時に自分の罪を背負う覚悟がなければ戦い続けることなど出来ません。

ましてや、仮面ライダーを倒すと言う事は最悪の場合、人を殺すことになります。

戦場でも人を殺す覚悟がなければ戦うことなど出来ません。

（はたして皆様にその覚悟はあるのでしょうか？）

「何度も同じこと言わせないで！」

「……」

「傷ついでる大切な友達を助ける力があるなら助けてあげたいってさっきも言ったでしょ！そのためだったら戦う覚悟だって持つし、自分の罪ぐらい背負ってやるわよ！！！」

「わ、私もアリサちゃんと同じだよ！！！」

「俺も、覚悟は出来てる」

「私もだよ」

「ええ」

「……美由希様。その4つのアタッシュケースを取っていただけですか？」

「え？う、うん」

皆様の答えを聞いた私は美由希様にGトレーラーに置いてあった4つのアタッシュケースを取ってもらった。

「これでいいの？」

「はい。では、その4つのアタッシュケースを机に置いて、開けてください」

「うん」

美由希様はアタッシュケースを机に置き、アタッシュケースを開けた。

「い、これって!」

「ベルトか?」

「でもこのベルトって」

「あの二人と同じじゃない!」

「それに後の2つも似てる」

すずか様、恭也様、美由希様、アリサ様、忍様が4つのアタッシュケースの中身「デルタギア」「カイザギア」「サイガギア」「オーガギア」を見て驚いている。

「ではすずか様、その銃のグリップの形をした携帯「デルタフォン」を取ってください」

「う、うん。つというかこれ携帯なんだ」

すずか様がデルタギアからデルタフォンを取った。

「次にアリサ様、その黄色のラインが入った携帯「カイザフォン」を取ってください」

「うん。あ、これターン式なんだ」

アリサ様がカイザギアからカイザフォンを取った。

「美由希様は青色のラインが入った白色の携帯「サイガフォン」を

取ってください」

「オツケー。あ、私のは折りたたみ式だ」

美由希様がサイガギアからサイガフォンを取った。

「恭也様は最後の携帯「オーガフォン」を取ってください」

「ああ」

恭也様がオーガギアからオーガフォンを取り出した。

「本当はこのようなことを私の独断でやってはいけないんですが、緊急のため仕方ありませんね。・・・デルタフォン、カイザフォン、サイガフォン、オーガフォン、指紋認識システム登録開始」

私はデルタフォン、カイザフォン、サイガフォン、オーガフォンに指示を送った

『『『『・・・COMPLETE』』』』

「指紋認識システム登録確認。続いて音声認識システム登録開始。音声データ転送」

デルタフォン、カイザフォン、サイガフォン、オーガフォンの指紋認識システム登録が完了し、次に音声認識システム登録のためにすずか様、アリサ様、美由希様、恭也様の音声データをデルタフォン、カイザフォン、サイガフォン、オーガフォンに送った。

『『『『・・・COMPLETE』』』』

「これで全ての準備は整いました。これでもう後戻りは出来ませんよ。」

「ええわよ」

「私も」

「覚悟の上だ」

「うん」

「あの・・・私は？」

「忍様はそこにある装着型仮面ライダー「G3-Xユニット」をお使い下さい」

「G3-Xユニット・・・」

「元はG3ユニット。正式名称はGENERATION-3、第3世代型強化外骨格および強化外筋システムと呼ばれるライダーシステムを元にした改良強化タイプのユニットで正式名称はGENERATION-3 Extensionと呼ばれています。G3-Xの各武装はマスターが出撃前にマガジンを装填していた銃と壁にかけてあるミサイルランチャー以外の物です。忍様さっそくですが専用のスーツを着てG3-Xユニットを装着してください。その間に皆様にライダーズギアの説明をします」

「ええ」

「わかったわ」

「うん」

「ああ」

「オツケー」

皆様にライダーズギアの説明をし、忍様の着替えが終わり、恭也様と美由希様が忍様のG3-Xユニット装着を手伝っている。

「これでいいのよね？」

「はい。問題ありません」

「忍、大丈夫か？」

「大丈夫よ恭也。でもこのユニット、私とサイズが合っていない気がするんだけど」

「ご心配なく。オートフィット機能、作動します」

オートフィット機能でG3-Xが忍様の身体のサイズに補正された。

「あ」

「いかがですか？」

「ええ、いけるわ」

「では皆様・・・マスターをよろしくお願いします」

「うん！」

「わかったわ」

「任せろ」

「任せて」

「ええ」

「オートバジン。マスターと皆様を全力で支援しなさい。では、ハッチを開けます」

準備が整ったのでGトレーラーのハッチを開け、オートバジンが先に飛び出しすずか様達もハッチの外に向って歩き出した。

(マスター、皆様、どうかご無事で)

私はマスターと皆様が無事に戻ってこられるよう祈った。

「ぐあああっ！...！ぐっ！...！」

ダメージを受けすぎ、クウガの変身が解除されてしまった。

「ふふふ、もう限界みたいね。さーて、これでゆつくりとあの車の中にいるのを確保出来るわ「ま・・・て！」んん？」

Gトレーラーに向おうとする姫を呼び止めた。

「いつ・・・たい・・・お前達の狙いは・・・なんなんだ!！」

ボロボロになりながら、俺は姫に質問した。

「・・・いいわ。最後だし答えてあげる。私達の狙いはあの車の中にいる夜の一族と呼ばれる人間の確保。そしてその目的は私達だけじゃなくてそのグロンギとアンノウンも同じみたいね」

「何故・・・すずか達を・・・狙う」

「私が聴かされているのはその子に力があるから連れて来いって言われてるだけよ。もういいでしょ？目的も話してあげたし、これで心おきなくあの世に行けるでしょ？最後に言いたいことはあるかしら?。」

「・・・くたばれカス野郎」

「!?!?!フカヒレ君!こいつをミサイルでぶっ殺しなさい!！」

「へっ?マジで?」「さっさとやる!！」は、はいiiiiiiiiiiii!！」

姫の命令でフカヒレのジェットスライガーが俺の方を向きミサイルが露出される。

「撃ちなさい！！！」

「発射あ！」

ドドドドドドドドドド

ジェットスライガーから大量のミサイルが発射された。

『ガガ・・・危険です』

バババババババツ

ガングルーとガンドールベルがミサイルを迎撃するためにイーグルガン、ドールベルガンを撃ち、放たれた弾はミサイルに当たり爆発し、誘爆によってミサイルが次々と爆発する。

しかし、誘爆から逃れたミサイルが1発、俺に向かって飛んでくる。

(すずか、アリサ・・・すまん)

戻ると約束したすずかとアリサに心の中で謝罪し、目を閉じた。

キイイイイイイン、ガシャンツ

ダダダダダダダダダッ

ドゴオオオオオオンツ

「熱っ！！なんだなんだ!？」

目を閉じてすぐ何か俺の前に着地した音がし、何かを連射した音

が聞こえた後爆発が起き、熱風が当たり熱かったので何事かと思いで目を開けた。

「!!!オートバジン!?!」

そこにはGトレーラー内ですずか達の護衛をしているはずのオートバジンが俺の目の前に立っていた。

「お前、なんでここについて・・・お?」

オートバジンにここにいる理由を聞こうとすると聞きなりオートバジンに抱っこされ

キイイイイイ

「おおおおおお!!?!?!」

空を飛んだ。

もちろん突然のことに俺は混乱している。

「はっ!?!何?何をするんだオートバジン!?!」

オートバジンは混乱した俺を抱っこしたままGトレーラーの近くまで飛び

キイイイイイイン、ガシャンッ

Gトレーラーの近くに着地した。

「オートバジン!お前一体何がしたいん「大丈夫?健悟君」・・・

だ？」

オートバジンの行動が理解出来ない俺はオートバジンに聞こうとした時、後ろから声をかけられた。

振り返るとそこには何故かすすか達が立っていた。

「な、何してるんだ！早くGトレーラーに戻れ！！」

「嫌よ、戻らない。」

「馬鹿なことを言っていないでさっさと戻れ！！死にたいのか！！」

バチンッ！！

「……え？」

乾いた音が辺りに響き渡った。

徐々に左側の頬に痛みと熱さが込み上げてきた。

「アリ……サ？」

俺はアリサの名前を呼んだ時、やっと頬をぶたれたことに気付いた。

「死にたいのかですって？それはこっちの台詞よ！！」

混乱している俺をアリサは怒鳴った。

「あんた、戦う前にあたしとすずかに言ったわよね？ちゃんと戻ってくるから安心しろって。俺を信じろって！その信じた結果がこれじゃない！あんな大人数を相手に1人で向かっていって！そんなボロ

ポロになるまで戦って！ミサイルも撃たれて！あのロボットが助け  
てくれなかったら死んでたのよ！！」

「……」

アリサの言葉に俺は何も返せなかった。

「あんた最初っから死ぬつもりで戦いにいったの？」

「そんなことは……」

俺は完全には否定出来なかった。

最終手段としては俺自身を囮にするプランも少しは考えていた。

「……そんなことないって言わないってことは少しは考えてたみたいね？冗談じゃないわよ！なんでそんなことするのよ！私達の誰か1人でも命を懸けて戦ってって言った？頼んだ？望んだ？誰も言っていないし、頼んでないし、望んでないわよ！そんなのあんたの自己満足じゃない！仮に私達が助かったとしてもね……」

突然アリサの言葉が止まり、顔をうつむかせた。

「アリサ？……！」

アリサの顔を覗くとポロポロと涙がこぼれ落ちていた。

「あん……たが……グスッ……死んだら……意味が……  
ヒクッ……ないじゃない……あんたが死んでまで……グス  
ッ……私は……私は助かりたくないわよ！！……グスッ……  
……何でも1人で……出来るって……思うんじゃないわよ……」

「  
そういつてアリサは自分の腕で涙を拭いた。

「アリサ・・・健悟君・・・」・・・すずか・・・

今度はすずかが話かけてきた。

「アリサちゃんの言う通りだよ？誰も健悟君に命を懸けてまで守ってなんて言っていない。健悟君が死んでまで、私も助かりたいなんて思わない・・・そこまでして助けて欲しくない！それに・・・私だって守られてばかりは・・・嫌だよ？」

すずかもアリサと同じように涙を流した。

結局、笑っていて欲しいって思ってたのに泣かせたのは俺か・・・。

「・・・すまん」

俺は二人に謝ることしか出来なかった。

「だから・・・」

「？」

「グスッ！今度は・・・私達が健悟を守る」

「・・・・・・は？」

一瞬、アリサとすずかの言葉が理解出来ず、頭がフリーズした。  
今なんと言った？

俺を守る？

誰が？

アリサ達か？

どうやって？

俺の頭の中で疑問がグルグルと回っている。

「あっははははっつっ!!」

俺が考えていると姫の笑い声が響き渡った。

「あーあ。面白いこと言ってくれるわね？そいつを守る？それって私達と戦うってことよ？ライダーの力を持たないあんた達に何が出て来るって言うのよ？分かったら馬鹿な芝居しないでさっさと夜の一族の人間を渡しなさい。死にたくなければね」

姫がカイザブレイガンを俺達に向ける。

「！に、逃げる！」

俺はすぐにアリサ達に逃げるように言った。

「嫌よ。さっきも言ったでしょ？今度は私達が……健悟を守るって」

「うん！」

しかし、アリサ達は逃げようしない。

「あっそ。なら……死になさ「皆伏せて!!」……!!」

バンツ、バンツ、バンツ、バンツ、バンツ、バンツ、

姫がカイザブレイガンを撃とうとした時、俺達の後ろから声が聞こえ、アリサ達が伏せると銃弾が姫達に向かって飛んでいった。

「うわッ」

「な、なんだ!？」

「今のは？」

突然の銃撃に姫とフカヒレは驚き、俺は銃弾が飛んできた後ろを振り返った。

「G3 - X!？」

そこには、装着者がいなければ動かないはずの仮面ライダー「仮面ライダーG3 - X」がGトレーラーのガードチェイサーを降ろすスロープの上に立っており、右手に持ったG3およびG3 - X専用の突撃銃「GM - 01 スコーピオン」の銃口からは白い煙が出ていた。

仮面ライダーG3 - X

「仮面ライダーアギト」の世界の装着型仮面ライダー。

警視庁が未確認生命体4号（クウガ）を元に開発したパワードスーツ「仮面ライダーG3」が「仮面ライダーギルス」との戦闘で破壊され、後に修復及び改修が行われ誕生したのが「仮面ライダーG3 - X」である。

改修前のG3よりも稼働時間が増加し、G3にはなかった装着者の身長に補正する「オートフィット機能」が追加され、G3の時の武

器も含め更に二つの専用武器が追加された。

「一体誰がG3-Xを？」

「ありがとう、お姉ちゃん！」

「はいっ!？」

俺が誰がG3-Xを動かしているのか考えようとした時、さすががG3-Xにお姉ちゃんと言って俺は思わず変な声を出してしまった。

「皆、今の内に！」

「えっ!本当に忍さん!?!??」

G3-Xから忍さんの声が聞こえた。

一瞬、信じられなかったが確かにさっきから忍さんの姿が見当たらなかったのを思い出した。

「でも、なんで忍さんがG3-Xを?どうやって?」

「それは後で話すわよ!いくわよ、すずか!」

「うん!恭也さん、美由希さん!」

「ああ!」

「オツケー!」

俺が何故忍さんがG3-Xを装着しているのか考えているとアリサ、

「すずか、恭也さん、美由希さんが俺の前に出て、横に並んで立ち、腰に何かを装着した。」

「な、なあ姫？あれって……」

「なっ！？まさかあのベルトって……！」

「デルタ、カイザ、サイガ、オーガ!?」

「すずか達がデルタ、カイザ、サイガ、オーガのベルトを装着している。」

「姿を見て姫とフカヒレだけでなく俺まで驚いた。」

「驚いている俺を気にせず、アリサ、恭也さん、美由希さんはカイザフォン、オーガフォン、サイガフォンを開き、すずかはデルタフォンを口元に持っていく。」

- 913 ENTER

『 STANDING BY 』

- 315 ENTER

『 STANDING BY 』

- 000 ENTER

『 STANDING BY 』

「変身コードを知らないはずのアリサ、美由希さん、恭也さんがカイザフォン、サイガフォン、オーガフォンに変身コードを入力し、音

声が発せられた後、待機音が流れ、三人はカイザフォン、サイガフォン、オーガフォンを閉じ、そして・・・

「「「「変身!」」」」

『STANDING BY』

アリサ達の変身つと叫ぶとさすがが持っている音声入力式のデルタフォンが起動し、待機音が流れ、デルタフォンをベルト型トランスジェネレーター「デルタドライバー」の右側のハードポインターに取り付けられているデルタムーバーに差し込んだ。

『COMPLETE』

次にアリサが携帯電話型トランスジェネレーター「カイザフォン」をカイザドライバーのフォンコネクターにカイザフォンを左斜めに差し込み、そのまま左に倒した。

『COMPLETE』

その次に美由希さんがカイザ同様携帯電話トランスジェネレーター「サイガフォン」をベルト型変身ツール「サイガドライバー」のフォンコネクターに突き立て左側に倒した。

『COMPLETE』

最後に恭也さんがカイザ、サイガ同様携帯電話型トランスジェネレーター「オーガフォン」をベルト型変身ツール「オーガドライバー」のフォンコネクターに突き立て左側に倒した。

『COMPLETE』

音声の後に4つのドライバーからフォトンフレームが形成され白、黄、青、金の光を放った。

「うわっ！眩しいい！」

「くっ！」

「むっ！」

この場にいた俺や敵である姫、フカヒレ、ライオトルーパー、オルフェノク、グロンギ、アンノウンが目を閉じたり、腕で影を作り光を防いだりしている。

光が収まり俺はゆっくり目を開いた。

「……！！！」

そこには仮面ライダーデルタと仮面ライダーカイザに変身したことで身長が大学生程にまで身長が伸びたすずかとアリサ、そして「帝王のベルト」と呼ばれるサイガとオーガのベルトを装着し「仮面ライダーサイガ」と「仮面ライダーオーガ」に変身した美由希さんと恭也さんが立っていた。

仮面ライダーサイガ

「劇場版 仮面ライダー555 パラダイス・ロスト」に登場した「仮面ライダー555」の世界の仮面ライダー。

スマートブレイン社が反乱分子を排除するために開発し、ファイズ達と違い、飛行用バックパック「フライングアタッカー」を持っており、空中戦は勿論、空中以外にも水中戦など特殊な場所での戦闘

を前提に開発されたライダーズギア。

ギリシャ文字の<sup>フサイ</sup>を模したデザインに紫色の複眼に青色のフォトンストリーム、スーツの素材はファイズ達の「ソルメタル」を超える性能を持つ「ルナメタル」と呼ばれる金属で作られている。

ファイズ、カイザ、デルタのベルトよりも性能が高く、強力な力を持つっており、他のベルトと違いオルフェノクの中でも選ばれた者しか装着出来ない「帝王のベルト」と呼ばれる2本のライダーズギアの中の1つで「天のベルト」と呼ばれている。

仮面ライダーオーガ

サイガ同様「劇場版 仮面ライダー555 パラダイス・ロスト」に登場した「仮面ライダー555」の世界の仮面ライダー。

開発目的もサイガ同様反乱分子を排除するために開発されたライダーズギア。

ギリシャ文字の<sup>オメガ</sup>を模したデザインに赤色の眼に金色のフォトンストリーム、「賢者の衣」の異名とる「ワイズマンローブ」を纏っている。

サイガ同様「帝王のベルト」と呼ばれる2本のライダーズギアの中の1つで「地のベルト」と呼ばれ、通常でもサイガの2倍のフォトンブラッドを生成している。

その強力ゆえにオルフェノクの中でも選ばれた者しか装着出来ず、それ以外の者が変身しただけで即死してしまう。

スペックはファイズの最強フォーム「ファイズ ブラスターフォーム」に匹敵する。

「・・・凄い」

「なんか・・・身長伸びたわね」

「私だけ白色なんだあ」

「凄いな。力が漲ってくる」

デルタ、カイザ、サイガ、オーガに変身したすずか達に変身した感想を述べている。

「帝王のベルト・・・最強の天と地のライダー、サイガとオーガ！」

「う、嘘だろおお？あれってこつちじゃまだ開発段階のはずなのに！！」

「あ、あれが天と地のライダー・・・」

「初めて見たぜ」

スマートブレインが誇る天と地のサイガとオーガを見た姫、フカヒレ、ライオトルーパー、オルフェノク達がうるたえている。

「まさかあの二人は上級の、しかも選ばれたオルフェノクなのか！？」

「そんなはずないわ。この世界にオルフェノクは存在しない。でも、変身出来る理由があるとすれば、恐らくあのベルトね。フカヒレ君、なんとしてもあのベルトを奪うわよ！」

「お、おう！」

姫達が構えた。

「皆、来るぞ！」

「は、はい！」

「はい！」

「分かってるわ、恭也」

「任せてよ、恭ちゃん！」

姫達が構えるのを見て、恭也さん達も構えをとった。

「おい、ちよつと待て！」

皆が戦おうとしている中、俺は全員に待ったをかけた。全員を視線が俺に向けられている。

「なーに俺だけ仲間外れにしようとしてるんだ？」

そういつて俺は変身ベルト「オルタリング」を出現させた。

「！！健悟君！？」

「あ、あんた！まさかまた！？」

変身しようとしている俺に驚くアリサとすずかを無視し、アギトの「津上翔一」のポーズをとり、右腕をゆっくり前に伸ばした。

「はああああ……変身っ！」

オルタリングの両サイドのボタンを押し、オルタリングが唸りを上げ、光が放たれた。

そして、光が収まると俺は「仮面ライダーアギト グランドフォーム」に変身した。

仮面ライダーアギト

神「オーヴァーロードの闇の力」に従う天使の如き存在の怪人「アソウン」と戦う仮面ライダー。

オーヴァーロードの「光の力」にアギトの力を与えられ、覚醒した者が変身する。

また、アギトは人間の進化の可能性とも呼ばれている。

現在のフォーム「グランドフォーム」は大地の力を宿し、格闘戦を得意としたアギトの基本フォーム。

平成仮面ライダー作品の第二作「仮面ライダーアギト」の主演ライダー。

キャッチコピーは「目覚めろ、その魂」

「俺も雑せてくれよ」

「別の姿になった・・・」

「お前、他にも変身出来るのか？」

「健悟君その姿は一体？」

先程のクウガとは別の姿に変身したことに美由希さんと恭也さんは驚き、すずかは今の俺の姿について聞いてきた。

「今の俺は・・・アギト。仮面ライダーアギトだ」

「アギト・・・」

「健悟！あんたまだ戦う気なの！？」

「そうだけど？」

「でも健悟君、無茶しちゃ駄目だよ！」

「そうかもな。でも、皆が戦うのに俺だけが休んでる訳にはいかない。それに・・・アリサ達が俺を守ってくれんだろ？」

「！う、うん！」

「ま、まあね」

俺の問いにすずかは元気よく答え、アリサは照れくさそうに答えた。

「本当は皆に戦わせるのは嫌だが今だけ力を貸してくれ」

「うん！」

「しょうがないわね。いいわよ」

「おい」

「」「？」

俺とすずかとアリサが話していると恭也さんが声をかけてきた。

「3人とも、お取り込み中悪いんだけど・・・向こうの皆さんが待

ってるよ?」

「「「「「あ」「」」」」」

俺はすぐに向こうを見る

「.....」

「羨ましくない羨ましくない羨ましくない羨ましくない羨ましくない羨ましくない  
い」

姫がかなりイライラし、フカヒレが何かブツブツ言ってる。

「すまん。若干忘れかけてた」

「忘れかけてんじゃないわよ!よくも待たせてくれたわね!」

「前は待ってやったじゃん」

「うっ.....と、兎に角!さっさとあんたを倒して仕事を終わらせるわ!」

図星を指され姫は一瞬口ごもるがすぐに若干の逆ギレをした。

「悪いけど、倒される気なんてねえよ」

「くっ!行きなさい!」

「「「「「うおおおおお!」」」」」

姫の合図と共にライオトルーパー、オルフェノク、グロンギ、アンノウンが向ってくる。

「くっそおおお！羨ましくなんかないぞおおお！！！！！」

フカヒレが何か意味不明なことを叫びながら向ってくる。  
何が羨ましくないんだ？

「まあ、あの馬鹿はほおっておいて……行くぞ！」

「くくくくおお！！！！！」

俺達も向ってくるオルフェノク達に向って行った。

「エアアアアッ！」

アギトに変身したせいか、アンノウン達がさっきよりも前に出てくる。

「よっしゃー！かかってk「健悟君、私に任せて！」って……へ？」

向ってくるアンノウンに立ち向かおうとした時に後ろにいる忍に声をかけられ、後ろを振り返った。

そこにはアタッシュケースのような物を持った忍さんが立っていた。

「アポロン君！」

Gトレーラー内

アポロンSide

戦闘が始まってすぐに忍さまからG3-Xの武装のアクティブ（解除）が要請されてきた。

「ラー ज्या。GX-05、アクティブ！」

私は忍様から要請を受け、G3-Xの火器「GX-05 ケルベロス」をアクティブした。

忍さんがGトレーラーにいるアポロンの名を呼んだ。

そのすぐ後に忍さんはアタッシュケースに付いてあるボタンを押していく。

- 132

ピピッ

『解除シマス』

音声が発せられるとアタッシュケースはG3-X専用ガトリング式機銃「GX-05 ケルベロス」に変形した。

「健悟君、避けて!!！」

忍さんがケルベロスの銃口を向ける。

「はっ!!！」

ダダダダダダダダッ

俺が横に避けると忍さんはケルベロスのトリガーを引き、轟音をあげながら無数の銃弾がアンノウンに向って飛んでいく。

「アアアアッ!！」

ケルベロスから放たれた特殊徹甲弾を食らった1体のアンノウンは頭の上に天使の輪のようなもんが出現し、その後爆発した。

「やるなあ忍さん・・・「エアアア!」・・・つむ!」

俺が忍さんに感心していると別のアンノウンが2体、杖状の武器を構えて俺に向ってくる。

「ふっ!はっ!つたあ!」

「アアアアアッ!！」

「エアッ!」

最初に向ってきたアンノウンが杖を振り下ろすと俺は左腕で払って受け流して回避し、2体目のアンノウンの攻撃は1体目と同じように受け流して回避しアンノウンの後ろに回った。

そして振り返ったアンノウンを前蹴りで蹴り飛ばした。

蹴り飛ばされたアンノウンはもう1体のアンノウンとぶつかり、2体とも倒れた。

「よし!」

アギトの角「クロスホーン」を展開し、地面に6本の角を模したエネルギーが出現した。

「はああああっ、はっ!」

右足にエネルギーが溜まるとアンノウンに向かって走り出した。

「はっ!」

十分に助走がついたところで飛び上がった。

「はああああっ!!!!!」

「「エアアアツ!!!」」

アギトの必殺技「ライダーキック」を受けた2体のアンノウンは頭上に輪を出現させて爆発した。

「おっし!」

「健悟君!すずかとアリサちゃんが!」

「!了解!」

アンノウンを倒した喜びを感じる暇もなく、忍さんとともにすずかとアリサの援護に向った。

すずかSide

私とアリサちゃんは今怪人達と銅色の仮面ライダー2人に囲まれている。

「あぁんもう！こいつらどんだけいるのよ！！」

「アリサちゃん、兎に角戦って！！」

カチツ、カチツ

「！た、弾が！！」

戦っている最中に私が使っている銃が弾切れになった。

「すずか、早く弾を！！」

「え、えっとどうやるんだっけ！？」

弾切れをおこしたことで混乱してしまい、私は弾の補給の仕方を忘れてしまった。

「！！！！うおおおお！！！！！！！！」

そんな隙見逃すはずがなく、怪人達が私とアリサちゃんに向ってきた。

ダダダダダダダダダダダダッ

「うわっ！！」

「がっ！！」

「ぐっ！」

「ゴッ！」

「エアッ！」

連射音が響き渡った後、怪人達が銃撃された。

「「えっ！？」」

「すずか、アリサ！！」

突然の銃撃に驚いていると誰かに呼ばれた。

声が聞こえた方を向くとそこには健悟君とお姉ちゃんがいた。

俺と忍さんがすずかとアリサのところに来ると2人にグロンギ達が迫っていた。

「すずか、アリサちゃん！」

忍さんはケルベロスの銃口をグロンギ達に向け、ケルベロスのトリガーを引いた。

ダダダダダダダダッ

「うわっ！」

「がっ！」

「ぐっ！」

「ゴッ！」

「エアッ！」

轟音とともに放たれた銃弾はグロンギ達の背中に命中した。

「「えっ!?!」」

「すずか、アリサ！」

突然の銃撃に驚いているすずかとアリサに俺は声をかけた。

「健悟君！お姉ちゃん！」

「二人とも、怪我はない？」

「うん！」

「大丈夫です！」

すずかとアリサが俺と忍さんの方を向き、二人は忍さんに返事を返した。

「くっ！」

「エアア」

「ゴギッ！」

俺と忍さんが2人の安全を確認をしていると Grongi 達が俺と忍さんの方を向いてきた。

「さあて、そろそろ別のやつを試すか。ふんっ！」

オルタリングの右側のボタンを押すと中心から剣が出現した。

オルタリングから出現した剣を引き抜くと金色だったアギトの身体が赤色に変わった。

アギトの基本フォームであるグランドフォームよりも走力と跳躍力が低くなる代わりにパワーが上がり、知覚が鋭敏化されたいる。

更に右腕が強化され、炎を操る能力が備わっている。

アギトの炎の力を宿した剛力形態「仮面ライダーアギト フレイムフォーム」にフォームチェンジした。

オルタリングから出現したフレイムフォーム専用武器「フレイムセイバー」を構えた。

「健悟君、その姿は？」

姿が変わった俺に忍さんが質問する。

「アギト フレイムフォーム・・・パワータイプのフォームです。」

「へえ・・・」

「エアアアッー！」

「ギビゾバギグ！ギベ！」（死に損ないが！いけ！）

すずか達と戦っていたグロンギとアンノウンが俺達に迫り、オルフエノク、ライオトルーパー達は再びすずか達に向っていく。

「一気に止めを刺します！忍さん、援護を頼みます！」

「ええ！」

忍さんがケルベロスの弾倉を交換したのを確認し、フレイムセイバーを構えるとフレイムセイバーの鐔の角がグランドフォームのクロスホーンのように展開される。

「はっ！」

フレイムセイバーを構えて向ってくるアンノウンとグロンギに向って行った。

「エアアアアツ！！！！」

ダダダダダダダダダダダッ

「エアツ！！！！」

向って来たアンノウンやグロンギは忍さんのケルベロスの銃撃を食らって怯み、動きを止めた。

「はあああああっ！はっ！はっ！ふんっ！つたああっ！！！！！」

動きを止めたアンノウンとグロンギをフレイムセイバーを使ったフレイムフォームの必殺技「セイバースラッシュ」でグロンギやアン

ノウン達を縦、横、斜めに斬っていく。

「アアアアアアツ!!!!!!」

セイバースラッシュを受けたアンノウンは頭上に輪を出現させ、爆発して消滅し、グロンギも爆発した。

「よし!」「きゃああつ!!」「っ!!」

アンノウンとグロンギの一部をある程度倒すと悲鳴が聞こえてきた。悲鳴が聞こえた方を見るとすずかとアリサがライオトルーパー2体とヘラジカの特性を持ったムースオルフェノク、カミキリムシの特性を持ったロングホーンオルフェノクに苦戦していた。

「すずか、アリサ!ふんっ!」

苦戦している2人を助けるためにオルタリングの左側のボタンを押して別のフォームに姿を変えた。

その姿は基本形態のグランドフォームをベースに右側に先程のフレイルフォームの力を宿し、左側にはアギトの別のフォームであるストームフォームの力を宿している。

更にオルタリングからフレイルセイバーの様に中心から今度はストームフォームの薙刀型武器「ストームハルバード」が出現し、左手で引き抜いた。

スピードとパワーの両方を兼ね備え、打撃力と跳躍力も強化されている。

俺は金色の身体、赤い右腕、青い左腕、そして赤い右手に剣を持ち、青い左手には薙刀を持った三位一体の戦士「仮面ライダーアギトトリニティフォーム」にフォームチェンジした。

「ふんっ！はあああああっ！！はああっ！」

「ぐあっ！」

「ぐわっ！」

トリニティフォームにフォームチェンジした俺は左手に持ったストームハルバードで2体のライオトルーパーを薙ぎ払う。

「「むっ？」」

すずか達の方を向いていたムースオルフェノクとロングホーンオルフェノクはライオトルーパーの声を聞き俺の方を向いた。

「はっ！」

ムースオルフェノクとロングホーンオルフェノクが俺の方を向くと俺は飛び上がり前方一回転をしながら

ムースオルフェノク、ロングホーンオルフェノクの後ろに着地した。

「はっ！」

「があっ！」

「ぐっ！」

ムースオルフェノクとロングホーンオルフェノクの方に振り向くと同時に右手に持ったフレ임セイバーでムースオルフェノク、ロングホーンオルフェノクを斬り、斬られたムースオルフェノクとロングホーンオルフェノクは後ろに飛んだ。

「大丈夫か？」

「う、うん」

「健悟。その姿は？」

「アギト トリニティフォーム・・・このフォーム1つで3つのフォームの力を使うことが出来るんだ」

「へえ」

「凄い」

「さて、お喋りはここまで。来るぞ！」

「さすがとアリサにトリニティフォームの説明をしているとライオトルーパーとムーソルフェノク、ロングホーンオルフェノクが立ち上がった。」

「2人とも、俺がライオトルーパーを2体とも抑えておくから1人1体ずつ、オルフェノクに止めを刺せ！」

「わ、私達が？」

「そうだ。やり方は覚えているか？」

「えっ？え、えーっと」

「えっと確か・・・」

「どうやら2人とも必殺技のやり方を忘れたようだな。」

「いいか？一度しか言わないからよく聞け。まずすずかはそのデルタムーバー、アリサはベルトの後ろにあるハードポインターに付けられているデジタル双眼鏡型ポインティンググマーカーデバイス「カイザポインター」にミツシヨンメモリを入れる」

「「ミツシヨンメモリ？」」

「すずかの付けているベルトのバックル部、アリサの場合は携帯についているやつを左に引きと取れて、それをデルタムーバーとカイザポインターに入れてアリサはカイザポインターを右足に付ける。すずかはデルタムーバーに「CHECK」と言つて、アリサはカイザフォンを開いてENTERキーを押せ。そうすれば音声の後に武器にエネルギーが充填され、相手を拘束するポインターが出現する。そのポインターに向つて飛び蹴りをするんだ。そうすればオルフェノクを倒せる。覚えたか？」

「うん！」

「分かったわ！」

「よし！」

2人に使い方の説明を終えると俺はライオトルーパーに向つて駆け出した。

「うおおおおっ！」

「むっ！」

「くっ！」

ライオトルーパーが1体ずつフレイムセイバーとストームハルバードをアクセレイガン ブレードモードで受け止める。

「2人とも、今のうちだ!!」

「「うん!」」

『『READY』』

俺がライオトルーパーを抑えている隙にすずかとアリサがミッションメモリーをデルタムーバーとカイザポインターにミッションメモリーを入れ、すずかのデルタムーバーの銃身が伸び、ポインターモードが起動し、アリサはカイザポインターを右足に装着した。

- ENTER

『 EXCEED CHARGE 』

「 CHECK! 」

『 EXCEED CHARGE 』

アリサがカイザフォンのENTERキーを押し、すずかが音声入力をする。デルタムーバーとカイザポインターにフォトンブラッドが注入され、完了した。

「おいおい、いいのかい？お嬢ちゃん達」

2人がポインターを発射しようとするのとロングホーンオルフェノクの影に上半身が裸の男が映っていた。

「「!!」」

「俺達だって人間なんだぜ？それなのに俺達を殺すのかい？人を殺すのはよくないんだよ？」

「う・・・ああ」

「・・・」

ロングホーンオルフェノク言葉にすずかは動揺し、アリサは黙ったままだ。

やはりあの2人には戦闘は無理だったかと思ったその時だった。

「つたあっ！」

「うおっ!!」

「「「!!」」」

アリサが右足を前に出しカイザポインターから黄色い二重の四角錐状のポインターを発射し、ムースオルフェノクをポイントした。

「うっ!!あああっ!!」

「はっ!!」

俺とすずか、ロングホーンオルフェノクがアリサの行動に驚いている中、アリサはポイントしているムースオルフェノクに向かって走り出した。

「はっ！」

そして、助走を付けたアリサは飛び上がった。

「てえりやああああっ！！！！」

掛け声とともに両足を揃えて前に出し、そのまま四角錐の中に入る。

「がああああああっ！！！！！」

四角錐がムースオルフェノクの中に入っていく様に消え、ファイズの必殺技「クリムゾンスマッシュ」の様に相手の中を通り抜けたかのようにアリサはムースオルフェノクの後ろに着地する。

「ふん！」

「うっ、あああああ」

カイザの必殺技「ゴルドスマッシュ」を受けたムースオルフェノクは黄色いギリシャ文字、<sup>カイ</sup>を浮かばせ、青い炎に包まれ、灰となって消えた。

「お、おい！お前、自分が何をしたのか分かっているのか！？」

ムースオルフェノクを倒したアリサにロングホーンオルフェノクが

動揺しながら聞いた。

ロングホーンオルフェノクもまさか本当にアリサがオルフェノクを倒すとは思っていなかったのだろう。

「ええ、分かってるわよ？死んだ人が蘇った怪人、オルフェノクを倒した」

「お、お前は今・・・人を殺したのと同じことをしたんだぞ!？」

「だから何？」

「へ？」

「!」

アリサの返事にロングホーンオルフェノクは愚か俺までドキツとした。

「あんたもしかして私が倒す覚悟がないと思つてたの？ならそれは大きな間違いね！私はそいつを、健悟を助けるって、守るって決めた時に覚悟を決めてるのよ!!」

「!」

アリサがロングホーンオルフェノクに向つて大声で答える。

アリサ・・・今のお前が凄くカッコ良く見えるぞ。

「くっ、くそお！ガキが生意気なことをいつてんじよ・・・がつ！」

ロングホーンオルフェノクがアリサに言い返すが言葉が途中で止ま

った。

「な……に……？」

「……」

「すずか!？」

ロングホーンオルフェノクがアリサに集中していると無言のまますずかは右手に持っているデルタムーバー ポインターモードを向けロングホーンオルフェノクの背中に青紫色の三角錐状のポインターを発射し、ロングホーンオルフェノクをポイントした。

「はっ!」

すずかが飛び上がった。

「えええええいつ!!」

掛け声とともに右足を前に出し、そのまま三角錐の中に入る。

「がああああああつつ!!!!!!」

三角錐がロングホーンオルフェノクの中に入っていく様に消え、ゴルドスマッシュ同様相手の中を通り抜けたかの様にすずかはロングホーンオルフェノクの正面に着地する。

「んっ!」

「つつ、あああああ」

デルタの必殺技「ルシファーズハンマー」を受けたロングホーンは  
オルフェノクは青紫色のギリシャ文字、<sup>デルタ</sup>を浮かばせ、赤い炎に包  
まれ、灰となって消えた。

「すずか……うおおおおおっ!!」

「くっ！」

「ぐっ！」

俺はすずかがロングホーンオルフェノクを確認するとフレイムセイ  
バーとストームハルバードの両方でライオトルーパーのアクセレイ  
ガン ブレードモードを払い除けた。

「はああああっ、はっ！」

フレイムセイバー、ストームハルバードを構え直すとストームハル  
バードの両端の刃が展開され、フレイムセイバーの鍔の角が展開さ  
れライオトルーパーに向かって行った。

「はっ！」

「がっ！」

フレイムセイバーとストームハルバードをライオトルーパーの1体  
に突き刺した。

「がああああっ!!!!」

トリニティフォームの必殺技「ファイヤーストームアタック」を受けライオトルーパーが爆発した。

「おのれ！・・・があああつ！」

向ってきたもう1体のライオトルーパーに何かが命中し、爆発した。

「健悟君、大丈夫？」

声が聞こえた方を向くとそこにはGM-01 スコーピオンとGX-05 ケルベロスを合体させたロケットランチャー「GXランチャー」を構えていた忍さんが立っていた。

先程のライオトルーパーに命中したのはG3-X最強の必殺技「ケルベロスファイヤー」。

GXランチャーから放たれたGX弾（ロケット弾）、その威力はアギト グランドフォームのライダーキックと同じ威力を持っている。

「大丈夫です、ありがとうございます。忍さんは大丈夫ですか？」

「私は大丈夫。それより・・・」

忍さんはすすずかの方を向いた。

「・・・」

「すすずか？」

「・・・」

ロングホーンオルフェノクを倒して、黙ったままのすすずかにアリサ

は声をかけ、俺は黙って見ていた。

「すずか・・・大丈夫？」

忍さんがすずかに優しく話しかけた。

「うん・・・大丈夫だよ、お姉ちゃん」

本人は大丈夫と言っているが声が僅かに震えているのが分かった。

「・・・すずか、無理をしなくてもいいんだぞ？」

俺がそう言つとすずかは首を横に振った。

「ううん。本当に大丈夫だよ？今ので本当に覚悟も出来たから・・・

」

「「「「・・・」」」」

すずかの言葉に俺とアリサと忍さんは黙ってしまった。

「もう後戻り出来ないから。私も戦うよ。」

「・・・そうか」

色々な言葉を考えたが今の俺にはこれぐらいしか言えなかった。

「それよりも健悟君、アリサちゃん、お姉ちゃん、恭也さんと美由希さんのところに行こう！」

「あ、ああ」

「そ、そうね」

「2人は海岸で戦ってるはずよ。行きましょ！」

俺達は恭也さんと美由希さんのところに急いだ。

海岸に着くとその光景に俺は色んな意味で驚いた。

「……なあ」

「何よ？」

「何、健悟君？」

俺の呼びかけにアリサとすすかが返事をした。

「あの2人……強すぎないか？」

俺が見た光景は3体のライオトルーパーとステイングフィッシュオルフェノク、フロッグオルフェノク、オクトパスオルフェノク、バットオルフェノク、そしてフカヒレと8人を相手に1人で戦っている美由希さんと4体のライオトルーパー、アルマジロオルフェノク、ワイルドボアオルフェノク、オックスオルフェノク、突進態のエレファントオルフェノク、そして姫と9人を相手に1人で戦っている

恭也さんが圧倒されているどころか逆に相手を圧倒していた。  
ちなみにフカヒレが乗っていたジェットスライガーはガングルー、  
ガンドーベル、サイドバッシャー、オートバジンの一斉攻撃で破壊  
された。

「「「うおおおっ！！」「」」

「はっ！」

「がああっ！」

「このっ！」

「ふんっ！」

「ぐっ！」

「うおおおっ！」

「はっ！」

「ぐわっ！」

美由希さんは向ってくるライオトルーパーに向っていき、相手のア  
クセレイガン ブレードモードをトンファーエッジで弾き、1体目  
のライオトルーパーをトンファーエッジで斬り、右側から来た2体  
目のライオトルーパーには肘打ちを食らわせ、後ろから来た3体目  
のライオトルーパーには頭部に回し蹴りを食らわせた。

「「「うおおおおおおっ！」「」」」

今度はオルフェノク達が一斉に向ってくる。

「はあ、流石にキリがないからそろそろ終わらせるか。えーっと必殺技の仕方はっ」と

流石に相手をするのに疲れたのか美由希さんはケリをつけるためにサイガフォンを開き、ENTERキーを押した。

- ENTER

『EXCEED CHARGE』

ENTERキーを押すとサイガドライバーからフォトンストリームを經由してトンファーエッジにフォトンブラッドが注入された。

「はあああっ！はっ！はっ！」

「ぐああああっ！！！」

「ぎゃああああっ！！！」

トンファーエッジにフォトンブラッドの注入が完了すると美由希さんはオルフェノク達に向って行き、トンファーエッジでフロッグオルフェノク、バットオルフェノクを切り裂いた。

「ぐっ、あああああ」

「あああああ」

サイガの必殺技「サイガスラッシュ」を受けたフロッグオルフェノクとバットオルフェノクは青いギリシャ文字、<sup>フサイ</sup>を浮かばせ、青い炎に包まれ、灰となった。

「ま、まずい！！くっ！」

仲間のフロッグオルフェノクとバットオルフェノクがやられたのを見たステイングフィッシュオルフェノクは上空に逃げた。

「逃がさないよ！！！」

- ENTER

『 EXCEED CHARGE 』

「はっ！」

美由希さんは再びENTERキーを押し、何故かオクトパスオルフェノクに向って走り出した。

「むっ！」

オクトパスオルフェノクは腕でガードをしようとした。

「ちよつとごめんね。よつとー！」

美由希さんはオクトパスオルフェノクの手前でジャンプをし、更にオクトパスオルフェノクの肩を使い、更に高く飛び上がった。

「な、何！俺を踏み台にした！？」

オクトパスオルフェノクがガンダムのガイアの台詞を言っている間に美由希さんはステイングフィツシュオルフェノクの背中を捉えた。

「何!？」

「言ったでしょ?逃がさないって。はっ！」

「がああああっ！」

美由希さんは上空にまで追いかけてきたことに驚いていたステイングフィツシュオルフェノクの背中をトンファーエッジで切り裂き、ステイングフィツシュオルフェノクはのマークを浮かばせ、灰となった。

「さあ、行きなさいあんた達!帝王のベルトを奪うのよ!」

「くくくくうおおおおおおっ!」「くくく」

姫の命令でライオトルーパー、オルフェノク達が恭也さんに向かっていく。

『READY』

一方恭也さんは向ってくるオルフェノク達に焦る様子もなく冥界の剣の異名を持つ剣「オーガストランザー」にミッシェンメモリーを入れ、短剣形態から長剣形態に変わった。

- ENTER



恭也さんは姫にオーガストランザーを向けた。

「ひ、姫〜!! どうしよう! 俺のところの部隊の連中がほとんどやられちゃった!!」

フカヒレと生き残った3体のライオトルーパー、オクトパスオルフエノクが姫と合流した。  
フカヒレが姫に泣きついている。

「こつちも私を残して全滅したわ」

「マジ?」

「恭ちゃん!」

「」「恭也さん!」「」

「恭也!」

「美由希、野田、すずか、アリサ、忍・・・」

先程まで戦っていた美由希さんに見物していた俺達は合流した。

「逃がさないわよ?」

「大人しくしてくださいよ!」

美由希さんとアリサがそういうとすずかはデルタムーバーを、アリサはカイザブレイガン、忍さんはケルベロス、美由希さんはトンフ

オーエッジ、恭也さんはオーガストランザーを姫とフカヒレ達に向けた。

「あー、皆さん」

「「「「「?」「」「」」

「どうしたの健悟君？」

突然声をかけられ皆の視線が俺に集まった。

「どうやらまだ俺達の勝ちって訳じゃないみたいだ」

「「「「「!」「」「」」

俺の言葉で皆が回りを見ると左右からグロンギ、アンノウンがゆっくりと近づいてくる。

「まだ残ってたの!？」

「しつこいわね!」

すずかは驚き、アリスはイライラしている。

「今の内に撤退するわよ!」

「は、はいいいい!!--!」

そう言っただけで姫は銀色のオーロラを出現させフカヒレ、生き残ったライオトルーパーとオクトパスオルフェノクを連れて撤退した。

「あ！逃げた！！」

「美由希、今は気にしている状況じゃないだろ！！」

「う、うん！」

美由希さんは恭也さんに注意されるとすぐにトンファーエッジを構え、皆も武器を構えた。

「さあつて、あと何体いるのかな？」

俺もフレイムセイバーとストームハルバードを構え、向って行こうとしたその時だった。

ブオオオンツ！

ドンツ

キイイイツ、プシュツ

「えっ！？」

「な、何！？」

「なんなの！？」

「な、なんではしご車とクレーン車にパトカーが？」

「ミキサー車にダンプカーもいるぞ？」

沿岸沿いの道からはしご車、青色のクレーン車、パトカーが右側、緑色のミキサー車、黄色いダンプカーが左側に俺達とグロンギとアンノウンの間に入り停車し、突然のことにすずか、アリサ、忍さん、美由希さん、恭也さんは驚いているが俺は驚いていなかった。

「いいタイミングだ！氷竜、炎竜、風龍、雷龍、ボルフォッグ！」

「「「「「えっ？」「」「」「」」」」」

「「「システム、チエエエエンジン！！」「」」」

「「ズジイイイ、ジャオツファン！！」「」」

俺の言葉を合図にしたかのように氷竜、炎竜、風龍、雷龍、ボルフォッグはシステムチェンジを始めた。

「氷竜！」

「炎竜！」

「風龍！」

「雷龍！」

「ボルフォッグ！」

システムチェンジを終えると全員が砂浜に着地した。

「健悟隊長、ご無事ですか？」

「大丈夫だ氷竜」

「け、健悟君？」

「な、何よこいつら？」

「車が……ロボットに」

「……」

突然のことにすすか達は混乱していた。

「すまん、こいつらについては後で話す。氷竜、炎竜、風龍、雷龍、ボルフォッグこの周りのやつらを一匹残らず片付ける！合体を承認する！」

「……了解！！シンメトリカルドッキング！！」

「了解！三位一体！！」

氷竜と炎竜、風龍と雷龍がそれぞれドッキングを初めボルフォッグはサポートロボであるガングレー、ガンドーベルと合体を始める。

「超お竜う神！！」

「撃龍う神！！」

「ビッグボルフォッグ！！」

氷竜と炎竜は超竜神、風龍と雷龍は撃龍神に合体し、ボルフォッグは右腕にガンドールベルが合体し、左腕にガングルーが合体した三位一体の姿「ビッグボルフォッグ」に合体した。

「一気に決めるぜ!!!」

超竜神は、はしごとクレーンを以前同様ジャッキ代わりにして飛び上がり両腕とはしごとクレーンをグロンギとアンノウンに向けた。

「ウルテクビーム、一斉射!!!」

「!!!ガアアアアアッ!!!」

超龍神が放ったビームはグロンギとアンノウンに命中し、次々と爆発を起こした。

「唸れ疾風、轟け雷光!シャントウロオオオン!!!」

「!!!ガアアアアアッ!!!」

撃龍神から放たれたシャントウロンはグロンギ、アンノウンを次々と飲み込み消滅させた。

「エアアアッ!!!」

そして一部のアンノウン、グロンギが逃げ出そうとしていた。

「逃しはしません!必殺!大ツ回転魔弾!!!」

ビッグボルフォッグはミラーコーティングを行い自身に定着している

ミラー粒子をアンノウン、グロンギに飛ばした。

「エアアアツ!!!!」

大回転魔弾を受けたアンノウン、グロンギは爆発し、消滅した。かなりの数がいたはずのグロンギとアンノウンは超竜神、撃龍神、ビッグボルフォッグの活躍によってほぼすぐにカタがついた。

「ご苦労だった超竜神、撃龍神、ビッグボルフォッグ」

「いえ、問題ありません。隊長」

「これくらいなら楽勝だ」

「同感です」

超竜神、撃龍神、ビッグボルフォッグは気楽そうに答えた。

「あの、健悟君。このロボットさん達は一体？」

超竜神、撃龍神、ビッグボルフォッグと会話している俺に、さすがが恐る恐る聞いてきた。

「答えてやりたいが今はここから離れた方が良さそうだぞ？」

「「「「「え?」「」「」」」」」

「耳、澄ましてみ?」

「「「「「.....あ」「」「」「」」」」」

耳を澄ますと遠くの方からサイレンの音が近づいてくる音が聞こえてきた。

「今俺達やこいつらを見られて色々聴かれるとまずいからこいつらの説明は別の場所でいいか？」

「うん。私はいいよ？」

「別にいいわよ？」

「ええ」

「俺もかまわない」

「じゃあ急いだほうが良さそうだね？」

「そうですね。お前達も早くシステムチェンジして撤退しろ」

「」「了解」「」

そついつて俺達は急いでGトレーラーに向かい、この場から立ち去った。

????? Side

Gトレーラーが立ち去った後物陰から眼鏡とコート、フェルト帽を被った壮年の男が現れGトレーラーが走り去った方向を見ていた。

「おのれ、仮面ライダーフェニックス。いや、野田健悟！我々の邪魔をしたあげく、この世界の人間にライダーの力を、しかも帝王のベルトの力を与えるとは！それにクウガやアギトにも変身出来るとは何処までも忌々しい！おのれ、フェニックスー！！！」

男はそう叫ぶと銀色のオーロラに飲み込まれ姿を消した。

第十九話 折角帰ったのに休む暇がない（後編）（後書き）

ARX-7アーバレスト 「よし、書けた」

健悟「今回はまた色々大変なことになったな。色んなフォームにもフォームチェンジしたし、最後は氷竜達出てきたし。つかいいのかこんなんで？」

アポロン「問題ないはずです、マスター」

ARX-7アーバレスト 「今に始まったことじゃないし」

健悟「気楽だな。ところで一つ質問がある」

ARX-7アーバレスト 「何？」

健悟「なんでこの変身になった？」

ARX-7アーバレスト 「えーっとアリサとすずかの変身は以前リクエストがあつて。その時にどうせなら他の人も変身させちゃおうって思つて」

健悟「そんなんでいいのか？」

アポロン「いいんじゃないんですか？」

ARX-7アーバレスト 「でも正直合つてそうじゃない？この組み合わせ」

健悟「……否定はしない」

アポロン「確かに」

ARX-7アーバレスト 「さあ、そろそろ次回予告と行きましょ  
う！」

健悟「次回『第二十話 一日に何度も説明するのは面倒臭い』で  
す」

アポロン「みなさまのご意見とご感想をお待ちしています」

ARX-7アーバレスト「出来れば今回の話の意見とご感想をお聞  
かせ下さい！では次回もお楽しみに！！」

## 第二十話 一日に何度も説明するのは面倒臭い

姫達との戦いの後、Gトレーラーに乗り、ある場所に向かって走っている。

「はい。これでよじつと」

その間に俺はまた美由希さんに手伝ってもらいながら左腕の治療を行っていた。

「ありがとうございます。すいません美由希さん、また手伝ってもらって」

左腕に包帯を巻いてくれた美由希さんにお礼を言った。

「別に気にしなくていいよ」

美由希さんはそう言うつと笑顔で俺の頭を撫でてくれた。

「お・・・」

普段俺はずるかやアリサを撫でることはあるが、こうやって俺が頭を撫でなれることは前の世界でもあまりされたことがなかったので正直、嬉しさと恥ずかしさの両方を感じた。

（しかし、こうやって改めてみると美由希さんって結構かわいい人だよな。こう言うつては失礼だが、確か原作では第三期になっても彼氏がないんだよな？こんなに優しくてかわいいのに勿体ないよな）

「健悟君？」

「え？」

「どうしたの？私の顔をジッと見て」

「どうやら俺は知らないうちに美由希さんの顔をずっと見ていたらしい。」

「い、いえ！何でもありません」

俺は慌てて視線を反らした。

「そう？」

美由希さんは首を傾げながらも笑顔でそういうと背が届かない俺の代わりに医療キットを網棚の上に戻してくれた。

（ふうー、焦ったあ。・・・あれ？なんで俺こんなに焦ったんだ？それになんか・・・顔が若干熱くなってるような気が・・・なんでだ？）

俺は自分なりに一生懸命原因を考えた。

「「健悟（君）？」」

「！！」

原因を考えていると名前を呼ばれた。

その声はとても低く、更に寒気を感じた。  
俺は油の切れたロボットのような動きでゆっくりと名前を呼ばれた方に向いた。

「・・・・・・・・」

俺の名前を呼んだ人物は、アリサとすずかだったのだがすずかはニッコリと笑いながら俺を見ているが、笑っているはずなのに背中から何やら黒いオーラが見えるような気がする。

アリサは俺を睨み、すずか同様背中から何やら黒いオーラのようなものが見えるような気がした。

なんだ？

なんか怒ってるのか？

「えーっと、どうしたんだ二人とも？一体何を怒ってるんだ？」

「別に怒ってないわよ・・・」

「私も別に怒ってないよ？」

アリサとすずかはああ言っているがアリサは拗ねた言い方出し、すずかは笑顔だが声のトーンが何時もよりも若干低い。

瞼を閉じてるから分からないけど多分目は笑ってないな。

明らかに怒ってるよなあ。

一体なんで怒ってるんだ？

怒ってる理由は分からないがとりあえず何か別の話題をだそう。

「えーっと二人とも・・・お？」

「マスター、目的地に到着しました」

俺が二人に話かけようとした時にGトレーラーが目的地に到着した。

「そうか。では皆さん、目的地に着いたのでGトレーラーから降りましょう」

そう言っただけで俺はずか達をGトレーラーから降ろした。

Gトレーラーから降りると一緒にいたはずの氷竜達の姿が見当たらなかった。

「アポロン、氷竜達はどうした？」

「彼らは既に地下に戻っていますのでご安心を」

どうやって地下に戻ったのか凄い気になるな。

「ならいいか」「おい、野田」・・・はい？」

俺が氷竜達のことを気にしていると恭也さんに声をかけられた。

「ここは一体何処なんだ？」

「うわあ、大きい家だねえ」

「健悟君、ここって誰の家なの？」

恭也さんに続いて美由希さん、忍さんが俺に質問する。

「俺の家ですけど？」

「……………えっ!?!」「……………」

「では、こちらへどうぞ」

連れてきた場所が俺の家であることに驚いているすずか達を気にせず、家の中に入った。

「今、飲み物を用意しますので適当に座って待っててください」

「……………うん……………」

すずか達を適当に座らせて、俺は冷蔵庫から麦茶の入ったボトルを取り出して人数分のコップに注いだ。

「け、健悟君。ご家族の方ってまだ帰ってこないの?」

「家族?居ないぞ」

「……………え?」「……………」

「俺、この家に1人で住んでるから」

すずかの質問にさらっと答えを返し、すずか達は驚いていた。

「どうして1人なのよ?」

「まあ、色々あってな」

アリサの質問にもさらっと答えるが親が前に居た世界に居るなんて言える訳がないので若干誤魔化した。

他の質問をされることを想定し、言い訳を考えていたその時だった。

ドタツ、ドタツ

「くくくくくん？」

二階からドタ、バタと音が聞こえてきた。

この時俺は前にも同じ様なことがあったことを思い出した。

「何の音だ？」

「上に誰かいるみたいだけど？」

上から物音が聞こえ、恭也さんと美由希さんが俺に聞いてきた。

「あー、上にいるのは・・・クワァー！」

俺が説明する前にフェイト達の時と同じ様にファング、ゼクター、メモリガジェット、カンドロイド達が階段を下り、リビングに入ってきた。

「きゃっ！な、何!？」

「何よこれ!？」

突然入ってきたファング達にアリサとさすがが驚く。

「おいお前ら、大人しくしろ」

俺がそういうとファング達は大人しくなった。

「驚かしてすいません。あ、お茶どうぞ」

皆に謝罪し、お茶を手渡した。

「う、うん」

「あ、ありがとう」

「ありがとう」

「す、すまん」

「あ、ありがとう」

突然のことでやっぱり皆動揺してるな。

「あ、あの健悟君。その子？達は一体なんなの？」

さすがファング達を指差して俺に聞いてきた。

「あいつらについてはこれから話すことと一緒に話すけど・・・その前に」

俺は視線をアポロンに向けた。

「アポロン、お前に聞きたいことがあるんだが・・・分かるか？」

「……私の予想ではマスターが私に聞きたいことは何故ですか様達にライダーシステムを使わせたのか……っということしか当てはまりません」

「その通りだアポロン。G3-Xならまだしもライダーズギア、デルタ、カイザ、サイガ、オーガは音声認識システムと指紋認証システムが搭載されていて登録されていない音声と指紋の場合、確実にエラーが出る。更に他の人物に使用させる場合はその人の音声と指紋を登録、その場合はマスターである俺の承認がなければ登録出来ないんじゃないのか!？」

「確かにその通りです。しかし、緊急時には私の独断ですることも可能なのです」

「だから、すずか達にライダーズギアを使えるようにしたのか？」

「イエス、マスター」

「何故だアポロン！何故の俺の承認もなしにそんな勝手な行動をしたんだ！待って、健悟君！」っ……すずか」

俺がアポロンに怒鳴っているとすずかが割って入ってきた。

「私達が無理にアポロン君にライダーシステムを貸してっようお願いしたの。だからアポロン君は悪くないよ！」

「すずか、これはそういっ問題じゃないん」でも……ん？」

俺がすずかに話していると今度はアリサが入ってきた。

「アポロンが規則を破って私達にライダーシステムを貸して戦わせてくれてなかったら、あんた死んでたわよね？」

「うっ！そ、それは……」

「しかも、私とすずかに戻ってくるとか言っておいてやられてたしギクッ！

「それになんだかんだ言ってるけどあの時、結局私達の力を借りてたけど、違う？」

ギクギクッ！

「確かに……」

「そうよねえ……」

「そうだな……」

ああああ！！

アリサの言葉に全員が一致している！！  
駄目だ、俺に勝ち目がない！

「はあ、確かにアリサの言う通りだ。アポロン、今回のことは不問とする。だが、次からはあまりないように頼む」

「ラージャ。ありがとうございますマスター。今後は気をつけるようにします」

「よかったね、アポロン君」

「イエス。ありがとうございますアリサ様、すずか様」

「別にいいわよ。本当のこと言っただけだし」

なんか俺の知らない間に仲良くなってるなアポロンのやつ。  
まあ、いいことだ。

「さて、じゃあそろそろライダーについて説明を……………あれ  
？」

俺はふとあることに気付いた。

すずかとアリサはまだしも恭也さん達がライダーに変身してってこ  
とは……………まさか。

「どうしたの健悟君？」

「アポロン、まさかとは思っけど……………皆にライダーのことに  
ついて話したか？」

俺は恐る恐るアポロンに質問した。

「イエス、マスター」

予感的中!!

マジか!!

「ちなみにどの辺りまで説明した？」

「説明した部分は……」

現在アポロンにすずか達に説明した部分を教えてもらっている。

「以上です」

「……」

結構説明していたので俺は人差し指をこめかみに当てていた。  
色々説明しすぎだ。

「……頭痛くなってきた」

「健悟、大丈夫？」

「……一応」

アリサに大丈夫って言ったけど本当は大丈夫じゃない！  
本来なら次元世界のことについてはA、Sまで隠しておくつもりだったのに！！

「野田」

「？」

恭也さんと呼ばれ振り返った。

「…………こいつらをなんとかしてくれ」

恭也さんを見ると頭の上でフロップポットが跳ね、バットシヨットが乗り、サードゼクター、デンデンセンサーが肩に乗り、ゴリラカンが左腕にぶら下がり、バッタカンが右足、フアングが左足の太ももに乗り、ガタツクゼクターがジツと見つめている。

「恭ちゃん人気者だね」

「そうね」

美由希さんと忍さんはカブトゼクター、ザビーゼクター、ドレイクゼクター、ホッパーゼクター、ダークカブトゼクター、カブテックゼクター、スパイダーシヨック、スタッグフォン、ビートルフォン、タカカン、タコカン、トラカン、電気ウナギカン、クジャクカンを遊びながら笑っている。

「あ、すみません。ほらお前ら、恭也さんが困ってるからどいてやれ」

俺がそういうとフアング達が恭也さんの上から下りた。

「はあ」

「ねえ健悟君。そろそろこの子達がなんなのか教えてくれない？」

フアング達が下りると恭也さんは溜め息をつき、その後美由希さんがフアング達の正体について聞いてきた。

アポロンによってある程度ライダーについて知ってしまったし、フ

エイト達にも説明とかしたし、隠す必要はないと思い説明することにした。

「あ、はい。まず最初にそいつらはメモリガジェットと呼ばれていて、名前はクワガタムシの形をしたのがスタツグフォン、コウモリがバットシヨット、クモがスパイダーシヨック、カエルがフロツグポッド、カブトムシがビートルフォン、カタツムリがデンデンセンサーっていいいます。次にこいつらはカンドロイドと呼ばれ、名前はタカカン、タコカン、バッタカン、トラカン、ゴリラカン、電気ウナギカン、クジャクカンです。こいつらはライダーの世界の機械でライダーのサポートをしてくれます」

「へえ、こんなに小さいのに凄いなだね」

美由希さんが感心している。

「そしてこいつらはゼクターと呼ばれ、赤いカブトムシがカブトゼクター、黄色いスズメバチがザビーゼクター、水色のトンボがドレイクゼクター、紫のサソリがサソードゼクター、青いクワガタムシがガタツクゼクター、左右が緑と茶色なのがホッパーゼクター、黒いカブトムシがダークカブトゼクター、そして金色、銀色、銅色のカブトムシがカブティックゼクターって名前です。こいつらもライダーの世界の機械で人をライダーに変身させます。ちなみにそこにいるファングも人をライダーに変身させてくれます」

「えっ!？」

「こんな小さいのが」

「ライダーに」

「変身させてくるの?」

「本当か?」

ゼクター達がライダーに変身させることにすずか達が驚いている。

「実際に見てもらったほうが早いですけど、ここじゃ狭くて危ない  
ですので移動しましょう。特に家具が危険なので」

「……危険?」

カブトの世界のライダーシステム「マスクドライバーシステム」の  
ことをよく知らないすずか達は何が危険なのか理解出来ないため首  
を傾げている。

「ついて来てください」

俺が立ち上がり移動するとすずか、アリサ、恭也さん、美由希さん、  
忍さん、ゼクター、ファング、メモリガジェット、カンドロイド達  
が俺の後についてくる。

「あれ?」

「どっしたのよ?」

「さすが達をGトレーラーが置いてあるガレージに連れて来たが置いてあるはずのGトレーラーがなかった。」

「あれ？さっきのトレーラーはどうしたの？」

「さあ？アポロン、知ってるか？」

Gトレーラーが無くなっていることを美由希さんに聞かれたが俺自身も分からなかったので一番知ってそうなアポロンに聞いた。

「Gトレーラーは現在メンテナンス中です」

「ああ、成程」

納得した俺はガレージに置いてある工具箱等が載っている棚の前まで移動した。

「システムチェック」

『SYSTEM START』

棚の前でそういうとセンサーが俺のスクリーンを開始した。

『音声チェック、並びにスキャン完了。マスター、健悟と確認しました。』

音声の後に棚が下に収納され、壁が横にスライドした。

「なっ！」

「隠し扉!？」

地下への入り口が出現し、アリサと忍さんが驚いている。

「ぶっぞ」

驚いているアリサと忍さんをスルーして地下への階段を下り、すずか達も俺の後についてくる。

そして着いた場所は……

「………ねえ健悟」

「何?」

アリサに呼ばれ返事をした。

「何よこれ?」

「地下整備施設」

天井には照明の他に巨大なクレーンやアームがレールを伝って移動し、周りには牽引車や移動用のバギーが止められていたり、壁側にはキャットウォークも取り付けられ、何故かMSハンガーまで置かれていた。

「見れば分かるわよ」

アリサの質問に答えたがアリサが聞いたかったこととは違ったようだ。

「じゃあ何？」

「なんでこんな整備施設があるのかって聞いているのよ」

「言えない。」

俺が望んだからなんて言えない。

「さあ？」

「なんでさあなのよ！！」

「いやー、しかしここまで立派な整備施設なんて知らなかった」

「もしかして健悟君自身もここに来たことがなかったの？」

「うん。整備施設があることはアポロンから聞いてたけど来るのは初めてだ」

「あんた自分の家の施設なのに何で初めてなのよ」

さすがの質問に答えると俺の答えにアリサが呆れていた。

「どうなさいましたか？隊長」

「ん？」

「」「」「」「！」「」「」「」

俺がアリサ達と話していると氷竜達が歩いてきた。

「おう、お前ら。メンテか？」

「はい。たつた今終わりました」

「どうだった、調子は？」

「問題ありません」

「僕は砂が入ったからその掃除が一番時間がかかった」

「私も問題ありません」

「俺も絶好調だぜ」

「私もです」

「あれ？ボルフォッグ、ガングルーとガンドーベルはどうした？」

「彼らはオートバジン、サイドバッシャー、Gトレーラーと共にまだ整備と補給中です」

「そうか。回収したジェットスライガーはどうした？」

「現在修復中とのことですよ。修復には早くて再来週、遅くても一月以内には修復が終わるそうです」

「分かった。ありがとう」

「いえ」

「健悟君。このロボットさん達ってさっきの・・・」

俺が氷竜達と話しているとすずかが訪ねてきた。

「ああ、まだ紹介してなかったな」

「隊長、こちらの方々は先程隊長と共にライダーに変身して戦っていた方々ですね」

「そうだ。この人達もある程度だがアポロンがライダーに関して説明したらしいから一応関係者になったな。お前ら、自己紹介しろ」

「了解しました、隊長。初めまして、皆さん。私の名前は氷竜といえます。よろしくお願ひします。隊長を助けていただいております。うございます」

「僕の名は炎竜、よろしくな」

「私は風龍、よろしく」

「俺は雷龍、よろしく頼むぜ」

「私はボルフォッグといます。よろしくお願ひします」

氷竜、炎竜、風龍、雷龍、ボルフォッグがすずか達に自己紹介をした。

「よ、よろしく」

「ねえ、健悟。なんでこのロボット達って喋れるのよ？」

「こいつらには超AIと呼ばれる高性能なAIが搭載されているんだ」

「『超AI？』」

「超AIは人間の頭脳を工学的に表現した情報処理システムで、人と同じ様に自分で考えたりすることが出来るんだ」

「『へえ』」

「忍、知ってるか？」

「ううん。知らないわ」

恭也さんが機械好きの忍さんに聞くがガオガイガーの世界で開発されたAIをもちろん忍さんは知ってなかった。知ってたら逆に怖いけど。

「知らないのは無理もありません。こいつらはこの世界の地球の技術で作られたロボットではありませんから」

「えっ？」

「この世界の地球ってことは」

「このロボット達も別の地球の物なのか？」

「はい」

「じゃあ、最初に助けに来てくれたバイクとヘリコプターも？」

「ああ。白バイとヘリコプターに変形したロボット、ガンドーベルとガングルーは氷竜達と同じ世界のロボットであとの2台、オートバイのオートバジン、サイドカーのサイドバツシャーは「仮面ライダーファイズ」と呼ばれるライダーの世界の物で、ファイズ、デルタ、カイザ、サイガ、オーガのライダーズギアを開発した大企業「スマートブレイン」社の子会社「スマートブレインモーターズ」がファイズとカイザ専用ビークルとして開発されたビークルで・・・「ちよつと待った!」・・・何？」

俺が説明をしているとアリサが待ったをかけた。

「私達が使ってたあのライダーシステムって企業が作った物なの!」  
「？」

「アポロンから聞いてなかったのか？」

「聞いてないわよ!」

アポロン、どうせならそこまで一緒に喋ってくれよ。

「ファイズ以外にもブレイドと呼ばれるライダーのベルトもそこにいるカブトゼクター達もそれぞれの世界の組織で開発された物だ。あとのGトレーラーは忍さんが使用したライダーシステム「G3 -Xユニット」と他の「G3ユニット」と「G3MILD」の運用を前提に俺が変身していたライダー「アギト」の世界の警視庁が開

発した車両なんです」

「企業の次は警視庁って」

「健悟君。「G3ユニット」と「G3MILD」ってなんなの？」

俺の説明聞いてアリサがこめかみを指で押さえ、今度は忍さんが質問してきた。

「G3はG3-Xの改修前の物でG3MILDはG3の量産試作型のユニットです」

「じゃあ、私達が乗ってたトレーラーにG3-Xの隣に積んであったあの黒いのは？」

あー、G4のこと聞かれたよ。

どうしよう。

「そついえばあつたな」

「確か、目が青色だったよね」

「健悟、あれってなんなの？」

もう明らかに言えって言うてるよこの人達。

……まあ、いいか。

隠すだけ無駄だし。

「あのユニットは正式名称はGENERATION-4、第4世代型強化外骨格および強化外筋システム。通称G4と呼ばれるもので

す。警視庁のG3を開発した人物がG3-Xと共に設計したんです。設計段階で放棄されたんです」

「なんで放棄されたんだ？」

「危険だからです」

「……危険？」

「G4システムは確かに装着することで強力な戦闘能力を有するシステムでした。しかしG4には特殊なAIが搭載されていてそのAIによって装着者の意思、運動能力とは関係なくもっとも最善的な動きを常に行います」

「装着者の意思と運動能力とは関係なく常に最善な動きを行うのだ？」

「それって体力が無くなってきて疲れていても無理やり体を動かされるってこと？」

「その通りです」

「それじゃあ、G4を装着している人は……」

「えっとつまり」

「どづいことなの？」

恭也さん、美由希さん、忍さんの大学、高校組はすぐに理解出来たみたいだがアリサ、すずかの小学生組はまだイマイチ理解出来てい

ない。

「解りやすく尚且つ単刀直入に言っと……死ぬってことだ」

「「!!」「」

俺の言葉を聞いてアリサとすずかが驚いた顔をしている。

「ど、どうしてよ?」

僅かに声を震わせながらアリサが尋ねる。

「人間の体には限界がある。しかし、その限界を無視し無理に体を動かすと体を壊すことになる。例えばだがアリサ。もし君がマラソン大会で一位を狙って更に普通なら走り終わるのに1時間掛かるのを半分の30分で走ろうと思えば全力疾走でマラソンをしているとしよう。しかし走っていると足が痛くなったり、息をするのが苦しくなってきたらどうする?」

「そりゃ、ペースを下げるか休憩するかのどっちかでしょ?」

「普通ならな。しかしそれを仮にG4を装着した状態で行った場合は例え装着者が疲れていようが装着者の運動能力がAIが動かすG4の動きについて行けてなかるうが目的を達成するためにAIがG4を動かしてゴールをするまで全力疾走で走らせられるんだ。そして、限界以上の動きを強制的にさせられ休むことさへ許されない装着者は、心臓や筋肉や骨等身体に負荷がかかり、死亡する。例え最初の頃はG4の動きについていけたとしても使い続けることで同じ様に身体に負荷が溜まっていき何時か耐え切れなくなり死亡する。しかもそれが戦いともなれば装着者は死ぬまでG4から降りること

を許されないだろう」

「ちょっと待て。戦いともなればってことはG4は実際に使われたか？」

「・・・はい」

「でもさつき設計段階で放棄されたって」

「確かに放棄されましたがその時には既に設計図そのものは完成していました。しかしその後陸上自衛隊の士官が警視庁からG4の設計図を奪取し、陸上自衛隊で完成させました。そしてG4のテストや実戦で装着したことによって何人も装着者が死亡しました。G4システムは最終的にはG3-Xとの戦いで倒されました」

「PROJECT G4」で死を背負いながら戦った男、G4の装着者「水城 史朗」が生を背負いながら戦った男、G3-Xの装着者「氷川 誠」と戦い死亡したシーンや2人が戦う前に水城 が氷川にこれまでG4システムによって犠牲となつたG4の装着者達の遺体を見せたシーンが俺の頭の中に浮かんできた。

「ねえ健悟君。さつきAIがG4を動かすって言ったわよね？だったら人が装着せずにAIだけに任せればよかつたんじゃないの？」

「残念ながらそれは不可能です。G3-Xを装着した忍さんなら分かると思いますがG4はG3-X同様強化服なので人が着なければ戦うことは不可能です。こういう言い方は悪いとは思いますが仮面ライダーG4を動かすには人間と言う名のパーツが必要なんです」

「そ、そんな言い方！」

俺の言葉に美由希さんが怒る。

「分かっています。でも事実でもありません」

「……一ついいか？」

「なんです？」

「あのG4つてやつがどれだけ危険なのかはよく分かった。ならなんでそんな危険なライダーシステムがあのにトレーラーに積んであったんだ？」

「それは私が説明します」

今まで黙ってたアポロンが割って入り、恭也さんの質問に答えようとす。

「Gトレーラーに積まれているG4はオリジナルのG4よりもかなり安全ですので問題ありません」

「本当か？アポロン」

俺もそこまで知らなかったのでアポロンに質問した。

「なんであんなに知らないのよ」

アポロンに質問する俺に対しアリサが呆れていた。

「オリジナルのG4が危険だったのはAIが装着者の意思、運動能

力を無視した動きを常に行うからでした。しかしあのG4のAIは装着者の意思、運動能力を無視した動きを常に行うというプログラムを無くし最初に装着者が装着する時にAIが装着者をスキャンし装着者の運動能力を測定、装着者の運動能力の可能な範囲で打撃攻撃や回避運動の動きをAIがサポートするプログラムを設定しました。更にあのG4のスーツには補助システムが搭載されているので装着者の疲れを多少は軽減してくれます。両腕部と両足部に改良を加えたのでオリジナルのG4よりもパワーは上がっています」

「ほお」

「しかし、その分装甲が若干厚くなり、更に補助システムも搭載しているので重量が増え、オリジナルよりも機動性が若干低下しています」

「つまり例えAIのサポートがあっても素早く回避出来るかは装着者自身の反応速度次第ってことか？」

「イエス、マスター。あと私個人としてG4達の装甲が気に入らなかったのがG3からG4までの装甲をオリジナルの装甲とは別の物と交換しました」

別に交換するのはいいけど気に入らなかったとか理由が凄いな。

「ちなみにその新しい装甲って何を使ったんだ？」

「Eカーボンです。CB製の」

「……はっ!?!?」

俺は今自分の耳を疑った。

こいつは今なんて言った？

Eカーボンって言った？

しかもソレスタルビーイング製のEカーボン？

いやいや、この世界では明らかに手に入らないだろ。

聞き間違いだ。

よし、聞きなおそう。

「なあアポロン」

「なんですか？」

「冗談だよな？俺の聞き間違いだよな？」

「いいえ、冗談ではありません。CB製のEカーボンを使っています」

聞き間違えじゃなかったー！！！！

なんでこの世界にCB製のEカーボンがあるんだ！！

Eカーボン

「機動戦士ガンダム00」の世界でガンダムや各国家軍で最新鋭のMSの装甲、武装、軌道エレベーターの建材にも使用されている最新の炭素素材。

またソレスタルビーイング製のEカーボンは各国家軍が使用しているEカーボンよりもはるかに高品質だといわれたいる。

「なんでEカーボンがあるんだよ！しかもCB製のー！！」

「この施設にはあらゆる世界の装甲板を用意してあります。U・Cのガンダリウム、、、ガンダリウム合金セラミック複合

材、チタン合金セラミック複合材、アフターコロニーのガンダム  
ニューム合金、アフターウォーのルナチタニウム合金、C・Eのフ  
エイズシフト装甲、ラミネート装甲等他にも色々あります。本当は  
フエイズシフト装甲を使いたかつたのですが本体の稼働時間が減っ  
てしまうので残念ながら不採用とさせていただきます」

「お前なあ」

そろそろ俺の頭が本当に痛くなってきた。

あらゆる世界の装甲板があるなんて一言も聞いてないぞ。

こいつ俺に話してないことが他にもあるんじゃないのか？

「ねえ健悟君？」

名前を呼ばれて振り返ると忍さんが目を輝かせていた。

「Eカーボンってなんなの？CB製ってなんのこと？あらゆる世界  
の装甲板って？」

やばいやばいやばいやばい。

忍さん完全に聞きたがってるよ！

そりゃそうだよな機械好きにはたまらんよな。

でも、これ以上説明するのは色々面倒だな。

誰か支援を！！！！

「隊長」

「「「「「ん？」「」「」「」

俺が悩んでいると氷竜が話しかけてきた。

「お話中のところ申し訳ありませんがそろそろこちらの方々を私達にも紹介してくれませんか？」

「おおー！」

「氷竜ナイスタイミングだ！」

「そういえばまだ紹介してなかったな。っという訳で自己紹介してあげてくれませんか？」

「Eカーボンや装甲板のことを誤魔化すためにすずか達に氷竜達に自己紹介するように頼んだ。」

「あつ、そうだね。えっと私は健悟君と同じ学校で同じクラスの月村すずかです」

「私はアリサ・バニングス。健悟とすずかと同じ学校の同じクラスよ。よろしく」

「俺は高町恭也。よろしく」

「妹の高町美由希。よろしくね」

「すずかの姉の月村忍です。よろしく」

「月村すずか様、アリサ・バニングス様、高町恭也様、高町美由希様、月村忍様ですね。記憶しました。改めてよろしくお願いします」

「すずか達が氷竜達に自己紹介すると氷竜が代表して挨拶をしている。」

「それで話は戻るだけだ」「申し訳ありません忍様」・・・アポロ  
ン君？」

「マスターは後10分程で重要な用事で出かねればなりませんの  
でその話はまた今度にして頂けませんか？出なければマスクドライ  
ダーシステムの説明が出来ませんので」

「えっ？そうなの？」

「ええまあ」

氷竜に続いてアポロンのナイスアシスト！

これで最初の目的だったマスクドライバーシステムの説明が出来る。

・・・あれ？

本当によかったのか？

まあいいや。

「では時間もないのでパツパとやりましょう」

俺はライダーベルトを腰に巻きつけた。

「あんだ、そのベルトどっから出したのよ？」

「企業機密だ」

「いや、企業じゃないだろ」

俺が突然何処からかライダーベルトを取り出したことにアリサと珍  
しく恭也さんがツッコミを入れる。

「気にしない気にしない。カブトゼクター！」

カブトゼクターを呼び右手を上げるとカブトゼクターが右手に飛び込んできた。

「変身」

『 H E N S I N ! 』

カブトゼクターをライダーベルトのバックル部に差し込むとカブトゼクターから低めの音声の流れると全身にマスクドアーマーが展開され、カブトの第一形態「仮面ライダーカブト マスクドフォーム」に変身した。

仮面ライダーカブト

カブトムシをモチーフにしたライダーで前回アースラで変身した「仮面ライダーガタック」と同様「ZECT」に開発されたマスクドライダーシステムの一つで「光を支配せし太陽の神」と呼ばれている。

銀色をメインに所々赤色が入ったボディに頭部の眼の部分は青色のゴーグル型になっている。

平成仮面ライダー作品の第七作「仮面ライダーカブト」の主演ライダー。

キャッチコピーは「天の道を行き、総てを司る！」 「俺が正義」

「凄い・・・」

「本当にあのカブトムシから変身した。健悟、その姿はなんて名前のライダーなの？」

「このライダーはカブト、仮面ライダーカブトだ」

「さっき変身してたライダーよりもなんかゴツゴツしてるね」

「そうだな」

「重装甲型のようなから防御は高そうだけど動きが鈍そうね」

「さすが達がカブト マスクドフォームの感想を述べている。」

「ええ、この状態のカブト、仮面ライダーカブト マスクドフォームはヒビロノカネと呼ばれる金属で製造されたマスクドアーマーを全身に展開しているので防御力とパワーと重視のフォームなんです。忍の言った通りその分機動性が低いです。さて、次はキャストオフだがボルフォッグ、マスクドアーマーが皆に当たらないように警戒しといてくれ」

「了解しました。健悟機動隊長」

ボルフォッグに頼むと皆から少し距離をとった。

「キャストオフ？」

「何よそれ？」

「見てれば分かる」

そういつて俺は左手でカブトゼクターのゼクターホーンに触れ、ゼクターホーンを上げた。

そしてガタツクの時と同じ様に待機音が流れると同時に、カブトの

身体に電撃が走り、腕、胸、肩、顔と次々とマスクドアーマーが浮かび上がり右手でゼクターホーンを掴む。

「キヤストオフ！」

ゼクターホーンを左から右に引つ張った。

『CAST OFF!』

音声の後、カブトを覆っていたマスクドアーマーが弾け飛んだ。

「きゃっ！」

「な、何よ!？」

「装甲が弾けた！」

すずかとアリサと美由希さんが驚きボルフォッグが飛んでいったマスクドアーマーを防ぐ中、マスクドアーマーがパリジされことで倒れていた赤い角『カブトホーン』が顎のローテートを基点に立ち上がっていき顔面に移動、固定され眼が光った。

『CHANGE BEE TLE!』

カブトホーンが顔面の定位置に収まったことでカブトムシを連装させる姿になりゴーグル型だった眼が複眼へと変わり、体のカラーは今度は赤色がメインになっている。

カブトの第二形態「仮面ライダーカブト ライダーフォーム」に姿を変えた。

「これがカブトの高機動形態のライダーフォームです」

「スリムになったね」

「そうだな」

「でもこれだと確かにさつきよりは機動性はあがってるんだろうけど防御力は下がってそうね」

流石忍さんだ。

カブトのマスクドフォームとライダーフォームの長所と短所を見極めてる!!!

「その通りです。このライダーフォームはさつきのマスクドフォームよりも機動性が上がる代わりにパワーと防御力が下がってしまうんですがその代わりに必殺技を発動させることが出来るんです」

「必殺技ってさつき健悟が他のライダーになってた時や私達がオルフェノクとかを倒す時に使ったやつよね？」

「ああ。ちなみに最初に变身してたライダーはクウガって言うライダーだ」

「最初の……………っ／／／／／」

「ん？」

なんだ？

クウガの話をしたらずか顔が急に赤くなつたぞ？

それによくみたらアリサも赤いし、何故か美由希さんと忍さんは笑

ってるし……なんでだ？

「えーっと、どうしたんだ？」

原因が分からなかったので尋ねてみた。

「あつ！えっと……その……」

「は、恥ずかしくて言えないわよ！！」

すずかはモジモジし、アリサは俺に怒鳴った。

恥ずかしい？

何がだ？

「まあ、あの台詞は結構かつこよかったけど、結構恥ずかしいよねえ〜」

「そうねえ」

ここで美由希さんと忍さんが気になる言葉ワードを言った。

あの台詞……そしてクウガ……この二つのキーワードで結びつくのは……まさか！！

「なあ。まさかとは思うが俺がクウガに変身する前にあの怪物との会話って聞いてないよな？」

「」「」「……」「」「」「」

俺がすずか達に聞くと全員が目をそらした。

「アポロン、どうなんだ？」

一番答えてくれそうなアポロンに聞くことにした。

「イエス、マスター。皆様マスターとグロンギの会話を聞いてました」

なんだとおおおおお！！

「何でだ！？」

「皆様にマスターが何を話しているのか理解出来るように翻訳したからです」

「誰が！！」

「私です」

「お前かい！！」

確かに聞いている方はありがたいだろうけど！

今思い出したら俺もすげー恥ずかしくなってきた！

なんであんなこといったんだろ！

「さて皆様、そろそろマスターのお時間が迫って来ますので次が最後の説明とさせていただきます」

何このテレビの生放送の時の放送時間が終わりますので次が最後ですみたいな言い方。

「なら最後にいいか？」

最後に質問をしてきたのは恭也さんだった。

「お前達が説明してくれたおかげであの怪物達や仮面ライダーや氷竜達のは大体は理解出来た。でも、一つだけ気になることがある」

俺はアースラの時と同じ、凄く嫌な予感がした。

「お前が何故ライダーに変身出来る装備を持っているのかという」とだ

再び予感的中。

「これまでの話を聞くと仮面ライダーの世界はそれぞれ別々の世界に居るんだよな？それなのにお前は別々の世界に存在するはずの仮面ライダーに変身する装備や車両、変形するバイクを持っている。それに氷竜達のような別の世界のロボットがいて、この家の普通とは思えない規模の整備施設。そして他の世界から来た敵についての情報も持っている。野田、君は一体何者なんだ？」

クロノとほぼ同じ質問だな。

まあ気になるのは当然だな。

「すみませんが今はまだその質問に答えることは出来ません」

「今はってことはいつかは話してくれるってこと？」

「はい。時が来れば皆さんに全て話します。すぐかとアリサとも約

束してるんで」

「「「え?」「」」

俺が恭也さんと美由希さんに答え、アリサとすずかにいつか話す約束をしていることを言つと恭也さんと美由希さんと忍さんはアリサとすずかを見た。

「すずが、アリサちゃん。二人とも知ってたの?」

忍さんが二人に尋ねた。

「うん」

「はい」

二人は忍さんの質問に素直に答えた。

「忍さん。二人を責めないであげてください。俺が黙っていてほしいと頼んだんです」

「くすつ。大丈夫、責めたりしなから安心して」

忍さんが笑顔でそういうと俺はホッとした。

「マスター、そろそろ」

アポロンがタイムリミットを告げた。

「分かった。あの恭也さん、納得がいけないことは分かってるいま

「ですが今は待つててくれませんか？お願いします」

「俺は恭也さんに頭を下げた。」

「……分かった。今は答えを待つておく。でも、いつか絶対聞かせるよ？」

「はい、分かりました。っともうこんな時間ですね。お送りします」

「恭也さんに感謝しながら答え、時間を見ると夜の8時半だった。」

「いいの？」

「はい。大丈夫です。ボルフォッグ、頼めるか？」

「美由希に返事を返し、俺はボルフォッグに送るように頼んだ。」

「了解しました。すぐに準備します」

「ありがとうございます。アポロン、Gトレーラーを動かせ」

「ラージャ」

「では皆さん。上に戻りましょう」

「アポロンにGトレーラーの手配を頼んで上に戻った。」

俺達が上に戻り、しばらく待っているとガレージからビークル形態のボルフォッグとGトレーラーが出て来た。

「では、皆さん。お気をつけて」

「ああ」

「ありがとうね」

「それじゃあね」

「ノートは任せといてね」

「なるべく早く学校に戻ってきなさいよ？」

「ああ、分かったよ。ボルフォッグ、後は頼む」

「はい。お任せ下さい」

すずか達と挨拶を交わすと恭也さんと美由希さんはボルフォッグ乗り高町家へ、忍さんとすずかとアリサはGトレーラーに乗り月村家とバニングス家へ戻った。

「さて、また問題事が増えたな」

「そうですね、マスター」

「お前は気楽そうだな」

「これでも多少は危機感を感じてますよ？」

・・・本当か？

「はあ、まあいいか。アポロン、準備の方は？」

「マスターが学校に行っている間に既に終わらせています」

ありがたいことだ。

どうやって準備したのか気になるけど。

「よし。じゃあアースラに連絡を入れてくれ。30分後に前と同じ場所に行くので転移の準備するようにと」

「ラージャ」

アポロンに連絡を頼むと俺は転移場所である海鳴臨海公園に向かうために荷物を取りに家に戻った。

第二十話 一日に何度も説明するのは面倒臭い（後書き）

ARX-7アーバレスト「やっと投稿出来た」

健悟「時間かかったな。それになんかタイトルと合っていない気がする」

アポロン「それは言わないであげてください。今回は終盤の終わらせ方に一番苦戦していたようです」

ARX-7アーバレスト「悩んだ結果、最後のほうは終わらせ方があまり上手くま纏まらなかった。そ」

健悟「大丈夫か？」

ARX-7アーバレスト「なんとか」

アポロン「まあ本当のことをいいますと気分転換とか言ってこちらを書かずに何故かStrikersのほうの話を書いてましたからね」

健悟「アホかお前は！」

ARX-7アーバレスト「問題ない。全て計画通りだ」

健悟「なんで碇指令になってるんだよ！」

アポロン「それ却下です」

健悟「お前もスケッチダンスネタやらんでいい！」

ARX-7アーバレスト「さて、アホなことやってないでそれそろ次回予告をしよう。はいこれ」

健悟「何この台本？」

ARX-7アーバレスト「いやねえ。毎回次回予告って結構さらって終わらせるだろ？今回の話でこの『少年が望んだ世界と力』が20話目に入ったからその記念としてちよつと次回予告に色んな作品の次回予告のやつを入れようと思う」

健悟「???ごめん。イマイチ意味が・・・」

ARX-7アーバレスト「口で説明するよりも実行したほうが早い！アポロンBGMよろしく！」

アポロン「ラージャ」

BGM『GUNDAMU出撃』

健悟「えっ?なんでSEED?」

ARX-7アーバレスト「早く台本読む!!あと言い方は三石さん風で!!」

健悟「は、はい!えっと、なのは達と共に行動をする健悟。しかし搜索しても残りの6個が見つけれないアースラのスタッフ達。そんな中、黒衣の少女、フェイトが残りのジュエルシードを強制発動させる。その時健悟がとった行動は・・・次回『少年が望んだ世界と力』第二十一話 海上での戦い』荒れ狂う嵐の中、駆け抜

けるフェニックス!!」

ARX-7アーバレスト「はいOK!!」

健悟「えっ!こんなんでいいの?」

アポロン「というよりも今度からこんな感じで次回予告をするんですよマスター」

健悟「マジで!?!」

アポロン「それではみなさまのご意見とご感想をお待ちしています」

健悟「えっ!終わるの!?!」

ARX-7アーバレスト「次回もお楽しみに!!」

## 第二十一話 海上での戦い

「……と言う訳で、高町なのはさんとユーノ・スクライア君に続いて新たに現地から協力してもらおう民間人の野田健悟君です」

「野田健悟です。よろしくお願いします」

「」「」「」「」「」「」「」

「すぐか達と別れてすぐにアースラに転移され、現在アースラスタッフに紹介されているんだけど前回の件があつて皆からやや冷たい目で見られている。」

「まあ、しょうがないか。」

「……」

「俺はドアに向って歩きだした。」

「健悟君、何処へ行くの？」

「挨拶が済んだので部屋に戻らせてもらいます。この人達もその方が気が楽でしょうから」

「そういつて俺はドアを開き、会議室を出た。」

「……ふう」

「しばらくの間はこの状態が続くでしょうね」

俺が通路に出て溜め息をつくときアポロンが話しかけてきた。

「そつだろつな。ま、俺は俺なりのやり方でやっていくさ」

俺は用意された部屋に戻った。

そして俺がアースラに来て既に9日になった。

その間になのはが3つ、フェイトが2つのジュエルシードを回収した。

しかし原作通り残りの6つのジュエルシードが未だに見つけられておらず、今のところはライダーや怪人達も現れたという情報もない。そんな中俺は部屋で一緒に持ってきたオートバジンをいじっていた。

「よろしいのですか？マスター」

「何が？」

「ジュエルシードの回収を手伝わなくて」

「今の段階ではなのはの魔法の訓練にもなるからいいじゃないか？」

「一理ありますね」

「それに俺は早く慣れないといけないのも多いしな。今日のトレーニングってなんだっけ？」

「本日はクウガとマスクドライダーシステムの両方です」

「マジか」

ここに来てなのは達がジュエルシードの回収に向っている時はアースラ艦内の通路の一部を射撃訓練は禁止という条件で借りてクウガ、マスクドライダーシステムの変身とオートバジンとの格闘戦のトレーニングを行っている。

「はあ、じゃあない。やるか」

俺は立ち上がりカードケースからオールドライドのカードを取り出しドライバーに入れる。

『OLD RIDE！ TWENTY！』

オールドライドで20代の姿になる。

「今日はその姿でトレーニングをするんですか？」

「うん。なんとなくそんな気分だから」

アポロンの質問に答え、トレーニング用の服に着替える。

ちなみに服装は上が黒のタンクトップに下が紺色のジャージである。

「よし」

着替えを終えると俺はオートバジンに近づいた。

> BATTLE MODE <

いじり終えたオートバジンのボタンを押して、バトルモードに変形させた。

「行くぞ、オートバジン」

オートバジンが電子音を鳴らしながら頷くと部屋を出てトレーニングに向った。

アースラ発令所

リンデイSide

民間協力者であるのはさんとユーノ君がアースラに来て今日で10日、そして仮面ライダーと呼ばれる異世界の戦士に変身する健悟君が9日目。

なのはさんとユーノ君がこちらが発見したジュエルシードを3つ回収し、例の黒い子が2つ回収している。

これまで回収されたのを合わせても、あと6個が未だに見つけられていない。

「残り6つ、見当たらないわねえ」

「搜索範囲を地上以外まで広げています。海が近いのでもしかするとその中かも。例の黒い子と合わせてエイミィが搜索してくれます」

「そう」

『あの艦長』

クロノと話しているとエイミーから通信が入ってきた。

「どうしたのエイミー？」

『またあの子があのおートバジンっていうバイク型ロボットと訓練を行ってます』

「そうなの」

「僕達のジュエルシード回収を手伝わずにいつもいつもご苦労なことですな」

クロノの言う通り、健悟君はアースラに来て以来ジュエルシードの回収を手伝わず、一日も休むことなくあのおートバジンと呼ばれるバイクに変形するロボットと訓練をしている。

しかし、その訓練時間が正直異常としか言えない。

毎日9時間以上の訓練。

本人はちゃんと休憩をしていると言ってるけどその休憩時間も僅か10分で1回きり。

食事もその10分間に済ましているらしい。

とても子どもがするような訓練量ではないので健悟君が倒れたりしないか気になる。

気になった私は健悟君の様子を見に行こうと思いきや席から立ち上がった。

「艦長、どちらに？」

「ちょっとあの子の様子を見てくるわ。しばらくお願いね」

「はい。分かりました」

私はしばらくクロノに任せて発令所を後にした。

アースラ通路

現在俺はクウガに変身してオートバジンと格闘戦の訓練を行っている。

「うおおおおりやあああ!!」

声を上げながらオートバジンにハイキック、左ストレート、ミドルキック等を次々にだしていく。

オートバジンはそれらを腕で防ぎ、避け、一旦俺と距離をとった。するとオートバジンはバスターホイールを構える。

「ちっ！超変身!!」

バスターホイールを構えられると俺はすぐにドラゴンフォームにフォームチェンジし、ドラゴンフォームの跳躍力を活かしオートバジンの頭上を飛び越え、後ろに回り込み用意されていた棒を拾いドラゴンロッドに変換させた。

そしてオートバジンが振り返ったとほぼ同時にオートバジンの腹部にドラゴンロッドの先端部を当てた。

「そこまで!」

決着がつくとアポロンが模擬戦終了を告げる。

「どうだったアポロン?」

アポロンに今の模擬戦の評価をしてもらおう。

「総合的には最初に比べればかなり成長しています。バスターホイールを回避するのにドラゴンフォームになり、後ろに回り込むのもいい判断だと思えますが、あそこでタイタンフォームになっておくのもいいかもしれません」

「理由は？」

「銃火器を持っていない敵なら今ので十分対応出来ますが銃火器を持った敵、例えばライダーというデルタ、ギャレン、G3等のハンドガンタイプのような取回ししやすい武器の場合、至近距離で撃たれる危険性があります。それはオートバジンのバスターホイールも例外ではありません」

「成る程、確かにそれだと耐久性が低くなっているドラゴンフォームでは危険だから耐久性が最も高いタイタンフォームになった方がいいんだな」

「イエス、マスター」

「お疲れ様」

「ん？」

俺とアポロンが話しあっていると後ろから声をかけられた。

振り返るとそこには飲み物が入った容器を両手に持ったリンディが立っていた。

「リンディ提督？」

「いつも熱心ね。はいこれ」

リンディは両手に持っている飲み物が入った容器の1つを俺に差し出した。

「中身はスポーツドリンクよ。余計なお世話だとは思っけど」

「いえ、そんなことは！ありがとうございます。いただきます」

「ええ。でもその前に変身を解除しないと飲めないんじゃないかしら？」

「・・・あっ」

俺が変身を解除するのを忘れているとリンディはクスクスと笑っている。

「じ、じほんっ！」

とりあえず咳払いをして誤魔化しクウガの変身を解いた。

「あら。今日は大人の姿だったのね」

「ええ、まあ」

俺はリンディから容器を受け取りスポーツドリンクを飲んだ。

「貴方も頑張るわね。こんな無茶なトレーニングばかりして」

「無茶だとは自分でも承知してます。でも、一刻も早く慣れておき

たいので多少の無茶はやむおえません」

「慣れるってライダーのこと？」

「はい。まだ一部のライダーに慣れてませんので。でもこの9日間の訓練のおかげでだいぶ慣れてきました」

訓練の最初の頃は9時間もクウガ、マスクドライダーに変身した状態で訓練するとすぐにバテたが今ではある程度平気になってきた。これも超兵のおかげなのかもしれない。

「そうなの。ところで貴方はなのはさんの手伝いをしなくてもいいの？」

「ジュエルシード集めですか？」

「ええ」

「自分で言うのもなんですが、確かに俺が手伝えはある程度は早く回収できるでしょう。しかし、高町はまだ魔法の存在、力を知ったばかり、まだまだ知らないことが多いはず。その制御や訓練には丁度いいでしょ」

現に原作でもなのはジュエルシードを回収しながらユーノと魔法の使い方訓練とかしてたからな。

「成程。貴方は貴方なりになのはさんのことを考えているのね」

「ええ、まあ。さて、俺はトレーニングに戻ります」

俺は再びオートバジンと模擬戦をしようとした。

「健悟君」

「はい？」

模擬戦を再開しようとした時にリンディに呼ばれもう一度リンディの方を向いた。

「あんまり無茶しっちゃ駄目よ」

リンディは笑顔でそういった。

「分かりました。・・・つといたいたのですがちょっと難しいですね」

「どうして？」

「強くなりたいから・・・ですかね」

「今でも十分強いと思っけど？」

「いいえ。俺はまだまだ弱いです。だから強くなりたい」

俺は容器の中に残ったスポーツドリンクを一気に飲み干した。

「どうして貴方はそこまで強くなりたいの？」

リンディの質問に一瞬考えた。

俺が強くなるうとする理由を。

「そうですねえ。強いて言うなら誰かを守りたいから……ですかね」

「誰かを守る？」

「ええ。高町やスクライア、地上の友人達や自分にとって大切な人を守りたい。もちろん自分にとって大切な人だけじゃなく、他にも強い人も弱い人も含めて誰かを守れたらいいなあって。だから強くなりたいたんです。もちろんリンディ提督、貴女も」

「／／／！」

俺は自分の素直な気持ちをリンディに伝えた。するとリンディの顔が少し赤くなっている。

「どうしました？」

「えっ？い、いいえ！なんでもん「ヴィーン、ヴィーン」っ！！」

リンディが慌てて返事を返そうとした時、アースラ艦内に警報が鳴り響いた。

『エマーゼンジー！搜索区域の海上にて大型の魔力反応を感知！』  
フェイトが動いたか。

「どつやらあの子が動きだしたようですね」

「大変！すぐに発令所に戻らないと！」

リンディが急いで発令所に戻ろうとするがここからでは少し時間がかかる。

「ちょっと待って下さい。オートバジン」

俺はリンディを呼び止め、オートバジンを呼び寄せた。

>VEHICLE MODE<

オートバジンの胸のボタンを押しビークルモードに変形させ、オートバジンに跨った。

「行きましょう」

「ちょ、ちょっと待ちなさい！まさか艦内をバイクで走る気？」

「それ以外何があるんですか？」

「だ、駄目よそんなこと！第一あなた免許は？」

「ご安心をリンディ提督。正規の免許はとっていませんがすでにマスターは普通自動車、中型二輪の免許を獲得しているほどの知識と技術を持っています」

「そ、そういう問題じゃー！」

リンディが言いたいことは理解出来るが今は緊急事態なので強行手段をとることにした。

「ちょっと失礼します」

「えっ？・・・きゃっ！」

リンディに一言言ってから俺はリンディを抱き上げる。  
俗に言うお姫様抱っこの状態だ。

こういつては失礼だが、以外とリンディは軽かった。

「ちょ、ちよつと／＼／＼」

「よつと」

お姫様抱っこをされて恥ずかしいのか顔が赤くなっているリンディをオートバジンに乗せ、ヘルメットを渡す。

「はい。メット被つて下さい。・・・いや、時間がなさそうなので俺がしてあげます」

俺はリンディにヘルメットを被せた。

「あ、あの・・・／＼／＼」

「じつとしてください」

「・・・」

俺がそういうとリンディは大人しくなった。

「よつと」

ブオオオオンッ、ブオオオオンッ、ブオオオオンッ

リンディにヘルメットを被せ終わると俺もヘルメットを被りオートバジンを3回吹かした。

「あ、汗掻いてて嫌でしょうけどしっかり？まっけて下さい。危ないので」

「え、ええ／＼／＼」

リンディが俺の腰に手を回してしっかり？まった。

「うっ！」

その時、なにやら柔らかい感触の物が2つ、俺の背中を襲つ。そしてその答えはすぐに分かった。

リンディの……む、胸が……背中に当たってる！

「あ、あの……どうかした？」

リンディが心配そうに尋ねてくる。

「な、なんでもありません！行きます！」

俺は誤魔化すためにオートバジンを急発進させ発令所に向った。

発令所

『な、なんてことしてんのあの子達?!』

エマージェンシーの警報が鳴り響き、発令所では海鳴の海上にいるフェイトがモニターに映されていた。

「エイミィ！艦長は？」

『さつきから連絡してるんだけど』

「くそっ！こんな肝心な時ん「ブオオオオンツ」っ！！」

クロノが言い終わる前に何処からかバイクの音が聞こえた。

ウィーン

ブオオオオンツ

「なっ！？」

『な、何?!』

発令所のドアが開くと俺とリンディを乗せたオートバジンが発令所に入り、停車する。

突然のことに発令所にいたクロノとスタッフ、そして通信モニターに映っているエイミィも驚いていた。

「ほい。到着」

「な、何をやってるんだ君は！！」

「いやー、訓練の場所からここまで来るのに結構時間かかるからオートバジンを使わせてもらった」

「だ、たからって!!」

「まあそう怒るな。……あとリンディ提督、そろそろ離れてもらわないと俺も降りられないんですが」

俺は到着したのになかなかオートバジンから降りないリンディに声をかけた。

「え？あ！そ、そうね!!」

俺が言うとリンディはオートバジンから降りヘルメットを脱ぎ、艦長席に向う。

「じよ、状況は？」

「ご覧の通りです」

モニターを見ると原作通りフェイトが海に魔力を叩き込み、残りのジュエルシールド6個を回収しようとか戦している。

「なんとも呆れた無茶をする子だわ!!」

「無謀ですね。間違いなく自滅します。あれは個人が出せる魔力の限界を超えている」

「フェイトちゃん!!」

リンディとクロノがモニターでフェイトの行動について話しているとなのはが発令所に入ってきた。

「あの！私、急いで現場に！！」

「その必要はないよ。放っておけばあの子は自滅する」

現場に行こうとするのはをクロノが止める。

「仮に自滅しなかったとしても、力を使い果たしたところで敲けばいい」

「でも！」

「今の内に捕獲の準備を」

「了解」

クロノが指示を出すとスタッフはすぐに準備に入った。

「私達は、常に最善の選択をしなければいけないわ。残酷に見えるかもしれないけど、これが現実」

「でも……」

リンデイがなのはに説明し、なのは達の後ろで見ていた俺は再びモニターに目を向けた。

確かに相手を捕まえる作戦としては消耗したところを敲くのはもっとも効果的な作戦、それは全く間違っていない正しい選択だ。だが、ここで大人しくするような俺じゃないんだよな。

俺は我慢弱く、落ち着きのない男だからな。

(さあて、そろそろ動くか)

俺はディエンドの「海東大樹」のようにフェニックスドライバーを回しながら取り出し、カードをドライバーに入れた。

『KAMEN RIDER!』

「「「えっ?」「」」

「何!?!」

「変身っ!?!」

『PHOENIX!』

リンディとなのは、ユーノ、クロノが驚く中、俺はフェニックスに変身した。

「何のつもりだ!」

突然変身した俺にクロノが怒鳴る。

「決まってるだろ?あの子を助けに行く」

「君はさっきのを聞いてなかったのか!?あの子の魔力が切れるの待ち、その後に確保w「そんなの聞いてたよ」っなら大人しくそこにいろ!勝手な行動をするな!」

「……こいつは怒鳴ることしか出来ないのか?」

「悪いな。俺はこういうのは見逃せない主義なんで。それにクロノ執務官。貴方は一つ忘れてませんか？」

「何!？」

「俺が貴方達と交渉した時、協力内容の中には俺の独自行動が認められていることを……」

そついいながらカードケースから一枚のカードを取り出した。

「!!!」

クロノはその内容を忘れていたらしい。

「だから……」

『AESTHI RIDER!』

カードをフェニックスドライバーに入れ、上に向けた。

「俺はこれから独自行動をさせてもらう。変身っ!」

『BLACK SELENA!』

引き金を引くと俺の身体はアニメーション映画「機動戦艦ナデシコ THE PRINCE OF DARKNESS」に登場した黒色の重装甲のロボット「ブラックサレナ」に変身した。

「な、なんだその姿は!」

「MS?AS?」

クロノが驚き、リンディがMSかASと予想している。

「どちらでもない。説明をしてやりたいけど今はあっちが最優先だ。アポロン、目標地点の座標を入力、制御とイメージを頼む」

「ラージャ。システムスタンバイ、目標地点の座標入力、イメージ・・・コンプリート」

アポロンがブラックサレナの出撃準備を進めていく。

「全システムオールグリーン。ディストーションフィールド最大出力で展開。出撃準備完了」

アポロンから準備完了が告げられた。

「了解だ」

アポロンの準備が終わるとカードケースからカードを再び取り出した。

「いくぞ、アポロン」

「イエス、マスター」

『ATTACK RIDE! BOSSON JUMP!』

取り出したカードをドライバーに入れ、アタックライド「ボソンジャンプ」を発動させた。

『な、何コレ!?!』

通信室にいるエイミーが通信モニターの向こうで驚きの声をあげている。

「どづしたのエイミー?」

驚いているエイミーにリンディが聞いた。

『謎の反応が健悟君の周囲から発生しています!?!』

「なんだって!」

エイミーの次はクロノが驚きの声をあげる。

エイミーが言ってる謎の反応は恐らくボソン粒子反応のことだろうから特に気にしなくても大丈夫。

「おい! 一体なにをしt・・・」

「ブラックサレナ、野田健悟、出撃する!?!」

「ジャンプ開始」

クロノの言葉を最後まで聞かず、ボソンジャンプを開始した。

「き、消えた?」

ボソンジャンプを使用し、俺が消えるとユーノが唾然としながら咳いた。

もちろん、ユーノに限らずなのは、クロノ、リンディ、他のスタッフ一同、発令所にいた全員が唖然としていた。

「い、一体なにが……『クロノ君!』……っ!どうしたんだいエイミィ?」

クロノが唖然としてしているとエイミィが再び驚いた様子でクロノに話しかける。

『あの黒い子の結界内上空でさっきの謎の反応を確認!』

「何?!映像は!?!」

『今出すから!』

モニターに映し出され、その5秒後にブラックサレナがジャンプアウツし、結界内上空に現れた。

「なっ!?!」

「の、野田君!」

「凄い。転移魔法を持ってないのに……でも、どうやって」

「これは……帰ってきたら色々聞く必要があるわね」

なのは達が驚きながらモニターに映るブラックサレナを見ていた。

結界内上空

アースラのいる次元空間から目標の上空にボソソジャンプした。上には青い空が広がり、下には雲が覆っており、空と雲の中間にジャンプしたようだ。

「ボソソジャンプ成功。目標ポイントに到達」

「……しんどいな」

「ボソソジャンプですからね。ボソソジャンプ用のトレーニングをせずに初めて使用すれば疲れるのは当然です」

「……そうだな」

ガオガイガー、マスクドライバーシステム、クウガに続いて今度はボソソジャンプのトレーニングか。

クウガとマスクドライバーシステムはほぼ慣れてきたからあとはガオガイガーだけだと思っていたのにまたトレーニングメニューが増えるな。

「それでマスター、この後はどうするのですか？」

アポロンがこの後の行動予定を聞いてきた。

「まずはブラックサレナを解除してくれ。この姿じゃカードをドライブバーに入れにくい」

「しかしそれでは飛行が出来ませんよ？」

「大丈夫だ。ドダイ改かグウルを使用する」

「成る程」

「じゃあ、早速ブラックサレナを解除してくれ」

「ラー ज्या。ブラックサレナ、解除します」

ブラックサレナが解除され飛行能力を持たないフェニックスに戻ったことで重力に引かれ落下していく。  
そして、落下しながらカードを取り出しドライバーに入れた。

『ATTACK RIDE! DODAI CUSTOM!』

「よっと」

「機動戦士Zガンダム」でエウーゴで使用されたSFSサブフライトシステム「ドダイ改」  
が出現し、俺はすぐにドダイ改に乗った。

「さて、まずはあの竜巻とか少し大人しくさせないとな」

「でしたら、高出力のビーム砲を使いましょう。海面に向かって撃てば少しは大人しくなるでしょう」

「高出力ビームか・・・それを装備した機体で飛行が可能なのは？」

「それらの条件に当てはまるのはMSですね。機体はA・Cのウィングガンダムゼロ、ウィングガンダムゼロ エンドレスワルツ、トリルギス？、A・WのガンダムX、ガンダムDX、ガンダムヴァサールゴ、ガンダムヴァサールゴチェストブレイク、C・Eのフリーダムガンダム、レイダーガンダム、フォビドゥンガンダム、ストライク

フリーダムガンダム、セイバーガンダム、デステイニーガンダム、オオワシアカツキ、00のガンダムヴァーチェ、ガンダムスローネアイン、セラヴィーガンダム、ラファエルガンダム、ガデツサ、リボーンズキャノンですね」

結構候補がいるな。

「SFSを使えば候補はさらに増えますが」

「いや、今言っただけでいい」

うーん、どれを使おうか。

でもよく考えたら最近SEEDや00の機体ばかり使ってる気がするし、たまには別の機体を使うのもいいな。

「よし、決めた」

使う機体を選ぶとカードをドライバーに入れた。

『MOBILE RIDE! TALLGEESE ?!』

「はっ!」

トリガーを引くと俺の隣に白と青のボディ、右肩のアタッチメントに大型のビーム砲を、左腕にはボディと同じ色のシールドを装備したMS「OZ-00MS2B トールギス?」が現れた。

トールギス?

「新機動戦記ガンダムW Endless Waltz」に登場したMS。

A・C195年の地球とコロニーとの戦争時に地球側、世界国家軍元師「トリーズ・クシュリナーダ」が搭乗したMS「OZ-00MS2 トールギス？」と同時期に開発されたトールギスの3号機だったが専用武装の最終調整が遅れ完成目前に終戦を迎えたため完成した機体は封印された。

しかしその1年後、A・C196年にマリーメア軍が武装蜂起を起こし、それをきっかけに特務機関「プリベントー」がトールギス？の封印を解き、プリベントーに現れた人物、「火消しの風・ウインド」を名乗り、旧OZの名パイロットであり、コロニー型のホワイトフアングでは本名である「ミリアルド・ピースクラフト」として「OZ-13MS ガンダムエピオン」に乗り、ウィングガンダムのパイロット「ヒイロ・ユイ」のライバルであった「ゼクス・マキス」が搭乗した。

「よしウインド、今から送るデータの場所に向けてメガキャノンを撃つてくれ」

俺はトールギス？を搭乗者であったゼクスと同じコードネーム「ウインド」と呼んだ。

「ふっ。了解した」

「データ転送します」

アポロンがトールギス？にデータを送る。

「……確認した」

トールギス？がアポロンからデータを受け取り座標を確認するとメガキャノンを構えた。

トールギス？がメガキャノンを構えるとメガキャノンの砲身が伸び、最大出力モードに変わった。

「最大出力モードだが・・・威力は絞るか？」

「ああ、出力は70%で頼む」

「ふっ、了解した。こちらウィンド、メガキャノンを発射する！」

ズゴアアアアア

メガキャノンから出力70%のビームが放たれると下を覆っていた雲に大きな穴が開いた。

「いくぞ、ウィンド。アポロン、あの2体にこっちにくるように連絡しろ」

「了解だ」

「ラージャ」

アポロンにある2体を増援として来させるように指示を出し、俺とトールギス？はフェイトの許に向った。

フェイトSide

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・くっ！」

海に魔力を叩き込んだことで残り6つのジュエルシードを発見でき

たけど魔力を使いすぎてもうほとんど残ってない。  
バルディッシュの魔力刃もだんだん弱くなってきた。  
サポートをしてくれるアルフも今は身動きが出来ない。  
私も身動きを封じられないように回避を続け、体力が削られていく。  
今のままじゃ、封印するのは難しい、自爆行為であることも分か  
つてる。  
でも諦めない。  
母さんが、母さんが待つてるから！  
母さんのためにも・・・諦めたくない！

>！Sir！<

「えっ？」

ズゴアアアアア

ドゴオオオオオオン

バルディッシュが当然私を呼ぶといきなり空から魔力ではない砲撃  
が放たれ海面に着弾し、水飛沫が上がった。  
その衝撃で竜巻が少し弱り、動きを封じられていたアルフも動ける  
ようになり、私に寄ってきた。

「フェイト！大丈夫？！」

「はあ・・・はあ・・・うん、大丈夫だよアルフ」

私は心配してくれているアルフに大丈夫と伝えた。

「でも、今のは一体・・・！！！」

「どうしたのアルフ?・・・!」

アルフが向いている方を私も見ると先程まで覆われいた雲に穴が開き、光が照らしていた。

その光の中から人の姿が2つ、私達に近づいて来ていた。

1人は右手の砲を持っている白と青のロボット。

さっきの砲撃を行ったと思われる。

そしてもう1人は・・・

「本当に無茶な行動をするなあ君は」

「あんたは!」

「フェニツ・・・クス・・・」

私は話しかけてきた最近よく出会う人物、仮面ライダーフェニックスの名を呼んだ。

俺とトルギス?はフェイトの近くに行き、フェイトに話しかけた。

「本当に無茶な行動をするなあ君は」

「あんたは!」

「フェニツ・・・クス・・・」

フェイトは息を切らしながら名を呼んだ。

かなり疲れているようだ。

「何故・・・ここに？」

「来たのは俺だけじゃないようだぞ？」

俺がそういうと覆っていた雲に再び穴が開き、そこからユーノの転移魔法で転移したのが現れた。

「フェイトの・・・邪魔はするなあああ！！」

アルフは俺の時と違い、なのはが現れるとなのはに襲い掛かった。しかし、そこにユーノが現れラウンドシールドで防いだ。

「違う！僕達は君達と戦いに来たんじゃない！」

「ユーノ君！」

『馬鹿な！何やってんだ君達は！』

フェニックスドライバーに通信が入り、クロノが怒っている声が聞こえてきた。

「アポロン、うざいから回線を強制カットしろ」

「ラージャ。っと言うより私も最初からそのつもりでした」

流石俺の相棒、空気が読めるといふかなんというか。

「回線の強制カット完了。しかし、リンディ提督の場合は回復する

よつに設定しました」

「よし、いい判断だ」

さて、これで邪魔者は入らないな。

「……どうやら、パワーダウンのようだな」

「……はい」

俺の質問にフェイトは小さい声で返事を返した。

「あ、あの、野d……じゃなくてフェニックスさん……」

「高町、この子に魔力供給する必要はない」

「えっ!?!」

「俺が変わりにこの子の魔力を回復させる」

カードを一枚取り出し、フェニックスドライバーに入れた。

『MIC Souders THE 13TH!』

「こい、マイクサウンダース13世!」

「マイク?……「イツツヤホオオオオ!!!」……っえ?」

フェニックスドライバーの引き金を引きた後、何処からか叫び声が聞こえてきた。

「な、何？」

突然のことにフェイトも驚き声が聞こえてきた方を向いた。

カードを発動させたことで超AIとGSライドが覚醒し目覚めた「勇者王ガオガイガー」に登場するGGGの勇者ロボ「マイクサウンドース13世」がやってきた。

「イエイエイ！Hello everybody！Nice to meet you！！」

「「「「「「「「「「「」

マイクのハイテンションについていけず、皆啞然としていた。

「マイク、はしゃぐのはそれぐらいにしておけ」

ちょっとはしゃぎすぎているマイクに俺は注意をした。

「OH！Mr・フェニックス！！マイクを呼んでくれて本当に嬉しいだもんねえ〜！！ありがとっだもんねえ〜！！」

本当にテンションが高いな。

「嬉しいのは分かった。それよりも仕事だ、マイク」

「オツケー！マイク、頑張るもんねえ〜」

「この子の力をディスクSPで回復させてやってほしいんだ」

「お安い御用だもんね！」

仕事を頼むとマイクは嬉しそうに答えた。

「よしマイク、システムチェンジだ！」

「システムチェンジ！！！」

俺がシステムチェンジの指示を出すとマイクはすぐにシステムチェンジを始めた。

マイクは標準装備である飛行ユニット「バリバリン」から飛び出し、基本形態であるコスモロボ形態から姿を変えていく。

「バリバリン、ターンオーバー！スタジオ7！」

バリバリンが上下反転し、サウンドウェーブ増幅装置として機能する「スタジオ7」に変わる。

「マイク、サウンツダース、13世！！！」

コスモロボ形態から戦闘形態のブームロボ形態に姿を変えた。

「イエエエイツ！ギラギラーンVV！」

ブームロボ形態になったマイクがスタジオ7をサーフィンのように乗り回し、スタジオ7からエレキギターとミュージックキーボードが融合したサウンドツール「ギラギラーンVV」が飛び出す。

「最強だっぜ！」

決め台詞をいい、スタジオ7から無数のスポットライトがマイクとマイクの周りを照らした。

「早速いくつぜー！」

ブームロボ形態になったマイクは早速ディスクPを取り出そうとした。

「ああ、頼むぞ「お待ち下さい」・・・？」

「What?」

俺もマイクに頼もうとした時にアポロンに止められた。

「普通のディスクPでは意味がありません。これを使って下さい」「ブオン！」

カードケースから一枚のカードが飛び出した。そのカードにはなのはのシルエットが写った一枚のピンク色のディスクが描かれていた。

「これは？」

「魔導師用に改良したディスクP。ディスクPプラスです」

用意がいいな、こいつは。

「サンキュー、アポロン！」

俺はフェニックスドライバーにアタックライドのカードを入れた。

『ATTACK RIDE! DISC P PLUS!』

「さあマイク、ライブの始まりだ！頼むぞ！」

「OKだっぜ！カモン！ロックンロール！」

スタジオ7からディスクが一枚飛び出した。

「ディスクPプラス、セットオン！」

マイクが自分の胸にディスクを入れる。

「ドカドカーンV！」

スタジオ7からマイクロフォン型サウンドツール「ドカドカーンV」が飛び出し、マイクが手に取ると演奏が始まった。

「~~~~~」

マイクは普通のディスクPと同じ曲「Power Of Desire」を歌う。

「あっ」

「これは・・・」

「な、なんだいこれ？」

「この歌を聴いてると・・・なんだか魔力が沸きあがってる来る気がする」

ディスクPプラスから流れるサウンドはディスクPがGSライドやジュエルジェネレーターのパワーを活性化させるのと同じようになるのは達魔導師のリンカーコアを急速に活性化させるエネルギーウェーブを放っているのだ。

>Power Charge<

フェイトの魔力が回復し、バルディッシュから再び魔力刃が展開された。

「イエエエエエイ！！最高だツゼ！」

「ご苦労さん」

「ノープロブレムだツゼ！」

「これで大丈夫だけど、どうだ？」

「は、はい。ありがとう・・・」

「お礼はいい。その代わりにちょっと頼みがある」

「なんですか？」

「そこにいる高町と協力してジュエルシードを封印してくれないか？」

「「え？」」

「俺が封印出来るのはあの結晶体の状態じゃないと無理だ。でもお前達なら出来る」

俺がなのはとフェイトの方を向いていると後ろから雷が襲ってきた。

「フェニックスさん、危ない！」

「ティガオフォー！ヴァアアアンツレイ！」

ユーノが叫んだ後、突然叫び声が聞こえ、別のところから雷が放たれ、俺を襲ってきた雷を打ち消した。

「え？」

「今のは?!」

「今回も本当にいいタイミングだな、雷龍！」

俺が雷が放たれた方向を見るとそこには雷龍がいた。

「へっ、まあな！隊長、雷は俺に任せてくれ！」

「あれはこの前の黄色いロボット！」

「あいつだけじゃない」

そういった後、陸の方から何か放たれ陸側に一番近い竜巻に命中した。

すると竜巻が見る見ると氷り、竜巻が止まった。

「か、海水がいきなり氷った?!」

「流石だな、氷竜!」

ユーノは驚き、俺は陸の方を向きながら通信で相手を誉めた。

海鳴市 沿岸部

沿岸部にはロボット形態の氷竜が片足をついた状態でフリージングライフルを構えていた。

「ありがとうございます隊長。しかし、射程距離ギリギリなので残り5つの内、狙えるのはあと2つだけです!」

海面上空

「十分だ。俺とウィンドもサポートする。おい、その1人と1匹!」

「は、はい!」

「な、なんだい!」

俺が氷竜に返事を返し、ユーノとアルフを呼ぶといきなり呼ばれたのでユーノとアルフは驚いていた。

「ボーっとして暇なんてないぞ!お前らも高町とフェイトの封印のサポートをしてやれ!」

「は、はい！」

「お、おう！」

ユーノとアルフは戸惑いながらもバインドを放ち、竜巻を止める。

「ウインド、雷龍！」

「了解だ！」

「了解！」

トルギス？は竜巻にメガキャノンを放ち、雷龍はヴァンレイを雷にぶつける。

「で、どうする？フェイト・テストロッサ」

「えっ？」

「協力するのか？しないのか？」

「わ、私は……」

俺がフェイトに協力するのか尋ねるとフェイトはどうするべきか迷っていた。

「高町、お前はどうしたい？」

「ふえ？」

今度はなのはに質問をした。

「お前はフェイトに手伝って欲しいか？」

「あつ！う、うん！」

俺の質問になのはは迷わず頷いた。

「だったらちゃんと頼め」

「うん。フェイトちゃん！」

「あつ……」

なのはがフェイトを呼ぶとフェイトはなのはを見た。

「お願い、手伝って。ジュエルシールドを止めよう！」

「……」

なのははフェイトに頼み、頼まれたフェイトは黙っていた。

「ユーノ君やアルフさんやロボットさん達が止めてくれている。だから今の内に！2人でせーので一気に封印！」

> Shooting Mode <

そういつて高町は原作通りフェイトから離れ、上上がり、レイジングハートはシューティングモードに変わった。

> Sealing form・Set up<

「バルディッシュ……？」

なのはをただ見ていたフェイトは相棒のバルディッシュが勝手にシリリングフォームになったことに少し驚いていた。どうやらバルディッシュの方は理解出来ているようだ。

「君の相棒は協力した方がいいと思ってるみたいだぞ？」

「バルディッシュ……」

フェイトはバルディッシュを見つめ、なのはの方を見た。なのははフェイトが見るとウィンクをし、デイバインバスターの発射体勢に入った。

「デイバインバスター、フルパワー。いけるね？」

> All right・my master<

なのはの間に冷静に答えるレイジングハート。

そして、なのはのピンク色の魔方陣が大きく広がる。

それに続きフェイトも黄色い魔方陣を展開し、攻撃体勢に入った。

「せーの！」

「サンダー……！」

「デイバイイイン……！」

なのはの掛け声とともに2人は魔力を蓄積していき……

「レイジー!!」

「バスター!!」

フェイトのサンダーレイジ、なのはのデイベインバスターが放たれた。

「ウインド、マイク、雷龍、氷竜！衝撃に備えろ！」

「……了解（だっぜ）!!!!」

俺がツールギス？達に警告して僅か6秒後、フェイトとなのはの凄まじい攻撃によって衝撃波が襲い掛かってきた。

「くっ！」

「むっ！」

「OH！凄い衝撃だっぜ！」

「うおおっ！こりゃあ凄いぜ！」

俺とツールギス？が衝撃に耐える中、マイクと雷龍は衝撃の感想を述べていた。

やがて衝撃が収まってきた。

「ふう、全員無事か？」

「なんとかな」

「ノープロブレムだっぜ！」

「俺も大丈夫だ」

『私も大丈夫でしたが、凄まじい威力ですね。これほど離れている陸でもかなりの衝撃波が来ました』

本当に実際に見ると本当に迫力もあるし唾然となるな。

「ジュエルシード、6個全ての封印を確認」

「流石だな。ん？」

俺はふとなのはとフェイトを見ると二人の間に封印された6個のジュエルシードが現れ、なのはとフェイトは無言のまま互いを見ていた。  
そして

「友達になりたいんだ」

「あっ……」

あのTV版、劇場版でも有名なシーンの台詞を言った。  
見ていた俺は少し感動していた。  
しかし感動をしていられたのはほんの少しだけだった。

(……そろそろだな)

この有名なシーンの後を覚えている俺はカードケースからカードを取り出し、いつでもドライバーに入れられるように構えた。そして次元空間にいる彼らからの連絡が来るのを待っていた。

次元空間、アースラ船外

そこには2体のMSがいた。

1体は頭部の黄色いV字のアンテナで眼を覆い、額からカメラを露出させた状態でスナイパーライフルを前方に向けている緑と白のガンダム。

以前フェイトが素手でジュエルシールドを回収しようとした時にフェイトの進行を妨害したMS「ガンダムデユナメス」だった。

もう1体は左膝をついた状態でアースラの船外上で待機していた。

その機体は全身が青色のボディに両肩に大型のセンサーシールドを装備したMS「GN Y - 002 F ガンダムサダルスード TYPE E F」

ガンダムサダルスード TYPE F

「機動戦士ガンダム00」の外伝「ガンダム00F」に登場するMS。

元はソレスタルビーイングが武力介入を始める15年前に開発された第二世代型ガンダムの2号機「GN Y - 002 ガンダムサダルスード」。

エクシア達第三世代型ガンダムが完成し、武力介入を始めてからはソレスタルビーイングのサポートチーム「フェレシユテ」が運用し、それに伴い改修が行われ現在の姿になった。

改修前のサダルスードは左肩のみにセンサーシールドが装備されていたが改修後は右肩にも装備され防衛力が強化された。

この機体は主にフェレシユテ所属のガンダムマイスターであり、ガンダム00Fの主人公「フォン・スパーク」またはイノベイドであ

り、後にフェレシユテを脱走したフォンの代わりにフェレシユテの新たなガンダムマイスターとなったガンダム00Fのもう1人の主人公「ヒクサー・フェルミ」に使用された。

「……………！」

デユナメスが高精度ガンカメラを展開した状態で前方にGNスナイパーライフルを構えていると遠くで光が見えた。

「見えたぜ！」

「了解。フェニックスに情報を送るよ」

デユナメスが光を確認すると膝をついて待機していたサダルスードFは地上にいるフェニックスに情報を送った。（ちなみに今回の疑似人格は『ヒクサー・フェルミ』に設定している）

811

地球 海鳴海上

「マスター、サダルスードからです！」

アポロンが次元空間にいるアースラの船外で待機させていたサダルスードから情報を受け取るとすぐに俺に伝えてきた。

「来たか！」

アポロンから報告を聞くと用意していたカードをフェニックスドライバーに入れた。

『BRAVE RIDE!』

「変身っ!」

『GAIGAR!』

「ガイガー!」

引き金を引き、俺は人間サイズのガイガーに変身した。

「えっ?」

「どうしたんですかフェニックスさん?」

「ガオーマシン!」

突然のことに驚くのはとユーノを無視し、ガオーマシンを呼んだ。現れたガオーマシンはやはりサイズが小さくなっている。

『ATTACK RIDE! FINAL FUSION!』

「プログラムドライブ承認」

「ファイナル、フュージョオオオオン!」

ファイナルフュージョンを発動させ、緑の奔流を放ちドリルガオー、ステルスガオー、ライナーガオーが入り合体を始めていく。そして頭部に追加装甲が装着され、額にGストーンが浮かんできた。

「ガオ！ガイ！ガー！！！」

ガオガイガーにファイナルフュージョン完了とほぼ同時に海に紫色の雷が落ちた。

「あつ、母さん・・・？」

当然雷が落ち、それが自分の母であることが分かったフェイトは怯えている。

フェイトが怯える中、俺はすぐにフェイトの真上に移動し、次のカードをドライバーに入れた。

『ATTACK RIDE！ PROTECT SHADE！』

「プロテクト、シエエエッド！！！」

左腕を出し、左拳部から空間湾曲防護壁「プロテクトシールド」を発動させた。

「ぐううううっ！！！」

プロテクトシールドで雷を受け止めた。

「フェ、フェニックス！？」

「何ポーっとしてる！早く離れる！」

「あつ・・・」

「早く！！！」

「……………」

フェイトは一瞬戸惑ったが小さく頷き、離れた。

「このまま……………」

「警告！2時の方角から敵機接近中！」

「何！？」

雷を防ぎきようとした時、アポロンが警告を出した。  
俺は警告通り2時の方角を見た。

「あれは！」

「エアリーズにトールラスだと！？」

2時の方角から向って来たのは「新機動戦記ガンダムW」に登場するMS「OZ-07AMS エアリーズ」と「OZ-12SMS トールラス」だった。

エアリーズ

おひつじ座が由来のOZの主力空戦用量産型MS。  
背中に大型のフライトユニットを装備し、両脚を収納する簡易変形機構を持っている。

カラーリングはOZ一般機仕様である黒色だ。

トールラス

おうし座が由来のエアリーズに変わる可変MS。

高速移動用の航空機形態に変形し、大気圏内だけでなく宇宙空間でも戦闘が可能と汎用性が高い機体となっている。

カラーリングはエアリーズ同様OZ正規軍仕様の黒色だった。

「何故こんなところに！つてうお！」

こちらに向ってくるエアリーズ、トールラスはいきなり無警告で攻撃をしてきた。

「敵のスキャン完了。生体反応なし。あれはモビルドールです」

モビルドール

ガンダムWで登場した自立可動が可能なMSでまた自立可動のほかにも外部からの遠隔操作も可能な無人のMS。(以降 MD)

敵の数はMDエアリーズ、MDトールラスを合わせて約40機はいた。

「ちっ！厄介な。ウインド、雷龍、応戦しろ！敵は無人だ、遠慮なくやれ！」

「了解！」

俺は動くことが出来ないためトルギス？と雷龍に指示を出すとして体はMDエアリーズ、MDトールラスの撃破に向かい、交戦を始めた。

「マスター、アルフが！」

「！」

今度はアルフの方を見るとアルフがジュエルシールドを奪いに行つて

いた。

「次から次へと！アポロン！」

俺はカードをドライバーに入れカードの発動をアポロンに任せた。アルフ達には悪いが流石にここは妨害しておかないとクロノとかに色々うるさく言われそうだから妨害するか。

『ATTACK RIDE！BROKEN MAGNUM！』

アポロンがカードを発動させると俺の右腕がゆっくりと回り始め、だんだんと速度が上がっていった。

「うおおおお！ブrouクン、マグナムッ！」

右前腕部を高速回転させて飛ばすガオガイガーの主力戦闘のロケットパンチ「ブrouクンマグナム」がアルフに向かって飛んでいく。

「くっ！」

アルフが飛んできたブrouクンマグナムを回避した。しかし・・・

「ん？ポオツ！」

「「あ！」」

ジュエルシードの前にクロノが現れ、アルフが回避したブrouクンマグナムがクロノの腹部にヒットした。

「やっべー！」

「まあ、いきなり転移してきた彼にも非はありません」

戻ってきたブラウクンマグナムを装着し直していると再びアルフがジュエルシードを回収しようとした

「！3つしかない！！！」

しかし6個あったはずのジュエルシードは3つしか残ってなかった。クロノの方を見ると彼の手にジュエルシードが3つ握られていた。

「くっくっくっくっく！！！」

それを見たアルフは悔しそうに唸っている。

「どつやら飛ばされながらもクロノ執務官が回収したようですね」

「頑張るなあ……」「フェニックス！！」「……っ！！！」

俺がジュエルシードやクロノに気を取られていると突然トールギス？と雷龍に呼ばれ、すぐに視線を向けた。

視線を向けるとMDEアリーズから発射されたミサイルが3発程、プロテクトシールドを展開していた左腕に命中した。

「しまった！」

ミサイルが命中したことで左腕に異常が発生したのかプロテクトシールドが段々押されてきた。

「!!!」

踏ん張ろうとするがプロテクトシールドの出力が上がらず、そして・

・・・

「!!!うわああああっ!」

「マスター!!!」

プロテクトシールドが破られ、雷が命中した。

「野田君!!!」

「えっ?」

高町が俺の名前を呼んだ後、雷でダメージを受けたことでガオガイガー、フェニックス、オールライドが解除されてしまった。

「そんな・・・嘘だろ?」

「健・・・悟?」

全ての変身が解除され、俺の姿を見たアルフとフェイトが驚いていた。

ガオガイガーが解除されたことで空中にいることを維持出来なくなった俺は真つ逆さまに落ちて行った。

「健悟!」

「隊長!！」

「危ないだつぜ！」

フェイト、トールギス?、雷龍が叫び、落下していく俺をマイクが受け止めてくれた。

「大丈夫か？」

「隊長!しっかりしろ！」

「健悟！」

「いっつつつつ。ああ、大丈夫だトールギス?、雷龍、マイク」

俺を心配してくれているトールギス?、雷龍、マイクに返事を返した。

周りを見ると先程までいたMDエアリーズ、MDトールラスがいなくなっており、またフェイトとアルフ、残り3つのジュエルシールドも消えていた。

「エアリーズとトールラスは？」

「殲滅した。しかしすまない」

「俺達が不甲斐ないばかりに・・・」

「気にするな。フェイトとジュエルシールドは？」

「逃げられたようだ」

トールギス？達が返事を返す前に腹部を押さえたクロノが俺の問いに答えた。

「そうか・・・」

そういつて俺は雨が降る中、雲の隙間から太陽の光が差し込む空を見上げた。

「マスター、アースラからです」

「繋げ」

「ラージャ」

アポロンがアースラとの通信を繋いだ。

『健悟君、大丈夫？』

「ええ、なんとか」

『そう。なら4人とも、戻ってきて』

「了解です」

『で、なのはさんとユーノくんには私直々のお叱りタイムです』

リンディとの通信のあとトールギス？はカードに戻り、俺とクロノ、なのは、ユーノはアースラに戻り、マイク、雷龍、そして陸にいた

氷竜も俺がアースラに戻った後すぐに撤退した。

## 第二十一話 海上での戦い (後書き)

ARX-7アーバレスト 「さあ！今回も無事に投稿完了！」

健悟 「ちよつと時間かかりすぎてないか？」

アポロン 「確かにそうですね」

ARX-7アーバレスト 「9月は1話しか投稿出来なかったから反省してる。いやあ、最近ゲームにハマっててそっちの方をやってたから」

健悟 「へえ。つか小説を優先しろよ。ちなみになんのゲーム？」

ARX-7アーバレスト 「『真剣で私に恋しなさい！』っだ」

健悟 「ああ、あれか。……つてR18物かよ！」

アポロン 「そのようですね」

ARX-7アーバレスト 「いや、面白いよなああのゲーム。ネタも色々あるし。アニメ放送が楽しみでしかだがない！次回作の『真剣で私に恋しなさい！S』も攻略キャラが増えたから早く購入してプレイしたぜ！」

健悟 「おいおい、なんか今回の話の内容と全く関係のない話……」

アポロン 「ちなみに一番好きなキャラは誰なんですか？」

健悟「おい！なんでお前質問してんの？！」

ARX-7アーバレスト「一番好きなキャラ？それは5人のヒロインの中で？」

アポロン「では最初はそれで」

健悟「最初って何！？」

ARX-7アーバレスト「ヒロイン5人の中なら百代姉さんが一番だなあ〜」

アポロン「5人のヒロインに順位をつけたら？」

健悟「お前なんで今日はそんなにノってるの！！？」

ARX-7アーバレスト「1位が百代、2位が一子、3位が京でクリスとまゆっちは同列の4位だな」

アポロン「ではヒロイン以外も含めるとベスト5は誰ですか？」

健悟「なんかツツコムの疲れてきた」

ARX-7アーバレスト「それでも1位は百代が確定だな。2位は辰子とマルギツテが同列で4位が一子で5位が京」

アポロン「やはり人気の高いキャラが好きですね」

ARX-7アーバレスト「言われてみたらそうだな」



健悟「そんなんいたの?!」

ARX-7アーバレスト「ではどうぞ!」

キバットバット三世「いやあ、どうもどうも!読者の皆さんこんにちは、またはこんばんは!俺様はキバットバット三世だ!」

健悟「おお!キバットバット三世だ!杉田ボイスだ!」

ARX-7アーバレスト「今回の次回予告ゲストは『仮面ライダーキバ』でお馴染みのキバットバット三世に来てもらいました!」

パチパチパチパチ(拍手)

健悟「キバットが来たってことは……今回はキバ風?」

ARX-7アーバレスト「その通りだ!では早速だけどキバット、お願い出来る?」

キバットバット三世「おう!キバっていくぜ!」

健悟「名台詞だ!」

ARX-7アーバレスト「では次回予告だ!アポロン、BGM!」

アポロン「ラージャ」

BGM「BREAK THE CHAIN」

健悟「キバのOPのカラオケバージョンだな」

ARX-7アーバレスト「次回、『少年が望んだ世界と力』は  
」

リンディ「指示や命令を守るのは個人のみならず集団を守るための  
ルールです」

クロノ「何故あの子は君の名前を知っていた？」

リンディ「一時帰宅を許可します」

アリサ「やつぱり大型犬・・・」

キバット「やつと俺様の出番だぜ！ガブツ！」

健悟「変身！」

『第二十二話 アルフ』

キバットバット三世「ウェイクアップ！運命さだめの鎖を解き放て！！」

ARX-7アーバレスト「はいOK！」

健悟「おお、いい感じだな」

キバットバット三世「決まったぜ！」

アポロン「みなさまのご意見とご感想をお待ちしています」

ARX-7アーバレスト「今度マジ恋の百代だそうかなあ」

健悟「最後の最後で何言ってるの!？」

キバットバット三世「次回は俺様も活躍するぜ！」

ARX-7アーバレスト「次回もお楽しみに!!」

第二十二話 アルフ（前書き）

キバットバット三世「少年が望んだ世界と力、キバって行くぜ！」

## 第二十二話 アルフ

「指示や命令を守るのは個人のみならず集団を守るためのルールです」

なのはとユーノが命令違反をしたため、現在リンディにお説教されている。

そして俺は何故か呼ばれ、今はなのはとユーノがお説教されているを見ている。

「勝手な判断や行動が貴方達だけでなく周囲の人達をもしれないとゆうこと、それは分かりますね？」

「はい・・・」

なのはとユーノが元気がない返事を返す。

「本来なら厳罰に処すところですが結果としていくつか得るところがありました。よって今回のことについては不問とします」

「あ・・・」

「但し、二度目はありませんよ。いいですね？」

「はい」

「すみませんでした」

「さて、問題はこれからね。クロノ、事件の大本についてなにか心

「当たり前？」

「はい。エイミィ、モニターに」

『はいはい』

クロノの指示で通信室にいるエイミィがモニターにデータを送ってきた。

そこにはフェイトの母「プレシア・テストロッサ」が映し出された。

「あらあー！」

「そう。僕らと同じミッドチルダ出身の魔導師、プレシア・テストロッサ」

クロノがリンディ、なのは、ユーノにプレシア・テストロッサの説明をしていく。

プレシアについてもある程度は覚えていたのでこの時俺は庭園戦でどの様に戦うかを考えていた。

「エイミィ！プレシア女史についてももう少し詳しいデータを出せる？放逐後の足取り、家族関係、その他なんでも」

『はいはい。すぐ探します』

リンディはエイミィに指示をだし、エイミィは再びデータを探しにかかった。

数分後、エイミーが詳細なデータを持って会議室に現れ、現在報告中。

「プレシア女史もフェイトちゃんもあれだけの魔力を放出した直後ではそうそう動きはとれないでしょ。その間にアースラのシールド強化もしないといけないし」

エイミーからの報告を聞いたリンディはフェイト達が直ぐには行動しないと推測する。

「貴方達は一休みしておいたほうがいいわね」

「あ、でも・・・」

「特になのはさんと健悟君はあまり長く休みつばなしでも良くないでしょ。一時帰宅を許可します。ご家族と学校に少し顔を見せておいたほうがいいわ」

「はい」

「じゃあ、部屋に戻って仕度するか」

俺は一時帰宅の準備をするために部屋に戻ろうとした。

「ちょっと待ってもらおう」

「ん？」

戻ろうとした時、俺はクロノに呼び止められた。

「君はまだ残ってもらおう」

「何故だ？」

「君に聞きたいことがある」

「……なんだかめんどろなことになるそうだな。」

「聞きたいことってなんだ？勝手に出撃したことか？言っておくが高町達と同じ命令違反についてなら俺は契約上独自行動が許されているから問題ないはずだが？」

「そのことじゃない」

「ん？」

「違うのか？」

「じゃああれか？さっきブロウクンマグナムを当てたことか？それについては悪かった」

「それもあるが今は違う」

「これも違う？」

「じゃあなんだ？」

「何故あの子は君の名前を知っていた？」

「！」

このクロ助め！  
本当にめんどろな質問しやがって！

「なんのことだ？」

「とぼけても無駄だ！君が海に落ちそうになった時、あの子が君の名前を呼んでいるのを僕は聞いた！」

「気のせいじゃないのか？」

俺は説明すると色々言われそうなのでなんとか誤魔化そうとした。

「君達はとうだった？」

クロノはあの場にいたなのはとユーノに訊いた。

「えっと、実は私も聞こえたんだ。野田君が落ちそうになった時にフェイトちゃんが健悟って呼ぶのを」

「僕も・・・」

「それでもまだ誤魔化すつもりか？」

あの場にいたなのはとユーノが証人になった。  
それにクロノだけでなくリンディやエイミィに証人になったのはとユーノも訊きたそうだ。

これでは誤魔化すのは不可能だな。

「ちっ、分かったよ。話すよ」

誤魔化すことが不可能なので話すことにした。

「俺はフェイト・テストロツサとその使い魔のアルフと小規模次元震が起こる前日にたまたま町で出会い、俺の家で食事を一緒にした」

「何!?!」

「「えっ!」「」

「あらあ」

「あらら」

上からクロノ、なのは、ユーノ、リンディ、エイミィがそれぞれの反応をした。

「何故黙っていた!」

予想通り、クロノに怒鳴られた。

「正直これはプライベートなことだから喋りたくなかったからだ」

「そんなのが許されると思ってるのか!?!」

そう言われると思ったから言いたくなかったんだよ。

「はいはい。今度からは気をつけるよ」

とりあえずクロノには適当に返事を返した。

「ではあの子を助けたのも罪を軽くするように要求したのもジュエルシードを渡しのもそれが理由か!!」

「それは違うな。ジュエルシードを渡したり助けたのは本当にただの気まぐれ、そして罪を軽くするように要求したのは前に言ったようにあの子には何か特別な事情があるような気がするからだ」

「信用出来るか!」

「ちなみに俺はフェイト達にライダーであることは話してないぞ? 今日正体を知られた」

「そうなの?」

「基本的にライダーに関する情報は極秘レベルSSSクラストリプルSです。ですからそう簡単に教える訳にはいきません。それに敵対している者なら尚更です」

「……そう本来なら極秘レベルSSSクラスの情報なのに最近ではアリサにすずか、恭也さん、美由希さん、忍さんに軽々と教えてんだよなあ。」

もう極秘もなにもないな。

「つまりフェイトちゃんが敵であることを知っていたのは健悟君だけでフェイトちゃんは今の姿の健悟君がフェニックスであったこと、またはフェニックスが健悟君であったことを知らなかったのね?」

「はい。皆の前で変身を解除したことがありますがああ時はオールドライブを使っていたので」

「皆の前ってことはクロノ君と出会った時だよな？」

「おう。それに食事をしたのはその一回だけだ。それ以来は戦場でしか会っていない」

「・・・そう」

「まあ、俺も黙ってたのは悪かったですし謝らせてもらいます。すいませんでしたリンディ提督」

そういつて俺はリンディに頭を下げた。

「・・・本当なら色々言いたいけれどなのはさんやユーノ君と同じ様にいくつか得るところもあつたことだし、今回は不問とします。でも・・・」

「二度目はない・・・ですね？」

「ええ」

「了解しました」

「か、艦長！よろしいのですか?!」

「クロノ執務官、貴方の言いたいことは分かるわ。でも彼の行動のおかげでなのはさん達のジュエルシードの封印がやり易くなったのも事実よ。まあ、回収の時は貴方が酷い目にあつたけど」

「それはそうですが」

「彼も次からは気をつけると言ってるし、信じてあげましょう」

「わ、分かりました」

クロノは前回の交渉の時と同じように若干納得出来ないままリンデイの指示に従った。

「じゃあ俺は部屋に戻ります」

「あつ！ごめん健悟君。私からも聞きたいことがいくつもあるんだけどいいかな？」

俺が部屋に戻ろうとした時にエイミイに呼び止められた。

まあ質問されることは予想は出来ていたが。

「ええ、どうぞ」

「僕の時と随分態度が違うな」

「気のせいだ。それでエイミイさん、聞きたいことは？」

クロノの質問を軽く流し、エイミイに質問の内容を聞いた。

「うん。フェイトちゃんを助けに行った時に変身したあのロボット、ブラックサレナだっけ？あれってなんなの？MSやASとも違うの？」

ほぼ予想通りの質問内容がきた。

「ええ、違います。あれは別の世界で開発された局地対応型の人型

機動兵器『エステバリス』と呼ばれる機体の一体で本来の大きさ6メートル程です」

「へえ」

「局地対応型って？」

「あらゆる場所で戦えるってことだよなのは」

局地対応型の意味を知らなかったのはに答えようとしたが先にユニノがなのはの質問に答えた。

「じゃあ次にあのブラックサレナになった時に使った転移魔法みたいなのはなんなの？」

「あれはボソソジャンプと呼ばれるものです」

「ソソソソボソソジャンプ？」「」「」「」

「まあ簡単に言えば一種の瞬間移動のようなものなので転移魔法と同じようなものです」

俺自身もボソソジャンプについてはあまりよくは覚えていないので大雑把に説明した。

「魔法以外での転移が出来るなんて」

「ほんと、色々な世界があるのね」

「ちなみにボソソジャンプをする時に発生したあの反応は？」

「あれはボソン粒子反応と呼ばれるものでボソンジャンプする時、または目的地に出現する時に発生します」

「へえ」

「ただし、ボソンジャンプは誰でも出来るという訳でなくある特定の人でなければボソンジャンプをすることは出来ません。一般の人達がボソンジャンプをする際はディストーションフィールドと呼ばれるバリアのようなものを使用すれば可能です。しかし戦艦クラスが発生させるものですが」

「なんだかディストーションフィールドって私達のディストーションフィールドとなんだか名前が似てるわね？」

「で、次の質問なんだけどなんで健悟君はあんなに早く攻撃がくることが分かったの？それに攻撃を防いだ時の姿って確かクロノ君が到着する前にジュエルシード回収する時に乗ってた黒いロボットと同じだったよね？あのロボットって一体なんなの？あと他のロボット達も」

「攻撃がくることが早く分かったのは俺がアースラに来た時にアースラの船外に監視役としてMS2機を配備していたのでそいつらから報告を受けてすぐに防御をすることが出来ました」

「へえ」。でもなんで監視役のMSを？」

「いざって時のためです。その結果今回のように素早く対応することが出来ました。次にあの黒いロボットですがあのロボットは最初のライオン型のロボットとサポートマシンが合体して誕生するGス

トーンを持つ勇者王、ガオガイガーです」

「……………はい？」

何故か全員がポカンとなった状態になった。

「勇者です」

大事なことなので2回言いました。

「ゆ、勇者？」

「はい、勇者です。ちなみにさっきの黄色いロボットと青いロボット、歌を歌っていたロボット達もガオガイガーと同じ勇者、勇者ロボットです」

「えーっとどういうこと？」

イマイチ理解出来ないエイミーが再び聞いてくる。

「彼らの動力源、Gストーンは持つ者の命の力『勇氣』に反応することで莫大なエネルギーを生み出す命の宝石。Gストーンを持つ者それが勇者です。まあこれは一部であり他の世界にも勇者と呼ばれるロボット達はいます」

「人の命の力、勇氣をエネルギーに変える命の宝石ねえ」

「なんだか信じられないな」

「では、説明も済んだので部屋に戻らせてもらいます」

説明が済んだので俺は今度こそ部屋に戻るうとした。

「ちょっと待ってくれる？」

今度はリンディに止められた。

「今度はなんですか？」

「ごめんなさい。これが最後の質問だから、さっきの戦闘で現れた航空部隊は一体なんだったの？」

「あの機体は眼の部分がゴーグル型だったのが型式番号OZ-07AMS エアリーズ、もう一体が型式番号OZ-12SMS トーラスと呼ばれるMSで前に戦ったMSとは別の世界のMSです。高町は覚えているだろうけど、前にお前が戦ったウイングガンダムと同じ世界のMSなんだ」

「ウイングさんと？」

「おう。まああのトールラスの場合正式な型式番号はOZ-01MDでしょうけど」

「なんで分かるの？それにどうして同じ機体なのに型式番号が違うの？」

エイミーが型式番号の違いについて質問してきた。これに関しては俺も不思議に思う。

なんでわざわざ型式番号を変更するんだろうか？

「あの戦闘中にアポロンが敵をスキャンした結果モビルドールであることが判明したからです」

「モビルドールとはなんだ？」

「簡単に言えば無人のMSのことです。パイロットを必要とせず、与えられたプログラムに従って戦う、まさに人形ですよ」

「だからあの時、健悟君はあの黄色のロボットやもう一体のMSに全力で戦わせてたのね？」

「ええ、無人機なら遠慮なんてしてられませんから。では今度こそ部屋に戻らせてもらいます」

「ええ、分かったわ。ありがとう」

「それでは」

そういつて俺は会議室を出て部屋に戻った。

????Slide

とある平行世界。

その世界のとある場所に建てられたビルの会議室で小規模次元震が起きた時、ビルの屋上でなのは達を見ていた人物達が集まっていた。

「どうやらロストロギア、ジュエルシードは全て回収されてしまったようだな」

「そのようすな。あれがあれば強力な機体を作ることが出来たというのに」

1人の男がそういうと別の男が答えた。

「全く、なにがMDだ。回収して帰ってくるどころか全滅とは、全く当てにならないか！」

今回の作戦でMDがジュエルシートを回収出来なかったことに対して丸型のゴーグルをかけ、軍服を着た大柄の男が文句を言った。

「貴様、私のMDを馬鹿にするのか!？」

その男に対しMDを開発した人物がMDを馬鹿にされて怒った。

「ふん！本当のことを言ったただけだろうが！」

「なんだと！貴様らティターズ部隊は一度も戦闘に参加していないくせによくも偉そうな口が言えるな！」

「ああゝもう、煩いなあゝ。少し静かにしてくれませんか？」

2人の男が言い争っていると青年が割り込んできた。

「どっちもたいした結果を残してないのにくだらないうことで揉めるのは止めてくれませんか？」

「ガキは黙っている！」

「そこにいる貴様の部下もたいした結果を残していないではないか

「！」

青年にそう言われると大柄の男は怒鳴り、M Dの開発者はこの場にいた青年の部下であり、野田健悟と戦った霧夜エリカ（以降 姫）と鮫永新一（以降 フカヒレ）を見る。

「何言ってるのよ！あんだ達よりはよっぽど働いてるし、何度か追いつめた時もあったわ！」

「そつだそつだ！」

「でも、結果的には負けて帰ってきたよね？」

「くっ！」

姫とフカヒレが言い返すと今度は黄緑色の髪の男が割り込んだ

「最初は400人近いライオトルーパーやMS、ASを連れて行ったのにMSとAS部隊は全滅、400人いたライオトルーパーは67人にまで減らされ貴方達は逃げ延び、しかもミスタ・Feに助けられた」

「それに二度目はあんただけでなくグロンギとロードにも協力させたのにも関わらず、ライダーに変身したのが初めての民間人に戦闘能力の高いオルフェノク達をオクトパスオルフェノクを除く全員を倒されるなんて失態よねえ？やっぱり所詮は人間ってことかしら？」

黄緑色の髪の男の後ろに立っている薄紫色の男と黄緑色の男と容姿は黄緑色の男が女になったような容姿の人物が姫とフカヒレをあざ

笑った

「好き勝手言ってくれるじゃない！」

- 106 ENTER

『BURST MODE』

馬鹿にされた姫はカイザフォンを取り出しコードを入力、カイザフォンをフォンブラスターに変形させ銃口を向けた。

バンッ！

「！」

しかし姫がフォンブラスターの銃口に向けた瞬間、別の場所から銃声が聞こえ銃弾は姫の足元に着弾した。

「おっと、そのへんにしておけよお嬢ちゃん？俺様のスポンサー様を傷つけられたら困るんだよお」

銃を撃つたのは長髪に不精ヒゲを生やした男で黄緑色の男が雇った傭兵だった。

「くっ！」

「止めておきたまえ」

姫と傭兵の男がフォンブラスターと銃を向けていると銀色のオーロラが出現し、眼鏡とコート、フェルト帽を被った壮年の男が現れた。

「今は揉めている場合ではない。あの憎きフェニックスを倒すために我々は協力をしているのだからな」

「……」

眼鏡とコート、フェルト帽を被った壮年の男にそう言われると最初に姫がフォンブラスターを下ろしカイザフォンに戻し、傭兵の男も姫がカイザフォンを仕舞うのを確認すると銃を仕舞った。

「さて諸君、突然だが仕事が入った」

「ほお、今回はどんな仕事なんだおっさん？」

銃を仕舞った傭兵が壮年の男に仕事の内容を尋ねた。

「あの黒い服の少女の狼が負傷し動けない状態にある。あの狼を捕まえてくるのだ」

「いけませんねえ。そのような狼を捕まえてどうするのですか？」

「成る程なあ。その狼を取っ捕まえて餌にし、あの小娘からジュエルシードとやらを奪うってことか」

全身が機械の男が捕獲する理由を尋ねると別の男が答えを出した。

「その通りだミスタ・Fe」

壮年の男が答えを言ったコードネーム「ミスタ・Fe」と呼ばれ、以前アースラでフェニックスを苦しめた男、ガウルンを見る。

「今は任務中じゃないんだ。コードネームでなくてもいいんだぜ？」

「では、ミスタ・ガウルンと呼ばせてもらおう」

「ああ、それでいいぜ。それで誰がその狼を捕まえに行くんだ？」

「私としては以前仮面ライダーフェニックスを圧倒したミスタ・ガウルン、貴方に行ってもらいたいんだが？」

「行ってやりたいが俺のコダールはまだ未完成の状態なんぞな。どうせアイツを倒すなら完全な状態で倒したいからな」

「そうか。なら貴様はどうだ？ミスタ・ガウルンと同型の機体だろ？」

ガウルンに断られると壮年の男は会議室で1人棒状の10円駄菓子を食べている男に訊いた。

「確かに面白そうだが俺は狼に興味はねえよ。それにまだ俺のモミアゲが短いんでね。もう少し伸ばしてから出撃したいんだよ」

そういつて男は自分のモミアゲを掴みアピールする。

「君達はどうだ？」

今度は黄緑色の男達に訊いた。

「残念ながら僕らの機体はまだ最終調整が終わってませんので今回の出撃は不可能です」

「貴様達は？」

「私のカイザギアとフカヒレ君のデルタギアは現在メンテナンス中、後7時間は掛かるわよ」

「活動可能だったMDが全機破壊されたからな。次に活動可能の機体を用意するのに後9日は掛かる」

「こんなくだらん作戦にわしの有能な部隊を動かすつもりなどないわ！」

「いけませんねえ」。残念ながら私も今すぐとなると不可能です」

「俺に任せてもらえますか？」

次々と断られていく中、1人の男が部屋に入ってきた。

「話は聞かせてもらいましたよ。俺ならすぐに出られる。俺が必ずこの仕事を遂行してみせる」

「………いいだろう。ただしライフエネルギーは吸うなよ」

「分かっている」

壮年の男に許可をもらうとその男は銀色のオーロラを出現させ、姿を消した。

「ふう」

アースラから地球に戻り、リンディはなのはとユーノと共に高町家に行ったので俺は1人家に帰ってきた。

「約10日ぶりの家ですね」

「そうだな。アポロン、オートバジンのメンテナンスは？」

「既に開始させています」

「流石、仕事が早いな」

「恐れ入ります」

「さーっとと折角帰ってきたし今日こそはゆっくりしようかな」

前回はゆっくり出来なかったので今回こそは身体を休めようと思った。

「……！マスター、残念ながらそれは不可能なようです」

「……敵か？」

「はい」

アポロンから俺の休息を妨げる報告が入ってきた。

「全く、何処に居ようが戦う運命なのかねえ俺は。場所は？」

「データを表示します」

アポロンにデータを見せてもらおうと俺はあることを思い出した。

「この場所は……アポロン、今日は確か……」

「アルフがプレシアと戦い、負傷しアリサ様に保護される日のはずです」

「狙いはアルフか。それにこのままだとアリサも危険だな。アポロン、Gトレーラーは？」

「いつでも出動可能です」

「よし、Gトレーラー出動！あとガングルーとガンドーベルも出撃だ！」

「ラージャ」

アポロンに指示を出すと俺は現場に向うために急いで家を出た。

アリサSide

「送信つと」

10日ぶりに来たなのはからのメールに返事を返し携帯を閉じた。

「アリスお嬢様、何か良いお知らせでも？」

「別に。普通のメールよ。ん？」

鮫島の質問に普通のメールだと返し窓の外を見ると何かが見えた。

「鮫島、ちょっと止めて！」

鮫島に車を止めてもらい、すぐに車を降りて私は駆け出した。するとそこにはオレンジ色の大きな犬が怪我をして倒れていた。

「やっぱり大型犬」

「怪我をしていますな。かなり酷いようです」

「でも、まだ生きてる。鮫島！」

「心得ております」

「ちょっと待ってもらおうか」

鮫島が大型犬を運ぼうとした時、前から声が聞こえた。前を見ると男の人がゆっくり歩いてきていた。

「どちらさまでしょうか？」

「俺のことはどうでもいいんだよ。俺はその犬に用があるんだ」

鮫島がどこの誰か聞こうとしたけど男の人は無視し、怪我している大型犬を指差した。

「大人しくそいつを俺に渡しな。でないと・・・」

「「!!」」

「お前達のライフエナジーを奪うぜ？」

私達の目の前で男の人が青い馬の怪物に姿を変えた。  
その姿はこの前戦ったオルフェノクやグロンギやアンノウンとも違  
っていた。

「アリサお嬢様には手出しさせません！」

「うつせえよじじい！」

「うつ！」

鮫島が私を守ろうと私の前に立つと馬の怪物に殴り飛ばされた。

「鮫島！」

私はすぐに鮫島に駆け寄った。

「鮫島、しっかり！」

「ア、アリサ・・・おじょう・・・さ・・・ま・・・お逃げくだ  
・・・さい」

鮫島は私に逃げるように言うとそのまま気を失った。

「鮫島！」

「くくくくつ、折角だからそいつのライフエナジーをもらっておくか。安心しなお嬢ちゃん、後でお前のライフエナジーも食ってやるからよ」

馬の怪物が笑いながらゆっくり私に近づいてくる。

前回は怖がらずに怪物と戦えたけど今は違う。

あの時は健悟から仮面ライダーのベルトを借りて戦ったけど、あの後すぐに返して今の私には戦う力がない。

仮面ライダーの力がないと私はただの子ども、仮面ライダーの力を持っていて、毎回私を助けてくれる健悟は今他場所に行っていてこの町にいない。

このまま殺されるのかと思うと急に怖くなり、パパやママ、なのはとすずかを思いだし涙が出てきた。

『すずかの友達も、家族も、その周りの人達の涙もみたくない！その人達にも笑っていて欲しい！だから、その人達の笑顔を守るために、俺は怒り、そして戦う！！』

そして何故か急に以前、健悟が言っていたことが私の頭の中に響き渡った。

『俺を信じる』

「……………た……………けて……………」

震えた声が私の口から出た。

「あ?」

「助けて、健悟ー！！！」

今はいない、来るはずがない健悟の名前を目をつぶり、大声で呼んだ。

「はははは！叫んだところで誰も助けにこない……がああっ！」

馬の怪物が笑っていると突然声が途切れ、ダメージを受けた時の声を上げた。

「え？」

目を開けるとそこには赤色のカブトムシと青色のクワガタムシが私の目の前で飛んでいた。

その赤色のカブトムシと青色のクワガタムシは以前健悟の家で紹介してもらった仮面ライダーに変身させる「カブトゼクター」「ガタツクゼクター」だった。

「あ、あんた達」

ウーウーウーウーウ

「アリサ！」

「え？」

突然現れたカブトゼクターとガタツクゼクターに唾然としていて聞き覚えのあるサイレンの音が聞こえ、サイレンが止まり後ろから

名前を呼ばれ振り返った。  
振り返ると名前を呼んだ男、健悟がGトレーラーから降りてきて私に駆け寄ってきた。

「アリサ！」

俺はGトレーラーから降りるとすぐにアリサに駆け寄った。

「健悟、なんでここに？」

俺が現れたことにアリサは混乱しているようだ。

「一時帰宅したんだ。アリサ、大丈夫か？」

「く、来るのが遅いのよ！」

アリサの安全を確認するとアリサは涙を拭き、怒ってきた。

「すまんすまん。謝るから怒るな。カブトゼクター、ガタックゼクター、ありがとう」

「」

「それよりも……」

アリサに謝り、カブトゼクター、ガタックゼクターにアリサを助けてくれたことに礼を言って、怪物を見た。

「本当にいやがったな。しかもファンガイアか」

俺はアリサを襲った怪物「ファンガイア」を睨みつけた。

ファンガイア

仮面ライダーキバの世界の怪人。

人間の生命エネルギー「ライフエナジー」を糧として生きるモンスター種族の一種であり、存在する13の魔族の頂点に君臨している最強の種族とされている。

「き、貴様よくも!!」

カブトゼクターとガタツクゼクターに攻撃されたファンガイア「ホースファンガイア」が俺を睨みつけてきた。

「相手がファンガイアなら今回は私はお休みですね」

「そうだな。そして今回はあいつだな。キバットバット三世!」

「おう!」

俺が呼ぶと人間よりも知力が高いとされている蝙蝠に似た体形の小型モンスター種族「キバット族」の三代目「キバットバット三世」が現れた。

「な!キバット三世だと!?!」

キバットが現れたことにホースファンガイアは驚いている。

「はじめまして、だな?」

「ああ。改めて俺様はキバットバット三世だ！よろしくキバツていくぜ！」

「おう。俺は野田健悟だ。よろしくな」

「貴様、何者だ！」

俺とキバットが自己紹介しているとホースファンガイアが叫んだ。

「通りすがりの仮面ライダーだ、覚えておけ！！キバット！」

「俺様の出番だぜ！ガブツ！」

俺はホースファンガイアにそういうとキバットの名を呼んだ。呼ばれたキバットは俺の左手に噛み付いた。

「くっ！」

キバットが噛み付くと俺の身体に魔皇力と呼ばれる力を注入、身体に模様が浮かび腰に鎖が巻かるとキバットの止まり木となる赤いベルト「キバットベルト」が巻かれた。

「変身っ！」

キバットをキバットベルトに止めさせると身体が銀色に包まれた。銀色が弾けると俺は「仮面ライダーキバ」に変身した。

仮面ライダーキバ

変身する者が『キバの鎧』を身に纏い、ファンガイアと戦う仮面ラ

イダー。

黄色の複眼、赤と銀と黒のボディにヴァンパイアがモチーフとされている。

現在の姿のキバフォームはキバの基本フォームで素手での格闘戦中心とした戦闘スタイルを取る。

平成仮面ライダー作品の第九作「仮面ライダーキバ」の主演ライダー。

キャッチコピーは「覚醒！ウエイクアップ運命の鎖を解き放て！！」「それはバイオリンをめぐる、父と子の物語・・・」

「はあああつ」

キバに変身した俺は変身後のポーズをとる。

「健悟、その姿は？」

「今回の俺はキバ、仮面ライダーキバだ」

「キバ・・・」

アリスにライダーの名前を聞かれ答えるとアリスは名前を繰り返した。

「アリス、アポロンと一緒にGトレジャーに避難しろ」

「う、うん！」

「ご武運を、マスター」

「ガングルー、ガンドーベル、その執事さんとおおk・・・じゃ

なくて大型犬をGトレーラーの中に運んでくれ。運び終わったらお前達はそいつらを守ってくれ」

「……承知！」

「……お任せ！」

ガングルー、ガンドローベルに指示を出すとガングルー、ガンドローベルはラジオを使って返事を返し、執事さんとアルフをGトレーラーに運んだ。

「さーって。いこうか、ファンガイア！」

アリスとアルフ、執事さんがGトレーラーに避難しガングルー、ガンドローベルが外でGトレーラーの護衛に移行したのを確認し、ホースファンガイアに構えをとった。

「そうか。貴様が野田健悟か。あらゆる世界のライダーに変身する人間、通りでキバに変身出来る訳だ。はははははっ！俺は運がいい！貴様を倒し、その首を持って帰れば俺は恐らく幹部待遇だな！」

どうやら怪人達の間でも俺は人気者になってしまったようだ。

「お前の目的はあの狼だな？」

「ああ、そのはずだったが今は貴様の首をもらうのが優先だ！」

そういつてホースファンガイアは己の身体の細胞から剣を生成した。

「うおおおおっ！！」

ホースフォンガイアが俺に向って走り出し、剣で斬りかかってきた。

「よっ！ほっ！よっと！」

ホースファンガイアが連続で斬りかかってくるがアースラで9日間オートバジンと訓練していたので俺は軽々と回避していく。

「動きが単純だな。それにスピードも遅い。貴様の力はこの程度か？」

敵の攻撃はオートバジンとの格闘戦訓練と比べれば攻撃パターンが読みやすく、キレがない。

しかもオートバジンのように射撃武器を持っていない完全な格闘戦限定だから射撃を警戒しないで済むからやりやすい。

スピードの方もやはり以前訓練したナイトメアプラスよりも遅い。

「黙れえええっ！」

気に障ったらしく叫びながら剣を振り下ろしてきた。

「遅いつていつてんだろ！」

「！おっ！」

ホースファンガイアが剣を横に大降りするがしゃがんで回避し、スキだらけの腹部に拳を入れた。

「ぐっ！」

腹部を殴られ、ホースファンガイアが後ろに下がると俺はキバットベルトの左側から「フェッスル」を取り出した。

「キバット、いくぞ！」

「おう！」

取り出したフェッスルをキバットに銜えさせた。

「ガルルセイバー！！」

キバットが呼びながら青色のフェッスル「ガルルフエッスル」を発動させ、笛の音が響き渡った。

海鳴市内

海鳴市内の高層ビルの中層部、その中はビルの中とは違う空間が存在している。

その中でタキシードを着た男性がコーヒーを飲んでいた。するとキバットから発せられた笛のような音が部屋に響き渡った。

「呼ばれたか。さーて、異世界の娑婆の空気を吸いに行くか」

そういうと男性の姿は突然青色の狼の姿に変わった。

この狼はキバに使役させる3体のアームドモンスターの1体。

3体のアームドモンスターのリーダー的存在でありライオンファンガイアによって滅ぼされたウルフィン族最強の戦士にして最後の生き残り「ガルル」。

先程の男性の姿は人間の世界での仮の姿で今の青色の狼の姿が本来の姿。

そしてガルルは彫像に姿が変わった。

「ギャオオオオオン！！」

すると高層ビルの中層部から西洋風の城と一体化したような姿のドラゴンが現れ、空を飛んでいった。

「ギャオオオオオン！！」

「来たぜ、健悟！」

キバットとそういうと先程高層ビルの中層部から現れたドラゴンが飛んできた。

そのドラゴンはキバの使役モンスター「キャツスルドラン」だった。そしてキャツスルドランは口から何かを出した。

出されたものは先程のガルルが変化した彫像だった。

そして彫像の姿がなにより武器のような形になっていた。

「はっ！」

キャツスルドランから出されたのを掴むとガルルが変化した剣「魔獣剣ガルルセイバー」に形を変えた。

アオオオオオン

ガルルセイバーを持つと狼の鳴き声の後にキバの左腕に鎖が巻かれていき、鎖が弾けると左腕の色が青色に変わり、左肩は青い狼の毛がたった様な姿になっている。

更に先程巻かれた鎖が今度は胸にも巻かれ、再び弾けると左腕と同

じ様に青色に変わった。

アオオオオオン

そして再び狼の鳴き声の後キバとキバットの眼の色が青色に染まった。

ガルルフエツスルでガルルが変化し、ガルルの力が秘められているガルルセイバーを召喚することで変身し、ガルルの力を受け継いだことでキック力、走力等の脚力に優れたフォーム「仮面ライダーキバ ガルルフォーム」にフォームチェンジした。

「いくぜ！」

「こいつ、調子に乗るな！！」

俺はガルルセイバーを、ホースファンガイアは剣を構え互いに向って行った。

「はっ！そりゃ！おりゃー！」

「ぐああああ！」

最初の攻撃でホースファンガイアの剣を弾き、右斜め、左斜めとバツ字になるようにガルルセイバーで斬った。

「ふっ！はっ！せりゃー！」

「ぐあああっ！」

追い討ちをかけるように連続で斬りかかり、斬られたホースファン

ガイアは衝撃で後ろに飛ばされ、地面に倒れた。倒れたと同時にホースファンガイアは剣を落とした。

「くそっ！舐めるな！！！」

地面倒れたホースファンガイアはすぐに立ち上がり、剣を拾わず今度は素手で向ってくる。

「動きが単純だと何度言えば分かる！！！」

そういつて俺は向ってきたホースファンガイアの左頬にハイキックを入れた。

「ぐおっ！」

頭部にハイキックを受けたホースファンガイアは地面を転がった。

「おおお、流石ガルルフォーム、さっきよりもキック力が上がってるなあ。キバット、今日は初回だ。キバフォームで決めるぞ！」

「おっ！」

俺がそういうとキバットがガルルフォームから元のキバフォームに戻してくれた。

キバフォームに戻ったことを確認し、キバットベルトの右腰にあるフェッスルを取り出し、キバットにくわえさせた。

「ウェイクアップ！」

キバットが必殺技を発動させる赤いフェッスル「ウェイクアップ」

エッスル」を発動させるとキバットがベルトから離れ、夕方だったはずの周囲が三日月が浮かぶ夜に代わった。

「はっ！はああああっ……」

周りが夜になると俺は構えをとる。

「はっ！」

右足を高く上げるとキバットが右足の拘束を開放した。

「はあっ！」

俺は右足を上げたまま左足で上空に高く飛び上がった。

「むっ！」

「はああああああっ……！」

飛び上がった俺は月をバックにし、ホースファンガイアに飛び蹴りを放った。

「があっ……！」

飛び蹴りを受けたホースファンガイアは地面に倒れ、倒れた地面にはキバの紋章が刻まれた。

「があああああっ……！」

キバの必殺技「ダークネスムーンプレイク」を受けたホースファン

ガイアは身体がステンドグラスのようになり、音を立てて砕けた。そして砕けたホースファンガイアからライフエナジーが出てきた。

「ギャオオオオオン!!」

出てきたライフエナジーをキャッスルドランが食べ、食べ終わるとキャッスルドランは帰っていった。

「ふう」

キャッスルドランが帰るとキバの右足が再び拘束され、変身が解除された。

「ありがとうな。キバット」

「気にするな。じゃあ俺様はそろそろ帰るぜ。また俺様が必要な時は呼べよ。いつでも駆けつけるぜ!」

「おう」

「じゃあな!」

そういつてキバットもキャッスルドランが飛んでいった方向に飛んでいった。

「健悟」

戦闘が終わるとアリサがGトレーラーから出てきた。

「あの敵はなんだったの?」

「あれはファンガイア。人の生命エネルギーを食う怪人だ。それよりも執事さんとあの大型犬は？」

アリスの質問に簡易に答え、執事さんとアルフの容態を訊いた。

「鮫島は気絶してるだけだから大丈夫だけどあの犬の方は早く治療してあげないと・・・」

「わかった。急ごう。アリス、お前の家でいいか？」

「うん。あ、でも車・・・」

そういえば車があつたな。  
どうするか。

「ご安心くださいマスター。Gトレーラーには簡易式のレッカー機能を搭載しています」

「そうなのか？」

「カスタマイズ済みです。作業はガングラー達にさせましょう」

本当にこいつは準備がいいな。

「分かった。すぐに始めよう」

ガングラーとガンドーベルに車を持ってきてもらい、Gトレーラーに繋いでもらいアリスの家に向かって走り出した。

??? Side

Gトレーラーが去って行った後、林から眼鏡とコート、フェルト帽を被った壮年の男が出てきた。

「ホースファンガイアめ、全く使えん奴だ。おのれ、野田健悟！まあしても我々の邪魔をしておつて！一体何度邪魔をすれば気が済むのだ！それに今度はキバに変身し、ゼクターすら所持しているとは・・・、そろそろ彼には消えてもらおう。次は必ず葬つてやる。覚悟しておけ、野田健悟・・・」

眼鏡とコート、フェルト帽を被った壮年の男は不気味な笑みを浮かべたまま銀色のオーロラの中に消えていった。

アルフ Side

目が覚めるとあたしは檻の中にいた。

「あ！目え覚めた」

声が聞こえた方を見ると金髪の髪の子どもがいた。

(あれ？このちびっ子どっかで・・・)

「あんた頑丈にできてんのね？あんなに怪我してたのに命に別状はないつてさ。怪我が治るまでは家で面倒を看て上げるからさ。安心していいよ」

あたしがこの子のことを思い出そうとしているとあたしの前に餌を置いて頭を撫でてくれた。

(あ……)

頭を撫でてもらってる時に随分前にこの世界の温泉に行った時を思い出した。

(あの子の友達なんだ……)

そして、あの白い魔導師の子の友達であることを思い出した。

「ほら。軟らかいドッグフードなんだけど……食べられる？」

あたしはあの子の友達が置いてくれた餌に近づき、餌を食べた。あたしが餌を食べる姿を優しい目で見てくれている。

「ふふふっ、そんなに食欲があるなら心配ないね。食べたらゆっくり休んで早く良くなりなね？」

「アリサ……」

餌を食べていると白い魔導師の友達の名を呼ぶ男の子どもが近づいてきた。

そして、その声はあたしに聞き覚えがあった。

「あ、健悟」

その子どもは以前あたしとフェイトをご飯に誘ってくれて仮面ライダーフェニックスの正体である、野田健悟だった。

俺がオールドライドを使いアリサの家の人達を誤魔化し、今はオールドライドを解除してアリサのところに行くところだとアルフが目覚まし、餌を食べていた。

「どうだ、その犬の状態は？」

「うん。食欲もあるから心配ないよ」

「そうか」

心配ないと聞かされ俺はホッとした。

「あなたの方はどうだったの？」

「なんとか誤魔化しきれた。車両が車両だからな」

Gトレーラーが警察の車両なので警察の関係者と言っておいた。誤魔化すのが結構、楽だった。

「そっか」

「アリサ、今日はもう休んだほうがいい。時間が時間だし、明日も学校がある。それに色々あって疲れただろ？」

「うん。そうする。健悟はどうするの？なんだったら、その……家に泊まっていく？」

アリサが頬を赤く染めながら家に泊まるかと誘ってきた。

「いや、この犬をもう少し見てから帰るよ。流石に泊めてもらうのは色々問題になる」

アリサの誘いを俺は断った。

「そ、そうよね。じゃ、じゃあまた明日・・・」

「おう」

そういつてアリサは家に帰ろうと歩き出した。

「・・・健悟！」

「ん？」

しかしアリサは家に戻る前に俺を呼び、呼ばれた俺はアリサの方を振り返った。

「その・・・ありがとう。今回も助けてくれて」

アリサは今日助けたことのお礼を言ってくれた。

「気にするな。また何かあったら次も必ず俺がアリサを守ってやる。なんたって俺は・・・通りすがり仮面ライダーだからな」

「／／／／な、何よ！かっこつけて！」

俺がそういつとアリサは顔を真っ赤にし、俺に背を向けた。

「……………ありがとう。期待してるわ」

アリサは背を向けたままそういつて家に戻っていった。

「……………あれ？もしかして俺結構恥ずかしいこと言った？」

今のアリサの行動を見て自分が今言ったことが実は恥ずかしいことだったことを今知った。

「もしかしてではなくほぼ間違いなくだと思います」

「……………まあいいか。それより……………」

恥ずかしい台詞はどうでもいいので今一番重要なアルフの方を向き、アルフの前にしゃがんだ。

「よう、アルフ。大丈夫か？」

「……………」

俺が話しかけてもアルフは黙ったままだった。

「今は管理局の連中は見てないから安心していいぞ？」

「……………」

しかしそれでもアルフは黙ったままだった。

「アルフ、何があったのか訊かせてくれ」

「……その前にあたしからも訊きたいことがあるんだ」

「なんだ？」

ようやくアルフが口を開き、アルフの質問を聞いた。

「……あんたは初めて会った時から知ってたんだろ？あたしとフェイトが敵だったこと」

「ああ、そうだ」

俺は素直に答えた。

「じゃあ、なんで初めて会った時、フェイトを助けてくれて、飯まで誘ってくれたんだい？それにこれまで何度もフェイトを助けてくれて、一度は管理局とも戦ってまで、そして今回もあたしを助けてくれた。どうして敵であるはずのあたし達にそこまでしてくれるんだい？」

「さあな。俺は単なる気まぐれな男だからな。飯に誘ったのもこれまで何度も助けたのも気まぐれだ。今回は友達であるアリサが危なかったからな」

「……そうかい」

アルフが顔を俯かせる。

「……まあでも強いて言うなら」

「？」

「あいつ、フェイトには何か特別な理由があるような気がするからほおっておけなかった……からかな」

「!?!」

半分は嘘、半分は真実。

本当はフェイトのことを知っているからほおっておけなかった。

「理由があるとしたらそれぐらいなんだが……これじゃあ駄目か？」

「……」

俺が理由を言おうとアルフは無言のまま背を向けた。

「アルフ？」

「あんた、変わってるね」

アルフは背を向けたまま俺にそういった。

「そうか？」

「ああ、本当に……健悟、頼みがあるんだ」

「ん？」

「今日なにがあったか、そしてこれまでのことを全部話すよ。だからあの子を、フェイトを助けて！あの子は何も悪くないんだ！」

アルフはそういいながら俺の方に再び振り向き、俺に近づいてきた。

「ああ、安心しろアルフ。最初っからそのつもりだ」

アルフを安心させようと俺はアルフの頭を撫でた。

「フェイトを守ってみせる。必ず」

「ありがとう」

そしてアルフはこれまでのこと、何故怪我をしていたのか全て話してくれた。

「なるほどな」

話の内容は原作でアルフが明日なのはとユーノ、クロノ達と話す内容と全く同じだった。

「健悟・・・」

「分かってる。話してくれてありがとうな。今は心配しないで身体を休めろ。でないと怪我が治らないぞ？」

話してくれたことにお礼をいい、アルフの頭を撫でた。

「分かったよ」

「それと嫌かもしれないがこのことは管理局にも言ったほうがいい。大丈夫、あいつらはまだ信頼出来るほうだ。それに何かあったら俺が何とかする」

「……そうだね。そうするよ」

アルフが管理局に話さないと言わないか心配だったが、承知してくれて助かった。

「じゃあな、アルフ」

「ああ」

アルフに別れを告げ、Gトレーラーを駐車している場所に向かって歩き出した。

アルフと別れ、Gトレーラーに乗ろうとした時、俺は動きを止めた。

「………いるんだろ？ボルフォッグ」

「気付いていたのですね、健悟機動隊長」

そういうとホログラフィックカモフラージュを解除し、ボルフォッグが俺の後ろに姿を現した。

「そろそろ来る頃だと思ったただけだ」

俺は後ろを振り返り、ボルフォッグを見上げた。

「そうですか。ところで私をここに呼んだのはあの狼が理由ですね？」

「流石ボルフォッグ、察しがいいな。あいつがまたいつ狙われるか分からない。もし敵が来た場合、下手をすればこの住人に被害が出る可能性がある。そこでお前に監視役を頼みたいんだがいいか？」

「了解しました。お任せ下さい」

俺が指示を出すとボルフォッグは笑顔で了解してくれた。

「すまない」

「お気になさらないください。これも私の任務です。健悟機動隊長は早く帰宅し、早く休んでください」

「ああ、ありがとう。じゃあ後は頼む」

「了解です」

そういつてボルフォッグはホログラフィックカムフラージュで再び姿を消した。

「アポロン、撤収しよう」

「ラージャ」

Gトレーラーに乗り込み、家に帰宅した。

## 第二十二話 アルフ（後書き）

ARX-7アーバレスト 「さあ、今月やっと2つ目を更新出来たぜ！」

健悟「最初の頃に比べたら本当に遅くなったよな」

アポロン「今回も終わらせ方に時間がかかったようです」

ARX-7アーバレスト 「いやー、まいったまいった。さてさて、やっと原作の第10話あたりまでやってきたねえ」

健悟「正確的には10話のAパートが終わった辺りだな」

アポロン「ここまで来るのに随分時間がかかりましたね」

ARX-7アーバレスト 「そこは言わないでくれ」

健悟「クライマックスまでもう少しだな」

アポロン「今後どのような展開になるのか不安ですね」

ARX-7アーバレスト 「それ以前に次の話を早く投稿出来るかどうか不安だよ」

健悟「頑張れよ」

ARX-7アーバレスト 「了解。では次回予告にいく前にちょっとネタバレしようか！」

健悟「いきなりだな。つかなんのネタバレ?」

ARX-7アーバレスト「実は今回の話を書いている合間に原作の第11、12話の庭園戦を書いて、その庭園戦で召喚する連中をちよこつとだけ教えたいと思います!」

健悟「そんなことしていいのか!?!」

ARX-7アーバレスト「別にいいんじゃない?ここまで書いたら読者の皆さんも気になるでしょう?」

アポロン「しかし、今ではなくその話の時に知りたいと思う人もいるはずです」

ARX-7アーバレスト「うーん。ではここは読者の皆さんの声を訊いてみよう!つとというところで緊急アンケート!次回の後書きでネタバレを 1、して欲しい、2、欲しくない 3、どちらでもかまわない のどれかを選んで下さい!もつとも多かつたほうをもちろん採用します!あと出来れば感想も一緒をお願いします!」

健悟「締め切りはいつだ?」

ARX-7アーバレスト「次の話が投稿されるまで。お1人様1回までとさせていただきます」

アポロン「お待ちしております」

ARX-7アーバレスト「ではそろそろ次回予告にいきましょう!今回はこれだ!」

アポロン「BGMスタート」

BGM「次回予告」

健悟「ほー、エヴァンゲリオンか」

ARX-7アーバレスト「そしてこの人も登場だ！」

葛城ミサト「あれー？何処よここ？」

健悟「今回は本人連れてきたー！！」

アポロン「ある意味やりたい放題ですね」

ARX-7アーバレスト「お忙しいところすみません。すぐに終わりますんでちょっとこの台本を読んでもらえますか？」

葛城ミサト「え？私が？」

ARX-7アーバレスト「お願いします！！」

葛城ミサト「わ、分かりました。えーっと、ゴホンツ！助けられたアルフはなのは達に全てを話す。フェイトのことを知り、どうにかしたいと思うのは。そして母のためになのはと戦うフェイト。しかし戦いの後、フェイトは母から衝撃の事実を明かされる。そんな中健悟は1人何を思うのか？次回『第二十三話 母と娘』さーて、次回もサービス、サービス」

ARX-7アーバレスト「ありがとうございました！！」

健悟「うわー、生サービスだあ」

アポロン「マスター、それではビールみたいですよ？」

葛城ミサト「えーっとこれでいいの？」

ARX-7アーバレスト「はい結構です！」

アポロン「それでは、みなさまのご意見とご感想をお待ちしています」

健悟「アンケートの方も改めてお待ちしています」

ARX-7アーバレスト「次回も」

葛城ミサト「次回もサービスしちゃうわよん」

ARX-7アーバレスト「最後取られた!!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5400r/>

---

～少年が望んだ世界と力～

2011年10月25日03時03分発行